

〔表紙〕

# 新納久仰譜

安政六年未十月朔日

十二月晦日迄  
ヨリ

〔久仰譜卷十三下 安政六年未十月朔日ヨリ十二月晦日マテ〕

一十月朔日、今朝新納主税殿湯地市兵衛・吉川源右衛門

ナト御用私用有之被参候、拙者事昨晚ヨリ少々風邪氣

ニ有之候間、今日引入致養生候事、

一八ツ後ヨリ伊東新五左衛門被参候テ、拙者昨年之日帳

雜譜清書被致候事、

一此節召拘置候役人木原孝右衛門事、先日移り来り候へ

トモ、今日ヨリ取払ヒ為致候事、

一今晚新納衛守殿御母公并ニ四郎殿・御姉子おさとの

被召列、新納三次モ御供イタシ此方へ御出被成、おさ

ととのハ今晚ヨリ此方へ滞在被成候筈ニテ、御母公ハ

四ツ過三次列立御帰リ被成候事、

一十月二日、今日モ風邪氣ニテ出勤不致候事、

一今日玉里ヨリ左之通り拝領被仰付候事、

一松葉蘭 壱鉢

一万年青 壱鉢

一モルモツトノ 壱番

但箱入付

右之通り御頂ニ相成り、為持上申候間御受取可被成候、

以上、

未十月二日

玉里

御庭奉行

新納駿河様

御近習役

右之通り申來候間相應返答申越サセ候事、

一十月三日、病氣同断、今日四島之与人トモへ帰帆前之送り物、例之通り扇子・沓箱・百田紙五束ツ、遣シ候事、

一十月四日、病氣同断、四ツ後書役助仁禮源七郎御用封持參、先月十九日御着御拜領之御模様有之候由ニテ、極々急キ飛脚今日着ニ付テ持參也、

一十月五日、病氣同断、八ツ後家來之黒岩傳太郎參リ咄シニ、今日八ツ前上春日小路北郷數馬殿所へ、掛リ人之市來八左衛門トカ申人此内ハ身持不埒ニ有之、座敷内召入有之候処、今日不図致乱心候哉、困ヲ破リ家内之數馬殿母へ一刀切り付、肩先ヨリ髪之内ニトカ相應手疵為負被申候由、右之數馬殿カ、ハ八左衛門叔母之

由、左候テ家内散々切りチラシ、剩へ火ヲ家ニ付候手段ニ見得、薪モへ掛リ候ヲ屋根ニトカ差込置、門外ニ走り出小路内ニテ大根壳之男へモ一刀突立、夫ヨリ若宮前ヲ通りサヨミ坂の方へ參リ、サヨミ坂角ニテモ丹荷帶替之者ニ行逢、是へモ少々手疵付、夫ヨリサヨミ坂へ掛リ堂之前の方ニ參候処、本嫡家四郎殿屋敷掛リニテ、島津帶刀家來之恒見<sup>垣カ</sup>矢兵衛トカ云者ノ後ヨリ首ヲ一刀ニ半分余リ切り付、外ニ沓ケ所深手ヲ為負、夫ヨリ坂之下返<sup>刃カ</sup>ニテ、嶋津登殿家來之小二歳頬ニトカ一刀切り付、夫ヨリ柏百喜所へ走り込ミ、百喜娘之十六七歳成ヲ追チラシ、数ケ所手疵為負候ニ付、娘モヤウく門外へ逃出候処追付參リ、門外地幅之内ニテ猶又深手ヲ為負候央ニ、上様福昌寺御仏詣ヨリ御歸リ之御先供參リ掛リ製<sup>制カ</sup>候処夫ニ恐レ家鴨馬場の方へ逃走リ、權現小路之下ニテ其身腹ニ刀突立倒レ候ニ付持込、近所ヨリ戸板ヲ持出シ御目通ヲ防キ、ヤウく御通り有之候由、八左衛門方

々走り廻り、往来之者へモ右之通疵付候次第ニ付、暫時大騒動イタシ、

上様福昌寺地藏堂之前ニ御出掛り之所ニテ、御先ハ丁度柏殿屋敷掛へ参り掛、サヨミ坂へモ手負人倒レ居、家鴨馬場之方へハ八左衛門参り行切腹イタシ居候ニ付御行列モ漂ヒ罷在リ余程隙取り、ヤウ／＼御通行相成候由、誠ニ以テ前代未聞之珍事ニテ候事、

但

後達テ承り候処、八左衛門(權現カ)現権小路ニテ無程息絶エ哉ニ候、柏娘ハ追散サレ逃カ外候テ門外へ出候処、御行列先参り、御先供製シ制カトカニ当惑イタシ、門内へ可引返イタシ候節、門内ヨリ八左衛門出會、終被仕詰候由、御行列モ不憚駈込候ハ、可助之処、女更若輩旁ニテ当惑イタシ不運成仕合ト跡評判承り候、且又八左衛門事モ乱心ニハ見得候へトモ、座敷内不召入以前、至極放埒者ニテ、柏所娘へ手疵為負候モチト考へアリテ之事ニハ有之間敷也、不審之事ト承り候

一夕方豊後殿ヨリ書役有馬雄之助ヲ以被申越候ハ、拙者

用達伊東猛右衛門事、此内ヨリ御広敷横目之内願相立

置候処、豊後殿ヨリ相同被具候処、則今日伺之通被仰

付候間、向々へ書付相下ケ置候トノ段被申越、別テ仕

合之至候ニ付、難有致承知候旨相応ニ返答イタシ置候、

左候テ右之雄之介へ、今日市來八左衛門一卷承り候処、

丁度拙者聞及丈之事ハ相聞得候へトモ「其外委細之事悉クハ行

ハ相聞得候へトモ、」其外委細之事ハ八ツ過迄ハ不相

知トノ由承り候事、

一猛右衛門事右次第ニ付先当座之一礼トシテ、道島源五

郎ヲ以テ豊後殿・納殿迄挨拶申遣シ置候、左候テ猛右

衛門別勤、跡ハ同人実弟新五左衛門願出度存候、尤モ

当人モ懇望之事ニ付則今日申談イタシ置候事、

一拙者風邪イマタ快方不相見得候ニ付、今夕方新納龍雲

召呼直診為致候事、

一十月六日、今朝猛右衛門・新五左衛門参り候、猛右衛

門ハ御側御用人猪飼鋤太郎ヨリ御用致承知候由、新五左衛門ハ跡役之儀願出度申談旁也、引続次郎九郎・三次等モ用向有之被參候、尤昨日市來八左衛門乱心ニ付テハ、北郷數馬殿御懷肩ヨリ背ニ掛深手ヲ負、ヤウク逃去リ、門前之川上弥四郎所へ走り込被申、直ニ帰リモ不調大疵ニテ今日モ滞在之由、右次第大變到来ニ付テハ、当月中おさと殿彼方へ引越ハ迎モ調間數トノ事候旨咄シニ付、丁度其通之事候間、イツレ追テ之成行次第有之方可然申談シ置候事、

一今日猛右衛門事弥以御広敷横目被仰付、役料米是迄之通り被下置候段、豊後殿ヨリ猪飼鋤太郎取次ヲ以被仰付難有次第ニテ候、右ニ付則今日跡用達之願書差出呉候様有馬雄之介へ頼ミ遣置候処、是亦則今日願之通被仰付致安心候事也、

口上覚

▽④〔朱書〕  
「願之通被仰付候、

十月 伯耆」  
△

三島方  
書役助

伊東新五左衛門

右ハ用達伊東猛右衛門事御広敷横目被仰付候ニ付、代用達右新五左衛門へ被仰付被下度奉願候、此旨御申可被下候、以上、

未十月

新納 駿河

右之通月番御用人市來次十郎へ差出置候処、即日同人取次ヲ以朱書之通り、御家老座於縁頬直申渡之筋ヲ以テ新五左衛門へ被相渡候由、八ッ後新五左衛門・猛右衛門參り細々成行申聞候事、

一十月七日、新五左衛門・猛右衛門被參、彼是次渡等申談候由也、

一十月八日、イマタ風邪氣快方不罷成、是迄新納龍雲藥ニテ候ヘトモ、今朝ヨリ朝稻三益相頼藥用イタン候、矢張風邪ニテイマタ熱氣少々有之故快然無之旨被申候事、

一今日玉里ヨリ御菓子頂戴被仰付候段左之通申來候事、

一重物御杉折 壹ツ

右ハ玉里

御牌前へ上り候御品ニテ、被成御頂戴候様トノ趣キ、

御年寄ヨリ承知イタシ差上申候間、御受取可被成候、

以上、

十月八日 玉里詰 御納戸奉行

駿河様

ノ

右之通り不存寄御品頂戴被仰付難有儀ニ付、御受書相

応差出シ置御品則拜味仕候、白ノマンヂウ・白ノ練羊

かんニテ、御日数内之故白御菓子ニテ結構成御品一丈

ケツ、入付有之候、大キ成御杉折ニテ候事、

一今日琉人ヨリ贈リ物左之通也、

進上

御扇子 一箱

御中茶碗 十

以上、

返上物才領大筆者  
具志堅親雲上

進上

御扇子 一箱

御笋寒 十

以上、

返上物才領才府  
祝嶺親雲上

進上

御扇子 一箱

御笋寒 十

以上、

右同

伊志嶺親雲上

右三人近々乗船ニ付テ定式也、

一十月十日、今日モ風邪気分同様乍去少シハ快方ナリ、

今朝朝稻三益見廻り被吳候事、引続キ山口喜三右衛門  
参り候、豊後殿ヨリ御用筋有之被遣候事、

一八ツ後ヨリ磯永喜之助相頼、都之城西生寺へ納候阿弥  
陀之記文清書方取付候事、

一十月十一日、今朝モ山口喜三右衛門参り候、御用談也、

一今日モ磯永喜之助参へり清書方被致、其外ニモ段々認  
物相頼候事、

一十月十二日、昼宗八郎殿御出被成候、おさと殿へ初テ  
御逢被成候、暫時ニテ御帰リ被成候事、

一七ツ後ヨリお悦都之城へ参へり候、先日豊前殿御夫婦  
モ御越被成候ニ付参り、四ツ前帰リ候事、

一七ツ後ヨリ田中八郎兵衛参り夜入四ツ過帰リ也、病氣  
今以テ至極不塩梅之由也、

一昼ヨリおセイトノ萬太郎召列レ武之橋へ被参候、然処  
夕方彼方ヨリ使ヲ以おせひとのチトシヤク気分ニ付今

晩ハ滞在被致、明日モ快ク候ハ、彼方ヨリ打立帰リ可  
申ト之事ニテ申来リ、チト不審ニ候ヘトモ夫レ形リ承  
リ置候事、

一十月十三日、風邪快方最早寸切ト程相成リ候ヘトモ、  
先ツ引入リ致養生候事、

一今昼山口喜三右衛門御用筋有之、豊後殿ヨリ被遣候事、  
一おせひとの矢張滞在也、

一十月十四日、今昼三原藤五郎被参候テ段々御用談ナリ  
相良蜻洲事モ承リ候事、

一夕方相良蜻洲参り候、明日ヨリ帰崎イタストノ事也、  
依テ無程肴料金百疋・紺地島細上布一反・小箱入煙草  
九斤取合為餞別遣シ候、外ニ調文代金之不足有之、金  
耆両耆朱程遣シ候事、

一十月十五日、今日ヨリ致出勤候、八ツ退出、

一 夕方伊地知小十郎被参候、左候テおせひとの武之橋へ  
滞在之由、一昨日武之橋へ参り合承り候テ被致世話候  
事也、就テハ拙者之存分申入候処被致難渋候、彼是細  
談ニテ夜入被帰候事、

一 今日都之城出雲殿へ近々江戸へ出立之筈ニ付、餞別為  
左之通り遣シ候事、

一 肴 一 折現品

一 唐紙 二 帖

一 毛氈 二 枚

一 花入 一ツ唐焼大形

右之通遣シ候事、

一 十月十六日、朝長崎助左衛門被参候テ、玉里御供使相

勤候坂本伴次郎事、御内用方付足輕ニテ拙者へ相付、

江戸へ差越度内意迄承候事、

一 八ッ後ヨリ武田宗右衛門父子参り、先達ヨリ取付居候

大口村田方文書巻物致出来候事、

一 十月十七日、晴天朝白霜強ク当冬今朝程之霜ハ初テ也  
今日出勤、八ッ退出、夫ヨリ福昌寺へ参詣イタシ、帰  
リ掛周防殿へ罷出段々御用筋致承知、日入り過罷立帰  
リ候事、

一 十月十八日、出勤、明日

御初入部ニ付、御拝領之御着到来之筈ニテ段々御手当  
相成候、御礼使島津出雲殿ニテ候間、八ッ退出ヨリ都  
之城へ暇乞ニ見廻り暫時ニテ罷立候事、

一 十月十九日、五ッ打直ニ出勤、八ッ退出、四ッ時 御

拝領之御着到着ニテ、直ニ

御先例之通り於御対面所

御頂戴有之、左候テ御引入掛於

御書院御礼使出雲殿

御目見ニテ、毎之通御口上被

仰含、左候テ 御引入、暫御間有之再

御出座ニテ御規式初リ、御一門方御相伴、且ハ御盃頂

戴等有之、引続キ大目付以上

御盃并ニ御着頂戴仕、都テ相済

御入、右之御看於

御対面所

御頂戴之箸拙者掛リ之故諸事相勤メ候事、

一今日吉辰ニ付

御参勤方御座立有之、彼之方へ出席、御祝ヒ等致頂

戴候事、

一今日鹿之間格ヲ以テ於御座左之通、

出水

新納 駿河

右来申年

御参勤之節地頭代被

仰付候、

十月

伯耆

一御参勤方御座ニテ豎山武兵衛ヲ以テ左之通、

攝州

住吉

新納 駿河

右来申年

御参勤之節

御代参被 仰付候旨被

仰出候、

十月

御取次 豎山武兵衛

一今日出雲殿出立ニ付、お悦事五ツ時分ヨリ都之城へ参

ヘリ夜入帰リナリ、次郎四郎モ水上迄遣ハシ、夕方ヨ

リ都之城へ参ヘリ夜入帰リ候事、

一八ツ後伊地知小十郎参リ候テ、武之橋一件ニ付内談ナ

リ、おせひとのハ于今滞在之事也、

一十月二十日、四ツ時ヨリ玉里へ罷出候、豊後殿同断、

今日御藏金次渡ニテ改方イタシ拾壹万両余無相違次渡

有之、其外御手元御目録金等ニテ何モ無相違次渡有之、且ハ御用談ニテ七ツ半時分退出候事、

一十月二十一日、出勤、八ツ退出、夫ヨリ重富へ罷出御用談ニテ七ツ半比退座、豊後殿上坂一件其外御内用色々也、

一今日武之橋へ使遣シ候処、モハヤ病氣モ快ク候間、明日ヨリカ明後日供遣ハシ候ハ、可罷帰旨被申越、案外之儀ニ付則夕方伊東新五左衛門差遣ハシ彼方用達上野彦助へ為引合、其御方ニテ何トカ思召候事モ有之由ニ付、明日供差上候儀ハ先扣申候段申達シ置候事、右ニ付今晚早速伊地知小十郎相招彼是相談イタシ置候事、

一十月二十二日、今朝(島津久光)周防殿ヨリ極内用御書付被遣候事

一今朝川上式部殿ヨリ用達ヲ以今朝迄之間私用ニテ参リ度候、在合之程シラセ候様被申遣候間即答ハ相応申置、追付此方ヨリ用達評定所迄遣ハシ式部殿用達へ為

引合、今朝御使ニテ致承知候へトモ此方ニモチト差支之事有之候ニ付、御出之儀先御延被下度存候旨申置ニ為致候、尤今日吟味ニテ評定所へ出席之故也、

一今日出勤ニテ周防殿被遣候御内用之儀、堅山武兵衛へ細々談合イタシ、退出ヨリ周防殿へ罷出、存慮之趣且ハ申談候趣等細々申上相伺候処、猶又思召之程細々被仰聞候趣モ有之、至極及長談七ツ半時分退席イタシ候事、

一夕方ヨリおさと殿・お悅列立西田橋ヨリ田歩辺迄遊参リ被成候、おさと殿ハ西田橋辺始役方モ是迄見物不被成御方ニ付右之通り候事也、

一十月二十三日、五ツ打直ニ出宅福昌寺へ、  
(島津重豪) 慈照院様御忌日ニ付

御代参

但

御惣靈様へ御代拜

着服々紗・小袖・半袴

右之通相勤夫ヨリ出勤、八ッ退出、

一今日御殿ニテ豎山武兵衛へ、昨日周防殿へ参上細々御談合申上候処又被仰聞候趣キ等ヲ以テ致細談候処、周防殿御考へモ難默止訳合ニ付、此上ハ此内

順聖院様御内沙汰被遊候趣キ之通り御取扱有之方可然哉ト申談、今日退出ヨリ又々重富へ参上得ト相伺候処

其通りニ候へハ至極御同意被思召トノ事ニテ御納得ニ付、暫時ニテ致退席候事、

一婦宅之処誦方數馬殿私用ニテ被参居致面会候、且又小

十郎・彌太右衛門モ八ッ後ヨリ参リ、拙者婦宅ヲ待被居候ニ付、數馬殿ナト对客相濟候後致面会候処、先日ヨリ武之橋へ滞在之儀ニ付、彌太右衛門存寄細々被申

聞候ニ付承リ候処、至極道理ヲ尽シタル訳合ニ付一言モ申分ノ無之成行ニ候、乍去拙者段々存分モ有之候ニ付、致承諾候トノ返答ハ今三日出来兼候段申達置候処

兩人共暮前帰リニテ候事、

一今日御殿於上之口、川上式部殿へ面会イタシ、昨朝使

之趣キヲ以テ致挨拶口合之処、式部殿存分段々被申聞候間、拙者存分ヲ不殘申入置候事也、式部殿ヨリ承候内案内之儀ハ、彌太右衛門・小十郎トモく先達ヨリ頼ニ逢被居候由、夫故先日武之橋へ小十郎被参候節モ

其趣ヲ以式部殿へ口合有之候由、誠ニ以驚入次第ナリ細事筆ニハ難尽候事、

一拙者事先日ヨリ持病差起リ居候間、今晚西郷幽泉相頼ミ針治且又足之灸治イタシ候事、

一十月廿四日、出勤、八ッ後ヨリ大目付以上

御休息所へ被為 召候段、昨日ヨリ致承知居候間、八ッ打直ニ一同唐子之間へ罷通り候処御料理被下、左候テ無程御目見被仰付、直チニ御馬事御初ニテ御馬場へ被為 入候間、御跡ヨリ罷出候処

御馬拜見被仰付、御馬見所ニテ御煮染等被下、跡ニテ上様モ一疋被遊候間、庭上へ罷出拜見仕候、夫限りニ

テ又々

御懸物一幅、瀧之絵中務卿勝川法眼藤原雅信筆、并ニ  
押〔掛〕<sup>⑤席</sup>一掛拝領被仰付候間、夫限り退〔出〕<sup>⑤席</sup>、唐子  
之間ニテ又々御湯漬被下、終テ御側役へ相付御礼申上  
置退出イタシ、且又御休息所ニテ御酒等被下候内、大  
形コツフニテ

御膝本へ被為召一盃ツ、銘々御酒被下、夫形リ被下切  
リニ付イツレモ持下リイタシ候、今日大目付以上相中  
ヨリ御肴一折進上仕候、我々支度麻上下着通シナリ、  
今日之御次第御手当書等左之通、

御休息所へ大目付以上被為召候御次第御手当、

明後二十四日

御休息所へ御城代・御家老・若年寄・大目付初テ緩々  
被為 召候御次第御手当、

一牡丹之間御床御懸物・活花等見合セ可差上候、

一相掛候面々服紗物・麻上下、

一大目付以上被為 召候旨前廉達シ置可申候、

一揃之上唐子之間ニテ二汁三菜之御料理被下候、御銚子

三篇・御菓子・御茶一度被下候、

一御時宜次第牡丹之間へ被召通

御目見可被仰付候、

一間之被下物追々可差出候、

一御側御用人・御側役相詰可致挨拶候、

一奥医師三四人相詰可申候、

以上、

別冊之通り被仰付候条此段致通達候、以上、

十月二十三日

豎山武兵衛

一十月二十五日、早朝豎山武兵衛御内用之儀有之被參長

談ナリ、是ヨリ重富へ被參被相伺候賦リナリ、尤モ豊

州之儀ニ付テノ御用第一ナリ、

一今日出勤、四ツ後大目付以上一同改服ニテ、御側役へ

相付昨日之御礼申上置候事、

一今日豊後殿事明日

御前御用有之候段、伯耆殿ヨリ達シ有之候事、

黒砂糖二十斤

一桶

一今日八ツ後ヨリ大島・喜界島・徳之島・沖永良部島与

以上、

人此節致上国候ニ付、先例之通り拙宅へ招呼致面会、

大島与人  
太三能安

盃トモ遣ハシ差出シ候、右ニ付三島掛書役日置半兵衛

・吉村才之丞相詰候、亭主振り用達新五左衛門并ニ猛

右衛門用頼等ニテ、与人トモ夜入過比歸リ之由、今日

御酒

一折

進物左之通、

以上、

進上

喜界島与人  
泉 貞民

御肴

一台

御酒

一荷

以上、

進上

芭蕉布

四端

大島与人  
太三能安

黒砂糖二十五斤

一桶

焼酎 十五盃

一壺

進上

御肴

一折

御肴

一台

以上、

真綿

三把

喜界島与人  
泉 貞民

焼酎二十盃

一壺

進上

御着

御酒

以上、

一荷  
一台

德之島与人  
佐和統

進上

芭蕉布  
縞三反

黒砂糖  
十斤

焼酎  
十盃

塩豚  
十斤

以上、

三端  
一桶

一壺

一桶

德之島与人  
佐和統

進上

御着

御酒

以上、

一台  
一荷

進上

芭蕉布  
縞二反

黒砂糖  
十斤

塩豚  
十斤

以上、

三端

一桶

一桶

沖永良部島与人  
納富

沖永良部島与人  
納富

右贈り物ハ前々ヨリ定式ナリ、尤与人トモハ上国涯ヨリ是迄且又出帆迄之間贈り物先規有之、別冊ニ委細記シ置候間是レニ略ス、

一十月二十六日、出勤、八ツ退出、今日豊後殿左之通被

仰付候事、

御城代

島津豊後

右者当務迄数十年致精勤、表御勝手方御用モ取扱、是

迄分テ御用立致勤勞候ニ付、右之通一篇之勤被仰付、

御役料高是迄之通被下置候旨、

御名代島讚岐殿ニテ被

仰付候、

右同人

▽  
右以来

御座之間御礼被仰付、五節句・月次御一門方御礼相濟

嶋津圖書引統疊目は迄之通ニ而御礼被仰付、年頭八朔

ハ家格之通可相心得候、且

御留守年ハ

御座之間御礼ニ準、於鶴之間、嶋津圖書引読詔御家老

御祝儀御礼等可申上候、左候而、登

城之節、水仙之間下之休息所江罷在候様、被

仰付候、

十月

伯耆

右之通被仰付候間、退出ヨリ玄喚迄祝儀ニ見廻置候事、

一八ツ後預リ所加世田郷士年寄并ニ組頭地頭横目等申付

引統誓紙迄為致候事、

一今昼之内御殿ニテ式部殿へ一刻致面会彼是申談シ置候

事、

一今晚彌太右衛門・小十郎相招武之橋一件段々申談候、

拙者存分細々相咄シ候処、随分納得候様見受候事、

一十月二十七日、朝新納三次参リ候、嫡家之家来中馬仲

右衛門へ金子五兩取替遣ハシ候事、

一今日出勤、玄猪之御祝ニ付、四ツ半時御座之間へ

御出座、大目付以上へ小餅御直ニ被下候間、耆人ツ、

罷出候処、五色之餅二ツツ、被下候間難有致頂戴候事

一退出ヨリ大興寺へ法雪院様御正忌日ニ付、致御墓参候

テ七ツ過帰宅、

一今晚モ小十郎内用談ニ付、被参候テ五ツ半時分帰リ也

一十月二十八日、今朝早川務見廻、一昨日江戸ヨリ致下

着候トテ也、

一今日御筆仰出弘メ方有之、御一門方始一同拝聞難有奉  
存候事也、

▽<sup>⓪</sup>  
家老中江  
△

我等儀身雖不肖

順聖院様依

御遺言御跡目相統蒙

仰、難有儀ニ候、就テハ

御先代様不奉汚

御積徳様ニト日夜令心痛事ニ候、尤モ我等事何篇不取

馴之事候間、心付候儀ハ不差置可申聞候、且又各始諸

役人末々ニイタリ

御先代ヨリ被定置候規格之通り聊モ無寛疎相守、政事

向一涯入念可取計候、殊更士ハ一々礼義廉恥ヲ存、深

ク文武之道ヲ学ヒ、耳目之欲陷四支之安便ヲ不願、古

来之國風不取失、万事致出精候様肝要ニ存候、以上、

十月二十八日

御跡目御相統被遊候ニ付テハ

御先代様ヨリ被定置候御規格之通り、聊モ無寛疎相守、

御政事向一涯入念可取計、且亦士者文武之道ヲ学、古

来之御國風不取失、万事致出精候様

御別紙之通

御筆ヲ以被

仰出、誠ニ以難有

御趣意之事候条、此旨謹テ奉承知、

仰出之趣聊無忘却、誠実ニ相守候様、向々へ可申渡候、

十月

伯著

登

駿河

一八ツ後永江休之丞被参候間、此内ヨリ之雜説沙汰段々

咄シ合イタシ候事、引統福永直之丞御用向ニ付参候テ

暫時也、

一拙者事先日ヨリ持病気分ニテ、八ツ後朝稻三益へ申遣

シ薬トモモラヒ、今晚灸治トモイタシ、今日共ハ難儀

ニ付右之通也、

一十月二十九日、飛脚便ヨリ江戸詰谷村孫右衛門・中野

喜三右衛門等へ差向、拙者出府之之手当品代金トシテ  
式拾両差登セ候事、

一八ツ後ヨリ彌太右衛門次郎四郎方へ被參候テ、先日ヨ

リ武之橋一件内談被致候由、暮比ヨリ小十郎モ被參候  
テ猶又及吟味、次郎四郎ヨリ離縁之筋ニ相決申出候間、  
何レモ同意ニテ其通り内決イタシ候、四ツ過被歸候事、

一大口郷士村田家藏之古文状、先日軸物ニ取立モ致出来  
候間、奥書イタシ差返シ候手当イタシ置也、

一右坪付等六通其方家藏ニテ此節致一覽候処、靈社真  
跡等モ有之候ニ付、加袷装差返之候条、無龜抹永伝有  
之度者也、

安政六年末十月

新納駿河

久仰判

村田治右衛門殿

一右坪付等七通其方家藏ニテ此節致一覽候処、三通ハ  
靈社真跡ニモ有之候ニ付、加袷装差返之候条無龜抹永

伝有之度者也、

安政六年末十月

新納駿河

久仰判

村田休右衛門殿

一十一月朔日、今朝差引所高岡井ニ地頭所指宿郷士年寄  
共召出シ、一昨日之

御筆仰出并ニ御家老中之添書一通ツ、相渡シ候事、

一今日八ツ後大坂ヨリ町便到着、江戸

御本丸御焼失之哉ニ内分申来リ、驚入リ候事、

一今日夕方筑後殿大口筋ヨリ下着之筈ニ付、用達等吉野  
庄屋所迄差遣シ候事、

一十一月二日、出勤毎之通、筑後殿今日ヨリ出勤有之、

至而之元気也、

一夕方武之橋へ萬太郎迎遣候処直ニ帰リナリ、流瀨カ嫡流馬見  
物之企イタシ置候ニ付、先日ヨリ式部殿へ拙者直談モ

イタシ置キ、程能帰りニテ則ヨリ機嫌能遊ヒ候間、何ヨリ仕合之事也、

一十一月三日、家内子供(流瀧カ)、大乗院内へ場モラヒ置、お悦・彦熊・萬太郎并ニ滞在

之とおと殿列立、四ツ時分ヨリ差処夕方帰り候、今日之射手鎌田源次郎殿・伊地知喜右衛門・富満彦之進・林權一郎ニテ候処、林致落馬気絶ニテ大混雜ニ及ヒ候由、且亦矢先ニテ少々怪我イタシ候者モ有之、散々之事ニテ余程及遅刻相濟ミ候由也、

一今日萬太郎誕生日ニ付、彌太右衛門・小十郎等相招キ候、次郎九郎ニモ列立被參、夕方ヨリ能心祝ヒイタシ、夜入四ツ半時分何ツレモ帰り也、萬太郎機嫌至テ宜敷夜前モ次郎四郎側ニ寝候テ今日モカ、ナト尋候事ハ全ク無之、別テ仕合之事也、

一十一月四日、出勤毎之通り、今日堅山武兵衛ヲ以御家

老人柄之儀致承知候へトモ、存寄等申出候訳合ニ無之故、存寄り無之旨申上置候へトモ、筑後殿ヨリ拙者存分被承候間成行申置候、然ハ筑後殿存慮モ同断ニ付、其段筑後殿ヨリ武兵衛へ被申出置キ候由ナリ、

一田中八郎兵衛事此内拙者旅仕廻之加勢ニ被參候、夏初比ヨリカクノ症ニテ煩ヒ、追々不塩梅相成頃日至極不勝候由、昨日実弟平田權之進ヲ以、細々ノ手扣書其身直筆ニテ遣ハシ、嫡子新太郎表坊主之歎願承リ候間昨日在合之薬トモ遣シ置、今日尚亦様体承リニ煎リ豚小鍋ニ入付、梨子三ツ・金子壱兩取合家来鮫島伊右衛門使ニテ遣ハシ候処、弥不塩梅相成至極苦痛ニテ罷在、乍然此方使ハ至極喜ヒナガラ敷キ入被罷在候段返答承リ、此方ニテモ笑止之到ニ存候事、

一十一月五日、五ツ半時分ヨリ福昌寺へ差越相詰候、

(馬津寄興)  
金剛定院様四拾九日御百ヶ日

御法事被相混御執行ニ付テ也、大目付川上式部殿被相

詰、七ツ前勤行等相濟候ニ付直ニ致退席、帰り掛周防

殿御近習迄御見廻り申、先日御供養被成候トテ重之内

トモ被下候間、右之御礼申上置致帰宅候事、

一 今日玉里ヨリ御年寄園川文ヲ以テ左之通頂戴被仰付候

事、

一寸申上候、さ様ニ御座候得は、此御二しな

御奥ニ御有付の御品ニテ

金剛定院様御残りニ御座候まゝ、御龜抹なから御まえ

様江御いたゝかせ申上候様、眞了院の御方よりも被申

候まゝ、則御廻し申上候、かしく、

園川

新納

駿河様

右之通致承知、御二品ハ

三幅対御懸物 一箱

中壽老人

左ニ水二亀

右一羽鶴

右箱蓋裏ニ左之通御記有之候、

充君様御画

天保九年戊戌十月關東御下向前被進者也、

竹之細工三重物 一箱

但

大猛宗竹ニテ蒔絵笹之模様有之、金切りかね入ニ

テ内黒真塗蓋ニハ時雨ニ虎之薄蒔絵有之、

右御受書左之通差出候、

御文拝見申上まいらせ候、しかれハ

三ふく対御懸物 一箱

竹之御器物 一箱

其御奥江兼而被召置候御品ニ而

金剛定院様御残りニ御座候まゝ拝領被仰付候由、眞

了院之御方御はからひニ御座候よし被仰下、委細承

知仕り誠ニ以難有くしかしあんじ上奉り候得は、存

寄らぬ

御事にて何とも恐入り頂戴仕り申候、御礼之事ハ罷上り申上候様可致、其内此段々々御請迄申上置度申上まいらせ候、かしく、

新納  
駿河

園川さまへ

人々御請

一 田中八郎兵衛病氣至極之不塩梅候処、今晚養生不相叶相果候由親類共ヨリシラセ承り候間、金子百疋・官香トモ取合悔トモ申遣シ置候事、

一 今日八ツ後ヨリ小十郎・彌太右衛門被參候テ、おせひとの事猶又次郎四郎へ細々申談、弥離別之筋被相決候段承り候間、次郎四郎ヨリ離別之筋申出候儀ニ付テハ難黙止訳合ニテ、何モ存寄無之候間、弥其通り明日モ川上家親類之内へ、右之兩人ヨリ引合被呉候様申達シ置キ候、左候テ夜入り五ツ過被帰候事、

一 十一月六日、昨日玉里ヨリ拝領物被仰付候御礼、今日拙者罷出申上管候へトモ、表之御方ハ最早御シメ切り相成り大奥向計之事候へハ、差付罷出候テモチト致シ兼候儀モ有之候ニ付、今日道嶋源五郎ヲ以テ、彼之方御広敷御用人汾陽清右衛門へ引合、宜敷様ニ取計被呉候様申遣ハシ候処、清右衛門能引受、拙者罷出申上ニ不及、宜敷取計可呉旨被申候由、源五郎ニテ承り候事一 今日伊地知小十郎ヨリ川上式部殿末家川上左太夫へ引合、おせひとの事は迄段々致吟味候へトモ、次郎四郎ヨリ離別之筋申出無拠訳合ニ付、此上ハ小十郎・彌太右衛門等モ難差留候ニ付、誠ニ氣之毒ナガラ其通り御引合申達シ候間、式部殿へモ申上被呉候様申達置候旨小十郎七ツ後參り被申聞候間、次郎四郎へモ申聞置被呉候様達シ置候、右ニ付今晚武之橋ヨリ道具取トシテ下女老人・納殿老人・人足等召列參候間為引渡候、此上ハ首尾相濟頓ト致安心候事、

一十一月七日、出勤、八ツ退出、夫ヨリ外御庭御藏へ差

越、玉里ヨリ今日相廻リ候御金八万兩位、御側役堅山

武兵衛御趣法御用人吉川源右衛門其外御役々立会入付

置、七ツ過致退出候、明日モ弐万兩余相廻リ候筈ナリ、

且又外之株々御金モ取合弐万兩位モ可有之哉ト存候事

一十一月八日、雨寒風、櫻島薄白也、今日出勤毎之通、

玉里御付之御小姓其外奥医師等多人数、御本丸へ并ニ

樂水殿・周防殿御付等へ御役替被仰付候、且又島津左

衛門殿事明日

御前御用被仰渡候事、

一十一月九日、晴天、出勤毎之通り、今日左衛門殿事御

家老御役被仰付、左候テ豊後殿へ被仰付置候通之諸掛

迄モ都テ今日被仰出候事、

一今日玉里御仏前へ、此内琉人ヨリ預贈居候瑪璃石大香

炬苧ツ并ニ海松大木苧鉢、御内々進上仕候、右ハ先日

玉里大奥へ相付

金剛定院様御牌前へ進上仕度、道島源五郎ヲ以テ相同

候処、不苦旨致承知居候ニ付テ也、海松ハヘゴニ鉢

モ仕立分石鉢之様拵有之、横三尺五六寸、高サ苧尺余

モ有之至極枝振能作り立有之品ニテ候間差上候処、眞

了院御方ヨリ厚ク御挨拶有之候段承リ候事、

一十一月十日、拙者事先日ヨリ風邪氣ニ候ヘトモ、押テ

今日モ致出勤、八ツ退出候、今日

上様御家老座始諸御役所被遊

御覽候ニ付、拙者

御相統方掛リニ付、御跡ヨリ御付添申上候テ、諸御役

所相廻リ候事、

一拙者事昨日ヨリ実ニ風邪氣分ニテ候ヘトモ、今日モ押

テ致出勤、明日ヨリハ引入致養生度成行ヲ以細々申分

リ、今日左衛門殿へ頼置候、尤モ左衛門殿再勤ニテ諸

掛リ迄モ豊後殿同様被仰付候付テハ、拙者内々存含候

時宜モ有之、折柄風邪氣モ鼻水等多流レ出、今日モ乍

不敬致出勤候テ彼是次渡、明日ヨリ引入之致手当候事、

一今日波見浦重新兵衛・重新左衛門ヨリ大鯛二枚・練羊

羹一箱・酒一樽・緞子沓本・貢緞沓本贈り候、訳ハ大

船造立本手金四千両拝借被仰付候礼ニテ候間致受用候

事、

一十一月十一日、寒風騒々敷微霰モ降り夜入風止候事、

今日拙者弥増風邪氣ニ付、弥以引入致養生候、御殿へ

ハ其段用達ヲ以細々申遣ハシ候、尤内々ハ昨日ヨリ所

存モ有之、折柄風邪モ相応有之候ニ付幸之都合ニ存候

事、

一今日左衛門殿ヨリ兩種給候、此節再勤之訳ニ付テナリ

拙者ヨリハ先日即遣ハシ置候、且又筑後殿ヨリ猪一肢

并ニ菜共為尋給候事、

一十一月十二日、風邪少シ快方ナリ、今朝書役鎌田孝右

衛門御用談ニテ参り候間致面会候事、

一四島与人共近日致帰帆候由ニ付、今日為餞別葉煙草式

斤位・昆布沓斤半位ツ、四人へ役人手紙ヲ以テ遣ハシ

且又大島并ニ沖永良部島人共へ音信物モ右之与人へ相

頼遣シ候事、

一夕方ヨリ梅北宗右衛門被参候テ、明日ヨリ垂水へ旅行

之由被申候間、久傳君雜譜之中取書改方頼置候、旅先

ニテ透ニ可被致トノ事也、

一十一月十三日、風邪追々快方也、然トモ内存有之候ニ

付、今程出勤ハ差扣候也、

一八ッ後伊集院周八被参候テ内用談也、

右之序拙者内存之趣致咄置候、引続岩下佐次右衛門モ

参り候間是へモ内存之趣キ致咄候処、兩人トモ無抛考

ニ可有之トノ事ニテ暮比岩下帰リ也、

一十一月十四日、雨霰間々降り櫻島ハ薄白之由、今日モ

病氣也、八ツ後新納次郎九郎・道島源五郎等見廻ナリ  
道島ハ玉里御納戸書役ニテ候処、今日御本丸御広敷横

目被仰付候由、且又同役有馬六之進・大山彦七ニモ御  
広敷番被仰付候由、兩人共見廻有之候、尤玉里御役所  
昨日迄ニテ引払之儀被仰渡、御帳留等ハ都テ御本丸へ  
引渡相成候由ナリ、左候テ今日玉里御付得能彦左衛門

・橋口今彦・永江休之丞・岸喜右衛門・伊集院直五郎  
・早川連等始メ御小納戸見習等并ニ御茶道方人数等、  
都テ願之通り御役御免被成候由也、

一 夕方山口喜三右衛門・福永直之丞被參候へトモ面会断  
リ申達候、山口ハ寺社方取次、福永ハ御勘定方小頭ニ  
御役替被仰付、御家老座奥掛勤ハ養田傳兵衛へ再勤被  
仰付候由、山口ハ豊後殿へ相付御内用掛書役ニテ毎々  
江戸へ致往来、福永モ豊後殿方へ一向致出入候者ニテ  
候間、豊後殿転勤之後何事モ大変化イタシ候事ト存候  
也、

一 十一月十五日、細雨霰交リ寒風アリ櫻島薄雪也、今日  
モ病氣也、

一 八ツ後新納彌太右衛門被參候間拙者内存得ト致咄候処  
至極尤之心得ニ候トテ彼モ同意之旨細々聖語引候テ被  
為聞候、此節ハ誠大切成時節ト互ニ咄シ合余程及長談  
候事、

一 拙者此節引入ニ成候処頓ト見廻リ衆等無之不思議ニ静  
也、就テハ世上モ自然ト感シ付候処有之カト先日独リ  
案シ罷在候、用達新五左衛門并ニ用頼等ハ毎日被參候  
テ用向被致世話候事也、

一 今八ツ前岩山八郎太被參候、御用筋ニ付致面会段々申  
談候事也、

一 十一月十六日、今日モ病氣ナリ、然トモ風邪ハ全快ナ  
リ、当分見廻客等モ無之静カニ付、当家之家譜編集方  
精ヲ出シ候、尤先日ヨリ少シツ、ハイタシ候ヘトモ、  
最早気分モ能成候間、此節コソ成就可致哉ト存候、彌

太右衛門ナトモ此内島方居住被仰付、便船迄之間、座敷内ニ罷在候節取シラヘモ出来候事ニテ、遠島不被仰付候ヘハ、彼家譜帳モ成就不致等候処、遠島モ幸之儀ト喜ヒ被申候儀有之其節致物笑候処、此節拙者其場ニ成候事ハ、昨日モ彌太右衛門ヘ物笑咄シモイタン候間今日共ハ前文之通ナリ、右ニ付新五左衛門毎日筆取加勢イタン、且又磯永喜之助モ此内ヨリ毎日程被参色々々写シ物加勢ニテ候事、

一新上橋脇水天宮社舞殿ハ此内

宰相様御内沙汰有之、拙者モ其段致承知先キ比ヨリ取付有之、此節成就ニテ今日音楽等奏シ舞殿披ラキイタシ候間、志シモライ度旨先日社人ヨリ諸方ヘ申入、此方ヨリモ金子百疋遣ハシ置候ニ付、今日八ツ後ヨリ彦熊等見物ニ参リ夕方方帰リ候事、

一佐土原家老伊集院相馬使者勤ニテ致出府、今日此方ヘ預見廻候ヘトモ病氣ニ付玄喚迄ナリ、右ニ付為土産彦半切紙五ツ折交着一折送り有之候事、

一十一月十八日、病氣同断、今朝鎌田孝右衛門御用筋有之一刻被参候、七ツ後五代傳左衛門モ同断也、今日御趣法方掛リ御用人三原藤五郎・蒲生郷左衛門御側御用人一篇之勤被仰付候、御趣法方ハ大野四郎右衛門被仰付候由也、  
一今日次郎四郎縁組離別之願、用達新五左衛門ヲ以テ月番御用人川上右近ヘ差出置候事、

口上覚

▽朱書

「本文ニ付、同年十二月十二日、筑後殿より御用人關山札取次ニ而御用人於座廊下、御目付福崎助七席詰ニ而縁組離別、願之通被成御免候旨、二階堂源太夫・郷原轉一所ニ致承知候事、」

△

私共親類駿河嫡子新納次郎四郎ヘ川上式部娘縁組為仕置候処、不縁有之離別仕度由承申候、縁組離別之儀ニ付テハ分テ被仰渡置候趣モ有之御座候ニ付、親類中差寄再三異見仕候ヘトモ、軽々敷心得違及離別候儀ニテハ無之、何レ之筋難遂合御座候ニ付、此上ハ無是非

双方親類熟談之上、離別之願申上候間御免被仰付被下  
度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉願候、以上、

郷原 轉

新納駿河  
親類

新納駿河  
親類

未十二月十八日

新納 主稅

新納 主稅

二階堂源太夫

川上式部  
親類

十一月十九日、夕方岩山八郎太被參候、拙者ヨリモ申

島津 左膳

遣ハシ置候故ナリ、右ヘハ去々年十月比豐後殿一件段

郷原 轉

々六ヶ敷成立候節之書付并ニ此節拙者内存之趣トモ、  
得ト咄イタシ八郎太含ミモ細々承ハリ及長談暮過被帰

口上覺

私共親類川上式部娘、駿河嫡子新納次郎四郎へ縁組為

候事、  
一今日松壽院殿ヨリ此節御歸リ之御土産トシテ大鯛二枚

仕置候処、不縁有之離別仕度旨承リ申候、縁組離別之

・唐挟五本・フノリ五枚被下候事、

儀ニ付テハ分テ被仰渡候趣モ御座候ニ付、親類中差寄

及再三異見仕候ヘトモ、軽々敷心得違離別仕候儀ニテ

無之、此上ハ無是非双方親類熟談之上、離別之願申上

候間此旨被仰上可被下儀奉願候、以上、

川上式部  
親類

未十二月十八日

島津 左膳

一十一月二十日、四ツ後ヨリ伊集院周右衛門被參候テ、  
此内拙者ヨリ談シ置候趣キ彼人モ得ト及工夫候処、拙  
者内存無抛趣キニ候ヘハ外ニ存寄モ無之旨細々被為聞  
左候テ当人猶勘考之趣モ段々聖語モ引候テ被為聞、別

テ深切成訳合忝存候、尤今夕当人泊り番之由ニ付、態ト時刻モ見合供ヲモ不召列被參候テ、外見モ憚リ参リタルトノ事ニ付旁以テ深キ考ニ付、去々年来及心配候諸書付并ニ此節之成行書付モ差出シ、猶及細談候処、何共六ヶ敷訳合ニテ詰リ拙者考無抛訳ト納得ニ付拙者モ致安心候、左候テ八ツ半時分被帰候事、

一 夕方新納休藏被參候テ嫡家之用向承リ候、左候テ此内新納喜右衛門ヨリ家来之中馬休右衛門借用之金子八兩有之、右返金持參被致候、尤モ右八兩之内ヨリ此内おさと殿御用衣類其外品々、仲右衛門方ニテ手当相成候代料差引払イタシ、残り金三兩老步位受取致格護置候事、

一 夕方ヨロおいつさま御出被成候テ、夜入四ツ過御帰リ被成候、拙者内存之趣トモ細々御咄申上候処、能御納得有之候事、

一 十一月二十一日、今朝吉川源右衛門被參候テ少々御用

談有之、跡ニテ此節拙者引入居候得ハ、拙宅門柱トカ落書為有之ト承リ及候、何様之事カト被申候ニ付、全拙者ハ勿論家来共ヘモ相糺候ヘトモ、左様成モノ見及候者無之ト申答候処、定テ其通り之事情半、浮説ハ難取用事ト笑捨ニ成候、尤拙者少シモ心掛リ存候訳モ無之、右等之説ハ人々見聞次第申與候事、却テ好之儀ト咄トモイタシ置候事ナリ、引統鎌田孝右衛門モ御用有之参リ候、八ツ後ニハ税所七郎右衛門・二階堂源太夫殿ナト被參候テ段々公私用打交リ也、

一 十一月二十二日、病氣同様ナリ、七ツ後養田傳兵衛・岩山八郎太御用談ニテ参リ候、有川七之助再勤之事トモ、承リ候ヘトモ、存寄無之旨致返答置候、暫ニテ帰リ也、

一 今日北郷浪江殿養子旬之介殿

御前元服被仰付哲五郎ト改名、其外初テ之

御目見等多人数ニテ、先用達伊東猛右衛門二男等モ右

之人数ナリ、

北郷家へハ何レモ参リ候様申来リ候ニ付、次郎四郎・お悦七ツ後ヨリ参リ九ツ過比帰リ候、尤兩種遣ハン候事也、

一十一月二十三日、拙者乗馬恒吉青毛、昨朝ヨリ後之左足引釣リ踏付兼候ニ付、昨朝ヨリ馬医入江稻尾へ相頼致養生候処、今朝モ稻尾参リ、人間ナラハ少々中風ト申場之様ニモ見得候ヘトモ、軽キ事ニ付能可相成トテ猶薬用并ニ灸治トモ被致候、尤モ昨日モ湯タテハ五度位為致候、今日ハ薬用灸治モ兩度ハ三度モイタシ候様被申教候事、

一夕方ヨリ彌太右衛門・小十郎申談シ被参候、其内彌太右衛門ハ早目ヨリ被参候テ、拙者当分引入リニ付平田八郎太内存之趣トモ細々被為聞、厚キ心入忝ク存候次第ナリ、尤モ彌太右衛門モ昨日南林寺へ致参詣(為津實久)大中様御儀被申受候趣、且又其身ト筮被致候趣トモ細

々被為聞候テ、何レモ深ク被及勤考候事トモ別テ忝次第也、就テハ猶亦拙者モ可及思慮旨モ申答置、即席之考モ細々咄シイタシ置候、且又小十郎勤婦リ之中途咄シノ内ニ聞兼候儀為有之トテ、九十郎ヨリ親ノ八郎太へモラシ有之候ヲ、又彌太右衛門ヨリ今日被為聞候、右ハ誠ニ無束モ咄シニテ、何様成事ヲ聞キ違ヒ小十郎被申候哉、存外成事ニテ、此儀ハ玉里御小納戸中及聞候ハ、何トカ申分イタシソフナ事ニテ候間、彌太右衛門ヨリ小十郎へ差付ニ程能論シ置被具候様頼置、旁咄トモイタシ居候処、小十郎モ被参候間、猶亦拙者引入一件咄合トモイタシ候、当時世上モ色々評判事有之、其内拙者身之上之落書、且ハ玉里御役々此節御跡御道具御片付候ニ付、永江・岸ナト取扱候咄雜説落書之向トモ被為聞候テ、色々及長談、兩人トモ四ツ過時分帰リ也、

拙者身の上ニ付而之落書、駿河なる府中細工の品なれハ

しやうふ付にて腰のよわさよ

又なそに

信州武士と掛たときや、新納殿と解くわひな、其心  
ハ追付引てハ

なひかひな

永江等之事なそに

玉里どろぼと掛たときや、貴人の御笠と解くわひな

其心ハ、ながゑぢやなひかひな、

盗人の手先ぎと掛たときや、京画の元祖と解くわひ

な、其心ハ、岸てはなひかひな、

右之様色々アリ、此外ニモ雑説有之由ナガラ兩人ノ衆

聞綴リ不申トノ事ナリ、拙者事ニ付テ之歌ハ、白木之

板ニ書拙宅門柱辺ニ打付有之タル由ナド、申触ラス由

其段ハ先日伊集院周右衛門・吉川源右衛門ナドヨリモ

承リ居候間、段々糺方イタシ候ヘトモ家来下人トモ之

内右様之物ハ勿論、其外紙ニテモ家ナト書タルモノ落

居候ヲ見当リタル事モ無之旨申出候、就テハ拙宅門柱

ナト打付有之候ト申事ハ全ク虚説ニテ候事、

十一月二十四日、今朝鎌田孝右衛門御用筋有之一刻被

参候、八ッ後東郷一介被参、先日弓之事

御覽ニ被罷出候処、八拾余歳迄ハ不取捨致修業候段心

掛宜敷候段、御褒美ニテ太平布一疋拜領被仰付候トテ

御礼ナリ、外ニ川西加右衛門同様ニテ、種子島休藏・

佐多佐次右衛門ハ御褒詞迄之由也、

十一月二十五日、今朝相良弥兵衛被参御用談ナリ、次

ニ諏方數馬殿御救内願一条モ頼ミ置、且ハ相良蜻州儀

モ咄シイタシ置キ候事、

一今日在番宮平親方ヨリ内意事有之、氷砂糖一籠・焼酎

砧一双贈リ有之候事、

一十一月二十六日、玉里大奥眞了院御方へ此内從

宰相様段々難有被仰付候御事ニ付、右御方へ為御礼、

琉人到來之品致進覽度都合向之儀、御広敷横目勤児玉  
嘉兵衛へ先日ヨリ頼ミ置候処、今日彼之方へ差廻シ候  
ハ、可然トノ事ニ付、四ツ後左之通り遣ハシ候事、

覚

御肴料 二百疋

御重甘物入 一組

紅ちりめん 一たん

白ちりめん 一たん

鶴もふせん 一まい

以上、

新納 駿河

右之通り覚書相添児玉氏へ向差遣ハシ置候事、

一 今日土持叶之丞・林仲之丞出立江戸へ被差越候、右ハ

公方様薨御ニ付中山王ヨリ伺御機嫌書翰被差上候次使

者ナリ、右兩人トモ此方内用頼ニテ幸便ニ付、江戸詰

谷村孫右衛門・中野喜三左衛門へ拙者來春出府用手当

品・手料一卷旁申合、金子モ拾両余頼ミ遣ハシ、乍然

拙者内合モ有之候ニ付、後便ヨリ猶万事可申越候間、

彼是程能取計被吳候様申合置、右之兩人トモ餞別品ハ

先日遣ハシ置候ニ付、今朝肴料金二百疋ツ、遣ハシ候

事且又叶之丞へハ当年中役所向諸用預世話候為礼分、

銀二枚程昨日別段遣ハシ候、是ハ歳暮之場也、

一 磯永喜之助事毎日程八ツ後ヨリ被参、写シ物加勢イタ

シ被吳候事也、

一 十一月二十七日、今朝岩山八郎太御用筋有之被参候、

豊後殿事当御役御断リ被申出候方可然トノ旨、昨日御

側役町田内膳ヲ以テ伯耆殿へ御達有之、則昨日伯耆殿

ヨリ肝付左門ヲ以内論相成候間、今日御断願書被差出

筈ト存候旨伯耆殿ヨリ相談被申越候、其外段々御用筋

ナリ、

一 拙者病氣押通り等分之様候へトモ、兎角疝積氣(癪)ニテ腹

中筋強張不塩梅勝ニ付、今日トモハ朝稻三益相頼直診

相頼候事、

一昨日玉里へ差廻候品々則眞了院御方へ児玉嘉兵衛ヨリ

致披露候処、余程喜悦之段今昼立寄折柄道島源五郎参

り居候ニ付、是へ取次キ挨拶之趣キ細々申置キ被為聞

候事、

一今日宮平親方ヨリ拙者病氣尋トシテ、唐茶壺・唐菓

子一重贈リ有之候事、

一十一月二十八日、今日病氣同断、先日ヨリ尚又少シ不

平ニ付、今日西郷幽泉相頼ミ針治共イタン候事、

一四ツ後児玉嘉兵衛相招キ、先日眞了院御方へ進覽物一

重、面働ニ相成候挨拶トモイタン、且ハ此内段々難有

被仰付候次第ニ付、到来物亀抹ナカラ是迄之御礼申上

候、寸志ニ致進覽候旨猶又モ折ヲ以御礼トモ申上給候

様頼入候処、彼方ヨリモ先日之進覽物差出候処、当人

別テ厚被汲受候趣之咄トモモ細々被為聞候テ暫被罷在

歸リ也、

一昼之内東郷八郎参候、豊後殿御役御断リ願書出候間、

伺之趣キトモ登殿ヨリ相談被申越候事也、

一十一月二十九日、先夜ヨリ三夜計リ夜陰ニ少々ツ、腹

痛有之候ヘトモ、夜前共ハ宜敷安眠イタン候事、

一今日冬至ニ付例之通り氏神祭イタン候、祭式ハ昨年ヨ

リ改メ念入候、受持社家中馬某ハ病氣ニ付名代壹岐雅

樂ニテ御祭イタン候、右ニ付八ツ後・七ツ後ヨリ近親

中又ハ兼テ出入之衆相招キ酒トモ振廻候、被参候人数、

新納 宗八郎 殿

新納 主税 殿

二階堂源太夫 殿

平田直之進 殿

山田十介 殿

伊集院周右衛門 殿

東郷左太夫 殿

新納彌太右衛門

東郷一介 等也、

且又

おいつ　さま

およし　殿

仁十郎　殿

奥方

ナト被參候テユル／＼ニテ四ツ時分迄ニ追々帰り也、

一十一月晦日、今朝五ツ過佐土原家老樺山岩紀・飯屋守

宮里十兵衛同伴ニテ見廻リ有之候ヘトモ、拙者病氣ニ

付不致面会、用達新五左衛門ニテ用向承ハリ候処、淡

路守殿御再縁之儀此内

宰相様へ御願有之候処其通御聞置被遊候、且又澁谷御

家作之内御小座淡路守殿御嫡子和之助殿御住居ニ御頂

戴被成度御願有之候処、是亦御願之通り被仰付候旁之

為御礼被差越候由、右ニ付拙者へ麻絹上下地二反・鷹

一羽・樽代金三百疋被下候、且又岩記ヨリ土産トシテ

三ツ重焼物盃一組贈リ有之候、右岩記ハ前条御再縁之

一条、且ハ佐土原之者田中源五左衛門旅宿門前へ落書

イタン候儀モ有之、旁之儀淡路守殿へ態々伺トシテ江

戸へ差越此節下着イタン候ニ付、右之通り為御礼被差

越候事也、

一拙者腹痛追々快方候ヘトモ、薬用ハ勿論西郷幽泉相頼

毎日針治等モイタン候事、

一今晚平田九十郎被參候、新納次郎九郎事御勝手方御用

人伊集院平治取次ヲ以テ麻袴御用被仰渡候、然トモ次

郎九郎事当分旅行ニ付、其段御届ケ申出ル筈ニ候旨彌

太右衛門ヨリ吹聴被申遣ナリ、右用向相濟候後暫時留

置、先日伊地知小十郎拙者之事ヲ同役之上村休兵衛へ

咄シ被致候趣トモ猶又直談ニ承リ候処、拙者小十郎へ

咄シイタン候儀ヲ受取違ヒ、別テ趣意違ニ咄シ被致候

哉ニ見得候、然トモ其通りニテハ外方へ響キ候節ハツ

マラン事ト存候、彼是之咄シニテ五ツ過帰り也、

一今日豊後殿事願之通り御役御免被仰付候由ニ付、隼人

殿見廻リニテ御礼細々承ハリ候、尤モ豊後殿ヨリ面会

イタシ候様被申聞候由ニテ、段々伝言之趣モ有之候事ナリ、尤モ被仰渡振左之通之由、

島津豊後

右ハ多年持病之痔疾折節差起リ殊之外致難儀候ニ付、御役御断リ申出願之通リ被成御免、数十年首尾能相勤候ニ付、其身一世式百石之物成被下置、其身代取込ミ拜借被下切被仰付候、以来奥へ罷通リ奉伺御機嫌 大奥へモ罷上奉伺御機嫌候様被仰付候、

十一月

登

一 今日永田與右衛門ヨリ鱧子一肢并ニ金柑・九年母・手作リ之野菜等取合拙者病氣為尋贈リ有之候、別テ之志也、此節ハ去ル十一日ヨリ引入候処、其後見廻リ客等無之、病氣尋ナト預贈物候向モ無之、不思儀ニ淋敷罷成候ニ付、毎々家内中ニテ、時之奉行日之役人トハ実ニ其通之事候哉ト存シ当リ候ナト申合候次第也、仍テ今日書役之永田等ヨリ預尋之事共ハ余程厚キ志シ之事

也、

一 十二月朔日、曇リ夕方時雨、今日モ病氣同断、様体相替リ候儀モ無之薬用・針治等同様イタシ候、昼時分西郷被参候事、

一 今日重富敬四郎殿事嫡子成リ之御礼ニテ又次郎殿ト名替リ、今和泉峯之助殿事養子成御礼ニテ安藝殿ト名替新納衛守殿嫡子少之介事

御直元服ニテ衛守ト改名、親ハ内匠ト名替リ次男祐太郎ニモ初テ之

御目見ニテ右八郎ト改名也、都之城四男具熊殿モ初テ之

御目見ニテ具次郎ト改名、其外多人數ニテ新納太郎左衛門嫡子モ右之内也、右ニ付内匠殿方へ次郎四郎并ニ滞在人おさと殿御出被成、都之城へお悦ハツ後等ヨリ追々参リ四ツ九ツ時分ニ帰り也、

一 今日重富今和泉ヨリ拙者儀モ祝ニ付参リ候様承リ候へ

トモ、病氣之成行ヲ以テ用達差遣ハシ断リ申入置候、然ル処今和泉ヨリ祝之品取肴・菓子等提重三重ニ入付酒一瓶相添被下候事、且又内匠殿太郎左衛門方ヨリモ祝品色々取合預贈候、尤右之両所へハ祝儀兩種等遣ハシ都之城へモ同断也、

一昼之内彌太右衛門被參候、拙者引入ニ付テ内談事也、

一十二月二日、昼平田八郎太被參、拙者引入之儀ニ付段々存寄等被為聞及細談、八ッ過歸リ也、

一十二月三日、今日(新納忠元)善翁君様御正忌日ニテ二百五拾年被

為成候ニ付、御法事ハ当春泉徳寺へ差越致執行置候ニ付、今朝拙宅

御牌前へ御靈膳等念入差上、昼興国寺役僧頼ミ入レ御経為致読誦候事、

一今朝伊集院周右衛門被參、御本丸御年寄永瀬・花野ヨリ周右衛門へ文ヲ以テ、此内拙者ヨリ

(島津齊彬女子)  
典姫様へ伺御機嫌、琉人之贈リ候甘物重一組并ニ御肴料金二百疋取合御内々致進上、且又右之御年寄兩人へ泡盛五十盃入壺差送り置候処、右之御返シ且ハ兩人ヨリ之



返礼トシテ周右衛門取伝ヲ以テ

一紅縮緬板シメ 壺反

一鼻紙入細工物也 一ッ

典姫様ヨリ

一包物 壺ッ

内髪差 壺本銀色付

器入 一ッ

箱せこ一ッ島びろふど

右永瀬・花野ヨリ

右之通り被下且贈リ有之難有頂戴仕リ候、右ニ付御礼之儀当分病氣之事故則周右衛門へ相頼ミ、其内申上置追テ快氣次第罷上リ可申上段宜敷御取成可給旨、兩御

年寄へ申遣ハシ且ハ挨拶共申遣ハシ置候、尤モ周右衛門出勤掛ニ付、則今日被申上呉筈ニテ候事、

一 今晚伊地知小十郎被参候テ段々内用談有之候事也、

一 十二月四日、今朝伊集院周右衛門一刻被参、昨日御本

丸へ御礼申上置被呉候段首尾聞セ也、

一 八ツ前彌太右衛門被参候テ拙者引入之儀ニ付、平田八

郎太存寄モ有之、得ト其之申談シ有之候趣細々彌太右

衛門ヨリ聞セ有之、別テ厚キ心入レニテ忝儀也、殊ニ

彌太右衛門事腰足之痛ミモ差起リ居候ヘトモ別段之儀

ニ付、今日ハ押テ致出勤、勤場ハ頼ミ合セ早御暇ニテ

此方へ参ヘリ候トテ別段之訳合也、

依之拙者之存慮モ細々申入レ置キ、尤モ出勤之儀ハ逆

モ心中向兼候時宜ニ候旨段々申入レ候処、難渋カリ被

申候事也、余程及長談七ツ前帰リ也、

一 今日指宿ヨリ例年之通り地頭屋敷所務致上納候儀左之

通也、

覚

中屋敷(ト)十七間 沓反一畦(ト)式步

御地頭屋敷

大豆式表四升式合

高ニシテ七斗式合九夕沓才(ト)

三斗八升代三分一上納

一 納菜種子沓斗 口入

一 真米沓升六合 役米

一 同九合 賦米

一 同八合 沓米

一 麻芋七匁九分

右ハ爰元御地頭屋敷所務代上納仕度段申出候ニ付、御

法之通直成リヲ以テ御取納可給候、以上、

未十二月二日 郷士年寄 園田宇左衛門

御地頭所

御役人衆中

右之通り上納之節ハ先々ヨリ直成高下無構、金考歩ツ、上納仕来相成居候ニ付、当年モ其通為致候事、

一 今夕方西郷被參候、針治イタシ候、尤モ西郷ハ毎日相頼ミ候事也、

一 十二月五日、晴天寒シ候、夜前ハ少々眩暈塩梅ニテ不

宜候ニ付、今朝三益へ申遣ハシ候処昼過被參候直診有之、西郷モ申遣ハシ置候処八ツ後被參候、兩人トモ矢張り疝之塩梅ニ見得候段被申候事、

一 八ツ後ヨリ磯永喜之助參ヘリ手札書方加勢也、新五左衛門モ毎日此方迄出勤、彼是レ加勢イタシ候事也、

一 十二月六日、今日病氣宜敷ナリ、八ツ後西郷被參候事

一 拙者事去ル丑年ノ今日、御家老御役被仰付候祝ヒ日ニ付、今日迄ハ御役御断リ之儀モ差扣居候、最早追々親類中へモ致相談度含居候事也、

一 八ツ後ヨリ喜之助參ヘリ手札書ナリ、新五左衛門モ同

断也、右之通り喜之助事当年モ余程之日數八ツ後等ヨ

リ参リ写シ物、或帳留等被致加勢候ニ付、到来之袖島沓反・琉真綿沓把・肴料金二百疋今日歳暮旁混シ遣ハシ候也、且又新五左衛門へモ袖島沓反・琉真綿沓把遣ハシ候事、

一 十二月七日、早朝東郷八郎・有馬雄之介・井上直右衛門御用筋有之被參候事、

一 今日五ツ時ヨリ

上様御乘廻シトシテ谷山へ御出有之、七ツ過御帰り之由、始終御乗切リニテ乗馬イタシ御供等勇間敷事ニテ候由也、

一 十二月八日、曇リ寒シ、夜前雨少々降り候処、今朝櫻

島真白ク成ナリ、今朝鎌田孝右衛門・新納太郎左衛門等御用筋有之被參候事、

一 八ツ前迫水善左衛門被參、彼是咄トモイタシ居候処、

八ッ打候へハ新納主税殿・二階堂源太夫殿追々被參候間、善左衛門ハ直ニ帰ヘリナリ、其内新納次郎九郎參ヘリ今日御勘定方小頭御役被仰付、御役料米是迄之通被下置、勤方モ是迄之通り被仰付候段吹聴有之、直ニ被帰候、右主税殿・源太夫殿へハ拙者ヨリ申遣ハシ置候故、被參候用向ハ拙者当御役御断リ申上度内存之趣キ細々申述致相談候処、兩人トモ無抛訳合ニ付何トモ、差留候儀モ難致、兎角拙者内決之通り致シ候方可然存寄無之段承ハリ仕合ニ存シ候、此節之儀ハ最早拙者モ決着イタシ居候へハ、タトへ少々存寄有之候テモ難聞入存居候旨咄シトモイタシ候へハ其通之事ニ候半、何分難黙止訳合ニテ定テ拙者是迄之間致心痛居、無抛御断之筋致決着候儀ニ致推察候トテ能納得之事ニ付仕合之至リナリ、右ニ付テハ夫々都合出来候上ハ源太夫殿ヨリ左衛門殿始其外同席方へ是迄難有被召仕、何レモ之預御世話候へトモ、病氣ニ付テハ当務往々難相調中ニモ旅勤等相調文ニ無之候間、御役御断リ申上度内意、

且ハ是迄之礼共申入給候様頼ミ置候、彼是及長談大鐘時分兩人被帰候、右之迫水モ彼方ヨリ少々口出シモ有之候ニ付致相談候処、是モ何トモ申様無之旨承リ候事也、

一夕方新納休右衛門被參候、是レモ申遣ハシ置候故也、用向ハ同断、御役御断リ之儀申談シ候処、是モ難黙止訳合ニ付存寄無之旨承リ候、尤モ此人へハ先月十日過引入之涯見廻リ有之候節、則拙者心組之程咄シ置候ニ付、今日ハ能合点被致候、尤周防殿へ当御役難有被仰付置候事ニハ御座候へトモ、病氣ニ付兎角往々難相動就中旅勤等相調候丈ケハ無御座候間御役御断リ申上度此涯不申上候テハ、来春

御參勤御供勤等モ有之候へハ彼是御不都合ニモ可相成奉存候間、速カニ御免相成候処奉願候トノ趣トモ、程能申上給リ候様頼入置候事也、

一腹卷・古札先年協方ヨリ相求メ置候持有之候ニ付、去々年比ヨリ木脇藤淵へ作り次之儀頼ミ入甲冑所へ遣

ハシ置候処、頃日出来上塗り方迄モ出来イタシ候由ニ  
付、昨日代金致上納、今日取寄セ候事、

賦書

腹巻卷領分

但

作足并ニ塗直シ

代錢三拾五貫三百五拾四文

外ニ

大一割増シ分三貫五百三拾八文

二口合

錢三拾八貫八百九拾貳文

金ニシテ四兩三步卷朱三百九拾貳文

新納駿河殿

役人

右之通り可有之也、

未十二月四日

甲冑製作所印

受取

此表上納候間受取也、

未十二月七日

甲冑方印

一昨春比ヨリ彫物師瀬戸口矢兵衛へ鉄縁頭鐙二具、雲波

ノ埋彫リ十ノ字金ニテ居込候細工頼置候処、今日出来

(上脱カ)  
リ差出候、是ハ追々彦熊用事ニ可致考ニテ地打ハ加世

田郷士仁禮治平次へ為致、細工ハ右之瀬戸口江頼ミ置

候事也、

覚

鉄御縁頭御大小分

但

雲波埋彫焼金ニテ十之字数三十切り込

手間料貳兩也、

外ニ

焼金地カネ七分五厘

不足

卷分ニ付五百文ツ、

メ拾九貫七百四拾八文

一本青金地カネ七匁相下リ

焼金トシテ四匁六分五厘留リ

内

十文字御紋所九ツ

同式ツ

十之字三十

メ数四十一

右三行焼金五匁四分ニ付申候ニ付、七分五厘不足

仕申候、

右之通仕調差上申候、以上、

十二月八日

瀬戸口矢兵衛

新納様

御取次衆

右之通りニテ十文字御紋所九ツト式ツノ事ハ先達テ致

出来候、次郎四郎用字之鉄杵目地ニテ金御紋付居候、

縁頭一具并ニ古物同断之小鐔ニ御紋式ツ金ニテ居増シ

イタシ候事也、

十二月九日、朝東郷一介被参候テ、来秋ハ宗八郎殿婚

礼祝被致度旨豊前殿ヨリ被申遣候間、何様トモ承知可

致旨相応申答へ置候事、

一 九ツ過平田八郎太被参候テ拙者当分之儀ニ付、段々及

勘考、聖天へ致参詣、誓願之上、宝珠院住持へ卜筮被

為致候、赴面<sup>掛カ</sup>之趣キトモ細々被為聞別テ懇意之次第ナ

リ、仍テ猶又彼是申談置候事、

一 今日モ西郷幽泉被参候、毎日相頼ミ針治イタシ候、腹

痛ハ先宜敷候事、

一 今晚伊集院周右衛門相招、拙者内存細々咄シイタシ彼

是申談シ候、四ツ過帰リ也、

一 今日宮平親方ヨリ大白砂糖一籠安否尋トシテ贈リ有之

候事、

一 十二月十日、曇リ寒風、夜前モ少々腹痛有之候処、今

朝朝稻三益預見廻候、仕合之事ナリ、八ツ後西郷幽泉

被参候、西郷ハ毎日相頼ミ針治イタシ候事、

一八ツ前迫水善左衛門被參候、是ハ申遣ハシ置キ候故ナリ、用向ハ拙者御役御断リ之儀致相談候処、何トモ存寄無之旨承リ候事、

一八ツ後二階堂源太夫殿・新納休右衛門列立被參候而、拙者御役御断リ之儀重篤ヘ伺候事ハ、先江戸詰迄之筋申上候テハ何様可有之哉ト、存寄承リ候ニ付、尤之儀ニモ可有之候ヘトモ、江戸詰勤迄申上候テハ甚自由之筋ニ可有之、外聞モ至極入り入候ニ付江戸ニモ難差越事候ハ、根切レ之御断リ申上候ハ、何トモ申分無之旨彌太右衛門・八郎太等ヨリハ承リ居候事ニ付其段申述候処、夫モ至極尤之儀ニ付、左様及吟味候事ナラハ、拙者存念通り根切レ之所ヲ以テ可申上、休右衛門等ハ残り多ク存候旨ヲ以テ被為聞候事ナラハ何分難致訳合有之、拙者行詰リ決心之事ニ付、此上ハ猶又主税殿ヘ致相談給候様頼置也、

一引統キ養田傳兵衛被參候、是モ伝言イタシ置候故也、仍テ拙者病体之咄トモイタシ置、今形リニテハ来春

江戸御供等ハ迎モ難相調考候旨ナト致咄候処、イマダ日合モ余程有之事候間、折角致養生湯治等ニテモイタシシテモ旅勤難出来節ハ、成行次第有之可然候半、只今ヨリ右等之心配ハ余計之事ト被申候、是ニハ態ト内心之趣キハ差扣居候、彼是咄トモイタシ候処暮ニ及被帰候事、

一桂小吉郎殿奥方此内ヨリ病氣之処、今晚死去ニテシラセ有之、奥方ハ亡鎌田出雲殿娘ニテ候事、

一今日左之通致承知候事、

御用之儀有之候間、明十一日四ツ時麻袴着用ニテ被罷出候、以上、

十二月十日

御小納戸

新納駿河殿

御用之儀有之候間、明十一日四ツ時麻袴着用ニテ可能

出旨被仰渡趣奉畏候、此段御請申上候、以上、

十二月十日

新納駿河

御小納戸中様

右之通り料紙小奉書半切ニ相認め、切封ノ処現ニ切  
リ欠キ相調差出候事、

一十二月十一日、今朝暖気ニテ気分合等ヨロシク候、昨日御小納戸ヨリ致承知候御用ニ付、四ツ時用達新五左衛門ヲ以テ病氣之届申〔出〕<sup>⑤</sup>候処、快気次第罷出候様致承知候事、

一大口ヨリ新納五郎右衛門・黒川強兵衛昨夕方参着候、段々用向有之申遣ハン置候故也、仍テ今朝召出シ逢候テ、緩々承リ且ハ申達シ候事モ有之候也、

一今日平田伊兵衛御側御用人ニテ御側役勤被仰付候由、右ハ此内御側役格御趣法方へ掛大坂御留守居勤ニテ、大坂へ詰中之事如何様心障リモ有之候哉、御役御断り申出度内存差起リ、百日余二百日計リモ引入ニテ拙者出勤イタシ候内ニ、御役御断り申出度含トモ、内々承

居候事ニテ候処、今日右之通り御役替被仰付候由、何様成事ニテ候哉ト存候事、

一十二月十二日、曇リ寒シ、夜前ヨリ又少シ腹中筋張り起リ痛ミモ有之、何分ニモ押シ通り快方ニ不相向入り候間、折角薬用ナリ、

一今朝新納休右衛門被参候テ、猶又拙者内存之趣キ周防殿へ申上候儀ニ付相談承り候間、此内ヨリ吟味之成行ヲ以不相替頼ミ置候事、

一八ツ後伊地知小十郎被参候間、此方嫁モライ方之儀致相談候事、

一先月十八日願出置候次郎四郎縁組離別之儀、今日筑後殿ヨリ御用人關山糺取次ニテ、御用人座廊下ニテ、御目付福崎助七・席詰二階堂源太夫・郷原轉一所ニ被召出、願之通り御免被仰付候旨致承知安心相成候事、

一十二月十三日、今日モ腹痛先ソ同様ナリ、

一 今日本家宗八郎殿家作成就ニテ引移リ祝ヒ迄モ有之筈

ニ付、次郎四郎五ツ過ヨリ参ヘリ、新納休右衛門并ニ  
休藏・三次且又北郷浪江殿・東郷一介等待迎之手当ニ

テ候、今日朝之内ハ大雨ニテ四ツ後ヨリ小降り相成、

徙移ニハ別テ吉兆之事也、都之城ニテ別レ之盃料理迄

モ寄り合有之、屹ト規式有之四ツ後新宅へ被入来候由、

次郎四郎等ハ夜入四ツ過時分帰ヘリ候、右徙移ニ付鯛

二枚・酒一樽・琉球製刀掛巻ツ・同花台一ツ・大卓一

ツ致進覽候、且亦都之城へモ今日引越候祝儀鯛一折・

酒一樽遣ハン候、豊前殿御夫婦モ八ツ時分ヨリ御出被

成候由、今晚宗八郎殿方ヨリ祝ヒ品トシテ取肴類并ニ

酒トモ被下候事、

一 九ツ時分ヨリ伊集院周右衛門被参候テ、拙者御役御断

リ一件何様之吟味ニ相成候哉承り度被申候間、存分不

残咄シイタシ置候、長談ニテ帰り也、

一 十二月十四日、雨夕方止終日寒シ、今日モ腹痛少々起

リ終日不止候位ナリ、昼西郷モ相頼ミ灸治モ六七日以  
前ヨリ腹ニ連灸イタシ候へトモ、今日ハ余リ寒ク有之  
候ニ付見合候事也、

一 八ツ後ヨリ次郎四郎方へハ御用人座書役都テ相招酒ト  
モ振廻候事、

一 七ツ後東郷一介被参候、明後十五日ヨリ都之城へ差越

トノ事ニテ旁ニ付見廻リナリ、

一 大口ヨリ差越居候新納五郎右衛門・庄屋黒川強兵衛モ

最早用向相片付候ニ付、昼後ヨリ打立罷帰リ候、此節

ハ木之氏諸事并ニ泉徳寺法事一件・規定等彼是段々申

付遣ハン候、且亦先達ヨリ預リ置候所郷士并ニ新納武

兵衛或ハ家来之仙良坊本尊不動王之絵図掛物等モ、修

覆或調替等致出来居候品モ、右兩人へ才領申付遣ハン、

奥書等左之通り也、

一 仙良坊看經所本尊不動并ニ五大尊ト相見得候掛物絵ハ

谷山探成へ相頼ミ書改方イタシ、袷装ハ櫻井勇右衛門

へ頼ミ先比致出来置候ニ付、巻口之方ニ左之通り記シ

置キ候、

安政六年己未冬書改寄附

画谷山探成、施主新納久仰

二幅共右之通相認置候事、

一右文状等六通其方家蔵ニテ此節致一覽加裱装差返之候条、無籠抹永伝有之度者也、

安政六年未十一月

新納 駿河 判ナシ

志村五郎次殿

一右坪付老通志村五郎次方へ致家蔵来リ候へトモ其方譲リ受候由、此節致一覽候処、

靈社様真跡ニ付加裱装差返シ候条、無籠抹永伝有之度者也、

安政六年未十一月

新納 駿河 久仰判

祁答院九兵衛殿

一右文状等三通其方家蔵ニテ此節致一覽候処、拙者先祖忠清手跡等ニ付加裱装差返之候条、無籠抹永伝有之度

者也、

安政六年未十一月

新納 駿河 久仰判

寺原周右衛門殿

一右坪付等七通其方家蔵ニテ此節致一覽候処、靈社様真跡等ニ付加裱装差返之候条、無籠抹永伝有之度者也、

安政六年未十一月

新納 駿河 久仰判

上村庄兵衛殿

一右坪付二通上村庄兵衛致家蔵来候へトモ其方譲受候由、此節致一覽候処、

靈社様真跡ニ付加裱装差返之候条、無籠抹永伝有之度者也、

安政六年未十一月

新納 駿河 久仰判

湯田喜三太殿

一右大嶋取納奉行宛之条書其方家蔵ニテ此節致一覽候処

別テ古証ニ付加裱装差返之候、急度被致龜抹間敷候、

新納仲右衛門殿

新納 駿河 判ナシ

古知行目錄之奥

安政六年未十一月

上井十兵衛殿

一右知行目錄ニ通其方家藏ニテ此節致一覽候処、拙者先祖名前之目錄ニ付加裱装差返之候条、無龜抹永伝有之度者也、

古文状等之奥

一右文状并ニ諸書付等其方家藏ニテ此節致一覽候処、

靈社様真跡其外先祖手跡等ニ付加裱装差返之候条、急

度無龜抹永伝有之度者也、

新納仲左衛門殿

新納 駿河 久仰判

安政六年未十一月

久仰判

右之通り一卷毎ニ奥書イタシ入箱迄モ相調差返シ置候

事、

新納仲右衛門殿

雜文状等之奥

一右諸書付并ニ文状等其方家藏ニテ此節致一覽候処、拙

者先祖手跡等モ有之候ニ付加裱装差返之候条、無龜抹

永伝有之度者也、

新納 駿河 久仰判

久仰判

一十二月十五日、快晴、昨日中ハ腹痛ミ有之不宜候処、夜前深更ヨリ追々安ラカニ相成リ、今朝ヨリ至極平和ニテ喜ヒ候事也、八ツ前西郷被參候、三益モ昨日ヨリ申遣ハシ置候故今日被參候事、

安政六年未十一月

一夜前深更番所勤酒匂榮藏事、(佃居裏) 佃居之間下女八重傍ニ寢居候由、彦熊乳母見当リタル由今朝承リ候事、

一今日嫡家宗八郎殿事、養子成并ニ家督之御礼被仰付波

門ト改名有之、八ツ前御見廻被成候間、拙者病中ナガ

ラ致改服面会ニテ祝儀トモ申上候、右ニ付今日彼之方

へ家内中并ニおさと殿モ御出被成候様承リ候へトモ、

当分お久モ腫物イタシ拙者勿論之事候へハ皆断リ申入

次郎四郎迄参リ候、右両条御礼ニ付テハ重立候事故、

昼之内肴一折・酒一荷并ニ太刀一腰・馬代青銅百疋為

祝儀拙者父子ヨリ遣ハシ候、彼之方ヨリ今晚祝之品ト

テ取肴并ニ菓子・引物・酒トモ取合セ被下候事、尤今

日御直元服其外初テ之御目見等多人数有之候由也、

一今日御広敷御用人小森新藏事、御鉄砲奉行ニテ御趣法

掛リ御用人席へ相詰、御家老へ得差図候儀御用人同様

被仰付候由、且亦昨日郡奉行關山鬼散太事、御勘定方

小頭へ御役替被仰付候由、是ハ去ル十二日郡奉行山城

新右衛門同日ニ御用出候へトモ、關山ハ旅行ニテ昨日

罷出候由、山城ハ先日即罷出寺社方取次へ御役替被仰

付候由、兩人トモ近比地方枡方検者減少筋取シラへ等

イタシ候事ハ、現在拙者存之事ニテ、尤豊後殿ヨリ依

内沙汰取シラへ減少相成候儀ハ拙者モ預相談、同意イ

タシ申渡等ハ拙者名前ニテ取扱イタシ置候処、先日ヨ

リ又々以前之通り両検者被仰付、減少之者トモ本之通

リ再勤ニ相成候、就テハ右之吟味等モ不行届之筋ニ見

得恐入罷在候事、

一今日周防殿御事結構被仰出候儀左之通り也、

島津周防様

右ハ御前向へモ脇差被帯候様被仰付候、

一此様文字 御前御用タリトモ相用候様被仰付候、

但

他所向之儀ハ是迄之通、

一年頭其外屹ト立候節供廻リ六七人、平日モ三四人相増

被召列候様被仰付候、

一虎皮鞍蓋・金紋先箱御当地迄被相用候様被仰付候、

一登城之節御桜門ハ是迄之通りニテ、北御門通融之節ハ

中之口御玄喚前迄、大奥へハ通番所前迄、御台所御門

ハ士番所御門涯迄乗輿候様被仰付候、左候テ諸御屋敷并ニ神社寺院へハ右ニ準シ被乗通候様被仰付候、

一登城之節ハ桜之間脇二階へ被相扣、御家老座へ御用

之節ハ時々勝手ニ被成御通り候様被仰付候、

一御高五千石御一世被召付置候、

右ハ格別之御倫次ニ付、別段深思召之訳被為、在、御

一世右之通り御会釈被相替、虎皮鞍蓋・金紋先箱之儀

ハ家格ニ被相用候様、御家老御使ヲ以御達可申上旨被

仰出候、此旨致順達候、以上、

但

今十五日拙者御使者相勤候、

未十二月十五日

筑後

右之通り大目付以上へノ中間順達ニテ承リ候事、

島津周防様

右ハ平日御登城之節是迄表坊主致御先達来候得共、

以来御目付可致御先立候、

一御扣所ヨリ御家老座へ御通ヒ之節ハ、御鈴口迄ハ御近

習番所詰奥御小姓、同所ヨリ鳴子之口迄ハ表御小姓、夫ヨリ御家老座迄ハ表坊主可致御先立候、

▽<sup>④</sup>右之通今日被仰付候、  
△

十二月十五日

筑後

一十二月十六日、腹痛昨日ハ余程平和之方ニテ喜ヒ居候

処、夜前深更ヨリ又々心下剛張起リ、今朝ヨリ積痛ニ

テ食事等不好不平ニ付、則西郷へ申遣ハシ針治トモ相

頼ミ候処、兎角時候ニ応シ不同有之候半、矢張り疝之

塩梅同様ニ見得候間暫時休息候様、左候ハ、可宜ト被

申聞候間、針之後暫時打臥一息寢候テ八ツ過目覚候処、

申教之通腹合気分相成リ、今朝之位ヨリハ格別平和

相成大キ喜ヒ候事也、

一七ツ後ヨリ伊地知小十郎・新納次郎九郎被參候テ緩々

致咄居候処、岩山八郎太被參候ニ付拙者八郎太方へ出

張リ少々御用談承リ、引続拙者此節引入之儀細々存分

咄イタシ候処、八郎太存分モ細々被為聞、得ト腹藏不

残置致閑談、別テ仕合ナリ、右ニ付長談ニテ夜入五ツ時分帰リ也、

一 今日嫡家波門殿ヨリ、此節引移リ且ハ両御礼等モ首尾能相済、預世話候趣キ旁ヲ以テ、着一折・酒一樽・太刀一腰・馬代青銅百疋御使ヲ以被下入御念候事也、

一 十二月十七日、今日腹合平和ニテ候ヘトモ、七ツ時分ヨリ脇腹ニ掛少々痛ミ起リ候、八ツ時分西郷幽泉被参候、夜入候テモ同様有之候ヘトモ、深更ニハ和ラキ仕合セノ事ナリ、

一 七ツ後岩山八郎太一刻被参候テ、昨日咄シイタシ置候御用筋、此内拙者取扱振り之儀トモ養田ト極内被致咄合候趣トモ被為聞、何モ心障リ相成事ハ無之トノ返答振りニテ至テ仕合之事也、乍然腹痛等ハ現在ニテ迎モ則ヨリ出勤ハ不相調候ニ付、歩行御暇ニテモ奉願、節角致養生早目ニ出勤出来候様可致旨実ニ申答置候事、  
一 先夜<sup>(四男)</sup>困居之間へ番所之榮藏臥居候儀ニ付、程能致糺

方候処、何分双方意通り等敷相見得居候処、下女暇申出候ニ付、直様其通り差免今晚引取候、榮藏ハ追テ暇差出筈也、

一 磯永喜之助事、毎日程参リ写シ物或ハ帳留等之加勢也、  
一 十二月十八日、晴天ナガラ寒風強シ、今晚ヨリ腹痛ハ平和相成仕合ナリ、今日中寒威敵敷候ヘトモ差テ痛モ強ク無之、先ハ仕合之事ナリ、九ツ時分西郷モ被参候事、

一 八ツ後伊地知小十郎被参候テ、次郎四郎へ再縁之儀口合被呉候処、何モ存寄無之候間、老輩或ハ拙者トモ之差図次第可致トノ事ニ候旨被申聞候間、其通ナラハ其考ヲ以テ可致吟味旨ヲモ咄合置候事、

一 八ツ後北郷浪江殿并ニ養子哲五郎殿召列御出被成候、尤モ養子成等被仰付候以後初テ之見廻ナリ、依之後達テ三本入扇子一箱・手助一掛・手綱一筋為祝儀差遣ハシ候事、

一今日歩行御暇左之通願出候、

口上覚

▽(中、朱書)  
一願之通御暇被下候、

十二月

筑後

右之通十九日被仰付候事、

△

私事此内ヨリ病氣有之、段々致療養候へトモ于今寸切

ト無御座、此涯歩行可致相応旨療医ヨリ承リ申候間、

武村之内東郷一介抱地迄歩行仕度御座候間、日数十五

日御暇被成下度奉願候、此旨御申可被下候、以上、

未十二月十八日

新納 駿河

右之通り相認、用達伊東新五左衛門ヲ以テ月番御用人

堀四郎左衛門へ差シ出シ置候事、

一今日宮平親方ヨリ氷砂糖一籠・焼酎砧一双贈リ有之候

少々成願筋有之、表向申出置候由ニ付テ也、

一今日夕方相成打疊リ敲敷寒シ、風モ追々相応吹立候事、

一十二月十九日、今朝極薄雪、昼モ度々打疊リ花ヒラ又

ハ霰交リ雨ニテ終日ヒトキ寒サニテ候、夫故腹通兎角  
不宜候、昼時分西郷被參候事、

一今朝新納休右衛門被參候、拙者先日ヨリ談シ置候儀ニ

付猶又引合承リ候、然レトモ趣意不相替旨申入置ナリ

引続キ東郷左太夫・新納三次・黒田平八等モ被參、引

続八時分迄客人也、

一昨日願出置候歩行御暇、今日願之通り筑後殿ヨリ御用

人ハ堀氏ヲ以テ御免被仰付候事、

一七ツ時分新納休右衛門又々被參候テ、今日拙者内存之

儀周防殿へ鹿島郷十郎ヲ以テ相伺ヒ被申候処、是ハ込(因)

タ事何トモ返答不出来候、イツレ同席中へ内意モ可有

之、其節相談承儀モ可有之トテ、何分御沙汰モ被為兼

候御事ニテ候由、其後休右衛門ニモ外ノ御用ニテ罷出

候処同様ニ御沙汰被成候間、駿河事実ニ胸腹之痛ニ付

テハ来春之事モ追々近寄り誠ニ心痛仕居候トノ趣被申

上候へハ、其儀ハ尤之事ニ候旨御沙汰被為在、外ニ何

モ御不興之御口氣ハ不伺候間、早々成行為聞度參リ候

トノ事ニ付、別テ面働罷成致安心候、尤モ同席へハ早速可申入旨相答置、鹿島へモ宜敷挨拶イタシ置被呉候様ニ頼ミ入置候事也、

一 大坂詰見聞役田中仲左衛門へ迫水善左衛門ヲ以テ頼ミ置候お悦用事衣裳箆寄一ツ、今日大廻船ヨリ相届候、至極宜敷候事、

一同席花山伊織殿先達テヨリ引入御役御断之儀被申出置候処、今日願之通り御免被仰付候由、是ハ全老年之訳ナリ、仍テ其身一世百石之物成被下置、以来奥へ罷リ通り奉伺御機嫌候様被仰付由也、

一 十二月二十日、櫻島大雪、昼晴寒冷甚シ、拙者夜前ヨリ少々風引之様ニテ熱氣ナト有之、今朝新納龍雲参リ候間為見候処、兼テ幽泉ナト被申候通り心下滞リ居候間、今少シ開ラケ立候ハ、追々可宜候ニ付、折角何篇心慰ミ相成候様イタシ、少シニテモ気分楽ミ候儀ヲ心掛候ハ、可然候半ト被申候、昼時分幽泉モ被参夕方三

益モ見廻被呉候、尤申遣ハシ置候故也、左候テ様体先同様ニ有之候、何ソ悪敷方モ無之ト被申候事、

一 夜前ヨリ今朝ニ掛お久ヨリ次郎四郎再縁之人物おさと殿ヲモラヒ度拙者トモハ存居候、何様相考候哉ト被申聞候処、少シモ存寄り無之、至極仕合ニ存候旨申答候由承リ拙者共モ大キ喜ヒ之事也、

一 今日嫡家へ新納末家中招キ有之候ニ付、次郎四郎ニモ参リ候様承リハツ後ヨリ参リ、四ツ時分歸リ候事、  
一 今日櫻島へ相応雪積、御当地ニハ極少シ見得候へトモ在番官平ヨリ例之通り蒸籠二箱・焼酎砧一双安否尋トシテ贈リ有之候事、

一 加治木之住刀鍛治池傳右衛門へ此内刀大小并ニ袋物鐘等打調方頼ミ置候処、致出来今日夕方持参差出候間、新五左衛門ニテ受取致挨拶、酒トモ為吞候、拙者事風邪氣ニ無之候へハ致面会考候へトモ、折柄ニテ無致形旨申断リ置候、左候テ右之大小并ニ鐘ハ、傳右衛門兄之池六郎申談シ打調呉レ候様頼ミ置候ニ付、刀ハ兄之

六郎正路、脇差ハ傳右衛門正光、袋鑓正路打方イタシ  
具候、<sup>▽</sup>尤帖佐御手山ニ而吹方之鑓ヲ以打方イタシ具候  
様、右之鑓ニテ打調候処第一之望ニテ、後年名物ニ相  
成取ト存候テ頼置候間、其通致出来、銘彫モ其段記シ  
有之候、且又外ニ短刀二本右御手山ニテ傳右衛門砂ヲ  
吹鑓ニ成シ、夫ヲ以打調候由ニテ為見候、是ハ相州之  
伝法ヲ以打調候由ニ付、地肌アリ、荒沸等モ多ク掛、  
見掛至テ面白ク有之候ニ付、到テホシク有之候ヘトモ  
脇方頼之由承リ押取モ難致、外ニ打方イタシ具レ候様  
相頼ミ置候、左候テ此節拙者頼候大小并ニ袋鑓之代料  
当人ヨリハ致遠慮不申出候ニ付、肴料トシテ五兩程遣  
ハシ置候、刀鑓等之銘彫寸尺左之通り也、

刀

六郎正路作

差表隅州住正路以帖佐鑓造

差裏安政六年己未十一月日

長サ式尺三寸三部半

反リ三部半

本幅壹寸五リン

重ね二部式リン

脇差

傳右衛門正光作

差表隅州住正光自銷煉

砂為鑓以鍛造之

差裏安政六年己未十一月

長サ壹尺四寸式部強

反リ二部強

本幅壹寸

重ね二部二リン

袋鑓

片刃

銘 隅州住正路

鋒首ヨリ三寸七分

袋込七寸式部半

右之通りニテ候、三品トモ追々彦熊用可相成ト、打調

方イタシ置候事也、

一地頭所指宿ヨリ寒中尋歳暮祝儀トシテ、例之通り産物

安政6年

トモ差出候儀左之通、

覚

式行料物壹貫貳百文  
一玉子 一台

指宿

右御子様御相中

寒中

歳暮

一御肴 一打生

一御肴 一折生

一御酒 一樽十

一御酒 一樽十

式行料物壹貫五百文

式行料物壹貫五百文

一玉子 一台

一里芋 一台

一紙袋 五ツ

右御地頭様へ

右御地頭様へ

郷土中

一御肴 一折塩

一御肴 一折塩

一御酒 一樽十

料物五百三拾貳文

式行料物壹貫貳百文

一里芋 一台

一玉子 一台

郷土中

右御奥様御方

右御奥様御方へ

一御肴 一折

一赤貝 一台

一御酒 一樽十

一里芋 一台

右御子様御相中へ

郷土中

一御肴 一折塩

一御肴 一折

料物五百三拾貳文

料物五百三拾貳文

右御地頭様御方

一玉子 一台

一御肴 一折塩

諸浦中

一耳組具座 貳拾枚

右御地頭様へ

料物五百三拾貳文

諸在中

右御奥様御方

一御肴 一折

料物五百三拾貳文

一御肴 一折塩

諸浦中

一玉子 一台

右御奥様御方

右御子様御相中

諸在中

諸浦中

一御肴 一折塩

料物五百三拾貳文

一中紙 一束

一玉子 一台

右御地頭様御方

右御子様御相中

町中

諸在中

一中紙 一束

料物百文

右御奥様御方

町中

一中紙

一束

料物百文

右御子様御相中

町中

合九貫四百三拾貳文

内

金壹兩貳朱

大錢三枚ト小錢八拾文

右之通り差上申候間宜御取計可被下候、以上、

未十二月

郷土年寄

園田宇左衛門

一十二月二十一日、晴寒風、今日モ風邪氣ニテ少々ズメ

キ等有之候間終日打臥居候、八ッ前西郷被參候、腹合

ハ宜敷候ヘトモ脈ニ少シ數有之トノ事也、

一七ツ時分新村謙齋參候、是ハ申遣ハシ置候故也、左候

テ篤ト脈腹共同被申候処、矢張り三益同様之見掛ニテ

腹中一体カラミ付敷敷候ヘハ、追々薬功相クツロキ付

候テ和シ合廻リ立不申候ヘハ迎モ宜敷場ニ不至、薬法

モ只今三益調劑至極可宜、謙齋見受モ丁度此通りニ候

旨被申候間致落着候、尤此内ハ只今ヨリモ筋張り強ク

難儀ニテ候得トモ、最早宜敷方相成候所ニ候旨申聞候

ヘハ、只今之所ニテモ今、日数十日哉十五日トモイタ

シ候テモ、カラミ和ラキ候処ニハ至ル間敷、折角灸治

トモイタシ候様、謙齋見受ニテハ灸治第一ト存候、左

候テ塩カシキイタシニツモ三ツモ取替々々腹ヨリ脇腹

ナトヘモ段々入レ、何ヨリモ腹中暖メ候処イタシ候様

此様体ニテハ寒氣敵ク嫌ヒ候モノ故、其考ヲ以テ致養

生候様細々申教也、

一夕方ヨリ岩山八郎太被參候、是ハ申遣ハシ置候故也、

用向ハ重富ヘ申上候趣ヲ含、猶又勘考イタシ候処之成

行致相談候へハ、八郎太考ハ此内ニ不相替矢張り無心障相考、快気次第致出勤候様ニトノ趣ニテ候間、其段

ハ弥心得居候、乍然余程長引入ニモ相成候間、病体冥々之成行月番并ニ左衛門殿へ申入、今形ニテハ兎角今暫御頼申上候外無之旨、委敷述置被呉候様頼入置候、夜入帰リナリ、

一十二月二十二日、曇リ寒風強、今朝気分太体也、一昨日比ヨリ風邪取合居候間夫丈之気分ニテ候事、今朝永田與右衛門見廻リ被呉候、昼西郷針頼置候、八ツ後ヨリ喜之助被參候、喜之助ハ毎日程也、

一八ツ後新納休右衛門被參候、昨日岩山へ申談候、猶亦致相談置候、且又次郎四郎へおさとの縁組之儀、豊前殿へ内願相立候ハ、何様可有之哉ト致相談候処、至極同意ニテ、彼ヨリモ訳テ致相談進メニ付、左候ハ、休右衛門豊前殿へ致參上、内願相立被呉候様、就テハ今日不成就日ニ付、明日モ都之城へ參リ被呉度細々頼

ミ入置候、此儀ハ休右衛門喜ヒ同意候事ナリ、七ツ半時分被帰候事、

一十二月二十三日、霜極強昼快晴、今日腹痛ハ追々平ラカノ方相成候へトモ、先日ヨリ之風邪氣ニテ寒熱往来之氣味ナリ、幽泉進メニテ此三日ミイラ丸毎朝致服用且又鶏之味噌煮モ今日ヨリ薬食イタシ候事、

一今朝新納三次召呼候テ、おさと殿事此方へ御モライ申上度致内談候処、大悦ニテ同意ニ付、左候ハ、其段おさととのへ申上置被呉候様頼ミ入、早速被申上候処、何トモ御承知可被成旨ニテ候段被申聞、是亦致安心候就テハ休右衛門へ最早頼入置候事ニ付、都之城程合相知候ハ、内匠殿へ申入、則踊(歌舞)へ伺ヒ越シ被呉候儀トモ宜敷申談給リ候様頼入置候事、

一四ツ後新納休右衛門被參候テ、今朝豊前殿へ罷出、おさととの一筋内願申上候処、至極宜敷御聞取ニテ、其筋ニ付テハ豊前殿御夫婦疾ニ御心付被成、東郷一介へ

ハ御咄被成候処、一介ニハ北郷家へ約束相成居候事ニ付ト申、頓着不致候ニ付、此方へハ定テ咄モ不致候半右次第豊前殿ナトハ疾御心付之事故、随分御受合出来候事ニ候、尤モ左候ハ、波門殿ニモ御本意ニ候半ト、段々御懇意沙汰被成候ニ付、早々此方へ参り成行申聞セ候トノ事ニ付、お久トモく面会イタシ大悦ヒイタシ、先一礼トモ申遣候事ナリ、左候テ右休右衛門門前へ新村謙齋居住之事故、拙者病体モ承被具候様先日頼ミ置候ニ付、今朝カ被承候処、拙者へ謙齋直对被申聞候通、腹中筋張り強ク敵敷カラミ付強ク候間、廻リ立クツロキ付候へハ追々宜敷可相成、乍然余程カラミ付強ク候間、今暫日数不相掛候テハ快方有之間敷申事ニ候旨モ被為聞、是亦致安心候事也、

一在番親方ヨリ例年之通り館内へ招請之儀承リ候へトモ御用多之趣殊ニ当年ハ現事病氣成行ヲ以テ断り申入候処、今日左之通贈り有之也、

進上

御掛物林梅筆 一幅

御花入 一

沈金御夜喰膳 十

縮緬紅 二卷

以上、

宮平親方

進上

御重甘物 一組

焼酎砧 一双

以上、

宮平親方

進上

散砂糖 一桶

以上、

琉球

役々相中

一宮平親方へ寒中為尋今日大鯛一折・酒一樽遣シ候、且

亦昨日返上物才領大筆者崎山親雲上へ近々〔乗船ニ而帰帆〕  
之由ニ付

返礼扇子一箱・白麻二十帖例之通り遣ハシ置也、

一 今夕方都之城出雲殿奥方、歳暮為祝儀御見廻被成候事

一 おいつさまへ歳暮ニ付金壹両今日差上置候事、

一 十二月二十四日、快晴暖気也、今日モ少シハ頭痛寒熱

往来之気味有之、乍〔併然〕追々軽ク罷成候事也、

一 今四ツ前鎌田孝右衛門玄喚迄被参候テ、拙者事今日御

用之儀有之候へトモ名代ニテ相濟事候間、誰ソヘ名代

取計可申旨取次ヲ以被申聞候間、弥其通り取計被呉候

様、中ニモ此五六日ハ風邪氣ニテ寒熱頭痛イタシ打臥

居候ニ付、宜敷取計被呉候様申達、追付用達差出候処

八ツ前罷歸リ被仰渡候御書付差上候へトモ、折柄西郷

幽泉被参居針央ニ付相濟候テ致拜見候処左之通、

右来申年

新納駿河

御参勤御供被仰付置候へトモ被成御免候、左候テ諸掛

リ之儀モ同様被成御免候、

十二月 筑後

右之通名代川上矢五太夫殿ニテ致承知、実々病氣ニ付

テハ難有次第ニテ安堵イタシ候、右ニ付親類中并ニ兼

テ出入之面々等へ則今日成行吹聴イタシ置候事、

一 右之通今日拙者儀彼是御免被仰付候ニ付、跡代リ等左

之通り被仰付候由、

川上式部殿

右来申年

御参勤御供被 仰付候旨今日

御直被 仰付候、

十二月 筑後

一 御軍役掛

一 御勝手掛

一 佐土原掛

一 琉球掛

一 琉球産物方掛

一 御改革方御内用掛

川上式部殿

一 浄光明寺掛

一 宗門方掛

島津 登殿

右之通被仰付候条云々

一 演武館掛

一 造士館掛

島津左衛門殿

川上筑後殿

右之通被仰付候条

御先代様被 仰出置候

御趣意基何篇行届候様可取計旨被

仰付候、

十二月廿四日

登

一 十二月二十五日、細雨暖氣、今日腹合平和押通居候、

四ツ後西郷被参候事、

一 今朝新納次郎九郎被参候、尤モ昨日致承知居候趣ニ付

テ之見廻リナリ、彌太右衛門モ最早快方候ヘトモ年内

ヨリ出勤トモハ無覺束模様ニ付、是迄之成行トモ細々

次郎九郎迄咄シイタシ置候、四ツ後新納休右衛門・平

田八郎太モ同断ニ付見廻リ有之候間、是迄之通り成行

存之前ナガラ猶亦咄シ合、此上ハ早目ニ御役御断リ可

申出旨モ談シ置也、引統伊地知小十郎モ見廻リ同断也

一 八ツ前兒玉喜兵衛眞了院御方ヨリ之使ニテ被参、御方

ヨリ左之通、

肴料金 五百疋

八丈島 二反

ヲールコール 一ツ小也

右ハ先達テ致進覽物候御返シニテハ無之、只在合ニ付

不取敢被遣候トノ口上、且ハ此内御音信イタシ候儀ト

モ厚忝被存候趣トモ挨拶トモ被申遣候間、無何事此内

之御挨拶ト存忝致拜受候テ直ニ同人へ御礼宜敷取合給候様、尤モ拙者当分之病氣ニ付テハ急速參上等ハ勿論不相調事候ニ付彼是レ頼ミ入、尤昨日致承知候成行共モ致咄置候事也、

一八ツ後迫水善左衛門見廻リナリ、是モ昨日致承知候儀ニ付テ之事候間、互ニ彼是咄合又承リ候処、恐入候事共有之候也、

一夕方岩山八郎太被參候、是モ申遣ハシ置候故也、訳ハ昨日致承知儀実々病氣御懺察ニテ右之通り被仰付候半難有事ニ奉存候、然処此上奉恐入候ヘトモ兎角此涯御役御断リ申上、御免ヲ蒙リ今一涯致安心養生モイタシ度候ニ付御断願書差出度、乍然昨日致承知候儀ニ付テハ早速差出不都合相成候テモ不可然哉ニ存シ候間、養

田へ致内談被具候様ニ細々頼ミ入置候事、

一今日役人木原孝右衛門ヨリ金四兩拜借之儀申出、且又下人仙五郎ヨリモ壺両拜借申出候由用頼ヨリ承リ候間兩人トモ其通り被取計候様達シ置也、

一大工川辺吉之助事、先達テヨリ毎日雇入諸箱類彼是致出来候ニ付当節季ニモ成リ候間、肴料金百疋・小倉袴壺ツ遣ハシ置候事、

一十二月二十六日、腹痛追々平和之方ナリ、乍然少シ風邪氣残り居候半、

一寒中并ニ歳暮ニ付見廻リ衆等モ少々有之候ヘトモ、拙者ハ病氣ニ付面会断リ申入引込居候事、

一今日用達新五左衛門へ金貳拾兩手渡シニ遣ハシ置候、同人事ハ此節拙者仕合ニ付テ甚氣之毒ニ存候、今日モ内決之趣細々申聞置候事、

一今日例年之通り年重ね之餅規式イタシ候事、

一十二月二十七日、暖氣ナリ、病氣同様ナリ、昼時分休右衛門・三次列立參リ、豊前殿へ願上置候おさとの一件北郷數馬殿方モ根切ニ相成、何モ都合宜敷候向ニ承リ候段内々為聞被申、先々喜悅イタシ候事也、

一今日兒玉喜兵衛へ左之通り申遣ハシ置候、

寒威平和ニテ猶御安康被成御座候半、私ニモ寒威別テ恐レ申病氣故、ケ様之時全至極仕合ニテ喜ヒ申事ニ御座候、擬先日ハ御出ニテ存モ不寄眞了院御方ヨリ之御挨拶クワシク致承知、其上

御着代リ 五百疋

八丈シマ 式たん

フールコヲル 一ツ

誠ニ結構成御品々被入御念候御取扱ニテ何トモ入り入御受モ直様出来兼候次第ナカラ、御趣意之程委敷承知イタシ候処、誠御趣意之御事ニテ御仁心之段深々難有儀ト奉存御受申上、幾久シク調宝秘蔵可仕、左候テ何御品モ難有御事ナガラフールコヲル則ヨリソロ／＼ナラシ感吟イタシ候処、御咄申上候通り此内ヨリ之胸痛今以相止不申、毎々夜陰ナトモ難儀イタシ本ヨリ安眠モイタシ兼候へハ、最早雨夜ホトソロ／＼ナラシ夫々心ヲ留候へハ、何トナク心下之動氣痛モワスレ候事ニテ

誠ニ以テ深キ御仁心ニテ被下候儀ト深々難有奉存候、訳テ秘蔵仕候、貴様迄此等之段成行申上候、尚御出勤序ニ御立寄給り度、左候ハ、御礼モ屹ト御頼申上度、先日ハ御受序当座之御礼迄ニテ行届不申候間此段奉希候以上、

極月二十七日

猶々私儀御存之通り全体不如意之家内故、近在屋敷ナト様之所モ持合無之、此節步行御暇奉願候モ東郷一介拘地借入置奉願位ニテ、家内モ小鳥其外右様之鳴物ナト実々一品モ持合無之、根カラ心付モ無之候処、前文之通誠ニ胸痛等之クツロキ相成候事初テ存申候次第、実事ノ成行御座候、猶書外面上可申上候、

一今夕方新納休右衛門ヨリ手紙ヲ以テ今昼内々申置候通おさと殿一件弥願通何モ無滞相運候間、左様ニ心得候様豊前殿ヨリ休右衛門被招呼御沙汰有之候ニ付、早速休右衛門此方へ参リ可申聞候へトモ時分柄ニテ脇方内用難迎儀有之候ニ付、手紙ヲ以テ申遣ストノ趣承リ頓

ト拙者夫婦大安心イタシ候事、

一十二月二十八日、晴曇、今日モ拙者気分快方押通り居候、四ツ時分新納休右衛門被參、昨日豊前殿御沙汰被成候趣、猶又被為聞候趣ハ、昨日モ手紙ニテ承り候通り也、右ニ付段々御世話被成下、内願之通り相運ヒ、我々類中モ頓ト致安心候段、猶亦今日モ今一往都之城へ參リ、御礼厚申上置被呉候様ニ類置候、左候テ今日日柄モ宜敷候間、則今日祝之盃為致可申候間、休右衛門モ夕方ヨリ參リ被呉候様ニ申達シ置候事、

一前文之通りおさと殿一件都合能相運ヒ候模様ハ、先日ヨリ内々及承居候ニ付、豊前殿ヨリ返答サヘ有之候へハ、今日日柄宜敷候ニ付、則祝可致手当モ先日ヨリ内々致心組置候処、昨夕ヨリ今朝迄細々休右衛門ヨリ承リ候ニ付、弥今日祝之手当イタシ、おいつさまハツ前ヨリ御出被下候ニ付、夕方次郎四郎・おさと殿・おいつさまニテ三献取計相濟、左候テ拙者モ病氣ナカラ今

日共ハ気分モ宜敷候ニ付致改服、幾久シク次郎四郎・

おさと殿へ致取替、夫ヨリお久其外家中モ目出度取替シイタシ候、左候テ燈台出シ候時分ヨリ、波門殿并ニ内匠殿・衛守殿・主税殿・休右衛門殿・休藏・次郎九郎等追々被參候、尤モ内匠殿御母公モ御出被成、およしとのモ被參、外ニ伊集院周右衛門・伊地知小十郎モ相招候、イツレモ羽織着ニテ御出被成候様、拙者当分之時宜ニ御座候間、何モ其通之手当イタシ置候段訳テ申入、主客羽織ニテ全夜咄シ企イタシ候、取立ハ極々輕クイタシ心之祝ヒハ千秋万歳ト酒トモ取ハヤシ頓ト致安堵候事ニテ、イツレモ四ツ半九ツ時分迄ニ追々御帰リ也、

一右おさと殿事ハ当月朔日ヨリ此方へ御出被成、勿論拙者トモ住居之方へヒタト滞在被成居候へハ、則ヨリ頓ト実子之コトク相成居候へハ、則ヨリ全体人柄ハ至極正道ニテ、此内之人達ニ違ヒ候へハ、我々夫婦成お悦ナトモ喜ヒ無限事ニテ候、尤モ四郎殿身持ニ付養子

一件及吟味候節、拙者考ニハ是非忝人ハ血統ニ相立度

十二月

隼見

申入候ヘトモ、第一四郎右衛門其外喜右衛門・八郎兵衛ナト不同意ニテ、全ク他家ヨリ相統之筋ニ相成、拙

右之通同晦日御免之筋を以申正月二日御付紙ニ而被相下候事、  
△

者初休藏・三次ナト訳テ残念ガリ、彌太右衛門等モ拙者同意ニ候ヘトモ、四郎右衛門等兎角不致落着所ヨリ無致形其意ニ任セ置候処、此節不量此方ヘモラヒ受候次第相成候儀ハ、如何様

未十二月二十八日

新納 駿河

大明神之擁護ニテモ候哉ナト、類中同意之面々ハ喜悅無限、就中拙者夫婦ニヲヒテ、此内兩人程心痛イタシ候儀モ有之候ヘハ、猶更喜悅無申計、此節ヨリ家運長久・子孫繁〔盛〕幾万々歳日出度可有之致大安心候、

右之通御用人北條十左衛門へ用達ヲ以テ差上置候事、一夕方岩山八郎太被參候、是ハ先日頼置候拙者御役御断願出候儀、イツ申出候テモ苦カル間敷旨承リ候間、左候ハ、一日モ早ク願出度候ニ付、明日モ願出候処取計被具候様今日頼入置候事、

拙者病氣モ何方ヘトカ去リ候哉不覚様罷成候、尤夕方ヨリ客対イタシ、今晚相応酒共モ進ミ候ヘトモ、全ク腹痛ニモ無障事也、

一島津左衛門殿奥方ハ松壽院殿御娘子ニテ候処、一昨晩カ産有之候処、兼テ身弱故血運症ニテ産後無程死去之由、今晚遺体私領ヘ引越之筈ニ付、今晚先立挑灯トモ遣ハシ候、尤モ昨日用達ヲ以テ悔ハ申入レ置候事、

一拙者当分之病氣ニ付、来年頭納太刀之儀左之通願出候

口上覚

▽〔申〕朱書  
一願之通被仰付候、

一近比御側役勤被仰付候平田伊兵衛嫡子朋之進事表御小

姓ニテ候処、一昨夜五ツ過キ比カ、伊兵衛所ニテ父子

兩三人并ニ客人藤井才之丞カ参リ居咄シイタシ候内、

不凶座ヲ立庭ヘカ差越候処、物音イタシ候ニ付則主客

差越見候ヘハ、朋之進自身ニ短刀ヲ突立居候ニ付、早

々イツレモ致心配養生之由候ヘトモ、昨朝五ツ過カ相

果今晚葬式之由也、

右ハ全ク不凶之癩氣ニテモ可有之哉ト申人モ有之候ヘ

トモ、実ハ平生父子之間ニ付何トカ余程行詰リ居候事

モ有之、其晚モ何カイジメラレコトキノ事有之、迷惑

之余リ致到来タル事ニハ無之哉ト申向モ有之虚実難弁

事也、

一今日差引所高岡ヨリ寒中并ニ歳暮ニ付、例年之通産物

差出候事左之通、

覚

高岡

寒中

一猪 一丸現

一御樽 一荷

料物金貳朱

右駿河様江

一鴨 一番

一御樽 一荷

貳行料物金壹歩

右奥方様ヘ

一猪 一丸現

一御樽 一荷

料物金貳朱

右御嫡子様ヘ

一鴨 一番

一御樽 一荷

貳行料物金壹歩

右御嫡孫様其外

御相中様ヘ

右之通寒中伺御機嫌進上仕候間宜奉頼候、以上、

未十二月

郷士年寄

市來 善助

外名前略ス、

右御嫡子様江

一鴨

一番

一御樽

一荷

覚

高岡

式行料物金壹歩

右御嫡孫様其外御相中様へ

歳暮

右之通り歳暮為御祝儀進上仕候間宜奉頼候、以上、

一猪

一丸現

未十二月

郷士年寄

市來 善助

一御樽

一荷

外名前略ス、

料物金貳朱

一広紙

五束

右駿河様へ

家督継目等被仰付候

一鴨

一番

御礼 五人ヨリ

一御樽

一荷

一中紙

三拾三束

式行料物金壹歩

右同断困究者共

右奥方様へ

三拾三人ヨリ

一猪

一丸現

右之通り為御礼進上仕候間是亦宜敷奉頼候、以上、

一御樽

一荷

料物金貳朱

未十二月

郷士年寄

市來 善助

外名前略ス

一十二月二十九日、相応之雨終日降り暖氣ナリ、拙者病  
体押通り平和ナリ、屋西郷被參候、是ハ毎日ナリ、夕  
方朝稻モ見廻リ被呉候、是モ申遣ハシ置候故ナリ、左  
候テ得ト脈腹被見候テ先ツ先日通りニテ候、乍然何モ  
アシキ方ハ無之段被申聞候事、

一今日拙者御役御断リ願書、岩山八郎太ヲ以、月番御用  
人堀四郎左衛門へ左之通り差出置候事、

口上覚

私事追々御役替被仰付、当御役迄モ被仰付置、是迄難  
有相勤居申候処、此内ヨリ胸痛差発、段々尽手養生仕  
候得共其詮無御座、迎モ往々出勤仕体無御座候間、近  
比恐多奉存候へトモ、当御役御免被仰付被下度奉願候  
此旨御申可被下候、以上、

十二月二十九日

新納 駿河

一八ツ後ヨリ次郎四郎同席御用人之衆表并ニ御勝手方并

ニ書役四五人相招、酒トモ緩々振廻候、尤モ昨夕内々  
致祝候訳ニ付テ也、亭主前主税殿・源太夫殿・新納休  
右衛門等ニテ、拙者病氣ニ付挨拶モ断置ナリ、お久モ  
当分腫物ニテ髪取上モ不出来ニ付、今日モおいつさま  
御出被下おさと殿御引出シ被下候、会釈ハ全夜咄之通  
リニテ緩々酒差出候迄也、五ツ過比皆被帰候、おいつ  
さまも四ツ前比御帰リ被成候、今日迄モ能キ首尾ニテ、  
当節季ハ嬉シク暮シ候事ト家内中之喜悅ナリ、  
一今日ハ終日之雨ニテ諸人大込リナリ、今晚ハ蚊二三疋  
出候位也、

一十二月晦日、今朝ヨリ快晴相成諸人大喜悅ナリ、拙者  
病氣モ押通り快キ方ニテ、風邪モ全快相成様有之仕合  
ナリ、八ツ前幽泉被參候間今日迄ハ針相頼、左候テ今  
形快方ニ付年頭三ヶ日ハ休ミ可申旨申入置候事、

一当年九月比ヨリ持病疝癪氣ニテ腹痛彼是有之致薬用、  
朝稻第一ニテ次ニ西郷モ其比ヨリ毎々相頼ミ、先月初

方ヨリハ就中毎日相頼、兩人トモ至極預世話事候間、

垂水 讚岐殿ヨリ

先日在合之白縮緬老反・十錦焼大碗十・塩鯰巻尾ツ、

一右同 金二百疋

歳暮旁ニ付遣ハシ置候事、

正蠟 一玉四拾七斤掛

一志岐藤兵衛事此方用向上聞頼置候処、当五月比ヨリ病

今和泉 安藝殿ヨリ

氣ニテ不被參候ヘトモ、其以前預世話候旁ニ付、肴一

一大鯛二枚并酒一樽

折・水砂糖白砂糖一重ツ、・金子二百疋取り合セ遣ハ

中蠟燭百五拾挺

シ置キ候事、

花岡 若狹殿ヨリ

一新五左衛門へ着古ヒ麻絹上下一具、道島源五郎・田代

右ハ都テ此内彼家之改革方用向承リ候ニ付テ例年被遣

太郎太へ紬島一反ツ、遣ハシ置候事、

候事也、

一歳暮祝儀ニ付親類其外懇意之向ヨリ肴・酒其外品々遣

外ニ

ハシ候場所モ有之候ヘトモ、互ニ例式故不書留候事、

佐土原ヨリ改革方承リ候為礼、例年之通金子五

一諸家ヨリ此方へ被下候内重立候御方左之通、

百疋・穂北紙等被下候ヘトモ、諸掛リ御免被成

一塩鯰并酒一樽

候後相届候ニ付御断申返シ候事、且亦同所ヨリ

重富 (島津久光) 周防様ヨリ

今晦日寒中為尋、鯉簧巻二ツ家老中書状相添被

一樽肴料三百疋

遣候、是ハ当御役未相勤居候筋候ニ付致受用候

加治木 岩松殿ヨリ

事、

一一樽肴料金三百疋

一昨日願出置候拙者御役御断願書、今日御用人同人ヲ以

テ筑後殿ヨリ今一往致養生候様ニト願書被相下、用達  
新五左衛門ニテ致承知候事、

一 一昨二十八日願出置候来年頭納太刀願之儀モ、今日願  
通り被仰付候旨、口達ニテ御用人座書役ヨリ用達致承  
知候、願書ハ取込ニ付追テ可相下トテ右之通り候由也  
一 歳暮祝儀旁見廻客モ少々有之候ヘトモ、病中之訳ヲ以  
面会断之事也、

一 此節おさと殿此方ヘモラヒ受候儀ハ拙者トモ夫婦之喜  
悦、前文細々相記シ重言ナガラ無限大慶イタシ候事ナ  
リ、以前之人ニテハ家内中始終致心痛、行末如何可相  
成哉ト毎々苦心イタシ候事ノミ有之候処、不計離別ニ  
相成、おさと殿事モ市來某之乱心ニテ婚姻モ差延居候  
処、此方ヘモライ受候事ニ成り立、ケ様成厚福之儀ハ  
イツレ前ニモ申述候通、

大明神之擁護ナラテハ有間敷トテ、毎々拙者共悦ヒ合  
候事ナリ、次ニ拙者退役願出候儀モ残念成事之様候ヘ  
トモ、是モ段々難述言語子細有之候ヘハ、何分先キ永

ク勤心シ候事ハ拙者無心元相考決着ニテ、御断り申出  
候儀トモ家内共ヘモ折々申聞シ置候得ハ能落着イタシ  
就テハ往々却テ安心之儀ニテ家運長久ニ候半ト実々少  
々モ別心無之、家内一統安喜イタシ落着罷在リ歳越シ  
イタシ候事也、

〔表紙〕

東行錄 全

自叙

余カ東行、豈以ニ微眇ニ言ハヤ閔ニト国家之大経ニ、雖然洪範之八政、食貨居ニ其始ニ、財用之事、固非ス小ナルニ、而我国家財窮シ民困シ、衰弊日ニ迫ル、在官有司不レ正サ其本ヲ、屑々焉トシテ逐ニ小利ニ、以ニ堂々タル雄藩ヲ、受ニ制ヲ於商賈ニ、有ニ識ノ人執レカ不レシ慨レ之ヲ、余承ニ乏ヲ於ニ浪一華、理一財ニ、勉ニ枢機之地ニ、乃奮然トシテ思フ之ヲ、我祖以ニ功一勲ニ柱ニ石於ニ国家ニ、今也生昇平ニ、何ヲ以テ報ニシ遺ニ訓ニ、幸ニ当

此。役ニ、官ヲ致シ身酬シ之ニ秋也、於是刻意ヲ焦腸凝胆ヲ、庶ニ幾ニ分寸ニ裨ニ益ヲラシトナシ。国家ニ、或曰、大廈之崩ル、非ニ一木ノ所ニ支ル、何ヲ不レ去テ、曰、吾家世祿、存亡在ニ于国家ニ、豈比フヤ驕ニ旅之臣、掲ニ々トシテ執ニ小節ヲ潔ニシテ其身ヲ不レ顧ニ国家者トシ耶、寧竭ニシテ微力ヲ、而後ニ止シト、遂ニ有ニ兩回東武之行ニ、言忤ニ時世ニ罷官禁錮ニシテ、夫レ蟻蟻ニシテ望ニ騏驎ニ、願ニ蹶固所レ期スル、何シシテ悔ニ、唯愚ニ衷窃ニ思レ之、屈ニ原放レテ、楚宗衰ニ、子ニ宵戮ニシテ具ニ国傾ク、吾雖レ非ニ其倫ニ区ニ々之心自ラ傷ク、屈ニ氏云、父母者人之本也、疾ニ痛慘ニ相、未ストニ會テ不レシ呼ニ父母一也、因テ録ニシテ始末ニ、以テ告ニ祖ニ考之靈ニ云、爾、

文政戊子三月

新納時升伯剛撰

東行錄上

余以ニ理一財一官ニ在ニト浪一華、邸ニ七年、文一政一丙一戊一秋、以ニ輪一台式老一君之命ヲ、至ニ于東一武一議一事、浪一華一知一邸一朝倉某孫十、趣法用人高橋某、甚五兵衛同趣ニ于命ニ、高橋是時

在リ于國ニ、命日、俟ニ其至<sup>ル</sup>ヲ俱ニ発<sup>ス</sup>ヨト<sup>リ</sup>焉、先<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup> 國家之窮<sup>シ</sup>追<sup>テ</sup>年<sup>ヲ</sup>甚<sup>シ</sup>、及<sup>テ</sup>市田大夫輪<sup>ニ</sup>番<sup>スル</sup>ニ于東武ニ命<sup>シテ</sup>有<sup>リ</sup>司<sup>シ</sup>議<sup>シ</sup>セシメ<sup>テ</sup>之、東館ノ度<sup>ニ</sup>支<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>九万金<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>限<sup>ニ</sup>、定<sup>メ</sup>之<sup>カ</sup>制<sup>マ</sup>、公<sup>ノ</sup>子公<sup>ノ</sup>女、其給有<sup>レ</sup>差、不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>踰<sup>ス</sup>也、既<sup>ニ</sup>而内<sup>ノ</sup>官嬪<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>之属、不<sup>レ</sup>便<sup>レ</sup>トセ<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>、積<sup>ル</sup>毀<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>山、節<sup>儉</sup>之制稍弛、余<sup>ニ</sup>与<sup>テ</sup>三朝倉<sup>ノ</sup>、屢<sup>ニ</sup>上<sup>リ</sup>言<sup>フ</sup>論<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>、所謂<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>正<sup>ニ</sup>其本<sup>ヲ</sup>、其末不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>理<sup>ム</sup>焉、然<sup>レ</sup>トモ遂<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>用<sup>ラ</sup>レ、於是内外之度支悉<sup>ク</sup>踰<sup>ス</sup>限<sup>ニ</sup>防<sup>テ</sup>辛<sup>ニ</sup>已<sup>ス</sup>歲<sup>ニ</sup>朝倉趨<sup>ニ</sup>于東武ニ陳<sup>ニ</sup>說<sup>ス</sup>利害<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>輪台前<sup>ニ</sup>、余別<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>録、老君稍<sup>ク</sup>覺<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、將<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>改<sup>ム</sup>也亡<sup>シ</sup>幾<sup>ク</sup>市田氏罷<sup>ス</sup>官<sup>ヲ</sup>、川<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>夫馬久用<sup>ユ</sup>事、悉<sup>ク</sup>廢<sup>ス</sup>市氏之議<sup>ヲ</sup>、於是内<sup>ノ</sup>外<sup>ノ</sup>之度<sup>ニ</sup>支、悉<sup>ク</sup>踰<sup>ス</sup>限<sup>ニ</sup>防<sup>テ</sup>、節<sup>儉</sup>制愈無<sup>ク</sup>度、尋而上野氏帶<sup>テ</sup>得<sup>ル</sup>寵<sup>ヲ</sup>握<sup>ル</sup>權、阿諛逢<sup>テ</sup>迎<sup>ヒ</sup>隨<sup>ヒ</sup>上<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>顧<sup>ル</sup>國事<sup>ヲ</sup>、而我<sup>レ</sup>國、饑<sup>ク</sup>歲連<sup>テ</sup>年、加<sup>ヘ</sup>以<sup>テ</sup>海厄<sup>ヲ</sup>、運漕失<sup>レ</sup>時、失<sup>レ</sup>亡<sup>ス</sup>幾<sup>ク</sup>百萬、大抵國產運<sup>ニ</sup>于浪<sup>ニ</sup>華<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>糶<sup>ス</sup>、金<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>歲<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>万<sup>ニ</sup>兩、災<sup>ノ</sup>害失<sup>レ</sup>亡<sup>ス</sup>在<sup>ニ</sup>其中<sup>ニ</sup>、我<sup>レ</sup>公<sup>ノ</sup>室<sup>ノ</sup>之盛<sup>ヲ</sup>國君<sup>ノ</sup>世子<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>之外、一<sup>ニ</sup>老<sup>ノ</sup>君<sup>ノ</sup>及<sup>テ</sup>公<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>、大小<sup>ノ</sup>二十<sup>ニ</sup>余<sup>ノ</sup>君、悉<sup>ク</sup>在<sup>ニ</sup>于東武<sup>ニ</sup>、附<sup>テ</sup>從<sup>ル</sup>屬<sup>ノ</sup>官保<sup>ノ</sup>傅嬪<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>至<sup>ニ</sup>

卑<sup>ク</sup>隸<sup>ス</sup>與<sup>テ</sup>夫<sup>ニ</sup>、前後無<sup>ク</sup>數、其費幾<sup>ク</sup>万、且自<sup>ニ</sup>昔<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>輪<sup>ノ</sup>台<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>女立<sup>ニ</sup>幕府<sup>ノ</sup>大夫人<sup>ニ</sup>、后宮<sup>ノ</sup>之苞苴、年々倍<sup>ニ</sup>々<sup>ニ</sup>國<sup>ノ</sup>貢<sup>ノ</sup>、是以<sup>テ</sup>國用計<sup>ニ</sup>校<sup>スル</sup>、其出入<sup>ヲ</sup>、一歲<sup>ノ</sup>之用、所<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>足<sup>ク</sup>、始<sup>メ</sup>三<sup>ニ</sup>万<sup>ニ</sup>金、至<sup>テ</sup>乙酉<sup>ノ</sup>計<sup>ニ</sup>校<sup>ス</sup>、所<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>足<sup>ク</sup>殆<sup>シ</sup>七<sup>ニ</sup>万<sup>ニ</sup>金、負<sup>テ</sup>債<sup>ノ</sup>累<sup>ニ</sup>年<sup>ノ</sup>之數<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>与<sup>ス</sup>焉、其不足者、悉<sup>ク</sup>假<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>、買<sup>テ</sup>及<sup>テ</sup>子<sup>ノ</sup>錢家<sup>ニ</sup>補<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>、是<sup>レ</sup>年<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>世子冠<sup>ノ</sup>婚朝<sup>ノ</sup>見<sup>ノ</sup>之大<sup>ノ</sup>禮<sup>ニ</sup>、其費<sup>一</sup>万<sup>ニ</sup>金<sup>ニ</sup>余、國夫人<sup>ノ</sup>大喪<sup>ノ</sup>之費<sup>六</sup>千<sup>ニ</sup>余<sup>ニ</sup>金、是<sup>レ</sup>年<sup>又</sup>銀<sup>ノ</sup>台<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>女、有<sup>ニ</sup>近衛殿下<sup>ノ</sup>之婚儀<sup>ニ</sup>、其費<sup>一</sup>万<sup>ニ</sup>余<sup>ニ</sup>金、悉<sup>ク</sup>取<sup>ル</sup>給<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>浪<sup>ニ</sup>華<sup>ニ</sup>、於<sup>テ</sup>是<sup>ニ</sup>丙戌<sup>ノ</sup>計<sup>ニ</sup>校<sup>ス</sup>、所<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>足<sup>ク</sup>九<sup>ニ</sup>万<sup>ニ</sup>金、東館<sup>ノ</sup>一歲<sup>ノ</sup>之給、供<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>足<sup>ク</sup>、無<sup>ク</sup>余<sup>ノ</sup>金、先<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>官<sup>ノ</sup>造<sup>ノ</sup>漕<sup>ノ</sup>船<sup>ヲ</sup>、其費<sup>三</sup>万<sup>ニ</sup>金、亦<sup>レ</sup>假<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>于浪<sup>ニ</sup>華<sup>ニ</sup>、官<sup>ノ</sup>為<sup>ニ</sup>省<sup>ノ</sup>馱<sup>ノ</sup>通<sup>ノ</sup>之費<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>運<sup>ニ</sup>漕<sup>ノ</sup>之蠟<sup>ノ</sup>菜<sup>ノ</sup>子<sup>ヲ</sup>糶<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>于國<sup>ニ</sup>、取<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>個<sup>ノ</sup>充<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>買<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>出<sup>テ</sup>、換<sup>テ</sup>浪<sup>ニ</sup>華<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>用<sup>ニ</sup>、是<sup>レ</sup>時<sup>ノ</sup>買<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>等、不<sup>レ</sup>獲<sup>ル</sup>數<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>之息<sup>ヲ</sup>、故<sup>ニ</sup>相<sup>レ</sup>謀<sup>リ</sup>而<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>滯<sup>テ</sup>貨<sup>ヲ</sup>對<sup>テ</sup>易<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>而<sup>テ</sup>填<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>、是以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>金<sup>ノ</sup>有<sup>ニ</sup>名<sup>ノ</sup>無<sup>ク</sup>實、有<sup>リ</sup>司<sup>ノ</sup>皆<sup>レ</sup>墮<sup>ル</sup>術<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>覺<sup>ル</sup>知<sup>ル</sup>焉、其<sup>ノ</sup>失<sup>レ</sup>策、大<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>運<sup>ニ</sup>用<sup>ノ</sup>之壅<sup>ニ</sup>塞<sup>ニ</sup>凡<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>、國家窮<sup>乏</sup>之<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>、大小<sup>ノ</sup>數<sup>ノ</sup>事<sup>並</sup>々<sup>ニ</sup>臻<sup>テ</sup>、悉<sup>ク</sup>受<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>之<sup>ノ</sup>弊<sup>ヲ</sup>、而自<sup>ニ</sup>癸酉<sup>ノ</sup>歲<sup>ノ</sup>行<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>始<sup>ニ</sup>業<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>行<sup>ニ</sup>新<sup>ニ</sup>日<sup>ノ</sup>更<sup>ニ</sup>始<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>德<sup>ノ</sup>政<sup>ナリ</sup>、新<sup>ニ</sup>令<sup>ノ</sup>廢<sup>テ</sup>舊<sup>ノ</sup>債<sup>百</sup>二十<sup>ニ</sup>余<sup>ニ</sup>万<sup>ニ</sup>金<sup>ニ</sup>、買<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>等<sup>生<sup>シ</sup>テ</sup>意<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>肯<sup>レ</sup>出<sup>ス</sup>、

金、尋而新債十八万余金、亦貸之浪華其〔息〕亦沮滯、是以用一金遂不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>大賈<sub>二</sub>謀<sub>一</sub>之、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已<sub>二</sub>ハコトヲ、<sub>一</sub>飯<sub>三</sub>手<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>駙儉<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>、駙<sub>一</sub>儉亦一再<sub>二</sub>シテ<sub>一</sub>而伺<sub>二</sub>察<sub>レ</sub>我窮<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>應<sub>二</sub>乎命<sub>一</sub>、事至<sub>二</sub>于斯<sub>一</sub>、術無<sub>レ</sub>所施、余与<sub>二</sub>知邸<sub>一</sub>每<sub>二</sub>慮<sub>レ</sub>事預<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>之、恐<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>意外之變<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>レハ大夫有<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>于此地<sub>一</sub>者、必陳<sub>二</sub>說機要<sub>一</sub>、又就<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>上<sub>二</sub>封事<sub>一</sub>者幾回、遂<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>報<sub>レ</sub>焉、丙戌之春、君公東朝、例東道之盤費六千余金、予<sub>レ</sub>備<sub>二</sub>之<sub>一</sub>于浪華<sub>一</sub>俟<sub>二</sub>駕<sub>一</sub>至<sub>レ</sub>、是<sub>レ</sub>役大賈等不<sub>レ</sub>肯<sub>二</sub>共給<sub>一</sub>、万方索<sub>レ</sub>之、僅<sub>レ</sub>獲<sub>二</sub>三千余金<sub>一</sub>、公<sub>レ</sub>駕<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>泄<sub>二</sub>兵庫<sub>一</sub>、前<sub>レ</sub>駙<sub>一</sub>悉<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>、邸<sub>一</sub>中皆汗<sub>レ</sub>掌<sub>ニ</sub>、於是与<sub>二</sub>知邸<sub>一</sub>謀、召<sub>二</sub>巨商和田某<sub>一</sub>辰巳屋休左衛門而告<sub>レ</sub>曰、公<sub>レ</sub>駕<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>臨、路費未<sub>レ</sub>弁、事<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>急矣、子等<sub>レ</sub>以為<sub>二</sub>吾輩<sub>一</sub>怠弛<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>于斯<sub>一</sub>与<sub>レ</sub>將<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>力之不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>乎、和田潛<sub>レ</sub>然<sub>二</sub>トシテ<sub>一</sub>曰、卑人等<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>公等<sub>一</sub>之苦<sub>一</sub>、唯恨<sub>レ</sub>勞<sub>レ</sub>而無<sub>レ</sub>功<sub>一</sub>耳、雖然今事之急、豈忍<sub>レ</sub>傍觀<sub>二</sub>乎<sub>一</sub>、即給<sub>二</sub>五千金<sub>一</sub>、公<sub>レ</sub>駕<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>、余乃<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>扈<sub>一</sub>從<sub>レ</sub>用<sub>一</sub>人調所<sub>一</sub>、圖師崎<sub>二</sub>二氏<sub>一</sub>告<sub>レ</sub>曰、國家財用之事雖非貴局之管轄朝覲会同公等之專務也、今<sub>レ</sub>公<sub>レ</sub>駕<sub>レ</sub>之用、至<sub>レ</sub>斯窮也、

一旦假<sub>二</sub>和<sub>一</sub>田之力<sub>一</sub>、豈供<sub>二</sub>每歲<sub>一</sub>之事<sub>一</sub>、明年之事、在<sub>二</sub>于今日<sub>一</sub>、二君議<sub>二</sub>之<sub>一</sub>于執政<sub>一</sub>、早不<sub>レ</sub>凶<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、將<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>救者<sub>一</sub>、是以敢告、二氏<sub>一</sub>曰、吾輩非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>之、它日議<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、是時町田<sub>一</sub>大夫亦至、後<sub>二</sub>公<sub>一</sub>駕<sub>一</sub>一日、乃具<sub>二</sub>劄子<sub>一</sub>又詳<sub>二</sub>說<sub>一</sub>之<sub>一</sub>、大夫曰、吾聞<sub>二</sub>事<sub>一</sub>機<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>裁割<sub>一</sub>也、唯聞<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、君上<sub>一</sub>敢<sub>レ</sub>明斷<sub>二</sub>耳<sub>一</sub>、遂<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>後<sub>一</sub>數月、東武羽檄<sub>レ</sub>至、曰、大夫以<sub>二</sub>浪華<sub>一</sub>之事<sub>一</sub>、經<sub>二</sub>公<sub>一</sub>聰<sub>一</sub>、而君上固非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>焉、今<sub>レ</sub>君慈<sub>一</sub>孝、不<sub>レ</sub>忍<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>老<sub>一</sub>君<sub>一</sub>勞<sub>レ</sub>中<sub>一</sub>、英慮<sub>レ</sub>也、汝等宜<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>庀<sub>二</sub>時機<sub>一</sub>周<sub>一</sub>〔施〕<sub>一</sub>、幸<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>支<sub>二</sub>三五年<sub>一</sub>、必有<sub>二</sub>大計<sub>一</sub>之所<sub>レ</sub>改易<sub>レ</sub>焉、今君固非<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>画度<sub>レ</sub>也、唯其間有<sub>二</sub>難<sub>一</sub>言者<sub>一</sub>、汝等宜<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>其臆<sub>一</sub>邀<sub>レ</sub>微意<sub>一</sub>耳、

時升云、所謂難<sub>レ</sub>言者、抑<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>哉、其微<sub>レ</sub>意吾未<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>臆<sub>レ</sub>度<sub>一</sub>焉、或邀<sub>二</sub>大夫<sub>一</sub>之意<sub>一</sub>穿<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>似<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>輪台<sub>一</sub>百年之<sub>一</sub>後<sub>一</sub>、嗚呼<sub>レ</sub>當<sub>二</sub>其路<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>事<sub>一</sub>猶可、何其以<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>祥<sub>一</sub>之言<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>之下<sub>一</sub>哉、是可<sub>レ</sub>忍<sub>レ</sub>孰<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>忍<sub>一</sub>、

命<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>而運金之督責益急、當<sub>二</sub>是時<sub>一</sub>國<sub>一</sub>產<sub>レ</sub>之漕〔輪〕愈<sub>レ</sub>滯、

彼一此交々相責、其窮益甚、於是重テ獻テ劄子ヲ、言ニ節儉之

事ヲ兩回、其大意謂 君一上慈孝之厚、臣等不レ敢テ領ニ

尊命ニ乎、唯當ニ今之時ニ東一武浪一華彼一此相依テ弁ニ其蔽ヲ、

大レ賈等亦有ニ就テ所レ謀焉、今國用無數、悉取テ之ヲ浪華ニ、

而運財之滯、倍ニ々ニ於昔年ニ、東館有司不察其壅塞、唯

運金之督責ス、如斯而支持三五年者、臣等不肖螻蟻微力非

所克負荷也、且朝覲会同ハ、國之大事、而今日之急、將レ

誤ニト大事ヲ、今執政有司措テ此ノ大恥ヲ、困ニ闕之細事ニ、

臣等之所レ不解也、幸執レ政有司少留テ意ヲ、然トモ遂ニ

不レ報テ、而東武邸一中之貴賤、踰テ十一余一月一俸レ

給、中一人尚テ典ニ衣裳ヲ、販ニ刀劍ヲ以弁レ事ヲ、下ナル者ハ飢寒

不レ支、怨レ言聞ニ乎外一、輪台聞之、大ニ勞ニ尊慮ヲ、於

是欲ニ再有レ議ヲ、乃命テ召テ吾輩三人ヲ、七月十五日 公

命至、即具テ裝俟ニ高橋ヲ至テ、高橋以疾不レ得ニ速發一、

於是相議テ余一人先發、九月十日上ニ于途ニ、會テ大井川

溢ル、滯ル、金谷駅ニ四日、二十六日到ニ于東武ニ、館ニ于

田坊別邸ニ、

二十八日、會ニ于趣ニ法一用人種島六郎六旅館ニ、東館理財大

迫レ某清右衛門、執レ政書記橫山某休、知識某喜右衛門、趣レ法書記

内田某八郎右衛門各來會、蓋執政令ニ此等ニ問ニ浪華之事上也、

余乃陳說一〔冊〕、種島曰、今東館數十君、内外出入、

一日之用、大小數十件、不レ能レ欠レ、而浪華運金不レ

給、吾輩、苟且以テ應レ之ニ、其不レ生ニ異變ニ者亦偶然耳、

事ニ已ニ至于斯一、人情所レ赴、應レ有大計ノ所レ改ル也、只

高橋、朝一倉將レ至、俟テ之ヲ而有レ議焉、比夜議止ニ于斯一、

十月四日、菊地東一原來訪、東原者幕下ノ小臣、輪台優

待ニ之ニ比ニ近臣一、昔一年以ニ琉球朱砂之事一、來ニ于浪華一、

相ニ知余ヲ、然トモ彼レ多方紛冗、今速ニ來訪、恐クハ非ニ其意一、

必有レ故、果シテ語及ニ國事ニ、即知ル 老君令レ彼レ探中余カ

意ヲ、於是偽テ為レ不レ達ニ其意上者ヲ、陳レ浪華之事情ヲ、原

慨焉トシテ去ル、

五日、町田大夫、召ニ余ニ種子一・大迫一會焉、大夫告テ余曰

輪台憂ニ國事ニ太切、因命テ而召テ高橋・朝倉及汝ニ三子

者至ラ、則自有議焉、而今浪華之事如何、余前ニ席而告曰、



告曰、昨日陰<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>君公之命<sup>一</sup>曰、今財用之窮、諸官論<sup>レ</sup>之當<sup>レ</sup>矣、但老君齡高<sup>シテ</sup>、倦<sup>ニ</sup>政事<sup>ニ</sup>、若強<sup>テ</sup>勞<sup>ス</sup>、英慮<sup>ハ</sup>剛<sup>ク</sup>斷行<sup>セ</sup>事<sup>ヲ</sup>、多傷<sup>ル</sup>人故<sup>ニ</sup>、諸<sup>ノ</sup>官倉卒<sup>ニ</sup>議<sup>シテ</sup>事<sup>ヲ</sup>、勿<sup>レ</sup>觸<sup>ル</sup>、老君之聽<sup>ニ</sup>、凡大小事、必經<sup>ニ</sup>公聞<sup>一</sup>、而後從<sup>ニ</sup>其宜<sup>一</sup>、且有司或議<sup>シテ</sup>、沮<sup>シテ</sup>明春<sup>ノ</sup>之駕<sup>一</sup>、雖<sup>レ</sup>然列侯就<sup>ク</sup>于<sup>レ</sup>國<sup>一</sup>、天下之大<sup>ハ</sup>、不可遲疑也、諸有司宜議<sup>シテ</sup>事<sup>ヲ</sup>、兩<sup>ノ</sup>勿<sup>レ</sup>誤<sup>ル</sup>命<sup>ヲ</sup>、我退而未<sup>レ</sup>就<sup>ル</sup>席<sup>ニ</sup>、忽又有<sup>ニ</sup>輪台之命<sup>一</sup>、至<sup>レ</sup>則老君近<sup>レ</sup>席而曰、今國事窮乏、日夜不<sup>レ</sup>安<sup>ニ</sup>寢食<sup>一</sup>、故召<sup>ニ</sup>三臣者<sup>一</sup>議<sup>シ</sup>之、然<sup>ト</sup>吾老矣、別無<sup>ニ</sup>良謀<sup>一</sup>、無<sup>レ</sup>已<sup>ト</sup>則隨<sup>ニ</sup>癸酉之例<sup>一</sup>、廢<sup>ニ</sup>旧債<sup>一</sup>、以<sup>テ</sup>弁<sup>シ</sup>今日<sup>一</sup>耳、汝等所見如何<sup>ト</sup>、今二君之命如斯、而昨新納所<sup>ニ</sup>陳說<sup>スル</sup>、雖<sup>ニ</sup>的切<sup>ト</sup>、言<sup>ハ</sup>之則忤<sup>ル</sup>老君之意<sup>ニ</sup>、忽敗<sup>ル</sup>事<sup>ヲ</sup>、是以不<sup>レ</sup>告焉、今英慮方<sup>ニ</sup>急吾思<sup>一</sup>之、汝等一旦諾<sup>シ</sup>二君之命<sup>一</sup>、以避<sup>ニ</sup>其銳<sup>一</sup>、事之不<sup>レ</sup>成<sup>ラ</sup>者、又有<sup>ニ</sup>後日之議<sup>一</sup>、今高<sup>ノ</sup>朝二臣未<sup>レ</sup>至、吾先審<sup>ニ</sup>汝二人之胸臆<sup>一</sup>、而後問<sup>ニ</sup>二臣<sup>一</sup>、種島曰、謹領<sup>レ</sup>命、退而議<sup>セ</sup>之、余前<sup>テ</sup>而告曰、大議非<sup>ニ</sup>倉卒所<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>言也、退而議<sup>セ</sup>之者、如<sup>ニ</sup>種子之言<sup>一</sup>也、只

公駕之用、假諾<sup>レ</sup>之、臨<sup>テ</sup>駕<sup>ノ</sup>發<sup>スル</sup>、方<sup>一</sup>一誤<sup>ラ</sup>事、臣等死以謝<sup>レ</sup>之何<sup>ノ</sup>益<sup>ヲ</sup>哉、言<sup>一</sup>出<sup>テ</sup>駟<sup>一</sup>馬不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>逐也、雖<sup>ニ</sup>大夫之命、不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>從<sup>マ</sup>焉、臣言雖<sup>レ</sup>唐突<sup>ニ</sup>、其行<sup>レ</sup>事在<sup>ニ</sup>于臣<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>言<sup>ハ</sup>之、大夫不<sup>レ</sup>悅曰、汝之言至<sup>ニ</sup>當<sup>一</sup>之論也、然<sup>ト</sup>奈<sup>ニ</sup>時勢<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>適<sup>セ</sup>何<sup>カ</sup>、弘袖而入、十二日、高橋<sup>・</sup>朝倉<sup>至</sup>、高橋館<sup>シ</sup>于<sup>レ</sup>西邸<sup>ニ</sup>、朝倉館<sup>シ</sup>于<sup>レ</sup>田坊<sup>ニ</sup>、十三日、高<sup>・</sup>朝謁<sup>シ</sup>大夫<sup>ニ</sup>、二臣退後、種島招<sup>レ</sup>余曰、昨与<sup>レ</sup>子陳<sup>ニ</sup>說<sup>ス</sup>大夫前<sup>一</sup>、國家窮迫之狀太<sup>ク</sup>的切、今日聞<sup>ク</sup>二臣之所<sup>レ</sup>說、頗似<sup>テ</sup>平易<sup>ナル</sup>、恐<sup>ク</sup>ハ生<sup>シ</sup>大夫之疑<sup>一</sup>、是以私<sup>ニ</sup>告<sup>ス</sup>大夫<sup>一</sup>、昨<sup>一</sup>者吾二人之<sup>ノ</sup>激切、比<sup>スル</sup>之<sup>ニ</sup>高<sup>ノ</sup>朝之言<sup>一</sup>、似<sup>テ</sup>憤懣<sup>ニ</sup>、雖<sup>レ</sup>然吾二人只語<sup>シ</sup>勢然<sup>ル</sup>耳、非<sup>レ</sup>殊<sup>ニ</sup>意也、必勿<sup>レ</sup>怪、以解<sup>ニ</sup>大夫之意<sup>一</sup>、余曰、小人鄙野、唐<sup>ノ</sup>突<sup>スル</sup>貴權<sup>ニ</sup>者、所<sup>レ</sup>常<sup>ニ</sup>畏<sup>ル</sup>也、然<sup>ト</sup>此役也、國之大事所繫、非<sup>ニ</sup>小事<sup>一</sup>、苟吾<sup>カ</sup>有<sup>ニ</sup>見<sup>レ</sup>所<sup>一</sup>擡<sup>ス</sup>、豈<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>它之言<sup>一</sup>取<sup>ニ</sup>舍<sup>セ</sup>之<sup>一</sup>乎、果<sup>シテ</sup>吾言之非<sup>ナル</sup>耶、它<sup>一</sup>日審<sup>ニ</sup>事<sup>一</sup>、實<sup>ニ</sup>黑白自<sup>ラ</sup>分<sup>レ</sup>、亦何<sup>ヲ</sup>為<sup>ニ</sup>忌憚<sup>スル</sup>、始余以為<sup>ニ</sup>種子質直之士<sup>一</sup>、

縱不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>事、非<sub>ニ</sub>阿從之徒<sub>一</sub>也、聞<sub>今</sub>之言、始知<sub>ニ</sub>其不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>為、大失<sub>レ</sub>望、

十四日、高<sub>一</sub>・朝朝<sub>ニ</sub>于<sub>レ</sub>輪台、此日有<sub>ニ</sub>舞樂<sub>一</sub>、貴<sub>ト</sub>賓數客老君密<sub>ニ</sub>召<sub>ニ</sub>一人於便室乃告曰、方<sub>今</sub>國家窮乏、寡人憂<sub>レ</sub>之、夙夜思<sub>レ</sub>之、群臣窘窮、皆曰、術無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>施也、雖然

我倚<sub>ニ</sub>西陲<sub>一</sub>、有<sub>ニ</sub>一國<sub>一</sub>、今僅以財用之窮、謂<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>術而俟<sub>ニ</sub>其斃<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>乎、是以召<sub>ニ</sub>汝<sub>一</sub>二人及理<sub>ト</sub>財新納<sub>一</sub>、議<sub>レ</sub>事、前<sub>一</sub>者新納先<sub>ニ</sub>汝等<sub>一</sub>而至、詳<sub>ニ</sub>說<sub>ニ</sub>大夫<sub>一</sub>、浪華之急、倍<sub>セ</sub>於所<sub>レ</sub>聞、如<sub>レ</sub>斯則術果<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>施乎、而大夫有<sub>レ</sub>司涖<sub>レ</sub>事

之窮、必為<sub>ニ</sub>遁辭<sub>一</sub>而言、謹<sub>テ</sub>俟<sub>ト</sub>英斷<sub>一</sub>、我老矣不<sub>レ</sub>耐<sub>レ</sub>事、豈有它術邪、汝等別有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>施設<sub>一</sub>代<sub>ニ</sub>寡人<sub>一</sub>而思<sub>レ</sub>之、高<sub>一</sub>・朝拜伏曰、如今<sub>一</sub> 國家之窮、實<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>尊命<sub>一</sub>也、然<sub>ト</sub>大國之雄勢、〔謂<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>〕無<sub>ニ</sub>它策<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>乎、且新納所<sub>レ</sub>說、彼<sub>レ</sub>以<sub>ニ</sub>其職<sub>一</sub>、固<sub>レ</sub>當然、雖然周<sub>レ</sub>施<sub>一</sub>保<sub>ト</sub>翼<sub>一</sub>、心<sub>シ</sub>乎時宜<sub>ニ</sub>而成<sub>レ</sub>事<sub>一</sub>、臣等之任也、退而議<sub>レ</sub>之、老君曰、寡人

嘗思<sub>レ</sub>之、処<sub>ニ</sub>今之急<sub>一</sub>、恐<sub>レ</sub>無<sub>ニ</sub>它術<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>已<sub>ト</sub>則循<sub>ニ</sub>癸酉更始之例<sub>一</sub>、廢<sub>ニ</sub>負債<sub>一</sub>供<sub>ニ</sub>今日之事<sub>一</sub>、二人先<sub>ニ</sub>已<sub>一</sub>知<sub>ニ</sub>

老君<sub>ノ</sub>此意<sub>一</sub>、故<sub>ニ</sub>路<sub>一</sub>而有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>議焉、乃從容<sub>ト</sub>而答曰、雖<sub>ニ</sub>尊命出<sub>ニ</sub>憂<sub>一</sub>心之厚<sub>一</sub>此策恐<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>是、昔年之事、英斷不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及也、雖然賈人等自<sub>レ</sub>是生<sub>レ</sub>意、頗<sub>レ</sub>傷<sub>レ</sub>令德<sub>一</sub>、今又踏<sub>ニ</sub>其轍<sub>一</sub>、人心益<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>、它日有事之日、將奈何<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、幸<sub>ニ</sub>君上思<sub>レ</sub>之、老君曰、然則汝等有<sub>ニ</sub>它策<sub>一</sub>乎、必勿<sub>レ</sub>匿<sub>レ</sub>焉、二人曰、臣等路而有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>議焉、唯恐<sub>レ</sub>苟<sub>レ</sub>且之策、与<sub>ニ</sub>英慮相反<sub>一</sub>、君上一<sub>ト</sub>嗔<sub>レ</sub>之、臣等亦無<sub>レ</sub>避<sub>レ</sub>罪之地<sub>一</sub>耳、是以難<sub>レ</sub>言也、老君曰、試<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>之、二人曰、臣等偶謀<sub>レ</sub>之、不<sub>レ</sub>告<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>忠<sub>ニ</sub>也、冀<sub>レ</sub>改<sub>ニ</sub>癸酉之令<sub>一</sub>、約<sub>ニ</sub>息<sub>一</sub>与<sub>ニ</sub>舊債之息<sub>一</sub>、二先<sub>ニ</sub>錢<sub>一</sub>改<sub>ニ</sub>癸酉之出<sub>ニ</sub>息<sub>一</sub>二錢<sub>一</sub>也、彼<sub>レ</sub>今所<sub>レ</sub>畏者、傲<sub>ニ</sub>癸酉之例<sub>一</sub>喪<sub>ニ</sub>其本<sub>一</sub>也、今反<sub>テ</sub>而<sub>レ</sub>之、事出<sub>ニ</sub>意表<sub>一</sub>、或有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>屈服<sub>レ</sub>乎、彼<sub>レ</sub>意悅而服<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、一時之急亦可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>弛也、只<sub>ニ</sub>英慮各<sub>ニ</sub>其策之矛盾<sub>一</sub>、〔頭注<sub>ニ</sub>時所<sub>レ</sub>避<sub>レ</sub>罪耳、老君傾<sub>レ</sub>頭而思<sub>レ</sub>惟<sub>ニ</sub>久<sub>一</sub>之曰、汝等暫<sub>レ</sub>退<sub>レ</sub>、吾重<sub>テ</sub>思<sub>レ</sub>之、二人退<sub>レ</sub>而出、使人<sub>ニ</sub>召<sub>レ</sub>余<sub>一</sub>告<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>此事<sub>一</sub>〕余曰、二君之議、安<sub>ニ</sub>賈人之意<sub>一</sub>則是矣、然<sub>ト</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>應<sub>レ</sub>今日之急<sub>一</sub>也、二人曰、如何、余曰、今浪華之大

買等聞<sup>三</sup>吾輩<sup>ノ</sup>東行<sup>ヲ</sup>、或<sup>レ</sup>言<sup>フ</sup>有<sup>三</sup>大政之改<sup>一</sup>、或言倣<sup>三</sup>癸酉之例<sup>一</sup>、是以信疑交々生、各懷<sup>三</sup>恐懼<sup>一</sup>、而一旦令<sup>レ</sup>以<sup>三</sup>二銖<sup>一</sup>息<sup>ヲ</sup>与<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>、彼疑心稍稍心志始<sup>レ</sup>定、其策非<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>佳<sup>ナ</sup>也、雖然、國家連年之窮、其<sup>レ</sup>新<sup>レ</sup>債<sup>一</sup>應<sup>レ</sup>一時之急<sup>ニ</sup>者、未<sup>レ</sup>獲<sup>三</sup>三片金之息<sup>一</sup>、而讓<sup>ニ</sup>語<sup>ト</sup>債<sup>ニ</sup>、旧債之息<sup>一</sup>誰敢信<sup>レ</sup>之、彼<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>吾<sup>ノ</sup>奈<sup>レ</sup>之何<sup>ゾ</sup>、傾<sup>ニ</sup>其庫藏<sup>一</sup>以救<sup>ニ</sup>我急<sup>一</sup>、然則二君之議徒<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>益耳、二人曰、此事誠然而<sup>レ</sup>トモ、老君一<sup>レ</sup>意<sup>ニ</sup>欲<sup>レ</sup>用<sup>ニ</sup>癸酉之例<sup>一</sup>、是以暫託<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>以避<sup>レ</sup>之耳、而以<sup>レ</sup>子謀<sup>レ</sup>之則如何、余曰、以<sup>レ</sup>升<sup>カ</sup>所<sup>レ</sup>圖<sup>レ</sup>明歲、君公留<sup>ニ</sup>于此<sup>一</sup>地、休<sup>レ</sup>就<sup>ニ</sup>于國<sup>一</sup>之役<sup>ヲ</sup>、然則往來之盤費三万金、以<sup>レ</sup>此<sup>ヲ</sup>給<sup>ニ</sup>國邸之用<sup>一</sup>、後<sup>一</sup>宮諸<sup>一</sup>公子及在邸之士、其俸不<sup>レ</sup>給者、<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>弁<sup>ト</sup>之、吾輩乘<sup>ニ</sup>此機<sup>一</sup>、喻<sup>ニ</sup>浪華<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>君公<sup>ノ</sup>憂<sup>レ</sup>國如<sup>レ</sup>斯篤<sup>ト</sup>、賈人亦感<sup>レ</sup>服<sup>シ</sup>、不<sup>レ</sup>吝<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>用<sup>一</sup>、則昔日、君公所謂支<sup>ニ</sup>三二年<sup>一</sup>者、或將有成焉、高橋曰、朝覲往來<sup>ハ</sup>、國家之大經、非<sup>ニ</sup>容易<sup>一</sup>所<sup>レ</sup>議也、余曰、國家之大<sup>一</sup>經、臣豈不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>之、但臣之所<sup>レ</sup>畏<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>在<sup>ニ</sup>一年之事<sup>一</sup>、在<sup>ニ</sup>於永世之策<sup>一</sup>也、若夫一期之交<sup>一</sup>代、往<sup>モ</sup>亦非<sup>ニ</sup>其

功<sup>一</sup>、止<sup>レ</sup>非<sup>ニ</sup>其恥<sup>一</sup>、所謂列國行<sup>レ</sup>之、其例不<sup>レ</sup>少<sup>カ</sup>、昔年我公亦有<sup>ニ</sup>此事<sup>一</sup>、今、國家之窮、朔<sup>一</sup>望之朝礼、或將<sup>レ</sup>欠、堂々<sup>ル</sup>大國、抑<sup>ハ</sup>何<sup>ノ</sup>顏<sup>ヲ</sup>哉、以<sup>レ</sup>此<sup>ニ</sup>比<sup>レ</sup>彼<sup>ニ</sup>、利害何<sup>ヲ</sup>ニカ在<sup>レ</sup>、則臣<sup>カ</sup>所謂大經、非<sup>レ</sup>屑々之事<sup>ニ</sup>也、公等熟計之、高橋曰、君上意<sup>ニ</sup>已<sup>一</sup>決矣、非<sup>ニ</sup>容易<sup>一</sup>所<sup>レ</sup>沮<sup>ル</sup>也、余亦閉口、十五日、高橋<sup>・</sup>朝倉<sup>及</sup>大迫會<sup>ニ</sup>于種島旅館<sup>一</sup>、事議紛々、要不<sup>レ</sup>過<sup>レ</sup>弁<sup>ト</sup>一時負債之事<sup>ヲ</sup>、而用金不<sup>レ</sup>給、其論無<sup>レ</sup>益、余甚<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>喜、向<sup>レ</sup>傍嘆息、吾三人遠<sup>ニ</sup>來議<sup>一</sup>事、豈為<sup>ニ</sup>此屑々<sup>一</sup>哉、今不<sup>レ</sup>論<sup>ニ</sup>其本<sup>一</sup>、為<sup>ニ</sup>苟且之計<sup>一</sup>、今日弁<sup>ニ</sup>一事<sup>一</sup>、明日生<sup>ニ</sup>三百事<sup>一</sup>、抑何益、衆無<sup>レ</sup>答、至<sup>ニ</sup>十七日<sup>一</sup>議不<sup>レ</sup>就、

十八日、輪台近<sup>一</sup>侍書<sup>一</sup>記野崎<sup>喜三左衛門</sup>、折簡以招<sup>レ</sup>余、且副書曰、此事宜<sup>レ</sup>秘焉、雖<sup>ニ</sup>家僮<sup>一</sup>、勿<sup>レ</sup>使<sup>レ</sup>知焉、於是偽<sup>ニ</sup>曰<sup>一</sup>、訪<sup>ニ</sup>銀邸親朋<sup>一</sup>館<sup>ヲ</sup>、至<sup>レ</sup>、則野崎曰、近<sup>レ</sup>侍用人猪飼某<sup>也</sup>、<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>令、蓋老君之命云、於是至<sup>ニ</sup>于猪飼之<sup>一</sup>宅<sup>一</sup>、菊地東原在焉、乃遠<sup>ニ</sup>傍人<sup>一</sup>而後告曰、老君憂<sup>ニ</sup>國事<sup>一</sup>太切、因欲<sup>ニ</sup>問<sup>レ</sup>子<sup>一</sup>以<sup>ニ</sup>利害<sup>一</sup>、亦唯憂有<sup>ニ</sup>高橋<sup>一</sup>朝倉<sup>一</sup>在<sup>ニ</sup>、各自<sup>レ</sup>

竭<sup>レ</sup>力、今措<sup>テ</sup>之議<sup>ス</sup>於<sup>テ</sup>它<sup>也</sup>、二人恐<sup>ク</sup>生<sup>ク</sup>意、是以秘<sup>シ</sup>之爾、而今措<sup>テ</sup>一人<sup>ニ</sup>問<sup>フ</sup>於<sup>テ</sup>子<sup>者</sup>、老君有<sup>テ</sup>深意、子之所<sup>ニ</sup>蓋蓄<sup>スル</sup>、必<sup>シテ</sup>問<sup>ニ</sup>陳<sup>ニ</sup>說<sup>シ</sup>之、勿<sup>ク</sup>有<sup>テ</sup>忌憚<sup>ス</sup>ト焉、余拜伏曰、老君賢明、不<sup>レ</sup>恥<sup>シ</sup>下問、社稷大計及<sup>テ</sup>于外臣、敢不<sup>レ</sup>竭<sup>テ</sup>鄙衷<sup>ヲ</sup>耶、唯鄙人固陋、不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>唐<sup>ニ</sup>突<sup>ク</sup>君聽<sup>ク</sup>也、唯<sup>ニ</sup>君裁<sup>之</sup>、乃逐<sup>テ</sup>條對問如左、

問、高橋・朝倉之言、得<sup>テ</sup>其正乎、得<sup>テ</sup>無<sup>ク</sup>巧言矯飾乎、  
答、二子陳<sup>ニ</sup>說<sup>ス</sup>於<sup>テ</sup>君前<sup>ニ</sup>、其言不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>飾也、雖然其大意与<sup>テ</sup>臣等<sup>一</sup>、每討<sup>テ</sup>論<sup>ス</sup>之、非<sup>テ</sup>殊<sup>ニ</sup>義<sup>ヲ</sup>也、  
問、浪華之事、以<sup>テ</sup>汝之言<sup>ニ</sup>、危急燔<sup>レ</sup>眉、二子之所<sup>レ</sup>言、稍似<sup>テ</sup>緩<sup>タル</sup>ニ、何其之矛盾<sup>也</sup>、  
答、二子之言、非<sup>テ</sup>与<sup>テ</sup>臣有<sup>テ</sup>異同<sup>一</sup>也、雖然二子之職、

在<sup>テ</sup>總管<sup>ニ</sup>、故以<sup>テ</sup>大計<sup>ニ</sup>之臣之職、在<sup>テ</sup>於斡旋<sup>ニ</sup>之際、故以<sup>テ</sup>親<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>之、此所以其言異也、試<sup>テ</sup>舉<sup>テ</sup>論<sup>シ</sup>之、高橋在<sup>テ</sup>于国<sup>ニ</sup>所<sup>レ</sup>算計<sup>スル</sup>、運漕<sup>ノ</sup>砂糖、未<sup>レ</sup>發者二百萬斤、穀二萬石、達<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>浪華<sup>ニ</sup>、獲<sup>テ</sup>三萬余金<sup>ヲ</sup>、東武今年之用略<sup>ヲ</sup>備、是以高橋謂事可<sup>レ</sup>弁也、臣之

所<sup>レ</sup>圖、今已<sup>ニ</sup>迫<sup>ル</sup>季冬<sup>ニ</sup>、海上三百余里、其無<sup>ク</sup>阻礙<sup>一</sup>猶不<sup>レ</sup>及也、況<sup>テ</sup>海厄不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>知乎、如<sup>シ</sup>穀<sup>ノ</sup>則高氏之筭<sup>ノ</sup>、猶有<sup>テ</sup>未<sup>レ</sup>取<sup>ル</sup>獲<sup>ル</sup>者<sup>上</sup>何論<sup>ニ</sup>海厄<sup>一</sup>、臣深<sup>ク</sup>畏<sup>ル</sup>方<sup>一</sup>之失以誤<sup>レ</sup>事、故迫切言之、此其所以異也、

問、老君欲<sup>テ</sup>再<sup>ヒ</sup>用<sup>ニ</sup>癸酉更始<sup>ノ</sup>之例<sup>一</sup>、廢<sup>ニ</sup>旧債<sup>一</sup>、弁<sup>中</sup>事<sup>ト</sup>今事<sup>ト</sup>、若然則扱<sup>テ</sup>一二巨<sup>ノ</sup>商委<sup>ニ</sup>任<sup>ス</sup>之、備<sup>ニ</sup>事之急<sup>一</sup>、汝或得<sup>テ</sup>謀<sup>レ</sup>之而成<sup>レ</sup>功<sup>ト</sup>、則貴<sup>ニ</sup>爾之位<sup>一</sup>、加<sup>ニ</sup>爾之祿<sup>一</sup>、專任<sup>ニ</sup>之<sup>一</sup>、一人<sup>ニ</sup>而行<sup>シ</sup>焉、如何、

答、此事雖<sup>レ</sup>出<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>英慮<sup>ニ</sup>、太不然、夫我<sup>ノ</sup>国七十萬石、委<sup>シ</sup>之<sup>一</sup>、一二賈人<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>乎、況大賈雖<sup>ニ</sup>素封<sup>一</sup>、要無<sup>ク</sup>尺土之有<sup>一</sup>、唯追<sup>テ</sup>什一之息<sup>一</sup>、為<sup>テ</sup>生業<sup>ヲ</sup>、其盛衰不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>測也、

一旦祚傾財散則是幸<sup>ニ</sup>我<sup>ノ</sup>国<sup>一</sup>、以<sup>テ</sup>予<sup>ノ</sup>商賈<sup>ニ</sup>也、且今之時異<sup>リ</sup>乎昔年<sup>一</sup>、〔余<sup>今</sup>〕算計<sup>ノ</sup>之士屢說、悉廢<sup>ニ</sup>旧債<sup>一</sup>、国用可<sup>レ</sup>給也、未知昔年<sup>ニ</sup>国家雖<sup>レ</sup>窮乏每歲息錢無<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>給、故廢<sup>テ</sup>絶<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>則規有<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>剩<sup>ル</sup>焉、今連年不<sup>レ</sup>給息、与<sup>テ</sup>廢絶<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>異、然<sup>レ</sup>人心愛戴不<sup>レ</sup>携離<sup>一</sup>者、則大国之余蔭、猶有<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>希望<sup>一</sup>也、一旦令<sup>レ</sup>示<sup>テ</sup>廢絶<sup>ノ</sup>之事<sup>一</sup>、人

心失<sup>レ</sup>望<sup>レ</sup>乖<sup>レ</sup>離<sup>レ</sup>、則無<sup>シ</sup>一<sup>ニ</sup>益<sup>ヲ</sup>於<sup>レ</sup>我<sup>ニ</sup>、徒<sup>ニ</sup>受<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>害<sup>ヲ</sup>、抑何<sup>ノ</sup>為<sup>レ</sup>哉、且今<sup>ノ</sup>蝨<sup>ノ</sup>斯<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>誅<sup>々</sup>、果<sup>シテ</sup>絶<sup>テ</sup>假<sup>ノ</sup>貸<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>路<sup>ヲ</sup>、万<sup>一</sup>当<sup>テ</sup>用<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>給<sup>ニ</sup>、將<sup>テ</sup>安<sup>シ</sup>カ<sup>ク</sup>弁<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>、且<sup>レ</sup>廢<sup>レ</sup>絶<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>、如<sup>シ</sup>三<sup>臣</sup>等<sup>ノ</sup>、一<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>從<sup>テ</sup>公<sup>ノ</sup>令<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>辭<sup>ヲ</sup>、猶<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>免<sup>ル</sup>罪<sup>ヲ</sup>、其<sup>ノ</sup>弊<sup>ハ</sup>悉<sup>ク</sup>歸<sup>シ</sup>於<sup>レ</sup>君<sup>上</sup>、為<sup>レ</sup>衆<sup>ノ</sup>惡<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>藪<sup>ト</sup>、如<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>何<sup>ソ</sup>忍<sup>シ</sup>行<sup>フ</sup>焉、臣雖庸<sup>劣</sup>、豈<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>欲<sup>シ</sup>三<sup>臣</sup>之<sup>ノ</sup>禄<sup>位</sup>一<sup>也</sup>、苟<sup>モ</sup>婦<sup>シ</sup>之<sup>ノ</sup>弊<sup>ヲ</sup>於<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>、自<sup>レ</sup>貪<sup>ニ</sup>寵<sup>位</sup>一<sup>者</sup>、臣<sup>ノ</sup>死<sup>トモ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>行<sup>フ</sup>焉、或<sup>レ</sup>則<sup>シ</sup>君<sup>上</sup>省<sup>シ</sup>用<sup>ノ</sup>減<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>、〔頭注〕「戰國策秦武安君頓首曰臣知行雖無功得免於罪雖不行無罪不免於誅然惟願大王一破國不可復完死卒不可復生臣寧伏受重誅而死不忍為辱軍之將」行<sup>ニ</sup>節<sup>儉</sup>之<sup>ノ</sup>道<sup>一</sup>、人<sup>ノ</sup>情<sup>ヲ</sup>拳<sup>ク</sup>室<sup>ヲ</sup>趨<sup>ク</sup>于<sup>レ</sup>命<sup>ニ</sup>、奈<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>何<sup>ソ</sup>遣<sup>ル</sup>人<sup>ノ</sup>〔乘<sup>レ</sup>〕德<sup>レ</sup>、行<sup>ニ</sup>虐<sup>政</sup>一<sup>為<sup>レ</sup>、冀<sup>フ</sup>二<sup>君</sup>為<sup>レ</sup>臣<sup>ト</sup>陳<sup>ス</sup>焉、</sup>

二人<sup>ノ</sup>蹶<sup>然</sup>曰<sup>ク</sup>、吾<sup>レ</sup>輩<sup>ノ</sup>非<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>与<sup>ニ</sup>聞<sup>ル</sup> 國家<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>利<sup>害</sup>也、而<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>聞<sup>ニ</sup>失<sup>得</sup>如<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>切<sup>ナル</sup>也、如此<sup>ノ</sup>則<sup>シ</sup>〔更<sup>ニ</sup>始<sup>ム</sup>〕之<sup>ノ</sup>〔事<sup>ヲ</sup>〕、〔殆<sup>ク</sup>〕不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>行<sup>フ</sup>焉、然<sup>レ</sup>則<sup>シ</sup>如<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>何<sup>ソ</sup>カ、則<sup>シ</sup>可<sup>ク</sup>ナ<sup>ラ</sup>ン、試<sup>シ</sup>論<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>、余<sup>レ</sup>曰<sup>ク</sup>、臣<sup>ノ</sup>愚<sup>衷</sup>太<sup>ダ</sup>難<sup>ク</sup>言<sup>フ</sup>、要<sup>ス</sup>專<sup>ラ</sup>在<sup>ニ</sup>于<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>、君<sup>上</sup>所<sup>レ</sup>明<sup>断</sup>スル<sup>ル</sup>欽<sup>ク</sup>、四<sup>方</sup>奔<sup>走</sup>、心<sup>ニ</sup>乎<sup>レ</sup>命<sup>ニ</sup>、何<sup>ノ</sup>事<sup>カ</sup>カ<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>耶、然<sup>ル</sup>況<sup>シ</sup>財<sup>ヲ</sup>用<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>事<sup>乎</sup>、雖<sup>レ</sup>然<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>三<sup>臣</sup>之<sup>ノ</sup>微<sup>眇</sup>、妄<sup>リ</sup>議<sup>ス</sup>、君<sup>上</sup>之<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>、除<sup>ク</sup>越<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>罪<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>免<sup>ル</sup>、且<sup>レ</sup>如<sup>シ</sup>三<sup>臣</sup>之<sup>ノ</sup>執政<sup>大臣</sup>何<sup>ソ</sup>、是<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>難<sup>ク</sup>言<sup>フ</sup>、

二人<sup>ノ</sup>曰<sup>ク</sup>、言<sup>出</sup>子<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>口<sup>ヲ</sup>入<sup>ル</sup>吾<sup>レ</sup>耳<sup>ニ</sup>、何<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>畏<sup>ル</sup>、只<sup>レ</sup>試<sup>シ</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>、余<sup>レ</sup>曰<sup>ク</sup>、臣<sup>ノ</sup>固<sup>リ</sup>不<sup>レ</sup>避<sup>ク</sup>湯<sup>鑊</sup>也、雖<sup>レ</sup>然<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>在<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>位<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>謀<sup>フ</sup>其<sup>ノ</sup>政<sup>ヲ</sup>、今<sup>ノ</sup>言<sup>フ</sup>不<sup>レ</sup>由<sup>ニ</sup>執<sup>政</sup>、何<sup>ノ</sup>為<sup>レ</sup>說<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>、二<sup>君</sup>、二<sup>人</sup>曰<sup>ク</sup>子<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>言<sup>ハ</sup>是<sup>キ</sup>矣、吾<sup>レ</sup>輩<sup>ノ</sup>亦<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>欲<sup>シ</sup>強<sup>ク</sup>問<sup>フ</sup>也、只<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>非<sup>レ</sup>欲<sup>シ</sup>三<sup>臣</sup>一<sup>ニ</sup>老<sup>君</sup>老<sup>シ</sup>于<sup>レ</sup>國<sup>耶</sup>、曰<sup>ク</sup>、然<sup>ル</sup>、雖<sup>シ</sup>三<sup>臣</sup>罪<sup>ノ</sup>當<sup>ニ</sup>万<sup>死</sup>、為<sup>レ</sup>國<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>思<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>、然<sup>ル</sup>、輪<sup>台</sup>春<sup>ノ</sup>秋<sup>ハ</sup>已<sup>ニ</sup>高<sup>ク</sup>、屈<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>遠<sup>ク</sup>疆<sup>ニ</sup>、豈<sup>レ</sup>所<sup>ナ</sup>願<sup>ヤ</sup>耶、若<sup>シ</sup>銀<sup>台</sup>一<sup>則</sup>春<sup>秋</sup>鼎<sup>盛</sup>、一<sup>且</sup>移<sup>ニ</sup>輿<sup>ヲ</sup>、未<sup>ダ</sup>為<sup>レ</sup>傷<sup>ト</sup>、尊<sup>体</sup>、特<sup>ク</sup>欠<sup>ク</sup>問<sup>安</sup>、一<sup>之</sup>禮<sup>節</sup>耳、雖<sup>レ</sup>然<sup>シ</sup>今<sup>ノ</sup>頼<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>舉<sup>ヲ</sup>、安<sup>ニ</sup>國<sup>家</sup>、以<sup>テ</sup>慰<sup>シ</sup>輪<sup>台</sup>憂<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>均<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>國<sup>也</sup>、豈<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>欠<sup>ク</sup>孝<sup>道</sup>、今<sup>ノ</sup>銀<sup>台</sup>而<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>斯<sup>ノ</sup>、則<sup>シ</sup>諸<sup>ノ</sup>公<sup>子</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>傲<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、諸<sup>ノ</sup>公<sup>子</sup>傲<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、則<sup>シ</sup>諸<sup>ノ</sup>公<sup>女</sup>亦<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>傲<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、公<sup>子</sup>公<sup>女</sup>、悉<sup>ク</sup>傲<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、後<sup>ニ</sup>宮<sup>中</sup>諸<sup>ノ</sup>如<sup>レ</sup>守<sup>レ</sup>節<sup>儉</sup>、則<sup>シ</sup>國<sup>家</sup>不<sup>レ</sup>俟<sup>ニ</sup>三<sup>年</sup>、必<sup>ク</sup>有<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>三<sup>庶</sup>幾<sup>ニ</sup>焉、今<sup>ノ</sup>君<sup>上</sup>棄<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>易<sup>キ</sup>、困<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>難<sup>キ</sup>、臣<sup>ノ</sup>窃<sup>ク</sup>痛<sup>ク</sup>息<sup>ス</sup>耳、二人<sup>ノ</sup>喟<sup>然</sup>曰<sup>ク</sup>、子<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>言<sup>ハ</sup>實<sup>ニ</sup>是<sup>キ</sup>矣、請<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>聞<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>君<sup>上</sup>、唯<sup>ク</sup>恐<sup>ク</sup>、君<sup>上</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>用<sup>フ</sup>焉、議<sup>歇</sup>而<sup>レ</sup>帰<sup>ル</sup>、

時<sup>ノ</sup>升<sup>云</sup>、先<sup>ニ</sup>是<sup>ノ</sup>平<sup>甚</sup>之<sup>ノ</sup>妄<sup>策</sup>、已<sup>ニ</sup>納<sup>ル</sup>於<sup>レ</sup>公<sup>聞</sup>、老<sup>君</sup>

一意欲用<sub>レ</sub>之、故此奉託<sub>ニ</sub>之于它<sub>一</sub>、以釣<sub>レ</sub>余耳、後日余之退者、此時<sub>ニ</sub>萌<sub>ニ</sub>其根<sub>一</sub>、二子<sub>ノ</sub>所感不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>

公意<sub>ニ</sub>而然耶、知<sub>レ</sub>而然耶、殆不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知耳、

十九日、大夫有<sub>レ</sub>命、会<sub>ニ</sub>其館<sub>ニ</sub>、高橋<sub>・</sub>朝倉<sub>・</sub>種島<sub>・</sub>大迫及書記<sub>横山</sub>・知識<sub>・</sub>竹下<sub>仁左衛門</sub>併<sub>レ</sub>余八<sub>人</sub>、大夫指<sub>ニ</sub>高橋<sub>一</sub>

暨<sub>レ</sub>余<sub>ヲ</sub>曰、昨<sub>ニ</sub>輪台有<sub>レ</sub>命<sub>一</sub>曰、頃來<sub>レ</sub>国用之窮、英慮憂<sub>レ</sub>

之、仄席待旦而<sub>レ</sub>高寿八旬、頗倦<sub>ニ</sub>政事<sub>一</sub>、汝等群臣宜<sub>シ</sub>ト下

努力<sub>シ</sub>テ救<sub>レ</sub>此弊<sub>ヲ</sub>以寬<sub>ニ</sub>國家之憂<sub>一</sub>、今<sub>ニ</sub>英慮如<sub>レ</sub>斯、汝

等当<sub>ニ</sub>此時<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>術<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>下<sub>ニ</sub>施<sub>ニ</sub>良策<sub>一</sub>以救<sub>ニ</sub>一時之急<sub>一</sub>、但

汝等昔日所<sub>レ</sub>議、移<sub>ニ</sub>菟裘<sub>一</sub>、殺<sub>ニ</sub>諸公<sub>一</sub>、維城之俸<sub>ノ</sub>者悉所<sub>ニ</sub>

君上之不<sub>レ</sub>悦、今縱<sub>ニ</sub>議<sub>一</sub>之、非<sub>ニ</sub>勢之所<sub>ニ</sub>得<sub>レ</sub>行<sub>一</sub>、況後

宮之<sub>レ</sub>く、婦人之口可<sub>レ</sub>畏也、若強<sub>テ</sub>議<sub>セ</sub>之、三宮生<sub>レ</sub>隙、

却<sub>テ</sub>生<sub>レ</sub>害<sub>ヲ</sub>、汝等措<sub>ニ</sub>此数件<sub>一</sub>、更<sub>ニ</sub>議<sub>ニ</sub>它策<sub>一</sub>、必勿<sub>レ</sub>誤<sub>ル</sub>コト

事<sub>ヲ</sub>、高橋逡巡而答曰、昔年臣在<sub>ニ</sub>于此地<sub>一</sub>、已<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>事<sub>一</sub>、可

至<sub>ニ</sub>乎此<sub>一</sub>、頗<sub>ニ</sub>獻<sub>ニ</sub>節儉之議<sub>一</sub>、執政亦其時在<sub>ニ</sub>于此地<sub>一</sub>

親<sub>リ</sub>所<sub>ニ</sub>与<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>焉、然其議遂<sub>ニ</sub>〔不<sub>レ</sub>〕用<sub>一</sub>、以至<sub>ニ</sub>今日<sub>一</sub>、臣

等更<sub>ニ</sub>何<sub>レ</sub>議<sub>一</sub>、但在<sub>ニ</sub>其職<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>弁<sub>レ</sub>事<sub>一</sub>、固其罪<sub>ナリ</sub>矣、

只所<sub>レ</sub>望、去<sub>レ</sub>職以俟<sub>レ</sub>罪耳、它皆默然<sub>ナリ</sub>、良久<sub>シ</sub>テ大夫又

曰、汝之言然矣、雖然言<sub>ニ</sub>如此危<sub>一</sub>激<sub>ナク</sub>、似<sub>レ</sub>乖<sub>ニ</sub>忤<sub>一</sub>スルニ

英慮<sub>ニ</sub>、且<sub>ニ</sub>今<sub>ノ</sub>公仁<sub>・</sub>柔慈<sub>・</sub>孝<sub>・</sub>深畏<sub>一</sub>、老君<sub>ノ</sub>煩<sub>ニ</sub>心慮<sub>一</sub>、

故不<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>行<sub>ニ</sub>危激之政<sub>一</sub>也、是以寬舒<sub>レ</sub>以処<sub>レ</sub>之、幸得<sub>レ</sub>テ

支<sub>ニ</sub>三三年<sub>一</sub>、足<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>応<sub>ニ</sub>今日之〔問<sub>一</sub>〕後日之事<sub>一</sub>、別<sub>ニ</sub>

自有<sub>レ</sub>議、汝等盍<sub>ニ</sub>思<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、衆皆無<sub>レ</sub>答、余前<sub>ニ</sub>席曰、

老君所<sub>レ</sub>命、今<sub>ノ</sub>公所<sub>レ</sub>憂、大夫所<sub>レ</sub>慮、悉領<sub>レ</sub>命、唯人<sub>一</sub>

一<sub>レ</sub>日不<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>食<sub>一</sub>則飢、今<sub>ノ</sub>邸中上<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>、月<sub>一</sub>俸不<sub>レ</sub>給者十余月、

当直之士壳劍、典<sub>ニ</sub>衣裳<sub>一</sub>、以免<sub>ニ</sub>今日之飢<sub>一</sub>、下<sub>ニ</sub>ナル者垢衣

不<sub>レ</sub>浣、破綻不<sub>レ</sub>繕、有<sub>ニ</sub>一<sub>レ</sub>貴賓<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>擯<sub>ニ</sub>一<sub>レ</sub>价<sub>一</sub>于前<sub>ニ</sub>、

有<sub>ニ</sub>一<sub>レ</sub>使命<sub>一</sub>、不堪<sub>ニ</sub>出<sub>レ</sub>テ、接<sub>ニ</sub>スル<sub>ニ</sub>于外<sub>一</sub>、在<sub>ニ</sub>邸有<sub>ニ</sub>司切憂<sub>一</sub>之日

々督<sub>ニ</sub>責<sub>レ</sub>浪華<sub>一</sub>促<sub>ニ</sub>其給<sub>一</sub>、臣等竭<sub>ニ</sub>微力<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>圖<sub>レ</sub>之、数月之

所獲、不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>充<sub>ニ</sub>一日之用<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>斯侯<sub>ニ</sub>三三年<sub>一</sub>者、非<sub>ニ</sub>臣

等愚衷<sub>ノ</sub>所<sub>レ</sub>不及也、今<sub>ノ</sub>大夫妄<sub>ニ</sub>意<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>浪華<sub>一</sub>、得<sub>ニ</sub>其謀<sub>一</sub>今

日之急可<sub>レ</sub>免也、臣請<sub>ニ</sub>試<sub>ニ</sub>論<sub>一</sub>之、大夫今<sub>ニ</sub>遣<sub>ニ</sub>一人<sub>一</sub>、到<sub>ニ</sub>

浪華<sub>ニ</sub>蔽<sub>ニ</sub>其命<sub>一</sub>曰、一月中給<sub>ニ</sub>五万金<sub>一</sub>、以<sub>ニ</sub>大夫<sub>一</sub>計<sub>レ</sub>之

之、以為<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>成乎、大夫曰、不能<sub>レ</sub>、曰、今年中、東<sub>レ</sub>館之

用、三万金、公駕ノ度支万余金、京師之用一萬金、通計之、五万金、是年僅二月、臣返浪華、重馳使節、往来將一月、則大夫自計所為不能、而專責之臣、臣之驚下、將如之何、或則有下事之可減、用之可省者耶、然則雖疲駕、亦有所奮起、大夫曰、試言之、曰、當直上、下月俸、欠之可欤、大夫曰、不可也、後宮之費幾許、欠之可欤、曰、不可、明春、公駕之用、欠之可欤、曰、不可、弛浪華運金之期、別有所取、給耶、曰、無、或募之、國中、別有所獲耶、曰、恐、無、然則國用不欠、一欲取、完於浪華乎、曰、不得、不、然也、余曰、大夫以臣等、為二何者、以二衆之所不克、婦、責、於臣等、臣等縱九一手、八一足、奈之何、應之、若欲強、命、臣等、一用、臣等之議、使、臣等、歸、于浪華、得、言、二政令、改、者、如、此、然、則、奉、命、行、事、或、不、能、用、之、罷、臣等、職、更、命、它、人、不、然、而、妄、領、命、當、期、失、事、駟、馬、不、可、追、也、大夫曰、今、公、別、有、所、慮、

汝等但得支三、三年、自、有、它、議、苟、得、支、汝等之耶、奇方詐術君上固放之從其所為、汝等不顧、前、後、唯、得、支、之、足、矣、余曰、貴人暗賤、事、今、時、假、金、者、孰、不、用、詐、術、況、今、方、君、憂、臣、辱、之、秋、二、方、態、千、變、無、所、不、悉、焉、謾、飾、詐、術、偽、一、謀、以、有、所、獲、焉、前、日、已、大、夫、前、二、詳、說、也、今、也、術、盡、事、窮、人、心、將、變、臣、唯、畏、之、然、尚、累、詐、術、泄、二、事、之、敗、辭、以、二、大、夫、之、命、豈、得、避、罪、冀、大、夫、思、之、大、夫、曰、汝、之、言、非、不、是、也、吾、老、矣、今、交、代、期、正、近、窃、欲、幸、以、安、就、于、國、更、乞、骸、骨、老、于、菟、裘、明、春、新、大、夫、至、則、自、應、有、議、也、余、揮、淚、而、進、曰、人、情、愛、躬、豈、特、大、夫、二、哉、雖、二、臣、等、亦、有、老、母、有、二、妻、子、方、今、國家之急、臣等忘身、忘妻子、忠告不顧忌憚者、寸分思以報、國家二耳、而大夫独欲老、菟裘、臣等实不、知、所、处、也、且、臣、等、外、臣、去、君、上、太、遠、唯、視、大、夫、猶、大、夫、於、君、上、也、一、旦、獲、罪、於、大、夫、一、身、流、落、妻、子、凍、餓、然、猶、犯、怒、不、

願此身、如斯、大夫盡思之、大夫愈不悅、事不可、以如此迫切也、宜退而思之、於是各無言而退、

二十日、議事於大迫之館、余曰、昨夜大夫之言、未審事勢、徒以吾所忠告、為憤激之言也、書記知識、能知吾情、令彼自傍道遙說之、大夫或有所感悟、亦不愈乎抗顏紛爭、大迫曰、是矣、乃召知識、語之、知識曰、大夫固非不察君等之情也、要不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已耳、請為君等說之、

二十二日、余說於高橋、竊聞朝議欲募國中出<sub>レ</sub>金、救<sub>中</sub>今之急、其議則非臣等所<sub>レ</sub>與知也、唯上無節儉之制、徒取<sub>レ</sub>之於民、人情所<sub>レ</sub>不服也、臣竊思之、

昔日議減<sub>ニ</sub>公女之俸<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>行、今所<sub>レ</sub>募果可<sub>レ</sub>獲、則以其金給<sub>ニ</sub>公女<sub>一</sub>、今之公女之俸、稱<sub>ニ</sub>言殺<sub>レ</sub>俸<sub>一</sub>、以補<sub>ニ</sub>舊債之急者<sub>一</sub>、大賈等必悅焉、而後命<sub>ニ</sub>公駕之用<sub>一</sub>、彼肯<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>命、君盡<sub>レ</sub>議<sub>レ</sub>之、高橋曰、可也、它日議<sub>レ</sub>之、

二十五日、輪台召<sub>ニ</sub>執政<sub>一</sub>、見<sub>レ</sub>問<sub>ニ</sub>國事<sub>一</sub>、而後命曰、吾

用<sub>ニ</sub>心於國事<sub>一</sub>多<sub>レ</sub>拳<sub>ニ</sub>其人<sub>一</sub>、遂無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>得焉、其所<sub>レ</sub>說揣摩<sub>ニ</sub>短<sub>レ</sub>長<sub>一</sub>、聽<sub>レ</sub>之、各有<sub>レ</sub>理、行<sub>レ</sub>之忽敗、一如<sub>ニ</sub>狐狸之魅<sub>一</sub>也、今<sub>ニ</sub>二三<sub>一</sub>臣之所<sub>レ</sub>議、吾太疑<sub>レ</sub>之、未<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>之亦不<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>不可<sub>一</sub>也、要<sub>ニ</sub>吾老而不堪<sub>レ</sub>事<sub>一</sub>、今<sub>ニ</sub>嗣君襲<sub>レ</sub>統<sub>一</sub>、已有<sub>レ</sub>年、堪<sub>レ</sub>斷<sub>ニ</sub>國事<sub>一</sub>、汝<sub>ニ</sub>一<sub>レ</sub>奉<sub>ニ</sub>嗣君<sub>一</sub>詢<sub>レ</sub>事<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>吾得<sub>レ</sub>養<sub>ニ</sub>殘老<sub>一</sub>、大夫不能答、退而致<sub>レ</sub>之、今<sub>ニ</sub>公<sub>一</sub>、

時升云、老君此命、蓋有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>然矣<sub>一</sub>、大夫不悟失答、

二十九日、大夫召<sub>ニ</sub>高橋<sub>一</sub>、朝倉于其館、書記<sub>ニ</sub>橫山<sub>一</sub>、知識<sub>ニ</sub>竹下<sub>一</sub>、川上 藤右衛門會焉、此日余不<sub>レ</sub>與焉、大夫向<sub>ニ</sub>高橋<sub>一</sub>、朝倉

曰、君上有<sub>レ</sub>命、前者<sub>ニ</sub>三臣<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>議、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>行<sub>ニ</sub>于今<sub>一</sub>、君上亦別<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>尊慮<sub>一</sub>如何、故隨<sub>ニ</sub>昔日<sub>一</sub>老君之意、用<sub>ニ</sub>癸酉之例<sub>一</sub>、救<sub>ニ</sub>今之急<sub>一</sub>、二三有<sub>レ</sub>司勉<sub>ニ</sub>從<sub>ニ</sub>事<sub>一</sub>乎此、高橋、朝倉<sub>ニ</sub>拜伏<sub>一</sub>而答曰、謹領<sub>レ</sub>命、唯微<sub>ニ</sub>臣等才拙力乏<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>行<sub>ニ</sub>此事<sub>一</sub>、願<sub>ニ</sub>乞<sub>ニ</sub>骸骨<sub>一</sub>歸<sub>ニ</sub>于國<sub>一</sub>幸<sub>ニ</sub>扱<sub>ニ</sub>它賢士<sub>一</sub>、大

夫曰、今之時措<sub>ニ</sub>女等<sub>一</sub>有<sub>ニ</sub>它人<sub>一</sub>、唯君命如此、如何<sub>ニ</sub>則可<sub>一</sub>、女等為<sub>レ</sub>吾<sub>レ</sub>凶<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>、二人曰、奉<sub>レ</sub>命行<sub>ニ</sub>事<sub>一</sub>、臣等

之職也、断ル大機、非ニ吾之任ニ也、唯大夫是命、大夫曰、有ニ理一財新納在、就而議レ之、高橋正色曰、理財之職、運財供事、何与シ大機之事、雖大夫之命、不欲就レ之議也、大夫曰、言何危激ナル、国家至此窮、謂シ非女等之罪、二人下席而拜伏曰、婦罪ハ於臣等、何所避、謹テ俟レ命、大夫愕然ト曰、豈至シ如ナル斯乎、又坐焉、再議事、二人曰、已レ有罪所命、何得レ与ニ聞コト國事、大夫曰、吾一旦失言、勿レ以為コト意、二人曰、執政之言、國典所倚、豈可ニ戲言一耶、謹俟命、大夫扶而座シ之、曰、吾倉卒失言、子等何罪、不必為レ意以議レ之、吾心実ニ惑焉、不知レ所レ処、二人曰、大夫不レ以臣等之罪、臣等亦不レ可レ不レ悉レ意也、方今 國家之急、以ニ時勢一言之、銀台及公子公女悉移居于國、東館之用、從簡易、上策也、前ニ已命曰、不能レ行焉、次則朝家貢物、列侯饗宴、悉省之、循シ儉素、中策也、前又曰、不能、臣等不レ得レ已、獻ニ下策一、悉除ニ癸酉之令一、以償ニ旧債一為ニ名一、一時安ニ商賈一之

心ヲ以俟ニ時運一之至、然此策、非下支ニ大勢一之道、苟且以勉レ之耳、而猶不レ用レ之、豈有ニ它術一、思フニ君上未レ知ニ癸酉之令一、其害至ニ于斯一欤、大夫願極論、詳說勉レ事情罷ニ今之命一、則事得ニ平易一、免ニ變革一、大夫然シ之、即朝而請問、時已ニ三更一、公入ニ于寢室一、以待臣ニ達一之、公曰、先退重思レ之、大夫退テ、議罷、明朝朝倉審ニ語一之、余ニ、時升云、高橋之議、一時之詐術、全始不レ屑焉、而君上猶難レ之、宜哉、余之言、不レ行レ也、十一月朔、高橋朝倉朝焉、大夫召ニ一人一曰、君上審ニ昨夜之議一未ニ敢為レ是一、然別ニ無ニ良策一、先試ニ行レ之、唯ニ二子果一能以ニ此策一并ニ國用一乎、宜盟疏以証レ之、二人曰、雖ニ尊命一此事難レ領、夫臣等之議悉レ得ニ施行一、國用之便、固不レ俟ニ尊命一也、今不レ用レ其言、僅ニ以ニ下策一、索ニ完一於臣等、臣等前ニ已陳一說、下策之不レ足レ處ニ大機一、然以此ヲ強テ命之臣等明ニ知其難一成レ事、縱ヒ一旦啜レ血誓レ神抑何、益哉、且夫大

一國存亡之大機、縱令臣等得<sub>レ</sub>シムトモ行<sub>レ</sub>フコトヲ其策<sub>一</sub>、委<sub>レ</sub>シテ之<sub>一</sub>、二三小臣<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>ナラシヤ耶、豈<sub>ニ</sub>三小臣ノミナラシヤ哉、雖<sub>ニ</sub>執政<sub>一</sub>容<sub>レ</sub>易肯<sub>レ</sub>之哉、然則臣等何誓<sub>レ</sub>之有<sub>レ</sub>ント、退而高橋謂<sub>ニ</sub>朝倉<sub>一</sub>曰、大夫而暗<sub>ニ</sub>コト事機<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>斯、豈得<sub>レ</sub>シヤ成<sub>レ</sub>トコト事<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>若辭<sub>レ</sub>職解<sub>ニ</sub>印授<sub>一</sub>而去<sub>レ</sub>、朝倉曰、是矣、唯不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>倉卒以<sub>レ</sub>テ誤<sub>レ</sub>ル事<sub>一</sub>、請就<sub>ニ</sub>近侍<sub>一</sub>二人<sub>ニ</sub>謀<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、告<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、調<sub>レ</sub>所、圖<sub>レ</sub>師<sub>一</sub>、崎<sub>一</sub>二人曰、公等不<sub>レ</sub>肯<sub>ニ</sub>誓言<sub>一</sub>者、是矣、雖然此事也、雖<sub>レ</sub>非<sub>ニ</sub>大夫失言<sub>一</sub>、恐<sub>レ</sub>、君命不<sub>レ</sub>如此也、前<sub>ニ</sub>吾二人<sub>一</sub>伝<sub>レ</sub>命達<sub>ス</sub>。于大夫<sub>一</sub>、今大夫之言、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>無<sub>コト</sub>毫厘之差<sub>一</sub>、請為<sub>ニ</sub>君<sub>一</sub>、再審<sub>ニ</sub>シテ<sub>一</sub>上意<sub>一</sub>而後議<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、此日晡後、二用人來于高橋館<sub>一</sub>、告曰、公意果<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>如<sub>ニ</sub>ナラ<sub>一</sub>大夫之言<sub>一</sub>也、公其意欲<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>子<sub>一</sub>等<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>今之形勢及<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>議<sub>スル</sub>具<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>案<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>獻<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>獻<sub>ニ</sub>輪台<sub>一</sub>、而後斷<sub>レ</sub>事、非<sub>ニ</sub>誓書<sub>一</sub>之謂<sub>一</sub>也、於是高<sub>一</sub>朝召<sub>レ</sub>余議<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、高橋把<sub>レ</sub>筆草<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、其言、則時々所<sub>レ</sub>上言<sub>スル</sub>之略、其要歸<sub>ニ</sub>前者<sub>一</sub>二人<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>論、後<sub>ニ</sub>旧債<sub>一</sub>之說<sub>一</sub>、書成<sub>ル</sub>、余曰、此書空言說<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>之条理分明、或君可<sub>レ</sub>之得行之也、彼癸酉前<sub>一</sub>旧債<sub>一</sub>百万余金、兒童猶知<sub>ニ</sub>其不<sub>レ</sub>可<sub>一</sub>

企及<sub>一</sub>也、況黠<sub>レ</sub>賈<sub>レ</sub>之心乎、今退而事不<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>、則其罪專歸<sub>ニ</sub>臣<sub>一</sub>、臣非<sub>ニ</sub>敢愛<sub>レ</sub>身<sub>一</sub>、然<sub>レ</sub>臣<sub>一</sub>以下所<sub>レ</sub>不<sub>ニ</sub>心肯<sub>一</sub>者、徒<sub>ニ</sub>受<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>罪<sub>一</sub>、豈非<sub>レ</sub>冤耶、臣不<sub>ニ</sub>敢自安<sub>一</sub>也、請遣<sub>ニ</sub>下<sub>一</sub>、一近侍<sub>一</sub>監<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、事之成否有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>証、以安<sub>ニ</sub>君上<sub>一</sub>之意、臣亦有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>免罪、高<sub>一</sub>朝、然<sub>レ</sub>トス之<sub>一</sub>、而近侍皆知<sub>ニ</sub>事<sub>一</sub>之不<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>、各不<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>行也、後種島充<sub>レ</sub>ケラ<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、以<sub>ニ</sub>其交代<sub>一</sub>過<sub>レ</sub>浪華<sub>一</sub>也、

二日、高橋具<sub>レ</sub>案由調<sub>レ</sub>所<sub>一</sub>而獻<sub>レ</sub>之、先是、余密<sub>ニ</sub>私朝倉<sub>一</sub>曰、今邦国大事独聞<sub>ニ</sub>輪台<sub>一</sub>、而闕<sub>ニ</sub>銀台<sub>一</sub>庭趨<sub>ニ</sub>於父子天倫<sub>一</sub>之道未免<sub>レ</sub>歎焉之恨、蓋今年之間輪台而所施<sub>レ</sub>者<sub>一</sub>一旦悉<sub>ニ</sub>稟<sub>一</sub>之銀台<sub>一</sub>則今公問<sub>ニ</sub>文視膳<sub>一</sub>之誠無<sub>レ</sub>不至<sub>ニ</sub>銀台<sub>一</sub>亦視察公私之急<sub>一</sub>之安知回天之神策不<sub>レ</sub>橫<sub>レ</sub>發其際耶、今大小有司議不及于斯者独何哉、君蓋逍遙論<sub>レ</sub>之、朝倉曰、実然矣、実然矣、吾亦思<sub>レ</sub>之耳、乃以<sub>レ</sub>問告<sub>ニ</sub>於大夫<sub>一</sub>、々々曰、銀台不<sub>レ</sub>喜<sub>レ</sub>吾、難<sub>ニ</sub>以進<sub>レ</sub>言<sub>一</sub>、朝倉不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已<sub>一</sub>、語<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>、銀台<sub>一</sub>近<sub>ニ</sub>侍有馬某<sub>一</sub>藏<sub>ニ</sub>有馬<sub>一</sub>曰、前<sub>ニ</sub>老君<sub>一</sub>聞<sub>ニ</sub>吾等<sub>一</sub>至<sub>一</sub>、頻<sub>ニ</sub>思<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、而大夫不<sub>レ</sub>告<sub>ニ</sub>一事<sub>一</sub>、君公稍怪<sub>レ</sub>之、吾

以間聞之、会シテ西上之命下ル、遂不レ知達乎否、  
三日、有<sup>二</sup>官命<sup>一</sup>急召レ余、至則高橋伝<sup>二</sup>輪台之命<sup>一</sup>  
曰、今国家之窮、浪華・東武之艱、悉上聞焉、而東館之  
有司、每<sup>二</sup>事之窮<sup>一</sup>、必歸<sup>二</sup>罪於浪華<sup>一</sup>、今驗<sup>レ</sup>之、豈悉  
浪華<sup>ナリシヤ</sup>哉、自今而兩地相謀、通<sup>二</sup>有無<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>以補<sup>二</sup>其  
闕也、今浪華運金今歲中、所需三万九千金、欠<sup>レ</sup>ケル之公  
事將<sup>レ</sup>廢、知<sup>レ</sup>邸理<sup>一</sup>財速<sup>ニ</sup>歸<sup>ニ</sup>于浪華<sup>一</sup>、為<sup>レ</sup>棄<sup>レ</sup>之策、但女  
等到<sup>二</sup>于浪華<sup>一</sup>之日、以<sup>二</sup>今之窮<sup>一</sup>徒<sup>ニ</sup>施<sup>レ</sup>策<sup>一</sup>、人<sup>一</sup>心恐<sup>ク</sup>難<sup>ク</sup>  
収<sup>メ</sup>、前者高橋・朝倉所議、改<sup>二</sup>癸酉之令<sup>一</sup>、復<sup>二</sup>旧債<sup>一</sup>

〔頭注〕「高橋先者以誓書之事拒之至欲辭職去今又命之何其矛盾」

者、從<sup>二</sup>其議<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>之、宜<sup>レ</sup>以此<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>辭、旁<sup>ニ</sup>諭<sup>ニ</sup>賈人等<sup>一</sup>、而後  
凶<sup>レ</sup>事、別又伝<sup>二</sup>今ノ公ノ命<sup>一</sup>曰、今知<sup>レ</sup>邸理<sup>一</sup>財<sup>一</sup>一意<sup>ニ</sup>欲<sup>レ</sup>  
緩<sup>ニ</sup>シコトト<sup>一</sup> 公駕之期、然<sup>トモ</sup>朝覲往來者、国之大事、其期不<sup>レ</sup>  
〔頭注〕「約契戰國策刑策事所以不成者乃欲以生却之必得約契以報太子也」  
可<sup>レ</sup>違、是以断<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>用<sup>ニ</sup>其議<sup>一</sup>也、二人唯努力奉<sup>レ</sup>事、凡<sup>ソ</sup>  
此<sup>二</sup>条、欠<sup>レ</sup>其三<sup>一</sup>、則誤<sup>二</sup>大事<sup>一</sup>、必諾<sup>レ</sup>之、無<sup>レ</sup>遺失<sup>二</sup>者、  
約契以証<sup>レ</sup>焉、且事急、新納以<sup>二</sup>今夜<sup>一</sup>發、朝倉別<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>命、  
以<sup>二</sup>三五日<sup>一</sup>之後發、各勿<sup>レ</sup>遲<sup>ニ</sup>タ<sup>一</sup>、余拜伏曰、臣等不肖職

事不<sup>レ</sup>弁、朝廷不<sup>レ</sup>加<sup>ルニ</sup>以<sup>レ</sup>罪、寬恕以遇<sup>レ</sup>之、恩寵何  
言、唯運金三万九千、公駕之用、一万余金、通計至三五  
万金、期月<sup>ニ</sup>而弁<sup>レ</sup>之者、臣等統<sup>レ</sup>生<sup>ルモ</sup>兩翼、豈可<sup>レ</sup>  
得<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>乎、況臣等此役、遠<sup>ク</sup>來<sup>テ</sup>聞<sup>レ</sup>命、浪華人皆謂必  
有<sup>二</sup>大政之改<sup>一</sup>者、而<sup>レ</sup>今<sup>ニ</sup>空手<sup>一</sup>以還、衆皆失<sup>レ</sup>望、特<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>  
除<sup>二</sup>癸酉之令<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>辭、我財不<sup>レ</sup>足、彼<sup>カ</sup>慮終<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>獲者、  
人皆知<sup>レ</sup>之、以此說<sup>ニ</sup>於衆<sup>一</sup>誰敢<sup>レ</sup>應<sup>ニ</sup>乎命<sup>一</sup>、臣等已<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>其  
不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>也、則約契其<sup>レ</sup>何<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>哉、臣固不<sup>レ</sup>避<sup>二</sup>斧鉞<sup>一</sup>、  
及<sup>二</sup>事之失<sup>一</sup>受<sup>レ</sup>罪固其分也、只<sup>レ</sup>一旦面<sup>レ</sup>從而後<sup>ニ</sup>失<sup>ルハ</sup>不<sup>レ</sup>  
若<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>罪於未然、不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>領<sup>レ</sup>命也、高橋曰、吾亦知<sup>レ</sup>其  
不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>成、然<sup>トモ</sup>老君英武、一旦反<sup>レ</sup>言領下之鱗忽奮起、  
不若<sup>レ</sup>仮<sup>レ</sup>諾<sup>レ</sup>之以避<sup>二</sup>其銳<sup>一</sup>、其不<sup>レ</sup>成者、它日自有<sup>レ</sup>議、余  
心<sup>ニ</sup>知其急<sup>一</sup>遽促<sup>レ</sup>婦<sup>ニ</sup>者、使<sup>レ</sup>余<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>悉<sup>レ</sup>言<sup>ニ</sup>之術<sup>一</sup>、  
廷<sup>ニ</sup>爭<sup>ルモ</sup>之、無<sup>レ</sup>所得、大<sup>ニ</sup>失望、乃決<sup>レ</sup>意謂<sup>ク</sup>此舉  
不<sup>レ</sup>啻<sup>二</sup>君上<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>喜<sup>レ</sup>焉、諸有司皆如此、一旦退而不<sup>レ</sup>  
再<sup>レ</sup>凶<sup>レ</sup>事、遂<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>成<sup>一</sup>也、則答曰、事之成不<sup>レ</sup>成、天  
也、謹領<sup>レ</sup>命、乃退而促<sup>レ</sup>裝<sup>ニ</sup>初<sup>一</sup>更發<sup>二</sup>田坊之邸舍<sup>一</sup>、朝

〔頭注〕「開弁云、高橋此語其行事之本色」

會留而具約契、連署呈之、其結末曰、其所力不及者、東館有司補之、官又削之、改書曰、悉領命、無誤事、余雖署姓名、其疏不能見一字也、竊憾、內官矯誣、特非昔然耳、

余辭東武上道、會尾張公就于國、不疾行、十九日到于浪華之邸、朝倉有京師之使命、終而至、十三日到于浪華、

知邸至、於是与椎原・田中議二字与余同官、田中交代、椎原是時新至、皆曰

東武之命雖嚴、今人心不服、縱論以除癸酉之令、足示吾欺瞞耳、誰敢信之、或則拳事之大者、以謀之、有所成乎、公命之中最不可欠者、公駕之用也、如得弁此一事其餘從子錢家所出、萬一欠東館之用、獲罪、豈不愈誤、公賀之事、示恥於天下乎、乃具三条而屬之、大賈等、其略如左、

一我國家連歲多事、加<sub>ル</sub>以天災、是以癸酉歲、廢<sub>レ</sub>舊債之<sub>レ</sub>息、約<sub>ル</sub>以三十年後復<sub>レ</sub>舊、天未愍<sub>レ</sub>下國、

海厄頻臻、運漕屢誤、期、國用益窮、再弛<sub>レ</sub>期、五年、我公夙夜憂<sub>レ</sub>之、故雖<sub>レ</sub>此窮厄之時、傷<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>於衆債主、是以除<sub>レ</sub>癸酉之令、給<sub>レ</sub>舊債息、一銖、唯吾國今之窮、今日欲<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>之、無<sub>レ</sub>所取<sub>レ</sub>財也、它日運財至、要必償<sub>レ</sub>之、

一今年新債之息、其約已定、而吾之窮日迫、如<sub>レ</sub>前所<sub>レ</sub>叙、今以其息、具<sub>レ</sub>之別券、与<sub>レ</sub>之、請俟<sub>レ</sub>明年一給<sub>レ</sub>之、

一我公就<sub>レ</sub>國之期在於明春、衆之所<sub>レ</sub>知、今我窮雖<sub>レ</sub>太甚、諸侯<sub>レ</sub>大事、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>欠、則不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>賴<sub>レ</sub>債主之力也、諸債<sub>レ</sub>主幸不<sub>レ</sub>咎<sub>レ</sub>往事、給<sub>レ</sub>之如<sub>レ</sub>例、我公所<sub>レ</sub>敢請也、雖然諸債主亦頃來多<sub>レ</sub>窮、故<sub>レ</sub>例年所<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>給、正<sub>レ</sub>十一月、東武<sub>レ</sub>運金、別<sub>レ</sub>函<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>它方、不<sub>レ</sub>煩<sub>レ</sub>諸債主、諸<sub>レ</sub>債<sub>レ</sub>主宜<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>弁<sub>レ</sub>公駕之<sub>レ</sub>嚴也、是祈、

大賈等雖<sub>レ</sub>拜<sub>レ</sub>命、意<sub>レ</sub>太<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>懌、皆曰、退而議<sub>レ</sub>之、十二月二日、大賈等各來<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>命、曰、公駕<sub>レ</sub>之用雖<sub>レ</sub>領<sub>レ</sub>、

命、近來財用準塞、家產衰弊不堪供<sub>レ</sub>大國之用、非<sub>レ</sub>敢違<sub>レ</sub>命也、實<sub>レ</sub>力不足也、謹謝<sub>レ</sub>之、大賈等既不<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>我命、於是再議、今詢<sub>レ</sub>事於衆、各讓<sub>レ</sub>言而不<sub>レ</sub>決也、試<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>管家老輩三四人議<sub>レ</sub>之、於是召<sub>レ</sub>之、各雖<sub>レ</sub>意不<sub>レ</sub>服、不能<sub>レ</sub>辭焉、皆曰、再會<sub>レ</sub>衆告<sub>レ</sub>之賤夫等竭<sub>レ</sub>意論<sub>レ</sub>之、乃以<sub>レ</sub>十一日會<sub>レ</sub>衆買<sub>レ</sub>、告<sub>レ</sub>以前事、十六日、衆賈來<sub>レ</sub>復命、曰、卑人等非不<sub>レ</sub>懷<sub>レ</sub>大國之恩、又非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>君等之苦心也、雖然吾輩以<sub>レ</sub>自家余羸<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>命者、不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>一二<sub>レ</sub>良賈、其它皆賴<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>錢<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>運用<sub>レ</sub>弁<sub>レ</sub>事、今<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>錢<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>皆稱<sub>レ</sub>、大國不<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>息、故<sub>レ</sub>〔難〕<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>命、卑人等再<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>圖<sub>レ</sub>之、皆掉<sub>レ</sub>頭耳、卑人等無<sub>レ</sub>奈<sub>レ</sub>之何<sub>レ</sub>耳、敢辭、此日<sub>レ</sub>三老輩密<sub>レ</sub>私<sub>レ</sub>曰、此舉也、衆<sub>レ</sub>而詢<sub>レ</sub>之、一人有<sub>レ</sub>不肯者、衆必倚<sub>レ</sub>之、不<sub>レ</sub>若、人々<sub>レ</sub>而詢<sub>レ</sub>之、有<sub>レ</sub>恩義<sub>レ</sub>者、或有<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>之者、今也歲已迫、衆皆有厭倦之色、却破事、請俟<sub>レ</sub>明歲<sub>レ</sub>議焉、於是從<sub>レ</sub>其議、

公駕之用、從<sub>レ</sub>衆賈之議、屬<sub>レ</sub>事於明春、而<sub>レ</sub>東武<sub>レ</sub>運

金、遂<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>其策<sub>レ</sub>方索<sub>レ</sub>之獲<sub>レ</sub>牙郎之手<sub>レ</sub>者、九千金、近<sub>レ</sub>江<sub>レ</sub>舖作兵衛者、一千金、平甚者、三千金、公倉下吏村上謀牙郎而獲<sub>レ</sub>二千金、術止<sub>レ</sub>于斯、於是重議、巨商中、只和田、我寵<sub>レ</sub>遇殊<sub>レ</sub>於衆<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>躬<sub>レ</sub>往<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>之或可<sub>レ</sub>成焉、千草舖女婿九十郎者、有志氣、知<sub>レ</sub>邸親<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>之必<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>命、遂<sub>レ</sub>賴<sub>レ</sub>此二人<sub>レ</sub>獲<sub>レ</sub>六千金<sub>レ</sub>通計<sub>レ</sub>二万<sub>レ</sub>二千金<sub>レ</sub>東武<sub>レ</sub>之用<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>數<sub>レ</sub>三万<sub>レ</sub>〔三〕<sub>レ</sub>千金、其六千金者非<sub>レ</sub>定規<sub>レ</sub>之數<sub>レ</sub>、除<sub>レ</sub>之、其它<sub>レ</sub>三万<sub>レ</sub>三千金、今<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>運<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>補<sub>レ</sub>之、

二十八日、種<sub>レ</sub>島<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>東武<sub>レ</sub>、因<sub>レ</sub>余<sub>レ</sub>之請<sub>レ</sub>、監<sub>レ</sub>浪華<sub>レ</sub>也、蓋<sub>レ</sub>種<sub>レ</sub>島<sub>レ</sub>代<sub>レ</sub>高橋<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>掃<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>、是以<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>也、然<sub>レ</sub>東武<sub>レ</sub>之事已<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>、無<sub>レ</sub>它<sub>レ</sub>議、只<sub>レ</sub>京師<sub>レ</sub>之給<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>弁<sub>レ</sub>、計<sub>レ</sub>校<sub>レ</sub>之、

今歲中所<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>、七千余金、京館知<sub>レ</sub>邸屢<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>曰、它<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>暫措焉、唯<sub>レ</sub>近<sub>レ</sub>衛<sub>レ</sub>公<sub>レ</sub>後宮<sub>レ</sub>之給<sub>レ</sub>、我<sub>レ</sub>公<sub>レ</sub>女<sub>レ</sub>新<sub>レ</sub>嫁<sub>レ</sub>、新<sub>レ</sub>歲<sub>レ</sub>之禮<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>始<sub>レ</sub>、其事<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>欠<sub>レ</sub>、然<sub>レ</sub>浪華<sub>レ</sub>之策<sub>レ</sub>、已<sub>レ</sub>盡<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>東武<sub>レ</sub>、別<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>之、不<sub>レ</sub>獲<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>片<sub>レ</sub>金<sub>レ</sub>、乃<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>僚<sub>レ</sub>田<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>走<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>京師<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>之、京師<sub>レ</sub>巨商<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>島<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>助<sub>レ</sub>纒<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>百<sub>レ</sub>金<sub>レ</sub>、其它<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>



東行錄上終

東行錄下

丁亥正月、種島辭浪華而返于國、而公駕度支二萬二千金、東武運金二萬一千金余、大賈等遂不<sub>レ</sub>応乎命、子錢家亦狐疑、不出<sub>レ</sub>金、再往謀之、僅和田<sub>レ</sub>称辰日屋平瀬称千草屋<sub>レ</sub>応之、其它或半金、或三之一、通計三千五百金、先致<sub>二</sub>之于東武<sub>一</sub>、其余不<sub>レ</sub>獲<sub>二</sub>片金<sub>一</sub>也、旧日〔余<sub>カ</sub>〕諫爭九回、併<sub>二</sub>前年之諍議<sub>一</sub>、後先幾十回、大夫有司、茫乎屬<sub>二</sub>耳風<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>路<sub>二</sub>於達<sub>レ</sub>言<sub>一</sub>、於是再決<sub>レ</sub>意而謂、國家衰弊之至、不<sub>レ</sub>〔得<sub>得</sub>〕<sub>二</sub>日月<sub>一</sub>、大夫有司不<sub>レ</sub>悟如<sub>レ</sub>斯、及<sub>二</sub>交之生<sub>一</sub>、嗚<sub>レ</sub>臍何及、方今公駕之用、困而無<sub>レ</sub>路、雖<sub>レ</sub>然事苟<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>于此、浪華人尚信<sub>レ</sub>我、豈不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>弁焉、唯今年弁<sub>レ</sub>之大夫有司<sub>レ</sub>安<sub>二</sub>於此<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>省<sub>二</sub>明年之事<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>辛巳<sub>一</sub>、至於今日、一年〔過<sub>基</sub>〕<sub>二</sub>一年<sub>一</sub>、遂無悔悟、明年亦猶<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>、何時<sub>カ</sub>脱<sub>レ</sub>窮困、不<sub>レ</sub>若<sub>二</sub>今因<sub>二</sub>公駕之事<sub>一</sub>、切<sub>レ</sub>諫<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>則大事在<sub>二</sub>于前<sub>一</sub>、諸有司不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>尋常<sub>一</sub>放過<sub>一</sub>、言<sub>二</sub>自<sub>レ</sub>達<sub>レ</sub>于君上<sub>一</sub>、君上聽<sub>二</sub>今之窮<sub>一</sub>、

于此、縱吾獲<sub>レ</sub>罪譴責<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>益於國家<sub>一</sub>也、猶不<sub>レ</sub>愈<sub>二</sub>東<sub>レ</sub>手而俟<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、乃議<sub>二</sub>朝倉<sub>一</sub>、朝倉亦有<sub>二</sub>此志<sub>一</sub>、因<sub>レ</sub>共謀<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>、會<sub>二</sub>東館島津大夫到<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>慶府<sub>レ</sub>代<sub>二</sub>于町田君<sub>一</sub>也、於是与<sub>二</sub>朝倉<sub>一</sub>陳<sub>二</sub>說大夫前<sub>一</sub>曰、臣<sub>一</sub>等先<sub>レ</sub>者東武<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>議、言<sub>レ</sub>遂<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>焉、徒<sub>レ</sub>督<sub>二</sub>責<sub>レ</sub>運金之事<sub>一</sub>、臣等陳<sub>二</sub>其難<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>事<sub>一</sub>、官強<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>之、臣等不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>拒<sub>レ</sub>命、一旦退而試<sub>レ</sub>之、其事遂<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>成、故再議<sub>二</sub>趨<sub>レ</sub>東武<sub>一</sub>、告<sub>二</sub>上訴<sub>一</sub>之、會<sub>二</sub>大夫到<sub>一</sub>、伏乞<sub>二</sub>大夫指揮<sub>一</sub>臣等窃<sub>レ</sub>謂朝觀往來者、國之大事、固亡論矣、然君公一期留<sub>レ</sub>于東武、列國有<sub>二</sub>其例<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>恥之大者<sub>一</sub>、公駕一旦泄<sub>レ</sub>于路其備不<sub>レ</sub>就其恥如何哉、且若<sub>二</sub>公駕之備<sub>一</sub>、万方謀<sub>レ</sub>之猶可<sub>レ</sub>得也、唯是東館亦有<sub>二</sub>二老君世子群公子公女<sub>一</sub>在<sub>二</sub>、悉絕<sub>二</sub>其給<sub>一</sub>能保<sub>二</sub>其宮<sub>一</sub>乎、縱後宮給<sub>二</sub>其俸<sub>一</sub>、群下大小、得<sub>二</sub>柴立<sub>一</sub>而當直<sub>二</sub>乎<sub>一</sub>、大夫到<sub>レ</sub>于東武、大小自<sub>レ</sub>屬<sub>二</sub>君<sub>一</sub>、其唯思<sub>レ</sub>之、大夫曰、吾未<sub>レ</sub>慣<sub>二</sub>於事<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>割斷大事<sub>一</sub>也、只達<sub>二</sub>言<sub>一</sub>於君上、吾之分也、今以<sub>二</sub>女等<sub>一</sub>言<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>之自有<sub>二</sub>英斷<sub>一</sub>、朝倉曰、突然矣、大夫若<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>審<sub>二</sub>之<sub>一</sub>

浪華之事、從<sub>レ</sub>理財一人<sub>ヲ</sub>如何、大夫曰、幸矣、朝會指<sub>レ</sub>余曰、可<sub>レ</sub>以往<sub>ニ</sub>乎、余曰、固所<sub>レ</sub>願也、何辭<sub>キ</sub>、於是大夫命<sub>レ</sub>余從<sub>レ</sub>之、大夫以<sub>ニ</sub>二十二日<sub>ニ</sub>東發、余以<sub>ニ</sub>十八日<sub>ニ</sub>發、約曰、以<sub>ニ</sub>日夜馳<sub>レ</sub>之、後<sub>ニ</sub>大夫不<sub>ニ</sub>三日<sub>ニ</sub>、是時會<sub>ニ</sub>天使下<sub>ニ</sub>于東武<sub>ニ</sub>、駅路忽忙、乃易<sub>レ</sub>道、由<sub>ニ</sub>木曾路<sub>ニ</sub>、三月二日至<sub>ニ</sub>于東武<sub>ニ</sub>、就<sub>ニ</sub>田坊之客館<sub>ニ</sub>、先<sub>レ</sub>是余東行之事、聞<sub>ニ</sub>于東武<sub>ニ</sub>、町田大夫大<sub>ニ</sub>揚<sub>レ</sub>之、以為事、聞<sub>ニ</sub>于輪台<sub>ニ</sub>、逆鱗忽震、禍不<sub>レ</sub>可知焉、今公亦頻<sub>レ</sub>憂<sub>レ</sub>之、即使<sub>レ</sub>人要<sub>ニ</sub>于途<sub>ニ</sub>、尋而會<sub>ニ</sub>大山<sub>ニ</sub>迫<sub>レ</sub>理財之<sub>ニ</sub>于國<sub>ニ</sub>、又命<sub>レ</sub>駐<sub>ニ</sub>余行<sub>ニ</sub>、或流言<sub>キ</sub>、余不<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>大夫之命<sub>ニ</sub>、欲<sub>レ</sub>抗<sub>ニ</sub>一言<sub>ニ</sub>於闕下<sub>ニ</sub>、君公又聞<sub>レ</sub>之、憂愈甚、重飛<sub>レ</sub>檄要<sub>レ</sub>之、曰、縱<sub>レ</sub>至<sub>ニ</sub>于國門<sub>ニ</sub>、勿<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>于邸中<sub>ニ</sub>、三檄皆馳<sub>ニ</sub>東道<sub>ニ</sub>、故余不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之、將<sub>レ</sub>至<sub>ニ</sub>于國邸<sub>ニ</sub>、赤羽橋<sub>ニ</sub>逢<sub>ニ</sub>趣<sub>レ</sub>法書<sub>ニ</sub>記高崎<sub>ニ</sub>進<sub>ニ</sub>金<sub>ニ</sub>、愕然曰、子不<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>大夫之檄<sub>ニ</sub>乎、於是知<sub>ニ</sub>三路之齟齬<sub>ニ</sub>也、高崎曰、倉卒見<sub>レ</sub>大夫、恐獲<sub>レ</sub>罪、不<sub>レ</sub>先<sub>ニ</sub>就<sub>ニ</sub>理財大山<sub>ニ</sub>謀<sub>レ</sub>之、<sub>余</sub>至于<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>始<sub>ニ</sub>知<sub>ニ</sub>大山<sub>ニ</sub>代<sub>ニ</sub>大山<sub>ニ</sub>迫<sub>ニ</sub>、乃至<sub>ニ</sub>大山<sub>ニ</sub>之亭<sub>ニ</sub>、大山語<sub>ニ</sub>以下<sub>ニ</sub>大夫要<sub>ニ</sub>于路<sub>ニ</sub>

之狀<sub>ト</sub>、且曰、事不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>以不<sub>レ</sub>告也<sub>ニ</sub>、宜至<sub>ニ</sub>高<sub>ニ</sub>崎<sub>ニ</sub>之亭<sub>ニ</sub>議焉、是時大山雖<sub>レ</sub>代<sub>ニ</sub>大山<sub>ニ</sub>迫<sub>ニ</sub>、仍<sub>レ</sub>理財之職<sub>ト</sub>、亦知<sub>ニ</sub>事之不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>就也、乃欲<sub>ニ</sub>具<sub>ニ</sub>表辭<sub>ニ</sub>職<sub>ト</sub>、已<sub>ニ</sub>起<sub>ニ</sub>草<sub>ニ</sub>、以<sub>ニ</sub>余之至<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>果、尋而官議紛々、遂歇<sub>ニ</sub>其事<sub>ニ</sub>云、邸中上下、聞<sub>ニ</sub>余之至<sub>ニ</sub>、皆失<sub>レ</sub>色、余竊<sub>ニ</sub>謂<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>拳國之大事<sub>ニ</sub>、縱<sub>レ</sub>途<sub>ニ</sub>獲<sub>ニ</sub>百檄<sub>ニ</sub>、豈<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>曠<sub>ニ</sub>手而返<sub>ニ</sub>乎、然<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>三檄<sub>ニ</sub>而違<sub>レ</sub>之、則忤<sub>ニ</sub>君命<sub>ニ</sub>也、其罪如何、適易<sub>レ</sub>道而與<sub>ニ</sub>使命<sub>ニ</sub>齟齬<sub>ニ</sub>幸耳矣、至<sub>ニ</sub>高橋之館<sub>ニ</sub>而告焉、且語<sub>ニ</sub>浪華<sub>ニ</sub>與<sub>ニ</sub>島大夫<sub>ニ</sub>議<sub>ニ</sub>之事<sub>ト</sub>、大夫至而一言<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>ニ</sub>浪華<sub>ニ</sub>之事<sub>ニ</sub>、是以諸<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>司皆謂<sub>ニ</sub>余擅<sub>ニ</sub>命<sub>ト</sub>、別<sub>ニ</sub>立<sub>ニ</sub>意見<sub>ニ</sub>、與<sub>ニ</sub>官抗拒<sub>ニ</sub>也、高橋亦顏色<sub>ニ</sub>怫然<sub>ト</sub>、聞<sub>ニ</sub>余之分說<sub>ト</sub>、始知<sub>ニ</sub>大夫之命也<sub>ト</sub>、於是又問事不<sub>レ</sub>就或有<sub>ニ</sub>別<sub>ニ</sub>所<sub>ニ</sub>議乎、余曰、臣等之議、去冬<sub>ニ</sub>已<sub>ニ</sub>尽矣、要<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>節儉之制<sub>ニ</sub>、則臣等之策、固<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>一端<sub>ニ</sub>也、而廢<sub>ニ</sub>其議<sub>ニ</sub>而不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>、一<sub>ニ</sub>督<sub>ニ</sub>責運金<sub>ニ</sub>、猶<sub>ニ</sub>縛<sub>ニ</sub>手足<sub>ニ</sub>命<sub>ニ</sub>命<sub>ニ</sub>疾走<sub>ト</sub>、雖<sub>レ</sub>加<sub>ニ</sub>鞭撻<sub>ニ</sub>奈<sub>レ</sub>之何<sub>キ</sub>、雖然一旦<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>退而試<sub>レ</sub>之、大夫有<sub>ニ</sub>司皆不<sub>レ</sub>信焉、故強<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>命而試<sub>レ</sub>之、今事不<sub>レ</sub>レ

就而再告之、実不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>之勢也、 国家幸除<sub>二</sub>一二之弊<sub>一</sub>、  
則臣等亦頼<sub>レ</sub>之凶<sub>レ</sub>事、不<sub>レ</sub>憂<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>成也、若不<sub>レ</sub>除<sub>二</sub>今<sub>一</sub>弊<sub>一</sub>、  
令<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>事、臣等術已<sub>レ</sub>尽矣、敢請速<sub>ニ</sub>罷<sub>二</sub>臣等<sub>一</sub>之職、  
它<sub>レ</sub>良材<sub>一</sub>代<sub>レ</sub>之、勿<sub>レ</sub>徒<sub>ニ</sub>費<sub>二</sub>時日<sub>一</sub>誤<sub>レ</sub>大事<sub>一</sub>、高橋曰、  
事非<sub>レ</sub>小、不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>伝聞<sub>一</sub>以誤<sub>レ</sub>事也、子自<sub>レ</sub>往<sub>レ</sub>告<sub>二</sub>大夫<sub>一</sub>、即  
至<sub>二</sub>町田大夫<sub>一</sub>請<sub>レ</sub>問、大夫出而見<sub>レ</sub>之、曰、三概要<sub>二</sub>于道<sub>一</sub>、  
不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之欵、曰、臣經<sub>二</sub>岐岨<sub>一</sub>而至<sub>レ</sub>、東道之事、遂不<sub>レ</sub>知  
焉、大夫曰、事之齟齬者、如之何、雖然吾唯畏<sub>レ</sub>爾等以<sub>レ</sub>  
唐突<sub>一</sub>犯<sub>レ</sub>中<sub>一</sub>、君上之<sub>レ</sub>怒<sub>一</sub>、是以加<sub>レ</sub>意、要<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>于道<sub>一</sub>、  
然<sub>レ</sub>其事乖忤<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>中<sub>二</sub>吾慮<sub>一</sub>、今也欲<sub>レ</sub>救<sub>レ</sub>女、恐<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>中<sub>一</sub>、  
及、將奈<sub>レ</sub>之何<sub>一</sub>、余曰、大夫愍<sub>二</sub>臣等<sub>一</sub>、實<sub>ニ</sub>至<sub>一</sub>矣、豈不<sub>レ</sub>レ<sub>レ</sub>  
感<sub>二</sub>其恩<sub>一</sub>耶、唯大夫之憂、以<sub>レ</sub>小措<sub>レ</sub>大、方今 国家之急、  
大事將<sub>レ</sub>廢、苟事<sub>一</sub>變<sub>レ</sub>、殆<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知者<sub>一</sub>、当<sub>レ</sub>是時<sub>一</sub>、  
豈愛<sub>レ</sub>微躬<sub>一</sub>、臣出<sub>二</sub>浪華<sub>一</sub>、意已<sub>レ</sub>決<sub>レ</sub>、大夫以<sub>レ</sub>臣之事<sub>一</sub>、  
陳<sub>二</sub>君前<sub>一</sub>唯<sub>レ</sub>国事其省<sub>レ</sub>焉、如<sub>レ</sub>臣<sub>一</sub>鼎鑊何憂、因陳<sub>二</sub>  
浪華之利害<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>答<sub>レ</sub>高橋<sub>一</sub>、大夫曰、爾等謂<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>別策<sub>一</sub>  
可<sub>レ</sub>乎、強論<sub>レ</sub>之、將如何、余曰、臣等之策、旧冬<sub>レ</sub>

之 官不<sub>レ</sub>用焉、事至<sub>二</sub>于斯<sub>一</sub>、然在其職不<sub>レ</sub>弁其事<sub>一</sub>、今也  
術<sub>レ</sub>尽途窮、受<sub>二</sub>其罪<sub>一</sub>固其所矣、 官若罪<sub>二</sub>臣等<sub>一</sub>以示<sub>レ</sub>焉、  
諸賢恐怖<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>命乎、亦不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>策而已、雖  
然事由<sub>レ</sub>之而携<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>者、成敗未<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知也、大夫曰、先退<sub>レ</sub>  
明日議<sub>レ</sub>之、余又曰、小人唐突、自<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>多罪<sub>一</sub>、唯 官論<sub>レ</sub>  
其罪<sub>一</sub>、知<sub>レ</sub>邸朝倉素<sub>一</sub>与<sub>レ</sub>於謀<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>然如<sub>レ</sub>朝家<sub>一</sub>會<sub>レ</sub>同  
心<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>、知<sub>レ</sub>邸為<sub>レ</sub>主財<sub>一</sub>用之事<sub>一</sub>、臣為<sub>レ</sub>主、 官能審<sub>レ</sub>  
輕重<sub>一</sub>論<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、臣<sub>レ</sub>縱<sub>レ</sub>重罪<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>憾焉、退而至<sub>二</sub>梅  
田用人<sub>一</sub>說<sub>レ</sub>之、如<sub>レ</sub>始、畢而就<sub>二</sub>旅館<sub>一</sub>、已<sub>レ</sub>初更、是日曉  
天<sub>一</sub>食<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>馭舍<sub>一</sub>後不<sub>レ</sub>食、是時始<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>食、  
三日、雖<sub>レ</sub>佳節<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>一橋公<sub>一</sub>喪事<sub>一</sub>、廢<sub>二</sub>朝儀<sub>一</sub>、故 官召<sub>レ</sub>  
余問難焉、事聞<sub>二</sub>君上<sub>一</sub>、君上素<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>喜<sub>二</sub>吾旧冬<sub>一</sub>之儀<sub>一</sub>、  
今又聞<sub>二</sub>余之至<sub>一</sub>益<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>憤<sub>一</sub>、以為<sub>二</sub>妄忤<sub>一</sub>官命<sub>一</sub>、使<sub>レ</sub>  
執<sub>レ</sub>政<sub>一</sub>用<sub>レ</sub>人及<sub>レ</sub>近侍用<sub>レ</sub>人調所<sub>一</sub>、圖師崎<sub>一</sub>議<sub>レ</sub>之、皆曰、  
朝倉<sub>一</sub>新納不能<sub>レ</sub>理<sub>レ</sub>其職<sub>一</sub>、却<sub>レ</sub>誹<sub>二</sub>謗<sub>一</sub>朝廷<sub>一</sub>、生<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>遜<sub>レ</sub>  
且<sub>二</sub>二人<sub>一</sub>處<sub>レ</sub>職<sub>一</sub>久矣、頗<sub>レ</sub>親<sub>二</sub>陸浪華<sub>一</sub>人、却<sub>レ</sub>誤<sub>レ</sub>事<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>代<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、事自<sub>レ</sub>弁<sub>レ</sub>、書記知<sub>レ</sub>識密<sub>一</sub>告<sub>二</sub>大夫<sub>一</sub>曰、新納雖<sub>レ</sub>犯<sub>二</sub>

君上之愠、原<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>已<sup>ト</sup>。今諸君之議、欲<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>它<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>代之<sup>ト</sup>之、臣思<sup>フ</sup>它<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>至<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>習<sup>ル</sup>於事、如何<sup>ク</sup>得<sup>ル</sup>其功<sup>ヲ</sup>、彼善<sup>ク</sup>老<sup>シ</sup>於浪華之事、若令<sup>レ</sup>之得<sup>ル</sup>施<sup>ス</sup>其策<sup>ヲ</sup>、豈莫<sup>ク</sup>所<sup>レ</sup>施設<sup>ス</sup>乎、大夫曰、新納妄<sup>リ</sup>逞<sup>テ</sup>己<sup>ノ</sup>之意<sup>ヲ</sup>見<sup>テ</sup>、抗<sup>シ</sup>拒<sup>ス</sup>、官<sup>ノ</sup>議<sup>ヲ</sup>吾再對<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>恐<sup>ク</sup>有<sup>レ</sup>不遜<sup>ニ</sup>、汝陰<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>私問<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>若有<sup>レ</sup>策議<sup>シ</sup>之<sup>ニ</sup>、知識即馳<sup>テ</sup>人召<sup>レ</sup>余、余退朝將<sup>レ</sup>返、逢<sup>テ</sup>知識之使<sup>ニ</sup>于邸ノ南門外<sup>ニ</sup>、即還而至<sup>テ</sup>知識之館<sup>ニ</sup>、知識乃告<sup>テ</sup>与<sup>テ</sup>大夫<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>之情<sup>ヲ</sup>、問<sup>フ</sup>余<sup>カ</sup>所<sup>レ</sup>蘊<sup>ニ</sup>蓄<sup>ス</sup>、余曰、今吾不<sup>レ</sup>避<sup>ク</sup>君上之愠<sup>ヲ</sup>、遠來<sup>テ</sup>進<sup>テ</sup>言<sup>フ</sup>、其所<sup>レ</sup>志非<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>タ<sup>ニ</sup>、苟用<sup>ラ</sup>吾言<sup>ヲ</sup>豈啻憂<sup>ニ</sup>ト<sup>ラ</sup>シヤ、公駕之事<sup>ヲ</sup>哉、一國受<sup>テ</sup>其沢<sup>ヲ</sup>、然<sup>ト</sup>言<sup>フ</sup>不<sup>レ</sup>用<sup>ラ</sup>レ、至<sup>テ</sup>于斯<sup>ニ</sup>、必不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>已<sup>ト</sup>、勉<sup>シ</sup>一時之急<sup>ニ</sup>、無<sup>レ</sup>若<sup>ク</sup>君上止<sup>レ</sup>就<sup>コト</sup>留<sup>ル</sup>于東武<sup>上</sup>、而此事又不用<sup>ラ</sup>焉、吾術実<sup>ニ</sup>窮<sup>ス</sup>矣、雖然、國家之事、豈謂<sup>テ</sup>無<sup>レ</sup>策<sup>可</sup>ナラ<sup>ン</sup>乎、吾請<sup>フ</sup>為<sup>シ</sup>陳<sup>セン</sup>八条<sup>ヲ</sup>、子宜<sup>ク</sup>告<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>、大夫<sup>一</sup>、扱<sup>テ</sup>其可<sup>ル</sup>者<sup>ヲ</sup>吾聞<sup>ク</sup>、公駕過<sup>リ</sup>于南都<sup>ヲ</sup>、其事雖<sup>レ</sup>非<sup>ニ</sup>逸遊<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>知者、皆謂<sup>ク</sup>當<sup>テ</sup>今<sup>ノ</sup>之窮<sup>ニ</sup>、君公猶<sup>テ</sup>有<sup>レ</sup>流連<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>、衆心不<sup>レ</sup>服<sup>一</sup>也、侍妾<sup>ヲ</sup>從<sup>テ</sup>駕往來<sup>ス</sup>者、婢<sup>ト</sup>女内官幾許人、其費幾許、今使<sup>テ</sup>

二女居<sup>ニ</sup>東西<sup>一</sup>止<sup>レ</sup>從<sup>レ</sup>駕、実<sup>ハ</sup>省<sup>キ</sup>往來之費<sup>ヲ</sup>、名<sup>ハ</sup>加<sup>シ</sup>儉<sup>シ</sup>於後宮<sup>ニ</sup>、衆<sup>ト</sup>望<sup>シ</sup>自服<sup>セ</sup>、二也、諸<sup>ノ</sup>公女他<sup>ノ</sup>適者、歲給<sup>シ</sup>千金<sup>ニ</sup>、休<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>三年、可<sup>レ</sup>充<sup>テ</sup>一方之闕<sup>ニ</sup>也、三也、君上及世子<sup>ノ</sup>服<sup>御</sup>、製<sup>ス</sup>於京師<sup>ニ</sup>者、貴<sup>シ</sup>居<sup>ニ</sup>天下第一<sup>ニ</sup>、東將軍<sup>ノ</sup>之服<sup>ハ</sup>次<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>、一<sup>ニ</sup>經<sup>テ</sup>服御<sup>ニ</sup>、為<sup>シ</sup>故物<sup>ト</sup>、給<sup>テ</sup>賜<sup>フ</sup>、一<sup>ニ</sup>、凡<sup>ソ</sup>服飾<sup>ノ</sup>之費<sup>ハ</sup>歲<sup>ニ</sup>三千金<sup>ニ</sup>、以下<sup>ニ</sup>其出<sup>ル</sup>、東將軍<sup>ノ</sup>之上<sup>ニ</sup>貴品<sup>上</sup>、一宿給<sup>テ</sup>賜<sup>フ</sup>予<sup>ニ</sup>、可<sup>レ</sup>耶、今降<sup>シ</sup>其等<sup>ノ</sup>從<sup>レ</sup>僕<sup>ノ</sup>、其費<sup>可</sup>減<sup>ス</sup>三<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>二也、四也、群公子<sup>ノ</sup>服飾<sup>ハ</sup>与<sup>ニ</sup>世子<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>相讓<sup>ニ</sup>、似<sup>レ</sup>無<sup>ニ</sup>分等<sup>一</sup>、今降<sup>シ</sup>其服<sup>ニ</sup>、從<sup>テ</sup>質素<sup>ニ</sup>定<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>制<sup>ヲ</sup>、五也、自<sup>レ</sup>輪台<sup>ノ</sup>公<sup>一</sup>女立<sup>テ</sup>東城<sup>ノ</sup>大夫人<sup>ニ</sup>、后宮<sup>ノ</sup>之苞苴<sup>ハ</sup>、倍<sup>ニ</sup>々<sup>ニ</sup>國<sup>ノ</sup>〔貢〕<sup>ニ</sup>、今<sup>ニ</sup>老君<sup>ノ</sup>齡高<sup>シ</sup>憂<sup>ニ</sup>威<sup>ス</sup>國事<sup>ヲ</sup>、大夫人<sup>ノ</sup>慈孝、豈<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>思<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>、其<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>及<sup>テ</sup>辭謝<sup>シ</sup>徹<sup>ル</sup>之<sup>者</sup>、恐<sup>ク</sup>深宮<sup>ノ</sup>之中未<sup>レ</sup>与<sup>テ</sup>知<sup>ラ</sup>闈<sup>ノ</sup>外<sup>ノ</sup>之事<sup>ヲ</sup>之故耳、今頼<sup>テ</sup>其親昵<sup>ノ</sup>之人<sup>一</sup>風<sup>ハ</sup>之<sup>ヲ</sup>、大夫人亦當<sup>テ</sup>有<sup>レ</sup>意、我有司<sup>ノ</sup>見<sup>テ</sup>其機<sup>ヲ</sup>、訴<sup>テ</sup>我情<sup>ヲ</sup>、歲貢<sup>ノ</sup>之外、休<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>三年<sup>ナラ</sup>、六也、前者諸<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>司議<sup>ニ</sup>、銀台<sup>ノ</sup>老<sup>ニ</sup>于國<sup>ニ</sup>、其言<sup>不</sup>行、然<sup>ト</sup>窺<sup>フ</sup>聞<sup>ク</sup>、銀台<sup>ノ</sup>之賢<sup>ハ</sup>、善<sup>ク</sup>知<sup>テ</sup>國<sup>ノ</sup>之憂<sup>ヲ</sup>、常<sup>ニ</sup>躬<sup>ニ</sup>儉<sup>シ</sup>素<sup>一</sup>、以示<sup>シ</sup>於<sup>テ</sup>下<sup>ニ</sup>果然<sup>ラ</sup>、則令<sup>テ</sup>近侍<sup>ノ</sup>賢者<sup>一</sup>、

善風之、滅其給、供國用者、豈莫留意乎、大夫願、懇謀、其事、七也、臣竊思、自大夫入立于東城、其孝於老君、歲時伏蠟之贈遺耳、未聞下有孝、裨益於國家者、也、

今老君八旬、大夫人拳一事、為老君為壽、則天下之人望也、今大夫挾習、世事者、風之時權、國家一二窮厄或有所免焉、八也、此八者、得行其半、一時之急猶可救也、悉得行之、公駕運金之用、不足憂也、知識曰、子之言善矣、吾正告之大夫、將起、陰以私告曰、子此行、諸有司皆側目、或言易人以治之事可弁也、吾思今之時、新官蒞事、不啻不能治之、却紊之、而當其無功也、不必修罪、多伺子之罅隙、陷子、以塞其責、子居樞要之地、百事蝟毛、吹毛索瑕、豈莫闕漏、以此奪子之功、却加其冤、吾為子憂之、子其勉努力哉、余揮淚曰、足下為吾忠告、切偲至矣、不不知所焉、雖然子其休愛、吾出浪華已決大斷

國家今時之窮、昇平一大厄、吾家祖先來為國拋生、吾雖不肖、奉其後、豈惜微軀、鉗口、至事之不、成、姦人落、下石、古今通病、吾丹心、上不違天、下不羞地、若以此獲罪、雖縲紲、非其罪也、唯神明知之、知識大息而止、余辭去、知識再朝告之大夫、

四日、余之言、忤君上甚矣、且今公性不喜東武之居、愈益薄、余言以為怫矣、而近侍和之者、各知本、非、君上益憤激、乃下令曰、新納所來告、不用令群臣議焉、宜從、輪台之明斷也、諸有司勿復言、遂遣近侍用人調所告之、輪台、大夫用人皆知、輪台之英、銳激昂、一朝皆震、余訪高橋其它之館、皆側目而不言、見島大夫、大夫曰、汝之志就矣、汝之言悉達于輪台、但老君之英慮、不可測、万一觸其激怒、罪不可知也、然、吾知汝之志、應莫悔也、余泣而答曰、某不肖、理財之職、八年、進言幾策、徒沮中路、不能通

焉、是以七顛八起思納之術、今臣之言達於手、君聽之、則風雲一遇、願已足矣、其用不用、天也、臣始不願之、唯罪是俟、退而還于舍、初出浪華、知邸朝倉私具書、遺近臣某々以裨〔佐〕吾事、余謂去秋之役、余猶觀〔觀〕方一、是以屈意抑銳、逢迎便口、以接權豪近侍、無所恥焉、以為苟得成事、曲尺直尋、非所厭也、是役也、事不成者歷然、要在於尺〔尺〕吾職一耳、是以謂、寧斃而止乎、安〔安〕倂〔倂〕之乃悉、收其書於行李中、而不達也、有客為余憂之者、余辭以三此意、且曰、人不可無賢父母也、余有老母、日夜倚門、是役也、豈不懷之、平日陵母之識、戒論子弟、勝大夫、是以吾不戀於去就耳、

四日、夜初更、忽有町大夫之命、召之至、則梅田用人伝命曰、前者運金、公駕之用已奉命、議已定、今其期已迫、〔妄〕違約誤事、不〔適〕其職、雖罪不可赦、更加恩待、有之速返于浪華一弁之、去冬汝所

奉命、一〔莫〕罪無赦、勿失事、別又有命曰、公駕預期四月朔、汝以今夜發、日夜馳之、先期報之、且君上怒甚、汝之發、頓足以促之、宜期漏刻一告之、余拜命曰、謹領教、臣昨日到行李未披、何旅裝之有、若欲急發、只待備夫之至耳、今已初夜、直命〔駟〕夫、二更則發、謹答命、退而見書記平田〔吉左衛門〕在傍、即私曰、為吾告大夫、〔反〕公命、雖不敬、東道百余里、日夜馳之、經七八日、復命又七八日、是月除今日不〔過〕二十六日、欲〔先〕發〔日〕、公駕發〔二〕三日、除往還日數、謀事之日不能五日、六日、運金急者一万余金、當今之窮、五六日〔シテ〕弁之者、縱生〔九〕手八足、豈得成〔コト〕乎、今受命而去、徒誤大事耳、其與〔誤〕徒誤大事、幸受罪於今日、且官命、罪不〔適〕其職、固亡所辭、只迫期違約之一言、以為臣不〔予〕告之乎、前日所告於大夫者、凡八回、大夫所親見、而強命之臣不能以服罪、雖然已諾命不能弁焉、今更何說焉、其罪可〔當〕

何俟<sup>也</sup>它日、唯今日而大夫斷之、平田曰、君上怒如烈火、大夫亦無如<sup>レ</sup>之何、子唯去、事之不<sup>レ</sup>及者、別有<sup>レ</sup>議、余不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>已<sup>トモトモ</sup>、退而至<sup>三</sup>高橋<sup>二</sup>乞<sup>レ</sup>間、告<sup>レ</sup>之如<sup>三</sup>平田<sup>二</sup>、高橋蹴然曰、君命已<sup>レ</sup>下<sup>レリ</sup>、反<sup>ハ</sup>之不敬<sup>ナリ</sup>、唯領命去<sup>レ</sup>事之不<sup>レ</sup>及者、自<sup>レ</sup>別有<sup>レ</sup>議、於是婦<sup>三</sup>于舍<sup>二</sup>即發、食不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>具、至<sup>三</sup>河崎<sup>二</sup>漸五更、就<sup>三</sup>駅亭<sup>二</sup>命<sup>レ</sup>食、又發日夜馳之、八日至<sup>三</sup>于浪華<sup>二</sup>、是日三月十三日、十四日、就<sup>三</sup>知邸<sup>二</sup>及同僚田中<sup>一</sup>達<sup>三</sup>君命<sup>一</sup>、先是知邸借<sup>三</sup>金<sup>二</sup>、於伊丹酒戶<sup>一</sup>、獲<sup>三</sup>三千金<sup>二</sup>、運<sup>三</sup>之<sup>二</sup>于東武<sup>一</sup>、余又多方求<sup>レ</sup>之獲<sup>三</sup>、二千金<sup>二</sup>、十八日發之、余乃上<sup>レ</sup>表乞<sup>レ</sup>罪別具<sup>三</sup>一表<sup>二</sup>乞<sup>レ</sup>辭<sup>トモトモ</sup>理財職<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>報、

余辭<sup>三</sup>東武<sup>二</sup>後<sup>一</sup> 官別有<sup>レ</sup>議、彼地<sup>ニシテ</sup>借<sup>三</sup>二萬六千金<sup>二</sup>、約<sup>スルニ</sup>以<sup>三</sup>今秋蔗糖<sup>二</sup>二百萬斤償<sup>レ</sup>之券<sup>一</sup>、署<sup>三</sup>大夫之印<sup>二</sup>、大賈等<sup>一</sup>、應<sup>レ</sup>命者、各有<sup>三</sup>抽賞<sup>二</sup>、公<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>此充<sup>レ</sup>其用<sup>一</sup>、遂得<sup>レ</sup>發、先是 輪台召調所<sup>一</sup>・高橋曰、列侯就國 朝家大典、雖然我聞邸中弊衣不補、半菽不補、官庁破壞不蔽風雨、乃公寧可忍然乎、卿等其以我意告之、今公詢<sup>三</sup>之<sup>二</sup>、大夫用人<sup>一</sup>。

皆曰、大賈等以<sup>三</sup>公<sup>二</sup>爲<sup>レ</sup>之故<sup>一</sup>、出<sup>三</sup>金<sup>二</sup>、若<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>此供<sup>三</sup>衣食<sup>二</sup>、食<sup>三</sup>言<sup>二</sup>於衆<sup>一</sup>賈<sup>一</sup>也、恐失<sup>三</sup>人心<sup>二</sup>、乃反<sup>三</sup>命<sup>二</sup>於 老君<sup>一</sup>曰、事已<sup>レ</sup>達<sup>三</sup>于 懸官<sup>二</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>追也、公<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>遂<sup>レ</sup>發、

時升曰、大夫用人以<sup>三</sup>公<sup>二</sup>爲<sup>レ</sup>之金<sup>一</sup>、<sup>一</sup>供<sup>二</sup>邸中費用<sup>一</sup>、爲<sup>レ</sup>食言<sup>レ</sup>可也、約<sup>スルニ</sup>以<sup>三</sup>蔗糖<sup>二</sup>二百萬斤償<sup>レ</sup>之、蔗糖則浪華已<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>約、有司皆知<sup>レ</sup>之、而不<sup>レ</sup>謀<sup>レ</sup>之於浪華、妄<sup>レ</sup>給<sup>レ</sup>之、東賈、當<sup>三</sup>兩地相爭<sup>二</sup>、一、則屬<sup>三</sup>食言<sup>二</sup>、則鄙語所謂<sup>一</sup>、賣<sup>レ</sup>猿買<sup>レ</sup>狙耳、思<sup>レ</sup>此事、諸<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>司<sup>レ</sup>嫌<sup>レ</sup>、輪台近臣困<sup>レ</sup>己之衣食、爲<sup>レ</sup>讚言<sup>一</sup>、託<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>而充<sup>スルニ</sup>己<sup>レ</sup>欲<sup>一</sup>、是以沮<sup>レ</sup>之、夫 輪台、英<sup>一</sup>武、偶有<sup>レ</sup>仁慈<sup>レ</sup>之命<sup>一</sup>、弘<sup>レ</sup>張<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>、以容<sup>レ</sup>諫<sup>レ</sup>、豈不<sup>レ</sup>救<sup>レ</sup>弊<sup>レ</sup>之助<sup>レ</sup>乎、嗚呼國之大事、以<sup>レ</sup>偏執<sup>レ</sup>廢<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>傷矣哉、

公<sup>一</sup>賀<sup>レ</sup>以<sup>三</sup>一橋公之喪事<sup>二</sup>、停<sup>レ</sup>行、以<sup>三</sup>四月十五日<sup>二</sup>發、途過<sup>三</sup>于南都<sup>二</sup>、五月五日<sup>一</sup>至<sup>三</sup>于浪華<sup>二</sup>、先<sup>レ</sup>是糖船四艘<sup>一</sup>至<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>國、是以其用得<sup>レ</sup>弁、余畏<sup>三</sup>公愠<sup>二</sup>、託<sup>レ</sup>病閉居、五月八日公<sup>一</sup>發<sup>三</sup>浪華<sup>二</sup>、

町田大夫後<sup>一</sup>、于 公<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>四日、五月十二日至<sup>三</sup>于浪華<sup>二</sup>、

留<sup>レ</sup>モト七日、略促<sup>ニ</sup>運金<sup>ニ</sup>耳、無<sup>レ</sup>它<sup>也</sup>議、人或告、大夫之留  
專<sup>ニ</sup>於<sup>リ</sup>伺<sup>ニ</sup>察<sup>ス</sup>ルニ余之過失<sup>一</sup>、余曰、自<sup>レ</sup>古賢人君子、無<sup>レ</sup>  
罪<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>誣者何限<sup>シ</sup>、如<sup>ニ</sup>余之不肖<sup>一</sup>、過失固多<sup>シ</sup>、以此得<sup>レ</sup>  
不<sup>レ</sup>省、

余有<sup>ニ</sup>嫡女之變<sup>一</sup>、乞<sup>ニ</sup>休沐<sup>一</sup>、八月八日、見<sup>レ</sup>許乞、此日  
別<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>官命<sup>一</sup>、曰、有<sup>ニ</sup>公命<sup>一</sup>、速<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>國待<sup>レ</sup>之、十  
三日發<sup>レ</sup>行、二十六日歸<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>家<sup>一</sup>、預<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>罪之及<sup>ニ</sup>ソコトヲ、託<sup>レ</sup>病  
不<sup>レ</sup>朝、二十八日有<sup>ニ</sup>官命<sup>一</sup>、罷<sup>レ</sup>朝家居、先<sup>レ</sup>是七月  
二十三日有<sup>ニ</sup>官命<sup>一</sup>、使<sup>レ</sup>朝倉<sup>ヲ</sup>往<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>國上<sup>一</sup>朝倉<sup>ヲ</sup>以<sup>ニ</sup>二十九  
日發、八月二十八日与<sup>レ</sup>余同<sup>レ</sup>罷<sup>レ</sup>朝<sup>ヲ</sup>、余浪華<sup>ニ</sup>シテ得<sup>ニ</sup>  
官命<sup>一</sup>之日、朝倉家人亦命<sup>シテ</sup>往<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>國<sup>一</sup>、家人至<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>府下<sup>一</sup>  
十月四日也、  
九月十九日、又有<sup>ニ</sup>命<sup>一</sup>、朝倉与<sup>レ</sup>余同<sup>レ</sup>免<sup>レ</sup>官禁錮<sup>セラル</sup>、曰、  
在<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>浪華<sup>一</sup>、職事不<sup>レ</sup>弁、因罪焉云、禁錮三月、十二月二  
十日、有<sup>レ</sup>赦、

朝倉与<sup>レ</sup>余退<sup>ニ</sup>浪華<sup>一</sup>也、官以<sup>ニ</sup>東郷半助<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>知邸<sup>一</sup>、以<sup>ニ</sup>田

中善左衛門為<sup>ニ</sup>理財官<sup>一</sup>、各代之、

先<sup>レ</sup>是平野鋪甚<sup>ニ</sup>右衛門者浪華<sup>ノ</sup>姦估也、性輕忽<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>點智  
一、屢往<sup>ニ</sup>来<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>東武<sup>一</sup>、相<sup>ニ</sup>知<sup>ニ</sup>菊地東原<sup>一</sup>、因<sup>レ</sup>賂<sup>ニ</sup>東原<sup>一</sup>、密<sup>ニ</sup>

謁<sup>ニ</sup>輪台<sup>一</sup>、說<sup>ニ</sup>浪華之利害<sup>一</sup>太巧、老君好<sup>ニ</sup>智巧<sup>一</sup>、  
暗<sup>ニ</sup>墮<sup>ニ</sup>其局<sup>一</sup>、屢欲<sup>レ</sup>〔隨〕<sup>ニ</sup>其言<sup>一</sup>革<sup>レ</sup>事、余与<sup>ニ</sup>知邸<sup>一</sup>

每持<sup>レ</sup>論言<sup>ニ</sup>其姦曲<sup>一</sup>、是時甚<sup>ニ</sup>產稍傾<sup>一</sup>、頻<sup>ニ</sup>欲<sup>レ</sup>謀<sup>ニ</sup>我國產<sup>一</sup>  
獲<sup>ニ</sup>其利<sup>一</sup>、種々用<sup>ニ</sup>智巧<sup>一</sup>、進<sup>ニ</sup>其說<sup>一</sup>一日余以<sup>ニ</sup>財事<sup>一</sup>

与<sup>レ</sup>彼會、彼誤<sup>テ</sup>信<sup>シ</sup>余、語<sup>ニ</sup>其密策<sup>一</sup>、余佯<sup>テ</sup>甘言<sup>一</sup>陷<sup>レ</sup>之、  
探<sup>ニ</sup>其突<sup>一</sup>、彼愈入<sup>ニ</sup>我術中<sup>一</sup>、示<sup>ニ</sup>東原之密書<sup>一</sup>、書中大意

在<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>從<sup>ニ</sup>甚<sup>一</sup>之言<sup>一</sup>、行<sup>ニ</sup>其事<sup>一</sup>、拳<sup>テ</sup>我國產<sup>ヲ</sup>与<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>彼<sup>一</sup>、廢<sup>ニ</sup>  
它<sup>ノ</sup>旧債<sup>一</sup>絶<sup>レ</sup>之、余恐<sup>ニ</sup>陽<sup>一</sup>破<sup>レ</sup>之却陷<sup>ニ</sup>彼<sup>一</sup>姦曲<sup>一</sup>、

佯<sup>テ</sup>答<sup>レ</sup>曰、吾素<sup>リ</sup>有<sup>ニ</sup>此志<sup>一</sup>、只<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>之有<sup>ニ</sup>時<sup>一</sup>、子容易<sup>ニ</sup>發<sup>レ</sup>此<sup>一</sup>  
之恐<sup>一</sup>禍、宜謀<sup>ニ</sup>時機<sup>一</sup>俟<sup>ニ</sup>吾起<sup>一</sup>事、返而語<sup>ニ</sup>之朝倉<sup>一</sup>

朝倉即遣<sup>ニ</sup>三書<sup>一</sup>於<sup>ニ</sup>輪台<sup>一</sup>用人及原<sup>一</sup>、言<sup>ニ</sup>甚<sup>一</sup>之產傾<sup>一</sup>姦多<sup>一</sup>其  
言不<sup>レ</sup>可用<sup>一</sup>其事遂<sup>ニ</sup>廢<sup>一</sup>、会<sup>ニ</sup>余朝倉失<sup>レ</sup>旨見<sup>レ</sup>罷<sup>一</sup>、

老君追思<sup>ニ</sup>其策<sup>一</sup>、遂命<sup>シテ</sup>高橋<sup>一</sup>東郷<sup>一</sup>田中<sup>一</sup>行<sup>レ</sup>之、三子会<sup>ニ</sup>  
川上<sup>一</sup>大夫東行<sup>ニ</sup>謀<sup>一</sup>事、大夫留<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>浪華<sup>一</sup>教<sup>レ</sup>旬、甚<sup>ニ</sup>財窮<sup>一</sup>、

術不行、退而請罪、有出雲舖孫兵衛者、姦滑之牙郎也、密察其狀、与平野舖彦兵衛者謀、說之、三子三子是時術窮、無所圖、聞其說、悅而告大夫、大夫大忻命行其事、得塞一時之責、輪台聞之、殊賞三子及大夫、而孫兵衛之術、則因甚之說、更加姦曲奪其利也、此成敗、未可不知焉、  
村上源太者浪華公倉之小吏、長算計之事、子錢家多頼之而心接、是歲七月以官命召于東武經百七十  
余日、無所命、其間朝倉余見罷職、新官行改革之事、事畢率其家屬、移之于國、戊子三月、至于國、更賜〔宅〕地、屬厩署、卒長籍、蓋源太多馴於子錢家、是以畏洩其事、生害也、前者余探得平甚之密策之日、彼大言、如村上等、吾先始去之、余太惡其言、心陰記、彼何者、出此言也、其讚遂成、禍及于吾党、利口覆邦家、可畏哉、余在浪華之日、適得閑、遣遙天滿廟邊、有觀相者見余而告曰、觀子之相、有用之器也、必善信於人

、唯有姦邪、欲中子以罪、宜避之、余曰、謹受教、相者又曰、禍將以今日至、吾有鳴弦之法、為子除凶、余曰、先生之教太厚矣、豈不感、然不、知命、無以為、君子、吾推一擢、擢微官命也、今遭姦邪獲罪、亦命也、詩云、愷悌君子求福不回、吾雖不肖、以武夫、煩巫祝乎遂去、此夕大夫至、不曰羅罪、相者、亦名手哉、

時升云、此役也、國機所繫、故衆人嘖々、有譽者、有毀者、塗說紛々、吾亦何弁、蓋余獲罪、原起于沮、公駕、人旁知之、特余之志、託于此而別有所欲焉、其実、在官有司每安于苟且、不知任務、本、遂々然日長歲晏、國事隨而頽廢、故所說、片語欲達之、君聽、覺知下情、言之達于君聽、無近、公駕之事、是以假之以達言遂達、君上陷罪、雖然、君公因是感悟、出節儉之令、正浮靡之俗、升也豈曰志不、唯恨、在官有司暗於事機、不能、權摘要成大事、一因下

民一、起念誠、不使君意達于下、是何無人于國、嗚呼其真無人欤、在於不用焉耳矣、

東行錄下終

宋哲宗時、右正言鄒浩劾章惇不忠慢上之罪、未報而劉后立、浩上疏言、賢妃與孟后爭寵而孟后廢、今乃立之、殊累聖德、乞追停冊、禮章諆其狂妄、遂竄于新州、初陽翟田畫

議論慷慨、與浩以氣節相激厲、及劉后立、畫謂人曰、志

完鄒浩字、不言可以絕交矣、浩既得罪、畫迎諸途、浩出涕、畫

正色責之曰、使志完、隱默官京師、遇寒疾、不汗五日死矣、豈

獨嶺外能嶺海之外能死人哉、願君母以此舉自滿、士所當行也

為者未止此也、浩茫然自失、謝曰、君贈我厚矣、浩之將論

事也、以告其友宗正寺主簿王回、曰、事有大於此者一乎、

不雖有親然移孝為忠、亦太夫人之素志也、時升云、宋

唯以道學衰弱也、氣節之士如此快恢者、獨多矣、及

余之罷誰一言及于此者、噫世之汗至于此哉、

## 九郎物語 上

## 九郎物語一之巻

浪華の旅の舎⑧く⑨〔に〕、一日心知れる人々打屯ひて、むかし今の事とも物語りけるに、其比の吾名を次郎九郎と呼けるか、一人の客人言出しけるは、世に九郎と名を呼人かならず苦勞多しとかや、理りなる〔かな〕、九郎の文字苦勞と音を通して自ら招く事、其理なきにあらず、御名を換へ給へかして、誰彼れと指を折、九郎と号る人をかぞへみるに、実にや源九郎義経公を始めて、今の世の人も多く苦勞奔走する人こそ多かり

けれ、又一人の言けるハ、そも其理にもよら〔さ〕るにや、今時浪華第一の素封といふて、人も羨む鴻池の巨商ハ、家の嫡子を代々善九郎と呼〔な〕る、是等何の苦勞かあるべきといふに、又一人かいふ、夫こそ苦勞の巨魁なれ、彼鴻池か家法ハ、息子の家を継べきおのこ子の生れたるにハ、何事も召仕〔に〕丁稚と業を同じて、朝起れハ直に其家〔帳〕場といふて売買の指揮する所に出、座席の洒掃より茶・煙草盆を清め、其家分家の古老共出来れば、茶を汲、煙草盆を出し、万の給仕丁稚と異なる事なし、其事終りて又おのれか物よみ手習ふ業を勤め、暫時も遊業の安逸なきを代々の教と〔す〕、幼少より如此なれば、長ずるに随ひ諸藩へ出入の勤仕も父と同じく〔鞍旋〕して、却て貧家の子弟にハ勝〔り〕て苦勞多かめれといふにぞ、さあれハ九郎は何れ苦勞する名なるにや、吾家高祖忠増の幼名を次郎九郎と唱してよりして、已に七代を經、代々幼名は同じく名なるが、実に一人も苦勞せざる人なし、

名の唱へにやあらんと言あへる、折しも、巨商高木氏  
 が管家に平兵衛といへる滑稽なる男の在しが進ミ出て  
 人々の九郎の名を忌給ふ〔こそ〕<sup>⑧ハ</sup> 僻事なれ、あるしの  
 君の高祖以来代々苦勞し給ふ〔こそ〕<sup>⑧ハ</sup> いと目出度事に  
 て、さる故に〔二〕<sup>⑧三</sup> 百年の今迄家を保ち同し九郎を能  
 く伝へ給ふなれ、もし苦勞なく安逸にのミ座しまさハ、  
 御子孫賢明とても其間に膏梁子弟の家を破らせ給ふ事  
 もなかるへきや、されば鴻池もさる事を思ふかゆへに、  
 家法厳格に丁稚の業までも習わせて、放惰に陥ぬやう  
 に制を建たるなれ、あるしの君の御家法暗に其事に協  
 ぐたる、いと目出度事ならずやといふ〔まで〕<sup>⑧ニハ</sup>、余手  
 を拍て、子か此一言誠に吾家永世の守りとなるべき庭  
 訓なれ、今より此言を記し置、世々の守り神となすへ  
 して謝しければ、一座の人も皆其事を感服せり、其席  
 〔終〕<sup>⑧給</sup>りて熟〔々〕<sup>⑧ク</sup>と是を思ふに、平兵衛は一時の滑  
 稽に言出しける言葉なれとも、実に是〔こそ〕<sup>⑧ハ</sup>我家永  
 世の訓戒となるへけれといたく感したる余りに、高祖

鐵翁忠増の君のさまく苦勞まし〔く〕<sup>⑧ク</sup>ける事より  
 して、世々の人々苦勞有ける家の口碑聞伝るまゝを書  
 つらね、次に此時升が世に珍敷苦勞したる事を記し置  
 て子孫の警戒となさばやと、筆を起して九郎物語とハ  
 号るものならし、

一我家高祖鐵翁君と謚せし御方ハ、諱ハ忠増幼名次郎九  
 郎、後に左京亮と改め、又弥太右衛門と稱し給へり、  
 世に著〔き〕<sup>⑧レ</sup>新納武藏守忠元君の次男にて、母君ハ種  
 子嶋修理亮時興といへる人の女也、此御〔服〕<sup>⑧服</sup>に一人  
 の女、二人の男子お〔ハ〕<sup>⑧イ</sup>したり、女子ハ有川雅樂介  
 貞世の室とならせ給ひ、二人の男子を産給ふ、是も世  
 に名高き伊勢平左衛門貞、兵部少輔貞昌の兄弟なり、  
 次を刑部太〔夫〕<sup>⑧輔</sup>忠亮、幼名ハ次郎四郎、父君に劣ら  
 ぬ剛勇無双の猛将なりしが、天正十一年六月肥前嶋原  
 の城主有馬修理〔太〕<sup>⑧ハ</sup>夫入道仙岩、龍造寺隆信にせま  
 られ、救を吾藩に乞れしとき、救の大將に撰まれ、川  
 上左京亮〔久〕<sup>⑧志</sup>賢と彼地に赴き給ひしに、肥前深江の

城にて戦死〔あ〕り、其時の勇戦比類なき事ハ世の人  
遍く知る所なれば記さす、年ハ三十二にならせ給ひし  
といへり、其次忠増の君、是も壮年よりけやけき武勇  
座して、就中世にいふ嶋原にて島津中務太輔家久君の  
龍造寺を破〔り〕給りしとき、父忠元の君と大口の人  
数を具して向ひ給〔り〕しに、家久の御子忠豊の君其  
時は又七郎とて年拾四にならせ給ふを、一方の大將に  
向られしに、後見の為に忠元を差添給ふ、忠元大口の  
人数は忠増に預られ、我身ハ忠豊の側に付副給ふ、さ  
れば戦の場に臨て忠増衆に擢て戦ひを励ミ、即其日の  
太刀始にて肥前の兵を切崩し給ふ、従軍に白坂駿河と  
いふ者はに従ひ戦功あり、其日肥前にて有名の〔士〕  
六人の首を獲、切〔数〕ハ数を知らすとなん、其戦場  
〔に〕札を建、武藏戦場〔若し〕疑ふ人あらば承らん  
と書たれとも、誰指点する人もなかりしとや、斯はか  
り烈敷戦にて、忠元の勇名益耀きけるが、其日忠元の  
手の働きハ皆忠増の勲切なり、其日の形勢想像るべし、

其外諸所の勲功ありつらんか、中比家の記録散〔妖〕  
して伝らんこそ遺憾なれ、

一天正十五年

豊太閤九州征伐の時、泰山〔卯〕を推〔す〕勢にて、  
我国の御安危此一挙にあれば、国中の上下皆肝を潰し  
汗を握らんハなかりしに、特忠元の君大口の城に楯籠  
り、数万の上方勢を兎戯のやうに見〔降〕し、天地分  
決の一戦を意匠ありしに早く和〔義〕調ひ  
君公川内泰平寺にして

太閤へ謁見あり、因て忠元も大口を〔降〕りて、  
殿下に拜謁の事を命せらるゝに、忠元大に憤り給ひ  
今上方勢長途を来り、師疲れ其上兵糧に困したる事吾  
明らかにはを知る、一戦に打碎事胸中にあり、然るを  
おめくと和議に至るは、上方衆に吾国〔人〕ならしめ  
笑わん、是非一戦に決すべしとて、態と兵糧米一俵  
を細川幽斎の陣江もたせ遣ハし、伝聞、上方〔衆〕兵  
糧に乏しと、是を食し鋭気を養れ、決戦を遂給へと言

送られける、上方勢も舌を巻て其勇武を畏れたりと、

按するに、此兵糧米を贈られしハ、即戦書にて其中に糧米の尽たるを此方に能く察知したる勢を知らしめ、上方衆の肝をとりひしく智計、誠に智勇の妙計

なるに、此事の行われさるいとく無念なる事也、

然るに又々

君公より和議の事已ニ御約諾あり、已ニ御寵愛の御娘龜寿の君一後に持明彰密庵主と申奉る、興国寺殿人質に出させ給ふに、忠元一戦

をなさば御娘子を撫殺しにするなり、さすれば

君上へ不忠をなす道理なりと稠敷命せられしゆへ、忠

元も不忠といへる御言葉に屈せられ、無是非下城し曾

木天堂ヶ尾にして

太閤に拜謁あり、

太閤深く其勇武を感せられ、手自道服・偃月刀を賜り

ぬ、其事の始末ハ世に記録も多ければ、今贅ハ「す」る

に及ハねとも、或説に、

太閤其勇武を感じ給ふに、いかなる顔貌の者か見まほ

しく思召けれとも、一向に平伏して頭を拳給ハぬ故、

御手自道服を賜らは、頭をもたくべしと思して下されけれとも、平伏して押戴き頭を拳▽られず、故に又々偃

月刀を下し賜ひしかとも同じく頭を拳△給ハず、御側にありし細川幽齋幽齋其機をや察し給ひけん、忠元は取

敢ず、口のあたりに鈴虫ト「ぞ」なく、と言懸給ひぬ、

忠元は兼て上髭のありける故に、かくは詠せられし也、

忠元其時御座を少し引すさり、頭を拳トけ、上髭をちん

ちろりんとひねりあげ、と答られければ、時に取ての

風流感ぜぬ人ハなかりけり、

此道服の事を近比今の久仰君職原家伊木七郎右衛門

なる人に問せられしに、七郎右衛門一覽して、絹地

は小柳ト「と」いへるものにて、堂上の御方々装束の

裾に用ひらるゝ物のよし、扱又道服は三位以上燕居

の服にて、位三位に至らざる人は堂上といふても服

し給ふ事ハ成難きものよし也、斯「斯」る貴き物を

賜りしハ

太閤一入勇武を感称の処おもわるゝなり、

扱、太閤は天堂ヶ尾より羽月の藪田を経て、肥後路に懸らせ給ふに、忠元御見送りの為出られ、遙に遠く叩へられしを

太閤御駕を駐め給ひ、武藏々々と呼せ給ひけれへ、馳出 御駕の前に躊躇ありしに、又々御手自陣扇子を下し賜ひぬ、

此陣扇子の要に付たる真紅の紐の〔結〕やうを伊木の翁深く感心あり、今の世の真紅に大房を付る事は、近代の俗風にて、古へ〔さ〕やうの物に大房付る事ハなかりしと見ゆ、然れとも、か〔よ〕うの製を〔自〕

〔ら〕にも纒ニツ見しと語られしとなり、

一太閤都に帰ら〔れ〕給ふに、質人之事を命せられ、

君公よりは、又一郎久保の君、御娘子龜壽君の君、伊集院右衛門太夫忠棟質として都へ赴れしに、忠元も同じやうに質を命せられしにより、次子忠増を質として洛にのほし給ひ、四年を経しかとも、忠元の武勇を

深く畏れ給ふゆへに、質の事を許し給はず、四年の後、忠元の御孫次郎兵衛忠光のか〔へ〕り給ひて、忠増帰郷を得たまへり、

一文祿元年壬辰には朝鮮征伐の御事ありて、国々の大小名夫々の軍賦あるに、忠元の君も〔他〕の列侯に均しく軍賦〔を〕命せられぬ、然れとも忠元老給ふ故、忠増父に代りて渡海あり、此朝鮮陣中〔は〕家に伝ふる忠増自筆の日記あれば、委しく記すにも及ばず、然るに忠増老父の代りに渡海ありし事へ、家の記録もくハしからず、〔他〕の譜乘にも見ぬゆへ、只供奉の人数とのミ思ひしに、近比時升嫡家の文書を読せしに、細川忠〔興〕より忠元に贈られし書簡に來春は朝鮮入之御催ふしあり、さあれは御賢息も其人数なるべしと言送られたり、忠〔興〕は列侯の尊き方なるに、其書面に言送られしへ、畢竟忠元之武勇を

太閤も深く〔畏〕れ給ふ故、朝鮮陣中〔跡〕に残らるゝを疑念ありて、渡海の人數に命せられしなれ共、老

年にて辞し給〔ひ〕<sup>⑧へは</sup>、其代りに人質にも出し〔置かれ〕<sup>⑧至ラ</sup>  
し忠増を祗役させらるゝ事、

太閤の御耳にも達したる故に、忠興も仄聞<sup>⑧ツ</sup>て言送ら  
れしならんか、是こそ忠元代勤の確徴にやなるべきと  
物知れる人に質問し〔た〕<sup>⑧至</sup>るに、皆人さる事なるべし  
と聞多し〔ならん〕<sup>⑧なり</sup>さはかりの事にや、朝鮮<sup>⑧韓</sup>く中  
惟新公御父子の御いつくし<sup>⑧也</sup>它の人とかはりて厚く、

毎度朝鮮より父忠元江賜せらるゝ御文の中に、忠増の  
消息を聞せられん事なく、いと浅からぬ御事な〔り〕<sup>⑧キレ</sup>、  
彼地にて左京亮を改め、弥太右衛門尉と名乗らせ給ふ、  
是も<sup>⑧御</sup>いとをし<sup>⑧御</sup>厚き故

君公より賜りしと言伝へたり、  
一高麗に二年経給ひし時、痔の痛<sup>⑧</sup>甚しく彼地には然る  
へき医師もなければとて、辱〔も〕<sup>⑧く</sup>

君公の仰を受け、文祿三年 月といふに国に帰り給ひ  
しか、程なくい〔た〕<sup>⑧室</sup>つきも〔癒〕<sup>⑧癒</sup>させ給ひて、同四  
年再ひ朝鮮に渡り給ひぬ、其時ハ

惟新公も

太閤の命にて御帰朝の事あり、再ひ

御渡海ありし其御供に候せられし事、淵邊量右衛門筆  
記にみへたり、夫よりして泗川の大戦にも痛く武勇を  
あらハし給ひ、其後番船破りの時も勇略を施されしと  
いふ、其間の苦勞いかばかりか〔おはしましけぬ〕<sup>⑧望しけぬ</sup>想  
像にも〔すさま〕<sup>⑧冷</sup>しくこそあれ、

一高麗より帰朝にハ、国々の列侯皆伏見なる

太閤薨去の地に封き給へは、

惟新公も同じく彼地に〔到〕<sup>⑧列</sup>らせ給ふゆへ、忠増も供

奉なりしか、程なく關ヶ原の一乱起りて西軍伏見の城  
を攻られし時、忠増仕寄奉行にて攻口〔近〕<sup>⑧迫</sup>く出張指

揮ありしに、它の陣より弥太々々城内より敵出ると呼  
人あり、是を聞ひて備をなし、手痛き戦をなし給ひし

よし、井尻某か筆記に記し置〔ぬ〕<sup>⑧為</sup>、其呼ハリし人は  
誰にや有け〔ん〕<sup>⑧ぬ</sup>、伏見に寄せられしハ慶長五年七月

十九日の事にて、落城は八月朔日<sup>⑧也</sup>く、

一夫より

我公も美濃の様に御進発にて、須俣川に御陣取なりしに、石田・小西の衆路久の渡りといへる所に大垣より出張

我公を招きて軍議あり、

我公ハ従兵を須俣に残し置、忠増に入來院又六・川上久右衛門・喜入攝津守其外十人計召具せられ、兩將〔と〕御評〔義〕なりしに、關東勢岐阜の城を攻落し路久の渡りに押寄せ來り、石田の人数と梅野といへる所にて一戦有しに、石田手の者三百人はかり關東方に打取られしと聞えしかは、石田大に畏れをなし、暫く鋒を避けて大垣のやうに引ぬといわれしを、

我公ハ従兵を須之俣〔江〕残したれば、是を繰退にせ〔さ〕れハ自らも退く事なりかたしとの給ふを、石田心臆して直に大垣江引くべき気色なる所、忠増・川上久右衛門兩人石田の轡を執へ、兵庫頭爰へはまられ〔候〕に、未練〔被〕成ましくと叱りたり、然れとも石田兎

や角して馬を引立遂に大垣に退かれぬ、其時二人の勇壯、さこそと聞くも冷しけれ、其後

我公は須之俣の人数を円め、大垣の様に〔引〕せ給ひぬ、

一關東勢大垣にハ押へを置いて、京師の方に向ふと聞えしかは、石田大に驚ろき九月十四日の夜、諸勢を俄ニ発して南宮山の下を通り關ヶ原に向はしめ給ふ、さありて關ヶ原戦の半筑前中納言秀秋の卿反心ありて上方勢利を失ひ、石田・小西を打破りし關東勢、我公の御手を取巻たり、其時阿多長壽院盛淳

公の御命に代り戦死あり、此時戦ひ已にかう〔よ〕と見えし時、我手の衆

公の御前に集り如何ハなさるべきと評議ある所、盛淳大音を上げ、此場に至り何事をか議せらるべき、戦の志あらん人は盛淳に付給へと呼はるゝ声の下より、忠増中々と答給ふ、其猛勢さこそと目に見るやうなれ、此一言に激せられ、嶋津下野守・毛利覺右衛門など踏

留りて敵に当りぬ、盛淳ハ初め

公の召させられたる、

太閤拜領の金にて鳳皇を縫箔したる御陣〔羽〕織を〔着替〕給ひしが、其御服に石田より

公に贈り奉りし金の唐団扇を取て、嶋津兵庫頭義弘死〔狂〕なりと名乗り刀を抜給へは、忠増も同しく刀を抜て敵に当り給ふ、其刀こそ我家今に伝へたる備前友成の刀にてこそありけれ、

一 盛淳戦死の其間に、

公は伊勢路にかゝりて退せらるゝに、忠増は跡に残り敵に当られしに、兎角して乱軍を切抜け、主従七人攝州大坂まで出給ひけれとも、關東方落人を捜し索むる事甚しきゆへ、ある商家に走り入て舎り〔を〕乞給ふに、あるし父子憐ミを加へ、其家ハ一向宗門徒なりしか、七人を仏壇の下に隠し数日かくまいおき。扱其子彦右衛門といへるハ、年比綿を商ひ日州に往来しけるが、櫃七竿を拵へ七人を其下ニ入、上に綿を覆ひ、

船に乗せ日州耳津まで送りしかは、恙なく家に帰られ、

老たる父母にも再ひ面を合せ給ひぬ、実にも簡程の苦勞せる人ハ世に稀なるべし、夫よりして世も治り、静に父母の養ひをも尽し給ハぬに、幾程なく慶長九年甲辰五月七日といふに父母に先たちて世を去給ひぬ、嫡家の菩提所大口泉徳寺に葬り石塔今にあり、法号ハ鐵翁盛關居士と申奉る、隅州帖佐山田地頭職に補せられしといへとも年月詳ならず、時升云山田地頭之考別冊系図拾遺ニ記ス

一 此彦右衛門事に付て、我か家あやしき事こそあれされは

彼大厄を免れ給ふ事も、日州迄彦右衛門送り奉りし故なれハ、再生の大恩なるゆへ、此方へ伴ひ越して幾く思の地行をも与へ、然るべきさまに取立得させぬとて、召具し来給ふ途中にて、家隸とも相談しけるは、主君纒の祿を分ち給ハんに、我一家如何して妻子を育むへき、よしや殺して後の邪魔を除くへしとて、小林村嘉例川といへる所まで来り止宿せし夜、熟寝を伺ひ、家隸鮫嶋某といふ者陰に是を刺殺しぬ、忠増是〔を〕聞

給ひていたく悲しミもたへ給ひけれとも及ふべきならねば、其所に埋ミ置、家に帰りて是を氏の神に崇め祭り給ひけるが、故郷の父母妻ハ、さこそ彦右衛門ハ恩賞を得、我か身も其報を得べしと待ちしに、おもひの外殺害に逢ひし事を洩れ聞、大に恚ミ憤ふり、一向宗にて人をす呪阻る方に逆川といふ事ありて、仏を倒にして川を引のほり呪阻調伏を祈る法ありけるを、三人其法を行ひ、新納の子孫七代絶へしと祈願して断食して死したりけり、一説に、彦右衛門召具した〔る〕おのこ其所を逃出家に帰りて告けたるといへり、其怨靈、甚敷部類眷屬に祟りをなし、〔さ〕まの怪事多かりけるに、嫡家の家隸に内村修〔理〕院といへる山伏あり、其者の祖は即ち内村軍右衛門といふて、忠増從者の長として關ヶ原の役にも供して旅中の事を管り、即ち櫃の内に匿れし六人の中也けり、其由縁にやありけぬ、此山伏〔さ〕まの祈禱しけるが、〔始め〕ハ一向靈を願さず、修善いよの心肝を砕き祈りけるに、

終に其靈あらはれ、日州耳津に彦右衛門所持の〔本〕尊あり、是を祭り其上に阿弥陀と観音を勧請し祭らは、〔惡〕靈穩なるべしと告あり、修善院〔耳〕津に到りて尋問に、果して正覚寺といへる寺に本〔尊〕を預〔置〕たるあり、因て是〔を〕祭り、又告の如く阿弥陀観音の像を大口木ノ氏村嫡家の持仏堂に勧請して今にあり、修善か子孫代々其祭りをなす、修善か後を今良賢坊といへり、夫より吾家には、彦右衛門正忌十一月十二日に御供神酒を設〔て〕、親族集り毎年仏事をなす、忠増の〔婦〕女ハ鳴津下野守久元の室なるか、彼方にも其祟りあり、忠増嫡子ハ、加賀守忠清嫡家を継れしに、是も同しく祟りあるゆへ、嫡家より、福昌寺中深固院、久元の家〔宮〕之城ハ、同寺の中龍護院に墓石を建て祭りを修せられしなり、又按るに、修善院か祈禱して靈のあらはれし〔ハ〕貞享四年五月七日とあり、其年忠増君の孫主計久行の隠れ給ひ、其子時春の君〔い〕また、十四歳の時也、此時件の祭事をなしたれば、い

かさまにも久行死去の時妖怪の事もありしが、又家に安置の四霊の牌に貞享四年五月七日と記したるも、此五月七日ハ忠増君隠れ給ひし其忌日なれハ、是も又其由縁あるべく〔おもむるれとも〕〔おもむるれとも〕其故遂に知るべからず、修善婦りし後、嫡家家隸の内より毎年代〔参〕を被越たれとも、近年は五六年に一度〔も〕代〔参〕の事にハなりし也、彼木の氏〔神〕仏堂の二像は、時升〔参〕詣〔せし〕とき段々破壊せしを仏〔工〕大塔正藏に命して修理を加へ納め置きし也、

一此彦右衛門及父母妻の恨ミは実に深かるべき也、縦さやうの冤事なくとも、急事の死亡を救ひしもの、世々祭りをもなすべき事なるに、まして家隸共恩を仇にて報し虎狼もしかさる振舞、天地の悪ミも受べき事也、高祖ハ流石勇武に仁心を兼たる御方なれハ、其時悔おもハせ給ひし事〔ハ〕嘸かしと思へるハなれ、高祖ハ仁心の見多たるハ、我が家の日記に、肥後の途中にて〔吾〕父の忠元君九州より帰〔陣〕に船に乗〔せ参〕ら

せしといふ男に行逢ひ、往昔の事思ひ出られ脇〔指〕を一腰とらせ遣したりと〔帰〕り、仮初の船渡しにさへ斯情深く振舞給ふに、まして吾命を助けたる者に酬〔給〕はん御志押計らる〔る〕、されハ〔斯〕る御仁心をハ上天もしるしめしけ〔れハ〕、四霊の七代は絶べしと誓し程の悪念障礙をなせしも、家は恙なく続きて今に及びしは、忠増の邪なき御志の陰徳なるべし、然れ共四霊の怨霊も畏るべきハ、高祖君より別れし男女の末養子ならざるハなし、不肖時升七代に当りて男子なく、ひとりの女子には它姓を養ひ家を継かせ、又嫡家も忠清の血脈今までハ残りしに、今の久仰君外孫より家を継給へども是も它姓也、其外女の它江嫁したるも皆養子あり、一念の悪気さも有るべき事なれハ、深く此事をおもふて、文政〔三〕年四霊の碑を珪樹院に建立し、福昌寺〔此時迄ハ南林寺御往職なり〕代俗州和尚を請して、大施餓鬼の法を修して靈を宥め崇めて信心を〔擬〕しぬ、此事子孫世々忘ましき事也、

一 忠増の君二女二男あり、嫡女は島津下野守久元の室にて、凶書頭久通、中務久茂の母堂なり、此時

(島津義弘) 惟新公の公女於下の君と申せしが、伊集院源次郎忠眞

の室とならせ給ひし〔が〕(給)、忠眞滅亡の後、寡にて渡

らせ給ひしを、然るべき方にかしつき〔参〕(参)らせ度

君公もおほしけれども、似合しき御方もなかりしが、

野州の方へ如何と評議ありけれども、已に室あ〔る〕(る)

故に黙止〔さ〕(御)れしを、室家何となく洩聞〔給〕(給)ひ、夫こ

そ目出度御事なれ、疾にも其事を聞たらましかは、い

かて斯ては有べきとて、野州の領所祁答院箕の下とい

へる所に別荘をしつらひ退居しておハせしかは、於下

の君は目出度野州の家に入らせ給ぬ、其事〔を〕(モ)世〔上〕

に伝へ〔て〕(ン)、当代の賢女也と称美しけるとなん、後

には次男中務君の方に養れしにや、彼家の古老の伝に、

(吉) 芳野実方に中務君の別荘ありしが其所に栖せ給ひしと

かや、寛文十二年五月十日八十八歳にて終らせ給ふ、

福昌寺中龍護院に葬〔奉〕(ナ)り、法号ハ泰清轉雲大姉と

唱〔奉〕(ナ)りぬ、

一 其次〔に〕(モ)又女子にて、上井市正兼通の妻となり、是

も八十四歳にて終り給ふ、法号ハ喜雲昌慶大姉と申也、

一次を忠清の君、幼名安萬丸、次郎四郎後加賀守とあら

ため給ふ、伯父刑部太輔忠堯の君肥前深江にて戦死あ

り、其子次郎兵衛忠光も父に劣らぬ人傑にて、我祖

忠増の君に代り、京師の人質に在京ありしか、其後細

川幽齋〔老〕(老)九州検地の時は、接応の役にて功勞あり

しに、是も世を早くし給ひ、忠清嫡家を相続し祖父忠

元の君の御跡〔に〕(ト)ハ成給〔ひ〕(ヒ)ぬ、父祖に少しも劣ら

ぬ勇敢無双の方にて、種々の事ハ嫡家の譜に委しけれ

は、爰に贅するに〔及〕(ハ)ず、

祖父忠元君の跡を継て大口の地頭にておハせしか、寛

永<sup>(十四)</sup>年肥前嶋原に耶蘇宗門の起りし時、忠清大口の士

を引列出陣ありしが、月日落城之時、城の一番乗

にて手の下に数人を切伏せ軍功比類なかりし、然れ共

其時先を争ひ抜〔懸〕(懸)にて城乗ありし故、帰陣の時軍

令を破られし御咎ありて遠寺蟄居の事あり、其時税所  
一和といへる人に送られし書牘あり、其文中に、此度  
の役こそ地は嶋原なれ伯父忠堯〔は〕戦死あり、父の  
忠増ハ隆信最後の軍に太刀始なり、今度の出陣三代目  
に当りて軍功なくハ、伯父親に對して泉下に面を向く  
べきやうなしと一〔筋〕におもひ込敵に向ひしに、弓  
矢神の冥加か祖父忠元の加護にや、本意の如く軍功を  
遂げ、此節の御咎こそ死したる伯父・父に面目となる  
証拠也、と一入忻の意気文面にあらハれ、流石忠元の  
君の御孫なれと勇〔々〕敷書牘なり、此一和の子孫に  
伝てあ〔り〕しを、今は嫡家にもらひ受給ひて文書の  
内にあり、

一 忠清の君其後某々に転職あり、大坂にも在勤ありしと  
〔見〕ゆ、此代に大口より府下に移り、今に至りて綿  
々として家の退転なき、武州公の御勲はさる事ながら、  
忠清の功勞も少からすとそ覺ゆれ、

一次を左京久連、我家二代目の家督なり、幼名は次郎九

郎 光久公にく仕へて御荷役と言職を命せられ、隅州  
始羅郡山田の地頭〔職〕なり、御荷役と〔い〕へるハ、  
今御納戸奉行と唱ふる職な〔り〕とそ、相役は伊勢兵  
部某といふ事あれとも委しき事伝わら〔ず〕、地頭  
事ハ種々の文書にも見得たれども、其余の事諸家の記  
録を失ふて伝はらんぐいと恨なる事なり、此代に大口  
を去て府下に移り給ひしと見得たれど、死去の時は  
大口にて終り給ひしとみえたり、然るに口碑伝〔説〕  
いろ／＼失て、我等幼少まで今府下興国寺に夫婦の御  
墓のあるを、遺骸の取りし所とのミおもひたるに、文  
政十三年今の久仰君家を継せ給ひて、初て木〔之〕氏之領  
所に越させ給ひし時、時升も〔伴〕ひ給ひ菩提所泉徳  
寺の廟所にも詣給ひしか、〔久〕仰君は物事精しく心  
を用給ふゆへ、古墳の苔に埋れしを都て洗ひおとして  
文字姓名を糾給ふに、其中に月珊良秋居士といへる墓  
石あり、則左〔京〕久連君の法号なれハ、爰にこそ遺  
骸は納り給ひけ〔る〕に、其事伝らず詣る事も怠りし

へいと〔無〕念なる事也、吾父の實道君は、さはかり  
 古墓の癖のおへして、它の家祖先の墳墓の知れかたき  
 をも指し教給ひし事度々なりに、此事をしろしめさ  
 ぬこそく<sup>あやし</sup>けれ、此度古墓のあらへれしに依て、興国寺  
 過去帳を捜し見るに、是には正徳二年七月廿八日と記  
 し夫婦のひとつに合したり、正徳二年は四代時春の君  
 五拾余歳の時に当れへ、其時祖父母の墓大口にありて  
 時々洒掃も難きゆへ、招魂の石を興国寺に建られしを、  
 過去帳には其年月を記したるなれ、久仰君の精微な  
 りせは、大口の古墓ハ朽埋るべきに、いと畏れいまし  
 むべき事なり、又吾家の位牌には月山とあり、珊山と  
 音の通したる故に誤りたるか、何れか証と定めかたし、  
 一久連の嫡女、鹿嶋伝右衛門通國の妻と成給ふ、元和五  
 年の生れにて延宝六年六十歳にて終給ふ、法号は華山  
 心月大姉と申す、  
 一三代久行の君、幼名は龜鶴丸、後に主計と改給ふ、此  
 御方はいかなる人といふ事詳かならず、唯父祖の物語

りに、此君はいと優長の質にて世路の交りも疎かりし  
 故、圖書頭久通の君とは従弟の親なるゆへ、彼別業  
 に吉野の地に隠逸の体にておわせしと、〔さ〕<sup>御</sup>れは、  
 吾か家高麗日記の末巻の遺亡せしも此御時と見え、又  
 一説にハ元祖の帶し給へ〔る〕<sup>へ</sup>友成の刀と此日記を久  
 通の方に預り置給〔ふ〕<sup>ひ</sup>しとも言は、家政にも疎くや  
 おわしけん、〔扱〕<sup>物</sup>こそ平兵衛か言し苦勞のなき御方  
 にてかくやおおしけぬ、  
 一主計君の妹、新納仲左衛門久榮の妻、寛永十七年生れ  
 寛文十二年に終り給ふ、年三十三、法号ハ壽嶽妙長大  
 姉となん、  
 一主計君一女三男あり、長女は兒玉金左衛門實貞の妻と  
 なり給ひしか、世を早くして二十九<sup>歳</sup>にて終り給ふ、  
 法号は元乗妙宗大姉と唱、  
 一其次時春の君、幼名次郎九郎後市太夫、〔又〕<sup>二</sup>悠右衛  
 門と改め給ふ<sup>寛永十一年辛亥三月十八日之誕生</sup>、此人こそ我家中興の功あ  
 り、始めハ父の君と同じく吉野に蟄居しておわせしか、

さるべき其器や聞へけ〔ん〕、貞享元年甲子冬十四歳の時〔寛澤光久〕〔院様〕に召出され近侍に召仕れしが、同三年父の久行死去なりしに、同四年江戸〔し〕にて父之家督を命せられ、同五年戊辰二月二十三日田禄二百石余、宅地を大龍寺の近辺に賜〔り〕、いたく御寵遇を加くさせ給ひぬ、其宅地は今重富公子の邸の裏門のある辺といへり、〔其年〕二月二十八日、高輪の後亭にて〔光〕久公〔網〕貴公の二君へ御膳を進上にて、田禄宅地拝領之事を謝し〔奉〕り給ひぬ、

二君は言ふにおよはず 御夫人 公女方まで御一席にて甚た饗応せさせ給ひ、夜深更に及びけ〔ける〕其時、御細工能数番を命せられ舞曲せし〔と〕手録の小冊に記しおかれしが、其御細工能といへるものいかなる物やらぬ、今の人知る者少し、其後近侍に有て東都の、朝覲御往来 公駕にハ従われしが、正徳四年の春〔徳〕之嶋代官を命せられ渡嶋し給ひしに、此時四十五歳にやならせ給けん、

▽御細工能の事、世に知る人も少く、又記録等に見当る事もなかりしか、嘉永五年の比徳之嶋播遷の時、彼地にて時之配古仲といへる者の系図を閲せしに、元禄七年甲戌徳之嶋〔井〕の川与人古仲就御祝儀上国被仰付、七月二十二日於敷舞台ニ於て少将綱貴公江、御目見、同二十三日於御下屋敷中将光久公・吉貴公江〔進〕上物さし上、翌二十四日於御下屋敷御細工能拜見被仰付、昼々に御料理被下、大殿様御目通にて御菓子頂戴仕候とあり、然れば其比三嶋与人などに拜見被仰付なれば、専ら其比行れし物なるべし、猶旧記を探索すべし、

近比、木村静隠翁談話の浦波とい〔へ〕る書を閲せしに、其内に、寛陽院様磯御茶屋にて吉野の狩人共を十人計櫻嶋の〔蛸〕釣〔鮎〕の者十人計被招呼、色々御尋の事抔ありしに狩の事を御尋の時は釣師共ハ口を嚙ミ、釣の事を御尋の時は狩師共言葉〔無〕之、其時、御前大に御一興にて、古語に狩師問山、漁〔文〕夫

〔答〕海と即是なりと御笑遊へされし、其比ハ〔度々〕<sup>◎渡ニ</sup>

右やうの事度々為有之と野元一之右衛門咄の由、靜

隱翁語られしと、野元は定御供にて御細工能の歌う

たひなりと記し有之、<sup>△</sup>

一徳之嶋の任を終て帰らせ給ひ、程なく御細工奉行を〔被<sup>◎命</sup>

命〕給ふ、〔此〕年享保二年丁酉四月なり、同年九月

又々御厩別当職に移り給ひ、是歳東武在勤の同僚海老

原正藏病に依て交代を〔願〕ふにより、東武抵役の命

あり、彼地に赴給ひ、是よりして東武の往来有しか、

同十一年丙午の七月〔武東〕におひて御使番に転職あ

り、然るに同十三年戊申十月御守殿添御用達といへる

職を命せられ給ひぬ、〔さ〕れは此職は今般

幕下の公女

竹姫君吾藩江

御入輿の事あり、此

公女実はかけまくもかたしけなくも

禁〔廷〕より

將軍家江下降ありしに

將軍家かくれさせ給ひけれハ

懸官の評〔議〕ありて

前大樹綱吉公の御養女と称して吾藩へ入らせ給ひぬ、

斯〔て〕やん事なき御方なれハ、

おふやけの御もてなし并々の御事ならず、吾藩にても

夫〔より〕応してかしつき御もてなしありけれハ、い

と々尊くいかれし〔く〕御事なりけり、斯りけれハ、

其方さまの侍衛の職を命せらるゝに、あらかしめ其人

を撰はるゝ事尤精ハしく、第一

大城の諸有司にも応对接伴の事多けれハ、此職を任せ

らるゝ人、辞令時機にも煉熟して君命を辱さらむ人誰

なるべきと、皆人批評しける処に時春の君に命下りけ

れハ、人〔々〕屈〔服〕して羨ミおもふ人も多かりけ〔る〕、

兼〔る〕人望も帰し居る材器お〔ハ〕しければ、さも

あ〔り〕つ〔る〕なるべし、果して其職にかなひて、

公女の入らせ給ひて後宮の行事も多端なるに、皆人懷

き尊ミミテ間然ス〔た〕る人なかりしとなり、其職御守殿  
 派御用達と名付られ、位階は物頭の下御船奉行の上  
 ありて、役祿七拾五俵に十三人賦を給せられ、在府の  
 時ハ田祿二百五拾石の入を給せさせ給ふとなり、今一  
 人ハ曾木權之助といへるを命せられ、二人交代して勉  
 められしか、職中寛保元年辛酉四月九日東武の邸に終  
 り給ひぬ、寿ハ七十三にて法号を諦了院徹心常休居士  
 と唱へ、芝の大円寺に葬り招魂の墓ハ珪樹院にあり、此  
 君幼少〔年〕より物事心得深く和漢の事にも暗からハず、  
 就中武田流の兵学を東武の酒井隼人といへる人に学ひ  
 て、印下の伝まで許さセ〔れ〕給ひ、今其書も家に存す、  
 一時春君の二弟に左廣〔庵〕久言といへる人あり、始めハ  
 左太夫と云ひしか、後に御路地見廻といへる茶道職を  
 勉め左廣〔庵〕と改名ありしか、三十八にて終り給ひぬ、  
 此人はさせる才器もなかりしにや、行事の伝る事もな  
 し、其次は夭亡にて梅顔童子といふ、  
 時春の嫡子〔次郎〕九郎時昌、後ハ浦右衛門と称らる、

〔宝〕寛永元年甲申八月廿七日に誕生、母は市來助〔  
 左衛門政親といへる人の女也、此人奇代の玲利〕に  
 て、容儀も人に勝れたりといへり、七歳の時福昌寺の  
 門外にて遊び居るを

（島津重豪）

淨國公御仏參の折御目に留り、忝くも、御輿の元に  
 召させられ度々御覽有しか、程なく礖御館の御近習ま  
 て召具すべしと命せられ、其時父の時春ハ東武の旅行  
 にて家にあらず、外祖父市來勸左衛門命を領して童子  
 を御近習江召列しに、則後宮に留られ数日召置十〔れ〕  
 御寵遇あり、御手自御手遊やうの物数品を下し賜ハリ  
 しか、此年の三月廿七日御小姓奉行比志嶋隼人といへ  
 る人伝命にて奥御小姓に命せられぬ、九歳の〔時〕年御  
 内証におひて元服せしに忝くも御手自髪を裁下され  
 しとなり、其後十三歳にて角入せしに、此時も後宮に  
 て、

君公御刺〔刺〕刀をあてさせ給ひ成童の姿となり、猶更  
 它事なく勤仕せしが、十四の年

君公の仰に、来年の朝覲にハ汝を召具〔す〕べしとおもふに、汝〔か〕父の悠右衛門こたひ廐の別当にて東武に祗役〔に〕、汝幼少なれば父に従ひ東行せバ起臥心あらぬか、さして東着せバ太子の方に給仕し、我東着せハ我か方へ奉仕さすべし、然れ共汝か父如何おもふべき、父の心を問来れと御懇なる、仰をありければ、即父の時春御廐に出〔仕〕して在けるに行告るに、かゝる難有事やあるべき、謹て君命を拜〔し奉〕るへき旨を申へしとて、其事を復命し、父子東都に〔趣〕き時昌は

太子の宮に奉仕し、翌春

君公朝覲ありけれハ、旧の如く君公の方に候せられしに、又々

君公の仰に太子頻りに汝を乞せらるゝにより難被黙止、彼方江遣さるゝなり、されは太子の方へ勤仕の暇にハ、時に来りて我用をも給仕すべしとなと、数々御懇の仰事ありて、夫よりハ

太子の方に仕へ奉りられしが、

太子の御いつくしミ并々ならず、近侍同僚の人も皆羨ミける、ほどなく

君公御代を

太子に譲らせられ、御継統の後には毎年の朝候虚歳なく供奉せられけり、享保九年九月二階堂五郎太夫といへる人伝命にて、名を浦右衛門と賜ハリぬ、

一享保十二年丁未例にかへらず、

公駕に供奉して東行あるに、防州あ〔下〕の庄といへる所にて、御手自抱椿の紋を画せられ、家の記号となすべしとて下し賜りぬ、実に面目身に余りて父の時春に告られけれハ、父にも忻の余り自らも恩賜の記号を用度、近侍の人して奉乞られしに、

君公も其切なるを〔悦〕ハせられ、其事ゆるしありけれバ、是よりして我家の紋抱椿を用る事〔と〕なりぬ、  
其它御佩刀御鉄砲の賜ハ数も尽し難く、一々には記さす、

一同十五年御小納戸井といへるに転職あり、同十七年君

公日光御社參の御事あり、其時の御供迄は候せられしか、同し年五月十日といふに東武の邸に終り給ひぬ、

瘡瘡なりしと言伝ふ、年は二十七にならせ給ふ、此人こそ家を起し父祖の名をも揚ぐべき器なりしに、天命悲むべし、法号は凌雲院穩功自安居士と唱へ、芝の大円寺に葬り、招魂の墓は珪樹院にあり、

一時昌の姉におまんと言〔ひ〕ハ、母は同服にて、成長の後松元氏に嫁せ〔ら〕れしか、多病にて子なく家に帰り三十八歳にて終り給ひぬ、同しく珪樹院に葬り、

法号ハ實相元眞大姉といへり、我父實意君常に此人の事をいたわり、忌日ことにねんころに祭り給ひし故、我か世にいたりても、父君の御志の空しからぬやうに

〔物〕し侍りぬ、時昌没し給ひて外に男なく、平岡内〔匠〕之命の次子幸之助と言しを養子と定め給ひぬ、

平岡は宮之城の末流にて、即ち泰清轉雲大姉の次子中務久茂君の家より別れし家なれハ、其血脈の故を以て

養子成しといへり、

然るに幸之助十四歳の時、時春君江戸にて没給ひければ、幸之助家流を襲ふて名を弥太右衛門時興と改め、いまた年弱なれば、住宅を平岡〔家〕の西隣に移し〔栖〕給ふ、平岡宅ハ其時野野街西南の角也けれハ、我家は其隣、近比市田氏の下邸と成しところとかや、時興も、有邦公の近侍に勉め給しか、其後喜界嶋代官を命せられ下〔島〕あり、是年宝曆三年にて時春三十歳計の時なりしとぞ、

一宝曆九年納殿役を命せらる、此時同僚に伊集院弥三右衛門ありて紛らわしとて、浦右衛門と改名し給ふ、明和七年十一月大嶋の代官に命せられ、翌卯春下〔嶋〕あり、同九年任を終へて帰り給ひしか、夫より後多病にて仕へ給はず、天明三年癸卯家を譲り名を浦舟と改め、城西上伊敷村城の後といへる所に別業を構へ退隠有しが、年老本宅に帰りて七十二歳にて終〔り〕給ひぬ、是も珪樹院に葬り、法号ハ潮海院月庭浦舟居士と

いへり、此人は相貌魁<sup>◎</sup>偉<sup>◎</sup>にて両眼鈴を掛たる如く、

威儀堂堂として気高き風なりしか、性質は至て優長にて家事にも拘へらず、悠々として世を終り給ひぬ、

一時春後の室は、本伊作の人にて賤しき〔者〕<sup>◎</sup>の女なり

しかども、幼より月桂院殿<sup>俗称おすま</sup>の宮に給仕して、

天性柔和篤実の人ゆへ調進せられ宮女の列に入られし

を、後宮の番長植村半左衛門<sup>後称東林</sup>といへる人の養女と

して時春に嫁せられぬ、此方へ嫁しても謙遜にして老年<sup>◎</sup>迄本

妻の位に処せず、継子の〔者〕<sup>◎</sup>にも詞を卑下して

主のことくあいしらい給ふ、是により、我父君幼年に

て継母戸田氏不慈の行ありし時も、此祖母君のいつく

しみにて成長<sup>◎</sup>し給ふゆへ、父君終身其事を物語感称

し給しなり、明和九年八拾三歳にて〔死終り給ひぬ〕<sup>◎</sup>、

珪樹院時春招魂の墓下<sup>◎</sup>合葬し、法号〔ハ〕<sup>◎</sup>香相院花

叟淨〔光〕<sup>◎</sup>大姉といへり、

一時興二女二男、長女名ハ〔やす〕<sup>◎</sup>、市來十郎右衛門政

の室にて、性質明敏男子の風あり、文化二年五十七歳

にて終り給ふ、市來家の先塋に葬り、法号ハ蘭窓院寒

室桂香大姉と称す、次女名は小くり、北郷八右衛門資

甫の室也、文政二年七十二歳にて終り給ふ、法号は永

昌院壽山妙仙太姉と称して資甫の墓に合葬す、次ハ我

父悠右衛門實意君、此三人藥丸氏の〔腹〕<sup>◎</sup>なり、藥丸

氏没せられ、継母室戸田氏一男あり、幼名幸之助、後

に河野氏を継て四郎左衛門と称す、戸田氏も早く没し、

其後室關山軍兵衛女、此人ハ子なし、

一先考悠右衛門實意君、幼名は次郎九郎、<sup>◎</sup>彌太右衛門

又悠右衛門と改め給ふ、府下知られたる度量雄偉の君

にて、多くの人にも敬ひ重せられ給ふ、宝曆五年乙亥

三月廿一日に生れ給ふ、幼にして母の藥丸氏世を早く

し、後戸田氏嫁来り給ひしか、此人ハ勝れて妬忌悍

〔凶〕<sup>◎</sup>の人にて、吾か産める子を愛育撫摩し継子を悪

む事甚しく、少し心に叶わさる事あ〔ら〕<sup>◎</sup>ハ鞭笞を用

ひ或は食を与へず、先考餓に及て浅ましき目に逢給ふ

時ハ、祖母の香相院<sup>◎</sup>密に隠して食を与へ、又年久し

き老僕に伊左衛門といへる者ありしが、此者外に出れ  
 へいつも己か錢にて餅を買ひ是を隠たる所にてまいら  
 せしとなり、「オさ」れハ先考長し給ひし後、伊左衛門  
 か牌を仏壇の末に設て四時の菜菓を祭り給へり、斯く  
 つらき目に逢ひ給へとも少しも心に懸給ふ事なく愈孝  
 心怠なく事へ結けれハ、近隣の人も大に称美せしと也、  
 実に関子か孝とやいふべき、幾理「程」なく戸田氏隠れ  
 給ひ、關山氏来り給ひて母子の親しミも大形ならず一  
 家も治りぬ、然れ共、父の時興の君、子弟の教もさの  
 ミ拘り給はず、先考成童にならせ給まで、物よみ手習  
 ふ業も督し給はぬを、先考隣其比ハ堅野より城東田の浦に移住ありし也潮音  
 院といへる寺に便りて手習ふ事を学ひ、又西隣に市來  
 壽伯漢科といへる「漢科鐵科」の老医ありしが、此人は頗る儒  
 名ありて向浪先生向も始め府下にも聞えたる学識なり  
 しが、此人に躬から往ひて事情を「述述」べ、学ばん事  
 を乞はれしに、「兼兼」而後母の孝養も能目視の事なレ「レれ」  
 ハ、懇に待遇して句読を授らるゝに、志学の比には学

業大に成りぬ、壽伯其才を奇として益訓導せられしか  
 ハ、数歳ならずして来舶の書籍訓点なきものも随意に  
 句読を下し給ぬ、是時家甚た窮して、田浦の僻地に住  
 給フ「ふ」とも、一函に志を奮ひ、「旁旁く」其比志士の  
 名ある人に交わり学を講し、或ハ劍鎗の業なども肆給  
 ひしが、程なく父の時興君大島の代官を命せられ、此  
 時居宅も清水街の地に移されけれハ、愈学業を修し、  
 所謂傑翁家の学に従事し講習あるに、一時先輩の衆も  
 皆席を譲られしとなり、二十歳の年、東武の祇役を命  
 せられ役に赴給ひしか、此時母方の舅野田某の教へら  
 れしハ、東武の地は士の才器を試る所なるが、汝武鑑  
 を読め、能く是を諳んして列国の鹵簿記号誤る事なき  
 ときハ、人の下に出る事ハなきもの也といわれしを先  
 考深く領掌し、座右武鑑を離ナ「さ」ず見閱せられしに、  
 本より其道は好める事にて能記憶せられしか、東武に  
 して国邸に就き、始て同僚の人是を導き列侯の朝智「智」  
 を観覽せられしに、邸門を出て程なく往先「来」に小諸

侯の朝せらるゝあり、〔導〕<sup>⑧導</sup>の人其表号を記憶せず、誰侯ならぬと疑ふに、先考是こそ某侯の鏢鎗なりと云給ひしを、〔導〕<sup>⑧導</sup>の人大に笑ひ、始て邸門〔を〕<sup>⑧セ</sup>出何侯を見知べきやと嘲けるを、先考服せず然らハ人に問て見よとて是を問に果して其侯なりけれバ〔導〕<sup>⑧導</sup>の人も愕然として屈服しぬ、夫より朝会の所に至りて列侯の表識を相せらるゝに、十に七八は違ハさりけれハ、其比邸中の伝称となりしくなり、

一東武より帰給ひて、又々再遊の志ありけれハ、其事を謀〔り〕<sup>⑧ア</sup>給ふに、父の時興老て病〔多〕<sup>⑧ダ</sup>く頻りに遠遊を止め給ふ故志を果さず、家に在て益学業を修し、大に其徒に重せられ貴賤の交りも弘かりしか、程なく進達掛<sup>其比ハ組方取</sup><sub>次といへり</sub>といふ職を命せられ〔ぬ〕<sup>⑧ヌ</sup>、其職ハ輕けれども士と隊長の奏達を司〔る〕<sup>⑧カ</sup>故、益々貴門の交多く、就中飲酒温潤にて稽叔夜か風あ〔り〕<sup>⑧カ</sup>ければ、宴席ことに人々弥太なけれバ楽すともてはやし重んし給ひし〔が〕<sup>⑧ガ</sup>、寛政七年乙卯三月御目附の職に命せら

れ給ひぬ、此時先考三十七歳の年にて、父の浦舟君没せられし〔い〕<sup>⑧ハ</sup>また喪服の内にてそ有ける、

一御目附の職ハ朝廷の礼式儀則を司る事なるに、先考一々研究あり、典規悉く諳んし給ふゆへ、一時先輩の人々も事に臨て尋問るゝ事多かり〔け〕<sup>⑧サ</sup>れは、益々人の敬重も薄からず、然るに吾家浦舟君老後両回の大病あり、其後物〔語〕<sup>⑧ゴ</sup>ありしに、同じ年吾次の弟八次郎も又病に罹りて夭傷し、屢災患多かりけれハ家産大に傾き、朝餐〔戸〕<sup>⑧ド</sup>給せず窮困なりしかとも、天姓恬澹の質にてさる事にも拘ハリ給ハす、已に七年を過されたるに、同僚の人々其窮を憐ミ、官長に乞沖永良部嶋の代官を命せられ、享和元年辛酉春彼〔島〕<sup>⑧ジ</sup>に下り給しか、政事一々私曲なく行わせ給ふ故、島の民も深く懐き奉りぬ、島の役三年任を終て帰り給しが、程なく山奉行ニ命せられ給ひぬ、此時山奉行署に聊私曲の事ありて、長官三人下吏数人職を免し譴責を受し故、こた

官にて勤厚の士を撰れしに、先考其撰に入給ひしといへり、されハ居職十三年賄賂苞苴を受給ふ事なく、廉潔を以て処せられけれハ、時の人は痴鈍なりとぞ笑ひけり、其事を或人告奉りけるに、先考完爾として、吾実に痴鈍なり、さるかゆへに奉職十三年全き事を得たり、もし痴鈍ならずんば豈此数を保んや、とて笑ひ給ひぬ、後〔痿〕<sup>⑧痴</sup>痞の病を得給ひ、山奉行ハ旅行多き職故、官に乞道奉行に転せられしが、吾浪華の祗役に御作事奉行を命せらる、其事は吾条下に記す故爰に略す、

一先考恬憺冲漠にして、一向家の〔背〕<sup>⑨背</sup>亡にも拘ハリ給ハす、所謂家に儻石の設なけれども晏然たりと言ひし漢の楊雄か態も見るやう也、家に在てハ手に巻を放ち給ふ事なく、食時にも傍に巻を置て見聞し給ふ、尤膏盲に入しハ兵書なり、壮年の時、田中諸右衛門〔綱〕<sup>⑩綱</sup>を師として武田流の兵学を学<sup>⑪結</sup>ひしか、終に一流の奥義を究め、彼家にて它<sup>⑫他</sup>の門人も師のことく敬ひけり、

又吾藩の故事に委しく諸家の系譜能く諳し、殊更古墓の癖ありて搜索ありける故、它<sup>⑬他</sup>の家祖先の古墓の埋れしを先考に就て探り得たるも多かりけり、山奉行の職に在られし時、諸邑を巡行あるに川内向田駅に止宿の時、其地の富商饗応する事ありて、半酣に至り妓楽を進べきと乞しに、古墓あらハ吾に教へよ妓楽ハ古墓を搜すにしかすと答給ひけれハ、あるし詞なくして退きぬ、随従の下吏ハ皆酒客にて妓楽を聞まほしく各娛しみ居たりしに、是を聞て呆然として詞もなかりしといへり、是にて其平生を知べきなり、又族類に一権貴の人謹密細慎のなりしが、病床終に臨て、遺託いと懇にて子弟に命して遺言の一冊を録せしめ、家人に警しめ固ク警戒違へからざる<sup>⑭せ</sup>命せられ、其比世の伝称せし事なるに、先考是を見、悠然として吾は死ぬるさへやうやく〔也〕<sup>⑮ナル</sup>と笑ひ給ふを、吾も傍にありて実に命に達せし人の言なりと感服したりしが、果して其後婦人の家事に成たるに遺言の事一も行れず、其時先考の言

思ひあたりし也、斯く優游におハしけれとも、公事の勉め給ふハ至て厳正にて、朝ハ未明に起き、日出には朝服を着て時刻を〔待〕給ふ、適家人事ありて且の設け遅くなり、人に後れて朝し給へハ、人の汗辱を受けたるやうに恥憤り給ふゆへ、吾家朝の営ミ毎も未明に炊きて早かりし也、不佞時升幼年の時、武術書卷の講習に夜を犯して出る時、先考常に吾より先に起給ひ、地炉に湯を沸かし飯を具し食〔せ〕しめ告諭し給ふ、人ハいかなる急事ニ処するも計るべからざるに、世の人多く寝起に食の進まぬ人多し、斯して尊食にならひ居れハ急事ニ食せられぬ事なきもの也と教へ給ひしが、後に時升処々の旅行に、〔鶏〕鳴尊に食する事のみ多きに、飯を十分に食し出れハ終日食せされ共疲るゝ事なし、此時庭訓の難有事おもひ当りしなり、一吾浪華の行を命せられしとき時ハ、先考早病床に懸り給ひ、第一は行歩に悩ミ給ふ故、旅行を辞せんと謀りしに、先考聞給ひて勃然として怒り給ひ、我家は高祖

武藏守以来死さへ辞する事なし、然るに汝父か病とて旅行を辞し吾傍に侍したれハとて吾是を喜ふべきか、且死生ハ命なり、汝傍に居たれハとて吾命の延べきにもあらず、今旅行を辞せハ吾か子にあらずと怒り給ふ故、さのミいろはば猶氣然に忤ひ怒りを重ぬべしと思ひ、命に従ふ体にもてなし居たれども、実は他の事に託して行を辞せぬと思ひ居たりしに、早其機を察せられしか、いと寢食も快からず憔悴の体の見多給ふを、年比療し奉る医のいへるには、父君疲労の姿の見ゆるは其情を察するに、吾起〔き〕かたき〔を〕知るゆへに旅行を辞るとおもひ給ふゆへ、頗る元氣のおくるゝやう也、纔一季の旅なれハ貴命に應じて出立給ハ、却而元氣を引立よかるべしといふ故、終に旅行に決せしか、さるにても発途に臨ハ、老たる人の病の床にさそや別れやおしミ給くと心苦しくおもひしに、一向悲哀の貌もまします、〔粧〕など細く下知し給ひ、已に出門の期に及〔ふ〕時、大盃を執て一盃呑干

し吾にさし給ふゆへ吾も一盃を尽したれば大に笑ひ、  
今こそ其の吾か子なれ、<sup>⑧天</sup>丈夫の出行〔す〕るに遅々  
へ見苦し早く出よと勵し給ふゆへ、是に激せられて出  
立〔したるが〕、<sup>⑨しか</sup>是そ一世の庭訓とはなりしなり、

一すべて恬澹無為の性質にておはしけれハ、終り給ひし  
時も病の苦しミもおはせず、此時〔余り〕<sup>⑩命か</sup>登瀛の喜あ  
りて其身も御作事奉行に転任ありしを深く悦ひ給ひ、  
親戚の保護によりて病を勉め強て拜命を受給ひける、  
そハ四月二十一日の事なりしに、同じく五月四日常に  
〔替〕<sup>⑪黄</sup>ハらず兵書を出し翻閱あり、又吾加階の事によ  
りて甲冑を買しといふ事を伝聞猶更嬾しミ喜ひ給ひ、  
母君に向ひ、吾家狭小なり甲冑の櫃を置ハ如此々々と  
すべしなと指揮あり、折ふし夕殮の熟したりとて持出  
しに、此日蛤を贈りたるものありて、是を調理して飯  
に供し一碗を尽し、代りの碗に二口を食せられ、首を  
前へ低給ふゆへ、母君何〔とて〕<sup>⑫ト</sup>召給ハさると問るゝ  
に、答給ハぬゆへ、御心地やあしきと抱起し給ふに、

唯笑へるさまにて御息ハ絶たり、折よく日比療せし医  
師門外を通り、其さまを聞、直に來り候ふに早事切た  
り、即親戚寄屯て埋葬の營ミし桂樹院先塋に葬し奉り、  
法号は實道院悟運徹參居士と稱し、御年ハ六拾七にな  
らせ給ふ、文政四年辛巳五月四日の事なり、

一先考日比聞見ましましける故事來歴小説野史の洩るゝ  
所書付給へる小本数卷あり、唯其著述に意なく事跡を  
綴らず書記し給ふゆへ、今校正するに時日土名等撰次  
成りかたき事多く、世に公行しかたき故遺稿を家に蔵  
〔る〕<sup>⑬カ</sup>のミ、憾べしとす、

一すへて先考性実私曲姦佞なく、純粹におはしける故神  
明も擁護ありけるにや、不思議の災殃を免れ給ふ事あ  
り、そは〔何事〕<sup>⑭アル</sup>といふに、御目附に居給ふ時、秩父  
太郎・清水源左衛門の二人ハ、わきて心知にて、彼方  
よりも先考を尊ミ交り、万の官事〔を〕<sup>⑮ト</sup>も商議せらる  
ゝ事多かりしが、先考沖永良部嶋旅行の跡にて二人、  
官事に乖忤する事有て、官を止メ禁錮せられぬ、其時

先考同職におハしたらハ、兼而交り深けれハおのつか  
ら商議すべし、其時先考如何判し給ハぬハ知難⑧くれと  
も、二人のいふ所公正剛直の事なれハ、同心あらぬも  
計られず、たとへハ其時同心あらぬには、後年秩父勃  
興の時専ら信用の人を多く登庸したるが、再ひ事の破  
れし時には多くハ死を賜りひし人多し、さなきハ重き  
流刑に処せられし、其内何れにか加ハリ給ハぬ、若又  
始めの時秩父か事をいなミ給ハ、此人剛腹⑧張強項  
の人なれば、其勃興の時是を恚ミ思ハ、先考をいか  
なる「罪」⑧にかおとさ⑧「めも」、ふたつの間「何」⑧れ  
ひとつは免れ給ふ事叶ハさるべきに、旅行におハしけ  
るハ実に神明の「加」⑧護やおハしけぬと思ハるれ、  
一先妣村野氏諱ハ普知、村野喜平太ハ實勝の女也、是ハ  
又世に稀なるけやけき烈婦にて、丈夫も及かたき生質⑧  
なり、幼き時より古「人」⑧賢人烈士の物語りを聞ハ倦  
む事を知らず、長せらるゝに随ひ其家父の實勝君読書  
を好給ふ故、傍⑧に侍して和「漢」⑧の事跡を尋聞給ふ

「より」、歴代移りかへるさまなど目に見るやうに記  
憶し給ひ、しかも女の物縫仕業或は厨下の営ミも人に  
勝れて物し給ふ、十六歳の歳吾か家にかしつき給ひ、  
其明けの年不佞時升を産給ひ、其後二人の男子ひとり  
の女子を設け給ひしが、其子共の教へ至て厳正にして、  
少「し」⑧の過あれハ稠敷正し警め給「ふ」⑧とも、其事  
改れハ聊も心に夾ミ給ふ事なし、召使の奴婢にも其通  
にて、其上に施予「吝」⑧ならず育ミ給ふゆへ人皆畏れ  
尊ミける、吾家に来り給ふと程なく、舅姑共に家事を  
譲り上伊敷に隠居ましましたけるが、其折しも家の産も  
傾きて朝夕の煙さへ立兼るに、先考ハ大度の風にて家  
の有無をも問給はず、先妣も是に仕へて婦道を勉め、  
舅姑の養ひ露もおろそかなる事なく、孝養を尽し給ひ  
ぬ、其後年長給ひて、二人の男子八次郎・矢之助共に  
先立まいらせ嘆きもいと深かりけれとも、さやうの事  
にも志を降し給ふ事なく、家政ハ嚴肅に勤め給へり、  
先考年老て瘵瘡の病を得給ひ手足便利ならざるに、湯

葉はいふにや及〔ぬ〕ニ便の不浄まで人手にかけ給ふ事なく、手自ら物し給へり、余か、浪華の祇役にて辱くも

上の御恵ミ厚く、事に触れて御いつくしミを受ける事多きも露悦ひ給はず、常に家人に向ひて、今の時官路に居るハ風のあらし枝上に巢ふ鳥に同じきに、まして浪華の地は一國要路の重き事のミ司る職なれハ、如何して全き事を得べき、相かまへて一時の寵を悦ぶ事あるへからず、只本を忘れず、今日の勤をこそ怠る事なかるへしと警しめ諭され、浪華の風信あることにハ吾にも戒めこされしなり、余か御船奉行に転職の後、仮初に外に出〔さ〕るゝに稚き婢女一人を具し給ふゆへ、傍の人、御船奉行は賤〔敷〕にあらざ、浪華の職ハ它方の人も尊ミ敬ぶ事なるに、其母なりといふ人下部の一人も具し給ハさるハ、人のミる目も如何なりと諫るに、先妣、我今弥太右衛門を御船奉行に命し給ふを聞く、未だ弥太右衛門が母を御船奉行に命し給ふを聞〔かす〕

して〕答へ給ひしかは、其人も詞なくして屈伏しぬ、平生〔期〕る氣概の老嫗なれハ、吾浪華の職を罷られ家に帰りし時も、少しも屈し給ふ色なく、今こそ弥太右衛門が志操を見ると悦〔給〕ひしなり、年老七拾八といへるに、行歩壮年の人にも劣り給はず、山坂峻路升降いと安けなりしが、吾孫の製太郎あやなく夭亡せしを深く痛ミ思ひ給ひしにや、程なく病に臥し終に起給はず、されは製太郎が夭せし時、皆人老母の歎き痛ミ給ハん事を心遣しに、思ひの外さまで歎き給ふ色もなく、命数の事は天のしからしむる処歎けくとも詮なしとて、却て某母などの歎くをも叱〔り〕戒め給ひしが、兼ての氣象に弱氣を見せ給わざりしかとも、老の悲しきには深く心根には徹しけるにやと思わるれ、

一〔御〕れハ病の床に就給ひて其年ハ暮れ、翌春に至り病は本痰結の煩なりしか、喘氣の久しきに乘して脹癰のやうに変していとやつれ給しか、其煩も平復に〔趣〕き身体も穩にならせ給ふゆへ、本復もあるへしと思わ

れしかとも、元氣終には復しかね、此年四月二十六日に終にかくれ給ぬ、此病中に付ても奇なる事のありしハ、平日至て厳酷の質にて、子弟奴婢少しも色を仮給ふ事なく稠敷叱り戒め給しが、病に就給ふ〔と〕唯柔和にて顔色も温〔酒〕<sup>⑤</sup>に一向愠り叱給ふ事なかりし、されは精神も劣り給ふかとおもへハ、家事の教諭よりして厨下の小事迄常よりも微細に指揮し給へり、思ふに平生の厳酷ハ、畢竟正路を専にし給ふ志より鎖細の事に至り省察詳なりしが、天〔性〕<sup>⑥</sup>純粹に私なき本心病中に随ひ斯善柔にならせ給ひけんと親戚の者共に語りあひぬ、扱病も稍弛まり、むかし今の<sup>⑦</sup>事なども常のことく打解、物語給ひしか、四月廿五日の朝飯の前に、今日は我が死期の日なりとの給ふを、皆々打笑ひて斯まで平愈ありて何条今程に然る事の候へきと答へしか、其日何事もなく翌廿六日いよ<sup>⑧</sup>精神も爽にてあやしき事なく末の牌に及ひし比<sup>⑨</sup>憑置ける療医森本朽匏なる人來り診脈するに、起て対応せんとし給ふ

を医師頻りに止めけれハ、然らば病婦の失敬偏に免し給へと挨拶こま<sup>⑩</sup>にて、病状の事〔を〕も委しく述給ひ、其跡に門人の書生容体を伺ふにも同し様に式礼し給ひ、医師も暫しか程四方山の事共語らい辞去しが、門を出ると幾程なく物言給ふ詞止りて息靜なる故、眠らせ給ふやと側に寄り見るに早事切たり、顔色も常に違ハすいと安らかなりけれハ、是にて誠実に私なき純粹の御事ハかり知べきなり、宝曆十一年の生れにて齡ハ七拾八、法号を壽峯院貞室妙香大姉と唱奉り、珪樹院先塋に納め参らせぬ、是歳天保十年なり、四人の子、長は時升此次に行事委しく記す、次を八次郎と言ふて是も聡慧なりしか、十一の歳病を請け寛政七年六月〔廿〕<sup>⑪</sup>日に世を去りぬ、次の女子、始め同氏吉兵衛の妻となりしか、一女を設け吉兵衛世を去られし故、改めて奥山藤太夫政明の妻となり一男一女を設く、男子藤五郎政通、生れて廢疾にて起居不自由なるにより家督を継かたく、谷山角太夫純清の次男<sup>⑫</sup>養ひ女子に妻して

家を襲ふ、今の藤左衛門政純也、藤五郎廢疾といへとも、<sup>天性は</sup>至極聡敏にて和漢の<sup>事</sup>精しく、就中宝生流の謡曲を学び予、其奥義を得たり、世の人奇人なりと称す、ハしめの吉兵衛方にて設けし女子、平田八郎太宗敬の妻となり、其第三の子を父吉兵衛の家を継しめ家統を襲ふ、<sup>季</sup>「家」の子矢之助時<sup>須</sup>「順」、十九の年上田源左衛門なる者と刃傷に及、源左衛門を果して家に帰り自殺す、其事予か条下に委しく記すゆへ此に洩ぬ、

一先考沖永良部嶋に宰たるの時、嶋の女<sup>に</sup>「の」<sup>腹</sup>「腹」に一男をあり、幼名を新潤といふ、十三<sup>歳の</sup>「の歳」<sup>時</sup>「<sup>ト</sup>余が大嶋の見分職にて下りし時、彼地に呼寄具し「登」りて宮城の公子の家に仕へしめ、名を新村岱峯と称して医学を学へせしか、先妣是を撫育し愛し給ふ事吾産る子よりも甚しく、適に彼か事を悪しきまにとも戯るゝ者あれハ実心憤り怒り給へり、然るに岱峯京師に遊学し、謙齋と名を改め典薬頭高科安藝守の門に入、精学しけるが、けやけき医業を遂げ四年の後国に帰りしに、四

方の人療養を乞索て今ハ府下に并なき高名を得、先妣在世の内<sup>能</sup>く撫育の恩を酬奉り、今も吾に事へて家事を顧る事怠なく、吾家<sup>を</sup>「を」窮彼か力に頼事大形ならず、九郎物語一の巻終ル

## 九郎物語二の巻

一いてや、此時升か終身苦勞せしさまをこそ語らめ、時升三十歳歳の年東武に抵役せしに、其比東武に隠れなき親相上手石龍子といへるが三嶋街に居住しけるに、一日是を訪て親相を乞しに、其相する処ひとつとして違ふことなく肺腑を見透すやうなりしが、彼翁吾に告て、吾天下の人を相するに吾子の如き苦勞する人は実に稀なるものなり、夫も世にあらゆる事ハさもあるべし、斯ることは世にあるましき事とおもわるゝ程の事の纏ひ付て難義せらるゝ事あるべしと<sup>イ</sup>「ゆ」<sup>故</sup>「ゆ」<sup>故</sup>、実にも然なり、先生の親相ハ実に神通といふべし、是に就て吾終身の服膺となるべき<sup>こと</sup>「あ」<sup>ら</sup>「ハ」<sup>示</sup>し給へといふ

に、相術如斯人の一生を觀る事はなりかたきものなり、然れども子に示す一言あり、只諂らい給へしと、子が諂諛ハ他の抗直に比すべし、是を守らば終身安全なるべしといふ故、余反復礼拝し、子ハ吾が黄石公也、謹て是を紳に誌し伝るべしといふて辭し出しが、實にも石龍子が言のごとく吾苦勞實に人に異なる故、其苦勞の有〔様〕<sup>増</sup>を記する事、しかり而して吾終〔り〕<sup>身</sup>を誤りしハ悉く抗直に破られ、其〔論〕<sup>論</sup>の教を全する事あたはず、再び石龍子に逢ば殆と言葉なけん、

一時升、安永七年戊戌十二月七日を以て生れたり、其時までハ、家も富く<sup>る</sup>にはあらねと今日の飢を免れ、父母の愛<sup>いと</sup>シハ更なり、祖父母の寵愛殊〔に〕<sup>更</sup>甚しく育せられしか、七・八歳の時より家の産も稍傾き、母人の朝夕の営に心を苦しめ給ふをいと便なく思ひしが、十一歳<sup>時</sup>の八月二十五日ニ<sup>此</sup>事府下諏訪神事頭殿の役を命せられ事故なく神事を終りぬ

君公へ始て謁見の礼を行ひ、是も目出度事成りぬ、然るに十八歳の春祖父浦〔船〕<sup>舟</sup>君隠れたまひ、同六月に

次の弟八次郎天傷しぬ、かやうの事にいよ／＼禄も乏しく成行、十九<sup>の</sup>年より所謂禄の仕に奔走し、封内の宦遊に纒の俸米を獲て生營を助け、父母の憂をも分ちけれども、本より数口の口を糊しかたく、日々に窮乏に困しけるに、先考同僚の人々議せらるゝ所ありて、日比先考勤勞の功を計りて

上に告られけれハ、沖永長部嶋の代官に命せられぬ、此時吾心父君を遙々の波濤に遠役させ奉る事の心憂く、自ら代らまほしくおもへども、本より勤勞の功もて命せらるゝ役なれハ私に代るべきやうもなく、詮方なく仏神に祈誓の外便るべき方もなければ、心に一大願を起したるに、あやにくも先考出船の翌日より病を受け、数日起〔る〕<sup>立</sup>事叶わず、兎角するに己に海洋に浮はせ給ふ日数に至れ共病ハ瘧疾のやうに日夜奔熱し怠る隙もあらされハ、いかさまにも神明に見放され吾信心を受け給ハぬ故に、祈願を拒〔て〕<sup>テ</sup>、かゝる病を施し給ふやと思へはいよ／＼あるにもあられず、或夜夜慨然<sup>行カ</sup>

として思ひ出し、是こそ吾丹心神明納受を占ふへき讖兆なれ、試に苦行を行ひ若風露の障礙もなくは神明の納収と知るべし、或其行に病邪祟りを増す事あらハ願望成就せずと知るべし、と心中に一決して、夜陰密に母君にも深くかくして朝服を盗出し、近き辺りの川水に身を浴し朝服を着替、一通の願文を捧げ諏方の廟前に至り、父の行安穩に帰朝なさしめ給へ、若父の行路に障りなくバ時升が生涯にいかなる災殃あるとも憾ミ思ふ事〔あ〕<sup>⑩</sup>るへからず、此事内心を申さば升が命を捧げて代り度望なれども、父母の愛情は吾をこそ大事に育給ふに、吾身を捨てハ却て父母の憂を加る故、其代り此祈願納受ましまさは升か身に何その危難を手へ給ひて其しるしを知らせ給へと丹誠を凝して拜し畢りて願文を密に社壇の下に埋めて帰りぬ、不思議や瘧疾の熱気あるに夜半、川水に身を浸して邪気の憂ひもなく、病ハ幾程もなく平愈せり、然るに其年七月、吾叔父河野氏不行の事ありて亡命せられしが、帰り来て自

殺し給へり、例〔の〕<sup>⑪</sup>少き士人の恥にて世の人に面も向がたき事なれとも、吾心に、是ぞ神明の吾願文を納受ありて父君海上の禍を転し此災を吾に譲り給ふしるしなれと、心の内にハ悦しか、果して父君海上の往来露も故障の事なく目出度帰朝ましましぬ、然れとも此祈願、一生父母共に知らせ給ふ事ハなかりし也、今更におもひ合するに、吾生涯さま／＼の奇難苦勞を賦命ありし天意、自然と吾心に感しかゝる祈願をも思付しかと、業因おそろしくこそ思はるれ、一されバこそ是を苦勞の始として、さま／＼の事こそ多かめれ、先考いまだく永良部に座し／＼ける時より心に黙計して、いかにも父の君帰り給ひても吾祿仕の助⑫くなくてハ、老後を慰し奉るべき營もなければ、小監察の職に充居は便宜の事も有べしとおもひ、藏方目附の職を乞しに、享保三年の春其職を命せられぬ、其年先考沖永良部嶋より帰朝あり、夫よりして東都大坂從役の事を乞しに、此年頃同じく役任を望む人多く容易に

乞を得ず、漸く<sup>(長崎)</sup>崎陽の在勤を命せられ已に発途に臨みし三日前に、先考沖永良部嶋にて聊遺失の事ありて、逼塞といへる禁錮の咎を得給へり、聊の小事なれハ余が行旅には障るましくとて、期を緩にしてやすらいけれども、思の外三ヶ月に繋りければ遂に崎陽の行を止られぬ、又明年の事を告訴するに、東都の祗役を命せられ其行装を促しける折、彼地の同僚に留滞の人ありて交代の人老人を止らるゝに、其番に当りて又此行を止らる、

此時、行を止らるゝにハ列名の末より減せらるゝ事にて、吾より末に餅原正右衛門ありて其番に当りたれとも、執政の掌書記<sup>(御家老座の書役なり)</sup>丸野大六其事を<sup>(命之)</sup>〔当〕<sup>(事)</sup>りしが、正右衛門ハ姻<sup>(族)</sup>なる故、陰に我名を前後して末となし吾其番に当りしなり、大六執政の署の要路に居て簡様の事多くあり、其齒牙にかゝる者多かりしが、陰惡の報<sup>(ひ)</sup>にや、其身も職を止られ、其子・其孫皆無行にて家も退転に及しといふ、

其<sup>(時)</sup>の年、発輟の期を待しに同様の事にて其行又延て凡四度齟齬し、五度目<sup>(に)</sup>文化五年辰春漸く発途を得たりしが、斯く度々徒の行装を督しける故、兼て用意せし盤纏皆空しくなりて囊中空虚なれハ、千里の行弁すべきならね共、同朋故旧の<sup>(人)</sup>彼是より力を添へ纒五金を懐にして行路に臨みぬ、東都に至りても、僅の俸金を以て宦仕すれはいとうるさきさまなれども、同僚の人々<sup>(皆)</sup>吾度々の事に支離したるを憐みねもころに交り睦し故、日々の官事人井のやうにてさのミ恥をさらす事もなかりしに、微運の宿業晴れやらず、妻の椀山氏か凶事告来り、心苦しき事こそ多かめれ、此椀山氏、名は茂里子といへるが、吾に嫁して四年を経れとも一子もなかりしに、吾発途の比懐妊したるか、此年潤六月胎内の児に病起り、恙なく小児は産落しけれども母子共に保得ず、此月<sup>(二十五)</sup>日果なく成りぬ、此計音につきてもいと惨怛<sup>(痛)</sup>刻なる事ありしハ、吾郷を出し其六月といふに先考いたく病給ひし事の仄聞へて、

疾に帰省して病床にも侍し度とおもへとも、遠途の仕官心のままならず、昼夜心を苦しめ故郷の事のミ思ひやる折しも、七月〔廿七〕日の夜夢に父の君に逢ひ奉りしに、いと顔色青さめ憔悴労働の御容なれハ、夢見て一人心煩しくおもひ居る処、国よりの駅使の至れると聞て、片時も風音聞まほしく音書を求むるに、家書ハなしといふ、いよ／＼心せきて方々を尋搜すに、家郷の親族より在府の族類〔鹿兒島〕某・澁谷某に宛たる書信あれども、二人ともに前の月交代して国に帰へり封を披くべき人なしと聞、国俗、父子兄弟の計を告るには、先親〔族〕の人に言送りて、其人の驚愕なきやうに凶事を告るならハしなれば、あはや父君の隠れ給ひて其計を告るなれと疑ふ所もなければ、前夜の夢を思ひ出し、父君の魂魄吾を忘れ給ハず夢に見ゑたるくやとあらぬ事までもおもひつゝけ、其書信を強て乞取急ぎ旅舎に返りて、取手おそしと披き見るに、父君の手書其中に見へたる故、扱ハ恙なくおわせしと先悦

ひながら書中を読めば、妻と子の計なり、されハ、最愛の妻に嫡子生れたる児の凶信なれハ、さはかりの歎きなれ共父の君の恙なき信を見て、おぼゑず故郷の方を三度拜し〔て〕、夫より三・五日も過ぎて、甲客も問ヒ来りさま／＼物語るにつれて、稍妻の哀情も出来りて座に泪もこほれしが、さりとても父の君には換かたく、吾か嘆きも第二等とはなりぬ、扱父の君は病も愈給ひて已に旅行をもなし給ひぬと言事の聞へて、帰省の事にも及はず少し心を安するやうなるに、奇代の凶変久保七九郎といへるか事に大に困苦に〔及〕たり、一扱、其久保が始末ハ、例少なき兇惡故委曲に記さぬに、先くたひの悪事の始末を叙して後に、彼が平生の事業ハ記さぬ、彼七九郎吾が家〔族〕類の親もなき者なりけれども、吾か叔父河野四郎左衛門此人不行く事二人の男子一人の女子ありしが、四郎左衛門不行の事にて自殺ありしより、二人の男子ハ吾家より衣食を給し件の娘を久保か方に嫁しけるく、程なく七九郎横目動にて

吾より先に東武に在勤せしが、同友の井上休藏といへるを殺害して匿居る事洩聞得、其糾問を親族の者に命せらるゝに、別に親族なけれハ時升彼か妻の族を以て命せられ、同じく濱嶋四郎右衛門といへるが遙かに遠き姻族なれ共是を命せらる、外に葛西四郎太・河野新太夫式人ハ同郷の朋友なるを以て是を撰れ、都合四人其命を受〔⑧け〕抑此事、七九郎大悪なれハ官より衛士に命して捕へしめ重刑に処せらるゝ事当然なれども、吾藩の法令其事証跡なけれハ士人を縛する事行〔⑧く〕れざる規格なるに、此〔⑧問〕の事其隠れなしといへども官いまだ其証を得られず、然るに其事早幕下衛士の手には是を聞知り、彼方の手に召捕へき手段洩聞へ、さすれば又国の忌諱を犯す事ある故、官の商議、類族の者に命して糾問し自殺を勧め給ふ事にハなりぬ、されハ此年十月 日の事なりし、在邸の刑官〔御裁許掛〕中村早太、時升を官署に召て其義を伝命し、它の三人は時升命を領して伝達すべきとなり、其時早太より命を伝

ふる処ハ、七九郎よろしからざる聞得の事あり、公事を遠慮して慎居るべしと〔⑧の〕事なれ共、席を去て傍にて私を以て告らるゝ処、伝命の趣を達せは其上に休藏か事を尋問、もし応答分明ならざる事ありて、自殺にても望まべ〔⑧必らず〕止むるにハ及ましきよしにて、専ら是を殺せといふ意を諷する詞なり、時升即旅舎にかへり三人を呼ひに、皆它適して舎にあらざるを人して急に呼寄せ其事を商議するに、時升ハ元來同僚の其事に与りたる人より聞知る事もありし故、是非を問に及はず刺殺して

官に聞すべしといふに、葛西ハ篤実純厚の人物ゆへ、いへるやう、久保ハ本同郷の朋友にて無二の心知なりしかとも、近比彼が放蕩を諫しより〔⑧志〕〔⑧疎遠せり〕、されば彼か行実にて論する時は死して余罪あり、然れとも井上も心友の好しミあるに、是を殺して匿居る事まことしからぬやうなれば万々一冤を蒙る事あらんに、彼もし冤を雪くへき証跡もあらハ官に告て明したくお

もふなり、然らずして是を殺し永世悪名を蒙らん事口惜〔き〕<sup>事</sup>ならずやといふに、是亦理の当然なれば、先ツ糾問するに一決して久保が旅〔舎〕<sup>宿</sup>櫻田の藩邸に〔趣〕<sup>社</sup>きぬ、河野新太夫は彼邸に旅舎ありけれハ、先其処ニ会して其機を謀るべしとて、余先に到り葛西ハ一旦吾か舎に帰り跡より到るべく約したるが、甚遅かりけれハ、吾か心には彼兼〔る〕<sup>て</sup>豪邁の名を得たるに斯る変に臨んでおくれやしたると怪しく思しに、後〔ハ〕<sup>に</sup>聞けば、久保武術におひてハ天然に得て人に勝れ、葛西と同じく長沼〔か〕<sup>の</sup>門に有りて仕合をなすに葛西一度も勝たる事なし、葛西ハ元来武を好ミ事天性にて、一日武事を講せされハ酔て泥の如しと言し様なる癖にて其錬磨人に踰たるが、久保ハ一向放蕩にて肆業の場に出るにも一月<sup>に</sup>一兩回もあるなしの業なれとも斯く天才<sup>ル</sup>〔り〕<sup>ル</sup>けれハ、此度の事仕負せん事とても難けれハ、自然の時は切死にする覚悟にて、衣服襦袢迄も死後見苦からぬ様に出立し故、時刻も移り<sup>し</sup>くなり、斯く

物知れる人ハ用心あるに、吾ハ唯倉卒にて、渠平曰学問に虚名を売り人にも称せられしが、是を試れハ胸中にハ一物もなき故、武術もさこそあらめと侮りおもひし、左程の事とも心得ざりしハ不用意といふべし、葛西又同友に藥丸長左衛門ハ物に馴たる士なれハとて伴ひ来り同じく商議するに、藥丸か意も我に同じく、渠か兇惡糾問したれハとて悔悟りて事を白すべきにあらず、察する所ハ座中の人を伐散〔ら〕<sup>り</sup>し蒐出逃るに相違なし、詮する所ハ吾か〔猜〕<sup>精</sup>〔量〕<sup>察</sup>のこくとく、其機を見て刺殺すにしくハなかるべし、然る時に臨ハ渠行燈を蹶倒し闇かりに紛れ蒐出る心得謀るべからず、其処ニ心を付べしと内評細に議定し、渠か旅亭に到るに、此夜ハ同舎の村田猪平次交代にて国へ帰る発足の日なれば、親〔族〕<sup>親</sup>朋友数十人集り、久保も其座にありて事もなげに酒飲笑ひ談して居る様なれハ、白地に事を拳しかたく、又商議して、かゝる所に四人一所にいたらは渠あやしみて如何なる変をかなさん、吾と河

野ハ村田に知人なれハ送別の体にて彼席に入、葛西と濱嶋ハ物蔭に匿れて其機会を待へしとて、吾先内へ入、村田に送別の詞を述へ其席に連り居るに、久保も同じく相對して笑談常に替る〔事〕なし、我と久保かあわひ三尺程隔りて、其傍に〔並〕<sup>兼</sup>て帶する大脇指の横はりたるが、我か心の内、河野ハ跡より来て背の方に座し居れハ、心付て酒の相手に出る体にて脇さしを遠さ〔け〕<sup>く</sup>る手合あるべき物をとおもへども、河野も其事心つくべき事ならず、あわれ渠若吾か顔色を悟りて其刀に手を懸は、吾も飛懸つて脇腹にてく<sup>も</sup>刺透さぬ物をと、始終逆視して油断なく守居たるに、其夜しも駅馬の滯る事ありて初更を過れとも駅夫来らざる故密に、村田か親族の人に謀りて村田か出足を促し、村田漸く出んとして座中に式礼し戸外に出るに、吾も同じく立上り最前相議したるやうに、官〔命〕<sup>名</sup>の一札を懐<sup>中</sup>より出し久保に見せしめ、禁錮の事言聞せ、其上時機を謀る手段にて一札を半懐<sup>く</sup>り出したる時、右<sup>の後の</sup>方より

吾を呼人あ〔る〕<sup>り</sup>故、風〔と〕<sup>号</sup>願て其答へをなし、振返り見るに七九郎見えす、あハやと庭へ飛出見るに其影を見ざる故、種子田彦作なる人の傍に在を呼掛、早く邸門を戒ムへき旨を告、種子田直に邸門へ至り見るに、門を早蒐出逃去りぬ、此時邸中の備、上邸よりも皆事を危ミ其事に与〔ざる〕<sup>りたる</sup>人々江相議して、衛士の剛壮なる者五人を撰ミて陰に久保か旅舎の隣に遣し置き、自然吾等が手に余る時機あらは力を副べく命し遣し、又守門の衛士も二人を増して守らせたるに、五人の者とも其前を駆通りたる影を見ず、守門の衛士も留め得ざりしハ、実に疾電の走ることくなりしと皆いへり、其門を駆出るには、折よく同藩の土朝倉孫十郎<sup>表御公用の事ありて此邸へ来り門を出るに出逢、其跡に小姓</sup>就て駆出る時守門士見咎<sup>く</sup>呼掛たれ共、脇さしを抜き引そはめたるが氷のことくに見へたる故、流石に留め兼しといへり、されハ其事本邸へ立帰り事の体を 宦長江告たれハ、邸中の大騒となり、即時に衛士の傑出

なる者を撰らミ、海陸七手に分て有家を捜させらるゝに、衛士等皆七九郎か武芸の絶技を知たる故、大に畏れをなし三人づつ一組にして出行に、各心知たる者を連合して無用の人を交ざる事を官長に告げ許くを受、純粹の者のミ出行しといゑり、斯く

官長よりも心を尽されけれども終に所在を知らず、理なるかな、其逃出たる時神田の辺とやら馴染し女のありて其所に数日隠れ居、事鎮りし比他所江出行しゆへ、遠路を捜せし者尋逢ふべきやうなかりき、其事後日召捕られし時に語りしといへり、扱、其場にて取逃せし事偏ニ我等の不覚なれへ、然るべき咎目めもあるべきなれども、其夜の事村田か発足に來屯ひし人皆見聞の前なるゆへ、させる咎の沙汰もなく只其緩怠<sup>◎の處</sup>を書疏を以て謝し奉りしに、時過ぎて七九郎捕られて死刑の時一七日の逼塞を命せられぬ、

一抑、此七九郎といへるへ、幼少より力行勤勉の質へなけれ共、龜豪輕忽にして応対敏捷なりけれへ、少年子

弟其才器あるやうに心得て交り、友とする人多かりけり、其時より人の物を偷ミ去る事多かりけれども、又人に与ふる事も吝ならざるゆへ人も是に惑わされ、却て豁達のやうに称しもてはやされ、己も愈高ぶりて振舞しが、二十四歳の時横目勤にて江戸に祗役しけるに、

素より放蕩無懶の質に江戸の浮氣を加へて、遊樓娼家至らざる限もなく、能土風にも慣<sup>◎習しける</sup>〔れすか〕故、貴門

の人なども諸所の遊覽等渠を從へ行給へハ甚た便利なる故、一時大にもてはやされける、元來家も富るにもあらず、百石余の田祿を沽却して用を弁しけるに、かぎりなき財用を費すに己を財の給すへきにもあらず、

後には人を欺き偽り事を弁しけるが、果ハ人の懐中を捜して盗取る事多かりけれども、其身監察の職に居り士人の中の交り故、座中に盜賊あるべきとは誰心付べき、皆油<sup>◎断</sup>くして<sup>◎外より</sup>盗れたりとのミおもひしに、其比国

より公用之事ありて柁城の公子出府ありしを、在邸の太夫川上氏墨水の納涼に誘引あり、同伴<sup>◎に</sup>〔の〕有川勇

馬其外誰彼と數輩なりし、本より久保はさやうの時、事に慣習し弁利なる故召列れ給ひ、船の装なども己れ専ら物したりしか、此時舟中に<sup>⑧</sup>て、柁城の近臣某か主人の用ニ懷中せし金五六<sup>⑧</sup>〔金〕有川か懷中せし金三兩、太夫の家隸の懷中せし五六金、都て<sup>⑧</sup>〔ハ〕十余兩の金子失たり、舟中に妓女<sup>⑧</sup>〔と〕も乗せられし故、人皆其者共の仕業にやとおもひしが、數金の事故八丁堀巡<sup>⑧</sup>〔衛〕衛士の方へ憑ミて其事僉<sup>⑧</sup>〔議〕せられしに、衛士の手より件の妓女を糾問せし処、其内に七九郎か事を見咎居たる者ありけれバ、衛士密に其事を告ぬ、然れ共、流石に士人の会に斯ることを白地に僉<sup>⑧</sup>〔議〕も如何にて、先夫成にて秘し置<sup>⑧</sup>〔れ〕たれとも、何となく人側目して弾指しける故、いよ／＼己か貸借の道塞りて日用の難<sup>⑧</sup>〔儀〕とハ成しなり、然るに彼井上休藏を殺害したる始<sup>⑧</sup>〔妹〕ハ、休藏も七九郎か同友ニて東<sup>⑧</sup>〔都〕に在勤し、藩邸士人出入の門牌を司る職にて俗には札渡方書役といへる職なりしか、素より輕忽の士にて、

七九郎<sup>⑧</sup>〔の〕浮華の行を能き事の様に心得慕居る程の交りなりけるを、同僚の士屢是を諫れとも用<sup>⑧</sup>〔ひず〕、遊樓の席にも七九郎か後に就て遊宴し、其交りの深きに乗して、七九郎にあつらへ、己か月俸<sup>⑧</sup>〔と〕官契を質<sup>⑧</sup>〔と〕して子錢家の金を借りしに、七九郎姦局をこしらへ、凡三拾金余の金を借なから休藏にハ五六金を分ち与へしに、其比出雲の松江領ニ琉球船漂着し東武に達しけるゆへ、藩邸より使臣を遣はされ其事を謝せられ、かつ琉人を護して国に帰る其使臣を休藏に命せられぬ、<sup>⑧</sup>〔是に因て〕<sup>⑧</sup>〔是に因て〕急卒使命に<sup>⑧</sup>〔趣〕くゆへ、彼官署の俸契を返し納め其後旅用の俸金を受る規則なれハ、休藏己が借し金を用意なし件の官契を返し納んとするに、元來七九郎休藏に偽り纒の金を与へ己れ數金を謀取し事なれば、休藏に其事も明しかたく、<sup>⑧</sup>〔他〕の金を以て其余を償へんとするに、己に其時<sup>⑧</sup>有川其外の懐金を貸盗し事取々に流布して、皆唾はきして七九郎に金を貸す人なく、己に休藏出立の<sup>⑧</sup>〔期〕も近づき頻<sup>⑧</sup>に其事

を催促する故、夫よりして悪意も出ぬるにや、休藏を誘ひ深川櫓下といへる遊楼に登り、帰かへるに築地本願寺門跡の後幕下寄合何某といへる人の邸の後、人離れの寂莫たる所にして遂に殺害ころし、哀あはれなり、休藏へまゝと欺たぶらひ己れ先に行き、背より切きらるる体にもて袈裟掛に一刀に死したるか、其切られし佩刀へ則休藏か帯せる佩刀にて、其切られたる所より十間計傍の堀の中へ捨たるか、潮の引たるに其刀は路頭より見え透りて紛れなかりけり、いかさま、七九郎常に好んで一七首にて遊行し、時に同列の人の佩刀を試に差せて見よとて、仮りに帯し歩行く事度々なりしが、此夜もさやうの業にて殺せしにや、休藏ハ己か佩刀にて己か身をまをらすべしなく亡しけるこそ無慙なれ、扱、七九郎ハ斯る悪事を行ひながら、翌日ハ空知らぬ顔にて野村了得といへる書生を誘ひ、境町のあいまをらす見物に行、事もなげにもてなし居たりしが、是も八丁堀衛ゑ士しの手に早く頭れ、終には其身を亡しけり、

七九郎流浪八年の後、大和之国にて某といへる山伏の養子となり、其娘とめなり居しを、京師藩邸在勤の横目有馬伴左衛門聞出し、邸の衛士管井清藏といへるに命して是を搜索するに、清藏如何して獲たりけん七九郎其妻に送りし文を搜し出し、其中に己か俗姓を只管白状したる文言ありて顯然相違なけれハ相捕へんとするに京師にて其便なかりしに、七九郎浪華に來りしを候まひ得、天満組衛士の手に使いて終に相捕へ、国へ送り下し鋸磔の重刑に処せられぬ、清藏始末を委しく記したる一冊あり、吾とも是をハ聞したり、

一此休藏か横死にて、吾も後日思ひ合する事のありしハ、前に己に吾も渠か術中に墮て俸金の官契を奪へれぬ、其時は吾も東武に來りし始の比に而、渠か所行も委しく明らめさりしに、一日風与來りて、吾今日他に金を借りしに、吾俸契し他の所へ質に遣し置たるが、今日の金を以て其金を償ひ入換る手段なるに、其往來の間金

主空に金を渡さ〔ぬ〕ゆへ、暫時子か俸契を借度といふに、色々いなミけれとも、只暫時の間にて吾帰るには直ニ携帰りて返すべきと頻りに乞し故、止事を得ず貸遣したるに、先の人他適したりとて其日を過こし、其後数日を経れとも返す事なき故、扱ハ図られたりと無念に思ひつれとも詮なく、折に触其事を促しけれども遂に返す事なかりしか、一日両国橋の辺へ遊ふへきと誘ふに、其前〔渡々〕誘引しを肯す打過しに此日は是非と強るゆへ止事を得ず伴ひ出しが、途中日本橋の辺にて錦江といふ尺八を業とする者の居に立寄、己が佩刀を脱し預け置、己は七首一口を腰にさし、風流の士は斯こそと豪〔語〕して伴ひ行に途中屢吾に向かひ、子か佩刀を帯し見〔ん〕とて兩三度乞しを、一〔丹〕仮したれとも後には許さゝりしか、兩國より猪牙を雇ふて川を下るべしとて舟〔より永代に至りし時〕舟を向ふの岸に着させ是より深川八幡の酒店に一盃を傾け帰らんといふに、己に昏黒に及たれハ、吾ハ此儘帰りて

も初更に及〔ふ〕、彼所まで至りて上邸の門期を如何せんといふに、是非に手を執て牽程に又止む事を得ず其方へ行に、八幡後の山に小径のあるに踏入、是より捷徑ありとて導きしが、夜ハ己に深く折から初闇にて前後も弁へがたき故、心に別の盜賊やあるべきと前後に心を配り、七九郎にも度々言葉を掛用心する内、酒店招牌の行燈を見掛け其影に立寄見るに、日比相知れる女奴出合楼上江迎へけるを、吾ハ藩邸に用あり急ぎ船を命せよとて、程なく猪牙を促かし来り一人先に帰り七九郎は跡に残りけるが、十日余を過ぎて休藏か事ありけれハ、跡より思合て、吾も訛かられて俸契を借り其督責も屢促す折なれば休藏に似たる事にて、扱休藏が佩刀にて背より切られしさま吾佩刀を借し時のやうにこそ有け〔れ〕と、其〔事〕の事目に見るやうにおもわれぬ、されハ此時吾を無理に誘引八幡山の闇かりにまで偽引し其心如何ありし、知りかたし、一七九郎亡命の後、渠か詐術いよ／＼頭れ、凡姦曲にて

印証を紛らし、或は贋筆をこしらへ、謀り取し金いくらといふ際限もなけれど、其内より訳て窘急に及ぶ人を拾ひあげ〔かぞ〕見るに、金三百三拾兩に及べり、其人々各吾に來りて歎きを告れ共せんすもなく、本より最初吾与り聞たる事にもあらざれば、肯弁すべき事にもあらず、然る内、本田七左衛門・高崎佐藤次二人と吾俵契を一紙にして国金百三拾兩を謀取しか、吾金ハ前に記せしことく(他)它に三拾三兩を詛り貸、本田ハ同じさまなるが、自己の用六兩を七九郎にあつらへ借りたるを、其六兩を本田に送り実ハ三拾余兩を己れ掠めたり、高崎ハいまだ年弱にて、久保知人にもあらざれば、其兄藤野六郎といひしが朋友なりしに、彼六郎が借りし金官訴に及ぶべきよしを以て威しけれハ、高崎驚きていかげんと謀るに、外に手段もなし、子が俵契を質にせは一時の急(用)くを免るべしと欺き、高崎に七兩の約契を書しめ、持歸りて七字の前に一画を引廿兩となし掠めたり、此三人の金〔鑄〕(銀)谷の長善寺といへる増

上寺会下の寺僧に借置たる事を尋ね出し、彼僧に行て憐を乞に、本より貪欲無慙の僧にて中々に憐を懸べきやうもなく、兎角して吾交代の期も近づきける故、度々愁訴を述べども取も合す、又一日、彼寺を訪て雑談に及ひけるが、増上寺会下の噂となりしに、我なにとなく下僕にハ詩友有て山中の僧侶に知人も多きよしを語りしに、夫ハ誰々と問ゆへ、辨信・恢麟(他)など其〔七〕某々と答るに、少し色の替りたるやうにて詞いと柔になりたるやうなるを、其時ハ心もつかず帰りしか、後に聞けば、彼借りし金実ハ増上寺寮統き用とて設けある金にて、私に人に貸して利を得る事彼等密々の姦曲なるに、件の辨信・恢麟は寮頭の積学にて山中一二之高名なれハ、彼徒には深く匿す事故、長善寺深く是を畏れたるなり、扱、其後又彼寺を訪ふに、法用の事ありて増上寺に行しと云ふゆへ、其往先きを問ふに恢麟寮と答るゆへ、我心に幸ひの事とおもひ其寮に至り見るに、法用一会の事と知られ多少の僧侶集りたり、長

善寺へ面会の案内を通したれハ、一間なる所にて面会しけるに、彼僧頻⑧リくに声を低くして我高音を避るやうなれハ空可笑、いよゝゝ声を高くし応対するに、兼ての貪殘と違ひいと柔和にて、終に百三拾兩の金子を六拾金にて領掌し事終たり、後に人に語りて、吾詩を好て半文錢に当りし事なきに、此一条始て詩の力を得たりと笑ひき、

一七九郎悪事の始末〔何⑨アニ〕となく、

輪台太々公伝へ聞し召て、渠が悪事ハさる事ながら、近來監察の輩風俗あしく放蕩なるよりさやうの事も起るなれハ、此度櫻邸監護の者ハ其人を撰ひ、老生勤慎の者を命すへしと

敵命ありけれハ、其事を有司伝命して其人を議せしむるに、老生の人は某々の署に充られて閑職の人なく、時升を以て其命を塞くべしとて其旨を告げけれハ、程なく櫻邸監護の儀を命せらる、其とき有司命を伝へ、櫻邸旧來の習俗しかゝの事

公聞に達し其人を撰⑩らるゝに〔ミらる〕に、同僚より子か勤慎を告て此命あり、されハ小監察の諸所に監視する時々公聞に入事なけれども、今般の事

君上御聴に達し命せらるゝなれハ、仔細に事を慎むべしと命せられしかは、時升も眉目あるやうにて、櫻田邸に移りぬ、吾⑪天〔君〕性文学を好ミ、こたひの旅中には四方の君子に就て学業を成へき宿志なりつれとも、東武に至し此

輪台太々公彼秩父か党に懲させ給ひて、文学の士を惡ミ給ふ事仇讐のことくなれハ、邸中にて文字をもてはやす事便なく、同僚にも深く匿し、吾諸方の遊覽を好とて邸を出、一時の諸先生を尋問に、尾藩の家田多門の学業近代の豪傑なれハ、窃に入學して其業を励ミけれども、邸中はいふに及ず同僚同舎の人さへ此事を知る人なかりしか、此度の

尊命には學問も却て自然なれば、始て心を許し公然と⑫他它方の文友にも交り、学業を終しなり、

一七九郎か始末、前にいへることく危難中の危難を兎角して免れたりしか、始より用金の蓄へもなく俸金のミにて生を過すを、彼俸契を訛られ長善寺か事の遂るまで月俸彼に奪われ片金の祐なく、只首を低れ手を合て人の助力を乞、今日の窮を凌ぎつれとも、月日の重るに随ひ朋友心知の人も助くべき力も限りあれハ、進退已に谷りて、憑む所は、在勤の功漸く満て小琉球の祇役を命せらるゝ期なれハ其命を得て事なく郷に帰るゝ事を得べしと、夫を力に一日く過しけるに偶々故郷の風音ありて、此志願 官の商議多端にてこたひまてハ叶ひかたきやと言来れり、実に此信を得て十方に暮、五尺の身イむへきく力なく、此地の在勤もなりかた、故郷へかへらん〔術〕ハ猶叶わず、胸中紛乱迷惑して、此儘自殺やせまし、さては亡命して他所ニ命や繋くへきなど、平日心にもあらん事まで思ひ続け狂気のごとくなりしに、一日友人の劇場の遊覧を誘ふに、せめての鬱散と〔伴〕ひ行しか、折しもこそあれ、其

日の舞曲院本に、梅川といへる遊女忠兵衛といへる男に馴合、遊里〔を〕逃亡し故郷に至るに、老父の某が勘当の子に面を合かたく拒ミ去るに、流石に親子の情ハ捨かたく、目を塞きて探り見る態を、坂東彦三郎といへる俳優の老手か術を尽して父子の情愛を写せるかたち、偏に吾故郷の老親も斯こそあらめとおもひたれは、即吾身の事のやうに思われ一向胸塞りて遊覧の心もせず、旅舎に帰りても彦三か立廻り愁歎目にさきりて眠もやられず、翌日に至りて一入吾か身をあちきなくおもひかこち、此儘にては病や出ぬとおもわれしが、よしや斯る薄命にて幾くの露命や繋く、行末ハさもあらハあれ一時の鬱を散せはやと、北里の遊楼に登り一夕の興を尽し、其時懐中に一両式歩の用金ありしを、囊裡の底をたゞき抛ち、深更ニ及んで旅舎に帰りぬ、されハ毒薬も薬とやら、翌日に至りて夢の覚たるやうにて前の事を思ひ替、大丈夫かゝる小事に志を降すへきか、よし人に金をも借りて見はやと思ふ心の

起りしが、風とおもひ付、其比平沢左中といへる高名の卜筮者あり、是に問て身上の運氣を謀らはやと思ひ、尋行て卜筮を乞しに、左中筮して此卦ハ子遠からずして吉事あり、其〔事〕<sup>○年</sup>十月か明〔る〕<sup>○日</sup>正月か発すべきか、十に八九は十月の初にあるべし、たとへば下邸より上邸に移らるゝものか、勤番の人ならハ急に国に往るゝか、何れとも今より用意をなし用具を備へて待給ふべし、若不用意にして発しての上ニ遅々の事あらんは子か恥辱なるべし、此卦甚動きたれハ国へ往るゝとも其所に足を留めがたく、遙かに遠き絶域の境にも到らるべきか、此役格別の榮名とする事にもあらず、たとへていわゝ福徳のある事とやいわん、何れとも吉事也と、丁寧反復示したり、誠ニ名手の占筮、見透したるやうにて、我志願の成就する兆なれハ、心喜ひ其〔<sup>○</sup>期〕<sup>○</sup>を待居たるに、果して文化七年午十月の八日といふに、大嶋の祗役を命せられぬ、前の窘急此時始て眞の夢覚悔悟りしか、人心ハ突に危き物にて、一旦の迷

惑に逃亡の蕩士とも成るべかりしを、幸ひにおもひなをして此身を保ち得しが、是に因て思へば、世の輕薄子弟一旦の過に千金の軀を誤るも有ましき事にあらすと、後にハ人に語りて笑ひき、此年ハ文化七年庚午の歳なりけり、

一大嶋の監官<sup>見聞</sup>兩人、老人は和田源兵衛、同しく藩邸祗役〔者〕<sup>○</sup>同僚にて同日に命せられぬ、徳之嶋の監東郷孝右衛門、是も同しく祗役にて同日に命を受、和田ハ公用の事ありて別に期を命せられけれハ、東郷と約して帰国<sup>○</sup>督すに、前に記せしことくさまゝの危難にて、前後の負債際限もなく、同朋僚友の人を多方に繋り術を尽せ共、吾平日の窮を知れハ人毎に是を避け、且近來藩中の士負債の償弁させる多く、子錢家前に懲て金を出さず、進退谷まりし次第也、然ルに、其間に深切なる事もありしハ、關山鬼散太なる人ハ吾祖母の姪なるが、近侍<sup>此時御</sup>小納戸<sup>○</sup>の列にて在府ありしに、吾か為に心を碎き術計せられけれ共遂に〔誠意〕<sup>○</sup>なかりしが、

或日彼旅舎を訪しに、拝領の絹布・衣服の類悉取出し  
てあり、其故を問に子か為に事を謀るに片金を得ず、  
然りとて今の窮救ハさるべからず、因て是を質にせは  
数十金を得べし、夫を以て用に給せんと欲すといわれ  
しを、余聞より落涙数行言も出ず、今在邸の<sup>⑤</sup>日比生  
死の交<sup>⑥</sup>をなし、事あらハ互ひに身に代らんと誓ひし  
人も、かやうの時に臨ば皆身の後患を畏れ是を避、甚し  
きハ路人のことくなるに、君の深切生涯何を以てか報  
せん、然れとも君近侍に奉仕し拝領の貴品を典したり  
といわんに、事知らぬ人はいかなる僻事をか言出<sup>⑦</sup>と  
ん、今一回我か術を尽し事就さるに至らハ、其時こそ  
参り訴ふべし、此貴品を典せは黄金ハ何時も獲易きけ  
れハ、某か参り訴ふまでハ此事止り居給ふべしと懇に  
約し置て帰りぬ、しかはあれとも猶片金の方便もなく、  
已ニ発途の期も二三日といふに及へとも、広漠の野に  
吟ふことく只茫然たる計なり、然る処に幼年の友藤井  
猪兵衛公倉の守舎にて<sup>⑧</sup>進物蔵在勤せしが、訪来りて子か

行も已に発途に臨むと聞く、盤纏の用意如何と尋問ふ  
に、有の儘に語りけれハされハこそ我も猜量しつ<sup>⑨</sup>、  
吾今黄金に於て幸術計の事あり、子が為に是を弁ぜん、  
幾許の金や用ゆべきと問ふに、有増計量の数を答へけ  
るに、藤井帰去て程なく黄金七拾両を携来り、吾に与へ  
ぬ、其時の嬉しさ実に地獄の罪人の地藏菩薩に逢たる  
も斯ハあらしと思われ、面前の辞謝ハいふにや及<sup>⑩</sup>、  
已に去りし後蔭を幾度となく伏拝ミぬ、  
余此事遂にに腹臆に忘れかたく、一度ハ此恩を酬ふ  
べしと心に誓ひ<sup>⑪</sup>「つ」れとも、させる事もなかりし  
に晩年に及んで、藤井目を病んで廢疾となり家に引  
籠るゆへ其身に酬ふ事も叶はず、よし其子に酬ふべ  
しとて、一日是を訪ふて詳に其志願の事を詢に、嫡  
子正八郎をハ大監察署筆吏<sup>大目付</sup>座書役を望むといふを聞  
ひて、吾報恩の意を述て某々の方に乞訴けれハ、皆  
其切なるを感せられ其職に命せられ<sup>⑫</sup>「け」れハ、父  
も悦て厚く謝しぬ、せめて吾志も成りぬといふべし、

一 藤井か懇切に因て、是迄債責の急なる悉く弁し得、旅装の事も夫々に備ふる事を得たれハ、発途の前日には行李「<sup>⑧</sup>つ」に装ひ終りて、送別の客に供する酒肴形の如く物「<sup>⑨</sup>し」、客の来るを待居しに、已に其期に至り同僚の人々訪来るに、斯る事とは知らず皆取々に商議なし、定て兼「<sup>⑩</sup>而」負債の督責弁し兼、喧嘩囉啤狼籍無慙の体なるべし、同僚として捨もおかれず、如何様にも連署の約契にて「<sup>⑪</sup>書遣し」、一時の急を免るへきやと略内評を定め来りし処、思ひの外舎中寂莫として督責の客耆人もなく、行李も儼然と備りたれハ、各目と目を見合不審かりし形勢也、しかれ共藤井ハ它「<sup>⑫</sup>他」に憚る事ありて、妄りに洩す事を禁せし故、白地に其事も説かたく、只多方の奔走に得たるとあいしらへ居たれハ、皆々其術計を感心し、快く酒を下し別をなしぬ、誠に藤井が深切を以て此一挙吾生涯の一大快なり、

一 東武を十月の 日と云ふに発軻して十一月二十八日に家に着ぬ、父母を拜し奉りて悲感交集り、涙のミこぼ

れしか、此時舅氏米良君の計らひにて、前妻椀山氏か跡に、吉井氏の女を家室に備へて娶り置「<sup>⑬</sup>れ」ぬ、

一 明る年末三月三日船を発して大嶋の旅行に赴く、同僚ハ前にいへる和田源兵衛、代官ハ二階堂與右衛門、附役ハ木脇權一兵衛・平田吉左衛門・日置半右衛門・川邊平八・毛利善左衛門なり、已「<sup>⑭</sup>か」嶋に到り職事に臨むに、此時川邊・毛利か徒頗る軽忽にて姦曲多く、二階堂は人に勝れし剛直廉潔の士なりし故、志趣一和せず事に処する「<sup>⑮</sup>も」区「<sup>⑯</sup>々」して、心を勞する事多かりしか、吾か身にハ弟矢之助時順か凶信告来りて、上なき神心を苦む「<sup>⑰</sup>る」事なりし、

一 扱、弟矢之助か凶変、此年六月廿四日時升大嶋の官舎に在りしか、其夜の夢に、新築のいと奇麗なる亭上より向ふに富士山を見渡たるか、殊に勝れて清朗なりしに、なにとなく揺「<sup>⑱</sup>れ」出して次第に揺「<sup>⑲</sup>れ」上りけるが、吾頭上に覆ひ来りて已に崩れかゝるやうにて驚き覚ぬ、天下の名山吾頭上に崩れかゝる至極不祥の夢

也、必定時升か身上に如何なる災殃か出来るべきと判して、直さま其月日を記し置ぬ、夫より物毎慎ミを加へて戦々兢兢として事に処するに、左のミ怪しき事もなく、此年の秋島中巡回の事に当りて同僚の和田及び川〔邊〕<sup>⑧金</sup>同列に旅行しけるに、旅中猶慎ミに慎を加へ畏れ行ひけれどもさせる事もなく、古見間切といへる所に來る時、何となく心濛々として染まず、又夢に故郷の家を覚しきに、何事とハ知らず母君声〔を〕<sup>⑧ト</sup>揚て啼泣し、父君は何やら憂の体にて嘯給ふ、其様体一々心に懸りしかとも巡回の旅中なれハ笠利間切といへるまで到りしに、此処に而徳之嶋の監察に渡海する法元太郎左衛門・東郷孝右衛門二人、今春誤つて紀州に漂着し、夫より国へ帰り再装して鳴へ赴へきニ出會ぬ、久々に国の便りを聞に兩人の信も何とやら不審、其うえに父の君の手書來り〔つ〕<sup>⑧サ</sup>れども、唯無事のミを記さ〔す〕<sup>⑧レ</sup>矢之助が手札もなければいよく怪しくおもひなから、外に尋問ふへきよしもなく只心にのミ訝り

居ぬ、理りなるかな、其凶信ハ琉球檣船の下るに訃音を送られたるが、其船此嶋江ハ碇を下さず、訃音は漸翌三月に島江達しぬ、東郷・法元ハ吾此事を知らざると見し故、凶事をあらかしめ言さりけるなり、夫よりして巡回の公用事終りて名瀬の旅館〔へ〕<sup>⑧ニ</sup>帰りし時、木脇權一兵衛ハ吾か外家の族類たる〔を〕<sup>⑧ト</sup>以て云々の事を告、いまた家信はいたらされ共事は相違なきの旨ね〔も〕<sup>⑧ヨ</sup>ころに告られたる故、其時手を拍てそは六月廿四日なるべしとして時日を聞くに果して其日にて、富獄の夢ハ已に自殺〔の〕<sup>⑧死</sup>比ニこそ當るべけれ、骨肉の恩愛左もあるべき事也と、後に人にも語りき、其時木脇に向て、吾か弟ハ剛克の性人に勝れたり、決して臨死の時末練の振舞ハ有ましきなりと言しが、果して後に人に聞くに誠に潔く、談笑して死に就といふは渠か事也と、世の人称賛せしとなり、扱、吾愁傷は何とか筆すへき、暫〔く〕<sup>⑧シ</sup>ハ籠居して官署にも出さりけれども、人々の勧めによりて官事ハ出て勤めしが、其年も暮て

翌文化九申の正月、島の長来りて大和船見えたりと告しかば、官吏各海浜へ出て是を望むに、程なく船港口に入来り、船長契籠を執て船へ乗移る体の見得たるが、是ぞ亡弟の訃音の来るならめと〔い〕<sup>⑧思</sup>ひたれハ唯心も心ならず旅舎に返へりて引籠りぬ、同僚の人々も其機を察し先木脇もて訃音の席を慰せしめ、余ハ跡より来訪べしと言送られしが、程なく家僕吾家の書信を持<sup>⑨し</sup>来るを、取手も遅しと披きみるに思ひの外に訃音にてハなく、昨年十二月朔日新妻吉井氏女子を産し、時しも冬の季なれハ父君の梅と名付給ふと言越されたり、こはそも打て替り<sup>⑩し</sup>く嘉兆にて、嬉しさもさる事ながら只何となく胸せき上げ覚へす声を揚て泣ぬ、されと家隸等酒・肴取調持出悦を述慰るにより、吾も面を改め一盃を傾け、同僚の人々もとよミ来り、凶席吉館と変して各話ひ舞帰られぬ、是ハ父の君慮り給ふ所ありて、目出度家の嫡〔子〕<sup>⑪女</sup>の吉信を報するなれハ、凶事を諱て此船にハ言越されさりし也、此紛れに〔少〕<sup>⑫打</sup>し心も

改まり、後に訃音の至りし時には稍胸も定まり、初而聞しやうにはなかりしなり、

一哀なり矢之助時順ハ吾第三の弟にて、吾より少き事拾七歳なる〔が〕<sup>⑬ハ</sup>、吾天性羸弱にて恐らくは子に乏からぬとおもふゆへ、自然の時ハ吾跡を継かせぬとおもふ心のありしにより、幼少よりわきて心を尽し育しか、六歳の時痼病を病んで已に十死一生なりしも吾精根を竭し療養怠りなく、前後三ヶ月に及び昼夜解帯なく省視して終に〔本〕<sup>⑭米</sup>復を得たりしか、九歳の時又〔瘡〕<sup>⑮瘡</sup>瘡を煩しに様々の変症多く、しかも此時父の君は沖永良部渡海の跡なり、此時世上一統の風邪流行し家ことに病臥したれハ、省病の相手となるべき人もなく、唯十三になる妹を手伝ハしめ病の保育するに、妹も幼年なれハ少しの間も休息させ、手伝ふ事のあるとき〔ハ〕<sup>⑯のミ</sup>呼起すやうにして、吾は一向まところむ隙もなく、凡廿一日の間半時ばかり兩度臥床に就しまてにて、昼夜の分ちもなく保養怠〔ら〕<sup>⑰チ</sup>さりしが、終に病平安を得た

り、斯く心を竭し育し立しか、其心さま実に耿介純一にて武事を好み昼夜講武に心を凝し兵学も其道を得て劍法は志学の年には早相手に立人も稀にして、世上にも称してもてはやしけるゆへ、吾後を譲るべきハ実にも此者なりと深く樂し、益心を尽し教へ導きしが、彼も又吾を敬ひ尊む事父君にもまさる程にて奉仕しぬ、吾か東武の祗役中久保か変事の聞へし時、用金の続きかたを歎きて、己か刀劍衣類を沽却し用を助けんとなま謀りしと也、己か衣類僅の匱物を販きたれハとて何程の金〔を〕<sup>⑧</sup>か獲べき、いとあとげなき事なれとも幼年の者のさ程まで心を尽せし神魂伝聞て、頗る落涙禁しかたかりしなり、

其後二十余年を経て吾浪華に在し時、今の弟謙齋か京師遊学の帰路長崎へ至り外療を学ぶ志にて彼地に赴くに、旅用幾許金を充行遣す<sup>⑨</sup>て、風と矢之助か事をおもひ出し、彼ハ吾貧窮の時心を尽せしに今此金を見せたらましかハと思出たれば、覺へすくわつ

と胸せきあけ、こらへ兼るゆへ急に厠へ走り込<sup>⑩</sup>み、厠上にて嗚咽流涕したり、

其後吾東武より帰り家にある事僅三ヶ月なりしが、其間彼か行作を見るに、いよ／＼武術に心を尽し、偏に膏盲の病となりしやうにて昼夜寝る間もなく〔練〕<sup>⑪</sup>習し、性質は、益廉潔純粹にて実に奇世<sup>⑫</sup>の俊傑とも成るべき様なるが、吾頻りに教訓し汝の生質果敢剛直にして悪をにくむ事甚たし、其天性にて武事を好むハ火に火を添ることくなり、必らず文事を学んで温和の道を解し事に処すべし、然らされバ巖牆の禍甚危しと度々戒め諭せしに、武術の膏盲ニ入りたりしハ、吾に匿して密に講武〔し〕<sup>⑬</sup>場に出るゆへ吾も知らぬ顔にてあしらい居しか、傍の家人に向ひて、人の癖ハ去かたき物かな、彼兼而廉直の性にして人に事を隠す事第一己れが忌嫌ふ事なるに、吾武術の事を制すれハ吾に匿くして密に場に出る、此病ハ実に除けまじと語りしか、己に舟に乗らぬとして海岸に臨し時も、送來るを傍に招

き又其事を丁寧反復論し〔つ〕れとも、其教訓遂得ずして非常の死を遂⑧くける〔ぞ〕⑨本意なけれ、其事ハ、此年六月加世田邑に遊行し、同伴上田源左衛門と道すから度々口論して、源左衛門が様々嘲るを憤り居しか、同廿四日帰路谷山にて又々口論し、源左衛門刀を抜掛しを打合て源左衛門を刃傷し、家に帰りて自殺しぬ、此〔事〕⑩十九歳也、

一扱も此度大嶋の任、事故なく終りて、七月廿六日といふに和田も同船にて嶋を發し、同廿八日山川の津に着、夫より小舟して家に帰りしが、両親の嘆〔を〕⑪思ふか故に再び弟の事を問す、然るに、此大嶋の行、吾運氣も聞くへぎやおもひのほか、弟の凶変のミならず、嶋の旅中も宰⑫と佐吏一和せず、夫に乗して姦猾の徒色々の私曲をめぐらし、〔小〕⑬大混雜の事多く、公私不〔弁〕⑭利にて、吾も〔空〕⑮手に帰りしやうなれハ、重ねて大嶋の代官職を乞、再び渡海の謀をなしぬ、文化八年壬申〔十二〕⑯月遂に其命を蒙むり、佐吏⑰は

古後七郎右衛門・染川伊兵衛・伊集院清右衛門・税所長左衛門・江川金六郎の五人なり、こたひの役こそ我が生涯の大計を定むべき所と思ひたれハ、万事に慎を加へ、事細大となく三思反復して省〔ミ〕⑱戒をなしぬ古後其外佐吏は、〔皆〕⑲父の行の人々にて事に老し物に慣へる人にて、前の旅行の佐吏の一和せざるに似す〔政〕⑳事も整たり、吾は本より年齢は下な〔リ〕㉑、事に処するも未熟なりしかども、前の年抵役して傍より聞見しける事も多く、其上官署に出、暇ある時ハ代々の記録を見閲したる故大形ハ記憶し、何その事あるに、夫ハ前宰誰の代某の年の日記に先例あり、或ハ某の代何の官長より命令如此と弁するに、皆其倚あるを感じて服せられぬ、監官㉒日置源左衛門・松元十郎兵衛志趣同しからずして時に乖〔巧〕㉓の事ありしかとも、它皆同心一和の事にて政事も能行れ、且明の年監官ハ有川與左衛門・弟子丸六郎交代して、是も吾等と志を一にし政事の欠闕なかりし也、此時、嶋の蔗田大に減少して年

々租税の足らざるを前宰二階堂心付、田地を檢察するに十の三分を減したり〔つる〕<sup>⑧サマ</sup>故に、何程督責を急にしても、地の足らざるに税の充つべきやうなし、前宰其事を検し得、蔗を植ゆる事を督したれとも已ニ任滿て其事成らず、吾に屬して其謀をなすへしと教られしゆへ、島民を勧る術計を思へども、今迄懶惰に慣て役に赴かず、此時、府下の市人に岩城織右衛門といへる者、舶来姦〔商〕<sup>⑧瀟</sup>の事に罪を得、島地に移されしか、物に馴たる大賈ゆへ、時ニ召て夜話の伽となしけるに、此者のいふ様、蔗を促すに一〔計〕<sup>⑧許</sup>あり、此年凶荒にて窮民飢に迫れ、其救を給せらるゝに、先蔗田をひらかせ、田一頃を開たる者に米何程を給すべしと命せられは、窮民米を獲んと欲して争て役に赴くべし、さすれハ別に救ひを施こさるゝに及す一計兩得となるべしといふに、余手を拊て、汝か事に慣へる智略感するに余りあり、実に妙計なれハ吾是を行ふべし、しかし此事岩城か教しといへハ、島民服せさるのミならず佐

吏監官も非議あるべし、汝か功を奪ふにあらず、事を行ハるべき為なれハ、吾胸中より出たる術にして其事を成就なすべしと<sup>⑧</sup>て、翌日其事を商議するに、皆其智略に感服し、島中に蔗田一畝を開たる者には、米五合〔ヲ〕<sup>⑧ト</sup>与ふべしと令したれハ、〔案〕<sup>⑧案</sup>に違ハず皆其米を獲んが為先を争ひ植ける故、島中に凡千余町の蔗田を<sup>⑧</sup>増したり、其功吾在島の間にはしるしも見多きりしかとも、後に至りて蔗〔糖〕<sup>⑧田</sup>大に饒熟して民業熾に行れ、吾も循吏の名を獲たりしが、実ハ岩城か教多し業なり、

一 島宰目出度任を終、是歳文化十二年乙亥代りの任に命せられしハ、前に来りし肥後翁助なり、佐吏某〔は〕<sup>⑧ト</sup>到着せしかハ婦棹の装〔を〕<sup>⑧ト</sup>なすに、あやにく運米の船遅滞して漸く六月の中比に島に着きし、夫よりして勘帳を檢考し新宰に屬し、婦舟を懸するに已に八月の始になりぬ、此時吾船は阿久根浦源兵衛といへるが船にて号〔を〕<sup>⑧ト</sup>寿福丸と稱し、船長ハ傳藏といへり、無

類の大船にて穀を受ける事二千石に及へり、是に伊集院清右衛門・江川金六郎同船〔す〕、今一艘〔は是も同〕、人か船にて号は成徳丸と称し、船長ハ喜助といふ、監官有川・弟子丸の二人是に駕をす、此船は洋中難儀に及しかとも兎角して山川に着ぬ、又一艘は同浦の宅右衛門といへる者の船、己船長〔を〕兼て船に在り、古後・染川・税所の三人是に駕す、三船一時に八月の十二日といふに大嶋名瀬の港を発せしか、程なく逆風と成、本の港に取返し、同十八日〔ニ〕船を發せしか、寶島の辺より又々逆風となり船を返へし、大嶋屋喜内の港を心さし船を寄せんとするに、風悪しく乗入かた、近浦大和濱江向るに猶あたはず、漸又名瀬の港口に碇を下し繋りしが、屋喜内より此所へ到るあいだ舟子皆風波の悪きに奔走して疲れけれハ、碇を下すと熟睡しけるに夜半〔に〕、西風強くなりしを覺へず、夜明てみれハ船已に竜郷の鼻といへる大巖に流れ懸りて、あハ僅十余丈に過す、此巖に一当あたれハ船ハ、齧粉

となる故、舟中神色を失ひ上を下に騒ぎけれ共、已に危くなりし処一壯夫進ミ出、各手を束ねて船の破るゝを待べきか、今帆を引〔揚〕れハ大熊の湊江は追風なり何の憂ひかあらんと声を励し叱りけれハ、舟子等是に激して帆を竿に、巖の間僅船一艘の丈を隔たれば、碇を起して船左旋すれハ追風ニ御す、右旋すれハ巖に当りて微塵になる、皆手足を握りて畏れ迷ふに、舟者某老功の者にて壯者を下知し、碇綱の船の右に下せるをく巻上くる勢ひに乗して綱を左の肩に転したれハ、舟ハおのつから左に旋りぬ、其時直に綱を切捨何の手もなく港の内へ飄り入ぬ、舟の老か一時の機転、皆人是を感じけり、港内へ至り見れハ、陸の方よりも船の危きを見て酋長其外集り、助けの舟を命すれとも波悪くし〔て〕舟通せず、唯手に汗を握りて詠め居たるに、船の恙なく港へ安頓したるを来り賀しける、此時間、監官の船ハ何へ行たるを知らず、佐吏の船ハ、西間切の内へ碇を下せしと聞へしか、其後彼地を出帆して遂

ニ行〔所〕<sup>所</sup>を知る事なし、其船、廣東に漂着くし事ハ  
 吾帰りし後にそ知られける、扱、吾船大熊に日を送り、  
 已に九月を過れとも順風なく、本より秋季に至れハ南  
 の風出る事なけれハ、よしや此歳は嶋に止まり明春の  
 季をや待へきと評議なしけるに、舟老某か言やう、逆  
 も風に〔こそ〕<sup>逆はす</sup>船も危け〔る〕<sup>れ</sup>、始より東風に舟を発  
 し、朝鮮の境に乘落し飄飄せぬに、方に今冬の季なれ  
 ハ西南の勁<sup>俗に西あがりといふ</sup>起らざる事なし、其時山川を望  
 みて舟を馳せぬに十に一失あるへからずといふ、此商  
 議一理ある論なれハ皆人〔是〕<sup>是</sup>に同して、十月二日と  
 いふに大嶋津代湊より船を発し、西を指して船を走せ、  
 所謂朝鮮の境と覚ほしき大洋に漂ひ居しに、案に違ず  
 正西の風吹出しけれハ、船中喜び真帆手打掛にして船  
 〔を〕<sup>ト</sup>、颯るに、翌日の曙に〔宇〕<sup>今</sup>治島を子丑の〔斜〕<sup>針</sup>  
 に見懸たり、舟人はいよ／＼力を得舵を正して馳る所  
 に、何とかしたりけん碇と裏帆をうたして、其勢ひに  
 帆の片間をハ一丈あまり颯と引裂たり、即帆を卸して

其破れを縫合せ帆を引揚るに、雜桿<sup>俗に打まへし</sup>といふものなり 翻覆  
 して帆登らす、再ひ帆を卸し見るに是も同しく損した  
 り、早く縄を換へ綴直して帆を揚るに、桅の半程に至  
 りて又翻りて帆上らず、重て帆を卸し見るに、倉卒齒  
 莽に繕ひしもの故綴目正しからず弊損したるや、重て  
 是を編〔換〕<sup>アミ</sup>へて漸に帆を引上げしか、其間己子二時  
 余りを過しけれハ風并稍変して漸々北へ移るに、黒嶋  
 の地に并へる比、終に正北の風に転し、山川の地に向  
 ひかたく屋久嶋の方へ羅経を向るに、北風漸〔々〕<sup>ク</sup>烈  
 くなり屋久<sup>久</sup>の地をも取得す、とかうして口の永良部  
 の湊に入得たり、爰ハ過にし下嶋の<sup>時</sup>、旅泊して相知  
 れる者多かりけれハ、昔の宿を尋問ふに、嶋の翁もお  
 ふな子共もふりし〔好〕<sup>好</sup>ミをおもひ、いと懇にもてな  
 しける故、しハし又爰に宿りをなしぬ、同十四日とい  
 へるに、舟の者共風直りたるるといそかハしく巖して  
 吾等を促かすに任かせ、忽々として船に登りしか、実  
 にや兼好法師か徒然の記に、高名の木のぼりといふ者

木を下る涯にて過なきよふ戒めし理こそ尊けれ、舟の者共かゝる危き船路を渡り済して是迄来り、手届く計りになりて心弛り、さして商議もなく船を出して上なき不覚を取りひし事、後にそおもひ合たり、されハ、船の神も心ありてや湊を出る事を忌給ひけん、已に碇を起し挿〔花〕<sup>⑧花</sup>を揚ケ走り出んとするに、風は真ともにてしかも山風吹入たるに、船は石のことく動かず、とかく船を旋さんとするに、船まへりハせで、其儘向ふの艫に衝当るやうなれハ、詮方なく船の尾に綱を付け杉板<sup>テンマ</sup>して漸引直しけるが、港口を出るに帆うらに風洩して、<sup>(やや)</sup>良もすれハ船回転して進得ず、其時吾も心附ざるにもあらず、斯まで船の進ミかぬるハ往先に危難やあらん、不祥の事〔哉〕<sup>⑨ヲ</sup>と心の内にはおもひたれともなまましいに言出すべきやうもなく喋ミ居たるが、後に吾か先見の至らざるを悔思しなり、扱、とかうして湊を出れハ程なく日暮れぬ、次の日に至りて、大洋只鹽の水のことく風全く絶へ、潮に牽るゝに大船の動かす

べきやうなく、空しく手を束ねて潮に随ひ漂ひ居たるが、屋久嶋の西南鳴瀬といゑる急湍に陥りぬ、抑、此鳴瀬といへるは屋久の一湊村の前に当りて、北は種子嶋と佐多の岬の間を下る潮勢、東ハ屋久嶋の外を巡りて大洋より落来る勢、南ハ七嶋を登る潮、西ハ朝鮮五嶋の潮流甌島〔を〕<sup>⑩ト</sup>巻て来る濤勢、四方より落合ひ激騰して闘ふ勢ひなれハ、名にしおふ阿波鳴戸は物の数ならず、吾船已に此急湍に臨めとも風なれば詮すべもなく、みす／＼手を束て荒巻濤に陥たり、さばかりの大船只六七転八倒して、九天に上るかとおもへハ奈落の底に沈む、躍ると思へハ飛あがり、左に転ぶかとおもへハ右に倒れ、波は櫓の上を打越し、人は皆伏まろびて〔起は倒れ倒るれハ起〕<sup>⑪倒れ倒れは起</sup>、叫ふあり泣くもあり、兎角する間に柁業碎けて片々と散浮ふ、是迄ハ此急湍さへ通り過れハ船も助かるへく頼ミをかけしに柁の壊れしに皆力を落し、唯死格護のミ期しあへり、其内舟手の剛強なる者一二人、舟中を激して、船の危き

ハ遮莫れ、唯徒然として死を待へきか、叶ハざるま  
 てもてを竭して死生ハ天に任すへしとて、先<sup>⑧</sup>く桅を伐  
 捨ぬと椽の上に登るに、転倒して斧を施すべきやうな  
 し、綱を以て胴をくくり、斧を上ヶケツ撃ては転ひ起  
 てハ伐り、兩人左右より力を竭すに、二時計して漸大  
 桅を伐倒しぬ、桅の倒るゝ機を見て、一人はへさきに  
 刀を振上げ待居て倒るゝに乗して串索を切離すに桅ハ  
 海中に飛抜る、其時吉凶を占ふて、船に中りて少しく  
 損するを吉とし、障なく海に落るハ不吉とする占筮な  
 るが、此時甲篙<sup>ほげた</sup>を打振り船の垣を損して倒れし故、吉  
 占とハ見多たりけり、其間、船長を始め、後倉船玉の  
 神を安置する棚の前へ三方に白紙を布、其前にて船玉  
 へ祈誓を込め、拜し畢て髻を伐、紙の上へ置、代るゝ  
 伐終て海へ入るゝに、其浮沈に吉凶ありといへり、其  
 髻を切の音耳に入りしが、其忌々<sup>⑨</sup>〔敷〕音今に至りて  
 忘れかたく覚ゆる也、扱、大桅倒れて船軽くなる其間  
 に又運送の蔗糖三百余挺を海江捨たる故、船ハ瓢を浮

たるやうにて難なく急湍を流れ出ぬ、急湍脱し得たれ  
 ば船ハ難なく屋久の東南に流れ漂へり、ひとゝハ唯  
 夢のやうにて打臥言葉を出す者もなし、潮ハ益東江落  
 る勢強く大河の急流のことくなるか始めハ七嶋を<sup>⑩</sup>〔拳〕  
 のことく見たりしも程なく影も見多すなり、其日も已  
 に爰に暮れ、翌十八日に至れハ洋海何の隈も<sup>⑪</sup>く風波は  
 全く収まり、唯渺々たる煙波何処を<sup>⑫</sup>〔あ〕てもなければ  
 とも、海水ハ唯東へ落る計也、因て老功の者に計ら<sup>⑬</sup>〔す〕  
 るに、潮候時更を以て計るに、早八丈島を二三百里や  
 跡になしけんといふに、一入心憂覚ぬ、同行伊集院清  
 右衛門ハさはかり船に老たる人にて、船の者共を励ま  
 し、汝等斯く彷徨として居たれハとて助るべき道出へ  
 きか、仮令島山を見<sup>⑭</sup>〔掛〕たりとも舵のなき船にて何  
 処へか寄する事を得ん、おもふに舵の損したるに舵牙  
 の恙なきこそ幸なれ、今舵牙に板を夾<sup>⑮</sup>ミ<sup>⑯</sup>字繩をもて扱  
 ミたらハ、舵の用をなすへきか、試<sup>⑰</sup>〔に〕見よとて下  
 知せらるゝに、皆人心付、尤も也とて手<sup>⑱</sup>に<sup>⑲</sup>板を削り

双方より夾立て縄もて搦ミけれハ、聊舵のやうなる物出来て少しハ船も揺くやうになり、「さ」らは帆を揚て見ぬとするに、大桅の倒し時甲篙を打折しゆへ桅に代「ゆべき」ものもなし、詮方「竿や櫓權取合せ、纜に風を受けて船を駕するに、果「々」敷事あるへきやうなし、只洗洋たる大海に「島」山を遠く隔たれハ、鳥もなく魚も見えず鳴瀬にて驕濤に船尾を破壊せしか、其時水桶を巻取られしゆへ只用心水桶のミ残り、船中六拾人余人幾日を過すへきならねバ、皆々是に氣を喪ひ桶の蓋にハ錠を下し日ニ一人にて茶碗二ツを限りて其余ハ吞事を許さず、然るに適雨の降出けれハ舟中喜ひ雨水を求るに、昔年阿久根浦の仲藏なる者、東海に漂流し夜国に流れし時、其船に在し舟「手」二人此度此船に雇れ来りしか、此者共七ヶ月余海洋に在て雨水を取の術を「得」、雨の時竹を割節を去、所「々」詰りしに樋を通し、落来る水を手繩を透す穴の口に大竹の節を「透」して夫に屯へ、其竹に小き口を明け竹筒

「に」て桶の中に落入るやうに仕掛たれば水を獲る事十分に、暫時の中に数斗の水を得、少しハ渴命の期を免れぬ、然るに又雨の空に冬の季なれハ、必らず西風の至る風候の法なるに、皆是を恐れしが、果して雨に随ひ雲の東へ飛を見て、此上に西風を受東へ落なは、魯「西」亜か夜国かいかなる憂目の地にか到らぬと、皆汗を握り居しに、誠に神明の加護にや「有け」ん、風候ニ西へ廻るかと思ふしが、忽東風に変して而も勁く吹出しけれハ扱は吾等か運命もいまた頼ありけりと人々色を直しぬ、次の日ハ空も快く晴て波も穏なるに、東風ハ猶吹止す、船も稍西の方に進ミ来やとおもわれしに、鯉鳥といふ海鳥の群かり翔るを見懸たり、此鳥鯉の食する雑魚を啄ミ食する鳥にて、鯉の集る上に群飛し舞ふ、鯉は「嶋」蔭をたよりて生ずる物なれハ、何れ「嶋」を離る「事遠からしと稍憑ミを懸る所に、又薪の「燃」株の流れ来る、是も久しく水に浸「り」居れハ沈むなるに浮ひ来るハ人間の居に近かるへしと

流石に果なき事にも憑⑩ミを懸けて〔良〕頼⑪もしくおもはれしか、其翌日に至れとも島山の影も見えず、其日午の一天とも覺しき比、仮寝して寝入たる夢に、所ハ何所とも知らず繁華の地に登り得たるが、遠く望〔む⑫に〕一帶の街路広〔き〕東武の通町程もあらんとおもへるゝに、左右は駅〔路〕の旅店と覺しく人を留むる光景なるに、往來の旅客数も限らず、或ハ馬荷を負たるあり、行李布疋やうの物背負たるあり、股引帶刀して歩行に行くあり、婦女の服装して行あり、其賑ハひ言べからず、街の中央に大なる華表あり街の向うへ行当る所、石礎數百丈次第に登るに、諸所に高樓伽藍やうの大廈建つゝけて、金銀珠玉〔を〕鏤め目も眩くやうなれハ、いかなる所⑬くあらんとおもひながら登りくゝて往く程に、大なる回廊の階宜⑭上ケたる高欄の有様、都の紫震殿とも謂〔フ〕へき殿造りの上に、山伏數百人并居たるか、中央に御座を構へて座を召れしハ、画ける大塔の宮とも言へきけやけき梵士の、差貫

き大口とも見ゆる服ニ頭巾大刀を佩、座し給ふ、こわいかなる御方なるやと近寄るも恐ろしく、階の下より硯居たるに、年比四十あまりなる山伏一人来りて、山主の命にて候、足下ハ劍術の老手と聞へ候程に、山主の若君甚た劍術を好まれ候ゆへ、来りて示し教へ給へと申され候故、其迎へ〔參〕らせ候〔ハ〕は〕いと懇に述ける故、夫ハ定て誤り聞せられ候、人違にて候らめ、某劍術の業幼より学得たる事もなし、〔ま〕して人に教へま⑮まいらする事〔ゆ〕めく叫ひ候わずと、起而辞すれとも山伏一向聞入れず、山主頻リニ乞れ候、何と辞し給ふ共許されまし、本より游治の公子其業に果々しき事ハ候まし、只々何にても教へ給へかしと強るゆへ、吾も大に窘窮し、然らハ、幼年の〔砌〕山ノ内氏⑯か居相の劍法を習し事を略覚え候、今其規矩進退記臆候はねとも、是也とも命に⑰応ずべきやと答ふるに、夫こそ屈竟の事に候、いざ後園に導き候へしとて殿の後に⑱出れハ、画ける牛若丸見る様なる童形の裾をく

ゞりたる袴に小太刀佩たるが待給ふに会し、謹而其人に接し、山ノ内の初〔門〕に授る懸退座といへる技を一再其人に授る所ニ、枕頭より吾を喚起すあり、驚きて誰そと問へば、吾管家の篠原喜平次といへる者なり即チ告命今船中の人共〔に〕相議候、漂洋数日一山を見ず、人々折誓も取々尽し候へ共、別段ニ折誓を癪し金比羅神へ深心を籠〔らせ〕祈願を掛け、首尾よく帰朝を得べ、船中の人遙々参詣して神徳を拜し奉るべき様を禱奉らんと商議なし候、主君へ伺ひ奉れと申事故、其事を告奉ると〔云故〕、斯る大洋に流れ一統の立〔願〕を乞ふに、何のいなむ事かあらん、商議の如く立〔願〕なすべしと答つゝ風と夢の事をおもひだし、夢中の形正しく金毘羅神殿の光景なり、此祈願へ験あるべしと心たのもしくおもひしが、其〔時〕のあした船中どよめきて、山こそ見へたれと呼、扱こそ皆人競ひて是を望むに、山ハ拳のことく見えたれと何れの地とも分ちかたく、次第に近くなるにつけて、喜界

嶋の形に似たれと、船中皆西浦の者ゆへ喜界を東より望たる者なく、本より彼地に到りたる者もなければ、夫と指て知るへきやうなし、心は矢丈ケにおもへとも、舵もなく大桅もなき船に風は全ク絶へて、只平和の海なれハ波の寄る辺かを〔待〕のミにて、其日も終に暮て潮ハ漸々勢ひ南に落るゆへ、其島影も脇へ見ゆるやうに船流れて、其地ニ伝へ寄るへき手段なく、船中又心を痛め、若此〔嶋〕を失ハ、果ハ何地へかさまふへきと、一向嘆き憂る体なれハ、吾〔も〕心苦しく余りの事に、佩たる脇指の島の官府〔に〕始終身を離さず帯ひたる左衛門作を追取、舷に立出、天に向ひ、吾一〔嶋〕の宰にして人の死生を司りたれハ、〔政〕の善悪に作〔す〕る罪も多かるべし、此一七首こそ官署に身を放さず佩たれバ、吾精神ハ是に籠れり、命代りに海に投す、希くハ天地神明〔受納〕ましまし、舟中六拾人の命を助け給へと祈誓して海中へ投入たるか、暫しハ浮ぬ沈ぬ瓢飄してさなから龍のことく見え、彼

雷漁が事おもひ出られたり、時しも二十三夜の月東に  
 さし昇り、空ハ隈なく晴れワたりて千里の外も〔澄〕<sup>⑧徒</sup>  
 渡るやうなるが、俄ニ楼上どよめき立て喚さはくゆへ  
 いかさま石礁にや触しと驚き問ニ、さハなくして、小  
 舟〔にて〕<sup>⑨コノ</sup>来りたれとて喜びさはくにてぞ有ける、則  
 立出て是を見るに、六十八かりの老翁、一人の童子を  
 携へ、独〔木〕<sup>⑩リ</sup>船に乗りて来れるなり、先何かは問す  
 此船に登れとて、迎へ乗せて何人そと問に、喜界嶋早  
 町村の者なるが、毎も海獺に出て來むに、此夜にしも  
 釣に出たるが、大桅なき船の漂ひ居るを見懸け、必定  
 難船にやあらんと尋来りしとて、今釣たるたはめとい  
 へる魚を取上げ吾等に与へぬ、誠ニ是や神明の老翁に  
 現し童子を携へ来り救ひ給ふ、古き物の本などに見え  
 るか、いかさま此老翁も神の化身にやと只難有そ思わ  
 れける、翁則〔ち〕<sup>⑪ル</sup>いふ、此所は早町湊の正面にて是  
 より一里に〔足〕<sup>⑫是</sup>ら〔す〕<sup>⑬ハ</sup>、今夜風もなし、人々杉板  
 を以て船〔を〕<sup>⑭ト</sup>牽給へ、事なく引〔届〕<sup>⑮届</sup>くべしといふ

翁ハ導の爲めに舟に留め、舟子等数人杉板に櫓を立  
 是を牽に、皆数日水に渴し食とも果々數ハ食ハね共、  
 湊を得たるに競ひ付、ゑいや声を出し牽程に夜の明る  
 比、難なく湊口に牽付たり、扱、翁か与へし魚を調理  
 し食するに、其味今も忘れかたき程ありし、此時海  
 〔渚〕<sup>⑯渚</sup>に千鳥の声の聞えしか、今まで洗洋に漂流し人  
 界を知らざるに、比鳥の声を聞、ひとつの感興を催せ  
 り、此島に宗祐喜・奥祐喜とて共に早町の者なるか、  
 幼年の時、吾舅氏（嘉界島目付米良藤右エ門）に従ひ府下に遊ひて深く相知れる者  
 疾に來て安否を問ふ、此所は鳴の監察二人の官舎あり  
 て、鳴宰の官署ハ西〔間〕<sup>⑰石</sup>切灣村といへる所にあり、  
 今の監察中山甚左衛門・種子島小十郎二人暁天より湊  
 口に出、床机に踞して役夫を指揮し、程なく吾等岸に  
 登りしかは、種子島か官舎に誘引、酒食さま／＼の饗  
 応あり、始めて心を安し始終の事とも物語りぬ、此所ハ  
 早町・塩道とて南北兩村あり、吾旅舎を北村塩道にて  
 央政といへる者の居宅ニ命せしか、此宅は鳴第一とい

ふ構成の亭にて、陋からぬさまの家なり、此央政か父は嘉盛といふて歳の酋長にて、予ハむかしより能相知れる者なりしか前の月みまかりて、央政ハいまた喪服なりけれども、嶋にて它(他)の居宅の旅舎となるへきなれば彼か宅を命しける故、央政(ハ)喪服を脱し、諸酋長と同じく饗応の事を指揮せしが、央政か祖母、母なる者も出来り、父がむかしの知人なれハとて、いとねもころにもてなしぬ、江川・伊集院も同じあたりに舍しけり、翌二十五日にハ、今の宰武與八左衛門、佐吏野々山平八郎・新納長左衛門訪来り、其外嶋の酋長數十人遠近聞伝へ来訪し、昼夜間断の隙もなく、就中新・水・野菜・雞・豚の類に至り、乏からぬやうに給したれハ島の官吏にも劣る事なく尊ミ敬れたれとも、元来小き嶋に我等長く居住してハ、薪・菜(肴)の給分失費続ぐべきやうなく、〔且〕(道)ハ帰程を促〔す〕(方)船の便りも悪しく本より乗りし船ハ修理を加へても再び駕すへきやうもなけれハ、再び大嶋の官吏に謀り遣して迎の船を乞遣

し、夫(▽)より船の便あしければ舎を西村坂嶺といふ所に移し船を待しに、十一月の初に大嶋より迎の船来りければ、喜界の人に別を告る事夫々にして船に就ぬ、伊集院・江川も後先別々にして皆大嶋の地に渡りぬ、されハ迎の船大島にてハ船をあらふといへとも船の造りハいと麁にして、此船に大海を渡り大島に至る船中いかゝあらんと思ひしに、其日は天氣(晴)の清明春景のことく融和にて、海の気色共娛しミ詠めて渡る程に、笠利間切宇宿村といへるに着ぬ、掟といへる村の惣官を召て舎りの事を命するに、此所に川口新左衛門といへるが、岩城織右衛門と同じく舶来商物の事に此地ニ居らしめ給ふ、其居宅を宿りとなしけるに、あるしハ它(也)に行て家にあらず、其屋に府下の市人の妻なりしお辰といへる女、罪ありて此地に配流せしが、新左衛門に寄宿して在ける故、あるしに代て出てもてなしするに、大和女の容体言語を聞て、誠に吾身の三年異方(方)にありて適家に帰るへきに、又かゝる浮沈に逢ひあらぬ所

〔に〕<sup>◎江</sup>漂泊し故郷の事のミおもわるゝ所へ、此女の容  
 体をみて益々故郷なつかしく、覚へず泪をこほしたり、  
 夫より赤木名といへる所に宿を移し、扱故郷の二親さ  
 そな案んじ給ふらめ、一日も早く此風信を聞かせまい  
 らせたく、琉球久高嶋の者共こそ魚龍のこたく海上の  
 自由を得て諸方の地多渡り世を過る者共なれハ、是を  
 〔獲〕<sup>◎廣</sup>まほしく尋見るに、幸ひに此地に來り居る故其  
 事を命するに、幾許の米を得て往來日數二十日に返事  
 〔報〕<sup>◎渡</sup>すへしと肯ひ船を発しぬ、其間我は又昔日旅舎  
 なしける大熊の旧館に移り、明の春まで憂月日を送り  
 久高人の帰るを待しが、誠ニ彼島の人海上を渡る神通  
 を得たりといふべきか、其約終に違す日數十九日とい  
 ふに、父君の返書を取來て我に与ぬ、扱こそ故郷の有  
 様詳に告來るに、吾船夏を過ぎ秋に到て返り登らされ  
 バ、二親ハいふにや及ぬ親戚遠族の人までも待々て、  
 其遅々を憂〔へ〕<sup>◎ひ</sup>おもわさる人はなかりけれとも、皆  
 人嶋の地にこそ滞り居るらめと頼をかけて居たりしに

大嶋の會長萩賢といへる者、公用の事に依て飛船より  
 登り來り、我船已に嶋を發せしといふ事を告、而も其  
 事、時しもあれ正月の元日に家に洩聞へ、此時父く君  
 は隅州村々の巡見に出給ひ、母君のミ家に居給ひしが  
 此風音のきこへしより所謂元日の式も打拵、只泣沈ミ  
 てのミ座して年賀の人にも應對もし給わす、家のさま  
 忌々敷やうなりけ〔る〕<sup>◎り</sup>、其事を父の君にも報し遣さ  
 れしに、父君はさすかに物に騒ぎ給はん性質にましま  
 せバ、其返書に次郎九郎所在知れずと言越たるが、琉  
 球又は唐上疑ひあるべからず、嘆き事なかれ<sup>◎と</sup>言ひ送  
 り給ひける、されと母君はいたく物を〔案〕<sup>◎案</sup>し給ふ人  
 ゆへ只一方に伏沈ミ給ひしに、久高の登り來て吾有家  
 を告し時ハ、父君も巡見より帰り家に居たまいに、  
 直に吾書を取て立上り座上を舞ひ給ひしといゑり、さ  
 れハ吾も又久高か帰り、父君の手書を取來りて、一家  
 平安の事を聞ひて、同しく座上を舞しなり、  
 一扱此年ハ島〔に〕<sup>◎島</sup>多端の事にてこそ有けれ、此文文化<sup>十三</sup>亥

年十二月に長崎来朝の華船風波にて漂来せしが、笠利間切の内用村といふ所にて石礁に船を乗掛、詮すへなく船中上下八拾余の人を上陸なさしめ、件の人數ハ仮小屋をしつらひ、船ハ其船主より「燒」捨を願ひけれハ石礁の上にて焼捨、其事を官長に飛船もて達しけるに、件の仮小屋に舟手の者誤て失火を「起」し仮小屋を焼亡するのミならず、余「燼」用村の民家に飛移り人家半を焼亡「す」、舟人の周章言も更なり、慟哭の声天地を動かし資財販物皆焦土となりぬ、

一々官長に聞せしに、府下より巨船を下して土幹羅の船と称して、都而琉球に送り給ひぬ、船主ハ「在」小園といへる者なり、此焼亡の時舟の者二人ハ火「の」傷て死にけり、

一明「る」年三月、龍郷といへる所に舍を移し、春運の便りを待に、山川浦の覺兵衛といへる者の自船觀音丸といへるを乗船に定め、船の長ハ次右衛門といへる同所の兒カ水村の者にて至て船には老せる者なり、此觀

音丸といへるハ、むかし京師大仏の棟木を積登りし事ありて、其御褒詞に、さるやことなき御方より、額の字をば御染筆ありて下「し」賜り、其御額を船に「揚」れハ海難の事なしといへり、船の製も「它」と異に、左右の牆を船尾江押廻して構へたる故、俗に是を押まハしと唱へ、日本の地に此製の船、一艘ハ阿波の竜丸といへる此船二艘より外なしといへり、実にや船の奇特さる事にも、去ル戌の夏の事なり、くし、大熊の湊に繫き居しに、颶風大に起り纜を絶切り船湊を流れ出しが、其時ハ舵も引上ケ桅のミにて人も陸に止舎し纜十二人船にありしが、詮方なく桅を切捨漂ひ居たりしに、三日といふに大嶋の地に漂ひ来り、笠利の洋に漂ひしを津代の湊に引入たりしが、切捨「て」大桅も同しあたりに浮ひ来りぬ、斯る奇特の船なれば今船吾乗船には定めしなり、四月の初旬、龍郷阿「丹」崎の湊より船を發「く」しか、此年も風候一向不順にて、七嶋の半までハ三度まで至りしかども逆風に吹戻され、津代の湊ニ船を止

しが、其時大桅も撓たがりて弓の如くまがりて、危く船の底も処々板腐りて〔潮〕の洩入る事甚しきゆへ、其原を捜し見るに釘の腐りたるか手を以て引抜くやう也、是に依つて皆人心を安んぜず、折節隅州波見浦の三勇丸といへる隣りに繋居しに、此〔船〕ハことし三年に及ぶ新造にて水主も健なる壮者能揃居れハ、此船に乗換へきやと評議するに、吾従者も取々に異見をも出し、とかく奇特のある船なれハ今の船よろしからんといふもあり、たとへ奇特のあれハとて眼前に〔斯〕く危殆の〔見〕是ゑたるを奇特の船とてたのま〔る〕へきかといふもあり、何れも一理あるに、我も前の危難に心臆して割断しがたく思惟して居たりしに、家隸の篠原喜平次申様、千里の海〔路〕未然の吉凶誰か判断を得候べき、此所の観音寺といへる寺に（島津賢久）大中公の御牌を安置有之候、此御牌前にて御鬮を取神慮に任せ候ハ、如何といふに、吾も同心し、実に此事然るべし、〔若〕別其上に異変ある時ハ吾輩

大中公に見放されし身なれハ、災殃も悔もおもふ事あるへからずとて、住僧に託し神籤を伺ふに、今の船吉といふ御鬮なり、扱は

神慮に任すべしとて乗換る事を止たりしに、不思議なりけるは、此度船を出して又々風波悪く件の三勇丸ハ寶嶋の辺にて船を破り、舟子ハ辛く命を助り寶嶋へ上りたれとも、船ハ海中に捨りけり、若其時乗換たらしかは、舟中六拾人の余に及べバ、やハ〔り〕カ命も助るへき、偏ニ

大中公の御神籤肺肝に銘し有難、扱こそ吾身〔終〕終身御銘日に参詣怠る事なし、

一扱、船ハ神籤にまかせ観音丸に駕して湊を出しが、このたびも寶嶋を越て風波頻りにあらく、寶嶋と平嶋の間に漂居しが、荒波に揺られ船の動〔旋〕旋甚しきゆへ、舵壯夫六人して左右より綱もて扱舵しけれ共力堪かぬるゆへ、又一人力を添くんとて立懸る所を、荒波来り船激して六人共にひかへし綱を取放けれハ、舵

牙を以て件の壯夫横胴をはらひけるゆへ、直に海へ打  
込たり、すわや人こそ陥りたりとて皆人驚き騒ぐに、件  
の壯夫水には能々練磨しけるや、何の手もなく遊ぎ上  
り、濡たる布子を絞り上げ、綿入の布子を衣たるゆへ  
自由に自由を得さりしとて平気なる体なりけれへ、皆  
人其水練をかんじたり、とかくして漂ひ居しが、夜の  
明る比には諏訪の瀬の東三里余の所に船ハ流れ居たる  
が、未明に吾起て四方を詠るに、風波ハ稍鎮り空も晴  
上りけるが、諏訪の瀬の燃る烟ハ北の方へ棚引ゆへ、  
船の者を呼て彼煙の靡くを見よと指示すに、扱ハ南の  
風や至るへぎと舟中喜ひけるか、果して南風快く吹出  
し北を望みて馳する程ニ、口永良部の辺りに到る比、  
空打くもり雨の催ふしたるや〔う〕なれへ、人々永良  
部に船を止めといふに、我も度々の危難に懲たれハ船  
を止るに同心したれども、船長次右衛門一円肯〔わ〕  
す強ひて山川へ向け船を遣るに、竹嶋に并ぶ比をひ、  
日暮れ風も全く絶へて船進まぬ様⑩なりしが、翌⑪朝

東雲いまた明ざるに、船の老楼上より下り吾枕の本に  
来るゆへ、舟〔路い〕かにと問ふ、舟老響燈していふ  
船ハ昨夕より竹島に並て同し所にあり、斯舟進すして  
今日の風如何あらんと憂ひ顔なるが、続けて次右衛門  
又楼上より下来る、吾今の舟老か詞を以て詰問ふに、  
次右衛門いふ、しかり船竹嶋ニ並ひて昨夜の所にある  
といへバ実に船進まず候と答へながら立さ⑫〔ま〕独言  
に、吾いまた後に山の見ゆる竹嶋を見たる事なし、と  
罵り又楼上に去りける故、扱ハ舟老か誤りたるやと吾  
も心おかしく思ひ居たるに、果して朝〔雲〕の晴るゝ  
に随ひ後より山を〔現〕⑬して、佐多の岬を山近く乗掛  
たるなりけり、船中大にどよミ合て次右衛門が船の功  
者を感じあへり、夫より山川に三日留滞し家に帰り二  
親の面を拝し奉り、互に悦ひの涙をこぼし祝ひしが前  
に生れし小女も早六歳ニなりぬ、是より暫くハ家に安  
堵して二親にも仕へ奉るへくおもひし所、幾程もなく  
横目の職を命せられ、三歳か程此職に奉仕しけるに文

政二年の冬浪華の祇役を命せられぬ、

江川・伊集院の二人は船を異にして登㊦くしが、是も

後先府下に着す、有川・弟子丸の二人ハ去春上着し

古後・染川・税所の三人は廣東に漂着し、彼地より

台浦㊦に送り、〔台㊦〕浦より西船三艘して長崎に送り

丙子七月崎陽㊦に着し、同じ年の冬国に帰りぬ、

九郎物語二の巻終り